松山市文化財調査報告書127

久米高畑遺跡

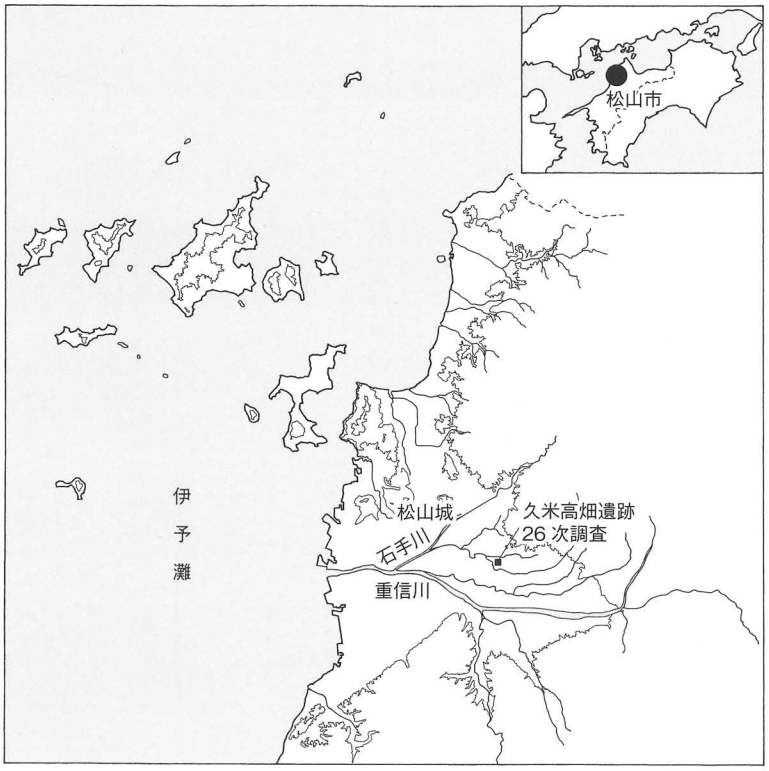
—26次調査—

2008

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

久米高畑遺跡

— 26 次 調 査 —



2008

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

序

本書は平成７年度から８年度にかけて実施した、民間の宅地開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書です。

調査地が所在する松山市久米地区には、国指定史跡「久米官衙遺跡群」や来住廃寺跡などがあり、同地区は、古代における役所の中枢施設が存在する重要地域として広く知られています。

今回報告します久米高畑遺跡26次調査では、縄文時代終わり頃の土坑や弥生時代から古墳時代までの集落に関連した遺構が発見されました。弥生時代前期では90基の土坑が検出され、土坑内からは土器の完成品や赤色顔料が付着した土器のほか、石器の未完成品などが多数出土しました。弥生時代中頃では竪穴式住居址や掘立柱建物址が検出され、当時の住居構造を解明する手がかりを得ることができました。これらは、弥生時代における人々の生活を復元するうえで貴重な資料となるものです。

このような成果をあげられましたのも、関係各位の埋蔵文化財に対する深いご理解とご協力のおかげと、心より感謝申し上げます。また、本書が埋蔵文化財調査研究の一助となり、各方面において活用いただければ幸いに存じます。

平成20年３月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団
理事長　中　村　時　広

例　　言

1．本書は、松山市教育委員会が平成８年３月から平成８年６月に、松山市来住町で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．遺構は、呼称を略号で記述した。竪穴式住居址：ＳＢ、土坑：ＳＫ、溝：ＳＤ、柱穴・小穴：ＳＰである。

3．遺構の作図・製図、遺物の実測・製図は、小玉亜紀子の指示のもと山邊進也、金子育代、仙波千秋、仙波ミリ子、高尾久子がおこなった。

4．写真図版は大西朋子と小玉が協議し、作成は大西がおこなった。

5．遺構図と遺物図の縮尺は、縮分値をスケール下に作成した。

6．本書に使用した方位はすべて真北である。

7．本書に関わる遺物や記録物は、松山市埋蔵文化財センターで保管している。

8．本書の執筆は小玉、編集は梅木謙一がおこない、宮内慎一、水口あをいの協力を得た。浄書は平岡直美がおこなった。

9．製版　カラー写真、写真図版－175線
印刷　オフセット印刷
用紙　マットカラー HG 菊判62.5kg
製本　アジロ綴じ

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
　１．調査に至る経緯　　２．調査・刊行組織

第２章　層　　位 …… 7
　１．基本層位　　２．検出遺構

第３章　遺構と遺物 …… 8
　１．縄文時代の遺構と遺物　　２．弥生時代の遺構と遺物
　３．古墳時代～古代の遺構と遺物　　４．中世の遺構と遺物
　５．時期不明の遺構と遺物　　６．表採遺物

第４章　小　　結 ……90

挿　図　目　次

第１章　はじめに
　第１図　調査地位置図（縮尺　1/1,000）…… 1
　第２図　西壁・北壁土層図（縮尺　1/40）…… 3
　第３図　遺構配置図（縮尺　1/200）…… 5
第３章　遺構と遺物
　第４図　縄文時代の遺構配置図（縮尺　1/250）…… 8
　第５図　ＳＫ21測量図（縮尺　1/40）…… 9
　第６図　ＳＫ21出土遺物実測図(1)（縮尺　1/4）……10
　第７図　ＳＫ21出土遺物実測図(2)（縮尺　1/3・1/4）……11
　第８図　弥生時代前期末～中期初頭の遺構配置図（縮尺　1/250）……12
　第９図　ＳＫ10測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4）……13
　第10図　ＳＫ17・22測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4）……14
　第11図　ＳＫ24測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4）……15
　第12図　ＳＫ25測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4）……16
　第13図　ＳＫ28測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4・1/2）……17
　第14図　ＳＫ29測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4・1/3）……18
　第15図　ＳＫ30測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4）……19
　第16図　ＳＫ31測量図（縮尺　1/40）
　第17図　ＳＫ31出土遺物実測図（縮尺　1/4・1/3・1/2）……20

第18図　ＳＫ35測量図・ＳＫ32・35出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4・1/3）……21
第19図　ＳＫ40測量図・出土遺物実測図(1)（縮尺　1/40・1/4・1/2）……22
第20図　ＳＫ40出土遺物実測図(2)（縮尺　1/3・1/2）……23
第21図　ＳＫ41測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/3）……24
第22図　ＳＫ50測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4・1/3）……25
第23図　ＳＫ53・60測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4・1/3）……26
第24図　ＳＫ87測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4・1/2）……27
第25図　ＳＫ89測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4・1/3）……28
第26図　ＳＫ137測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4）……29
第27図　ＳＫ90測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4・1/3）……30
第28図　ＳＫ93測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4）……31
第29図　ＳＫ98測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4）……32
第30図　ＳＫ103測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4）……33
第31図　ＳＫ106測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4）……34
第32図　ＳＫ110測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4）……35
第33図　ＳＫ112測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4・1/3）……36
第34図　ＳＫ113測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4・1/3）……37
第35図　ＳＫ119測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4・1/3）……38
第36図　ＳＫ126・130測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4・1/3）……39
第37図　ＳＫ135測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4）……40
第38図　ＳＫ138測量図（縮尺　1/40）
第39図　ＳＫ138出土遺物実測図(1)（縮尺　1/4）……41
第40図　ＳＫ138出土遺物実測図(2)（縮尺　1/4）……42
第41図　ＳＫ138出土遺物実測図(3)（縮尺　1/4・1/3）……43
第42図　ＳＫ147測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4）……44
第43図　ＳＫ出土遺物実測図(1)（縮尺　1/4）……46
第44図　ＳＫ出土遺物実測図(2)（縮尺　1/4・1/3）……47
第45図　ＳＤ５測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/80・1/4・1/3）……48
第46図　ＳＰ出土遺物実測図（縮尺　1/4・1/2）
第47図　弥生時代中期前葉の遺構配置図（縮尺　1/250）……49
第48図　ＳＫ111測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4・1/3・1/2）……50
第49図　ＳＫ15・ＳＫ134出土遺物実測図（縮尺　1/4）……51
第50図　弥生時代中期中葉の遺構配置図（縮尺　1/250）……52
第51図　ＳＫ122測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4・1/1）……54
第52図　ＳＫ23・ＳＰ407出土遺物実測図（縮尺　1/4）……55
第53図　ＳＤ１測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4）
第54図　ＳＤ23出土遺物実測図（縮尺　1/4）
第55図　弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構配置図（縮尺　1/250）……56
第56図　掘立７測量図（縮尺　1/80）……57

第57図　掘立７出土遺物実測図（縮尺　1/4・1/3・1/2）……58
第58図　ＳＫ128測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4・1/3・1/2）……60
第59図　ＳＫ・ＳＰ出土遺物実測図（縮尺　1/4）
第60図　古墳時代～古代の遺構配置図（縮尺　1/250）……61
第61図　ＳＢ３測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/60・1/3）……62
第62図　掘立２測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/80・1/4・1/3）……64
第63図　掘立４測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/80・1/4・1/3）……65
第64図　掘立５測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/80・1/3）……66
第65図　掘立６測量図（縮尺　1/80）……67
第66図　ＳＫ146測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/4・1/3）……68
第67図　ＳＤ10測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/80・1/4・1/3）……69
第68図　ＳＰ出土遺物実測図（縮尺　1/3）……70
第69図　中世の遺構配置図（縮尺　1/250）……71
第70図　ＳＰ1296測量図・出土遺物実測図(1)（縮尺　1/20・1/3）……73
第71図　ＳＰ1296出土遺物実測図(2)（縮尺　1/3）……74
第72図　倒木２測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/40・1/3）……75
第73図　ＳＫ出土遺物実測図（縮尺　1/3）……76
第74図　時期を特定できなかった遺構の配置図（縮尺　1/250）……77
第75図　ＳＢ１測量図（縮尺　1/60）……78
第76図　ＳＢ２測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/60・1/4）……79
第77図　掘立１測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/80・1/4・1/3）……81
第78図　掘立３測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/80・1/2）……82
第79図　掘立８測量図・出土遺物実測図（縮尺　1/80・1/4）……83
第80図　ＳＫ出土遺物実測図（縮尺　1/3・1/2）……84
第81図　ＳＰ出土遺物実測図(1)（縮尺　1/3・1/2）……85
第82図　ＳＰ出土遺物実測図(2)（縮尺　1/3）……86
第83図　ＳＰ出土遺物実測図(3)（縮尺　1/3）……87
第84図　表採遺物実測図(1)（縮尺　1/4・1/3）……88
第85図　表採遺物実測図(2)（縮尺　1/3・1/2）……89

表　目　次

表１　縄文時代の出土遺物観察表（土製品）……93
表２　縄文時代の出土遺物観察表（石製品）
表３　弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表（土製品）
表４　弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表（石製品）……100
表５　弥生時代中期前葉の出土遺物観察表（土製品）……101
表６　弥生時代中期前葉の出土遺物観察表（石製品）……102

表７　弥生時代中期中葉の出土遺物観察表（土製品）…… 102
表８　弥生時代中期中葉の出土遺物観察表（装身具）
表９　弥生時代中期後葉～後期初頭の出土遺物観察表（土製品）
表10　弥生時代中期後葉～後期初頭の出土遺物観察表（石製品）…… 103
表11　古墳時代～古代の出土遺物観察表（土製品）
表12　古墳時代～古代の出土遺物観察表（石製品）…… 104
表13　中世の出土遺物観察表（土製品）…… 105
表14　中世の出土遺物観察表（石製品）
表15　ＳＢ２出土遺物観察表（土製品）…… 106
表16　掘立１出土遺物観察表（土製品）
表17　掘立１出土遺物観察表（石製品）
表18　掘立３出土遺物観察表（石製品）
表19　掘立８出土遺物観察表（土製品）
表20　時期不明出土遺物観察表（石製品）
表21　表採遺物観察表（土製品）…… 107
表22　表採遺物観察表（石製品）

図　版　目　次

図版１　１．２区遺構検出状況（北より）　２．２区遺構完掘状況（北より）
図版２　１．１区遺構検出状況（南より）　２．１区遺構完掘状況（南より）
図版３　１．ＳＫ21遺物出土状況（北東より）　２．２区西側完掘状況（北より）
図版４　１．ＳＫ24遺物出土状況（南東より）　２．ＳＫ31遺物出土状況（南より）
図版５　１．ＳＫ138遺物出土状況（南より）　２．ＳＫ103遺物出土状況（南より）
図版６　１．ＳＫ137遺物出土状況（南より）　２．掘立２・ＳＫ122検出状況（南より）
図版７　１．掘立１完掘状況（南より）　２．掘立１ＳＰ955断面土層（西より）
図版８　１．掘立２完掘状況（南より）　２．ＳＰ1296断面土層（西より）
図版９　１．ＳＫ21出土遺物
図版10　１．出土遺物（ＳＫ24・ＳＫ31・ＳＫ35）
図版11　１．ＳＫ40出土遺物
図版12　１．出土遺物（ＳＫ50・ＳＫ53・ＳＫ103・ＳＫ106・ＳＫ126）
図版13　１．ＳＫ138出土遺物(1)
図版14　１．出土遺物（ＳＫ138(2)・ＳＰ1009・ＳＫ122・ＳＰ976・ＳＰ630・掘立１）
図版15　１．出土遺物（ＳＰ975・ＳＰ117・表採）　２．ＳＰ1296出土遺物(1)
図版16　１．ＳＰ1296出土遺物(2)

第1章　はじめに

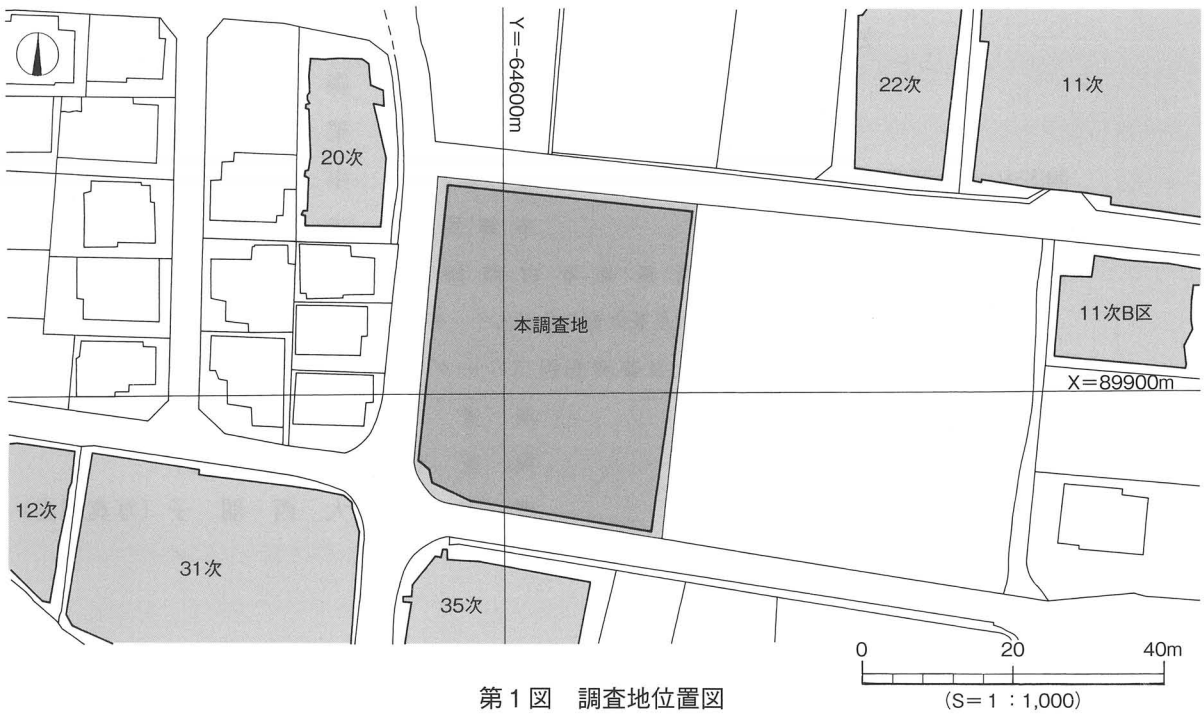
1．調査に至る経緯

1995（平成７）年11月15日、片岡功氏と片岡やえみ氏より松山市来住町888・889-1地内における宅地開発にあたり、埋蔵文化財の確認願いが、松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課）に提出された。当該地は松山市が指定する包蔵地「127来住廃寺跡」内にあり、松山平野の東部、堀越川と小野川の間にある来住台地上に位置する。台地上には久米高畑遺跡や来住廃寺や来住町遺跡があり、弥生時代から中世までの遺構や遺物が数多く確認されている。申請地周辺の遺跡には、東隣に古代の柵列と区画溝を検出した久米高畑遺跡20次調査地が、北東40mに久米評衙の可能性をもつ同１次・11次・22次調査地がある。また、西150mには弥生時代の住居址・土坑・大溝などの集落関連遺構を検出した同23～25次調査地が位置している。

これらのことから、当該地の埋蔵文化財の有無と、遺跡の範囲や性格を確認するために、同年12月７日に試掘調査を実施した。その結果、弥生土器・土師器・須恵器を含む遺物包含層と、溝・土坑・柱穴などの遺構を検出し、当該地に弥生時代から中世までの遺跡があることを確認した。

この結果を受け、文化教育課と申請者の両者は遺跡の取り扱いについて協議を行い、建物建設によって失われる遺構と遺物について、記録保存の為に発掘調査を実施することとなった。今回の調査では弥生時代の集落遺構と、官衙関連遺構の確認を主目的とし、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが主体となり、1996（平成８）年３月21日より調査を開始した。

なお、申請後に一部の所在地が変更し、調査地番の変更が生じた。ここでは、変更になった地番を記述している。



第１図　調査地位置図

（1）調査の経緯

本調査は、排土置き場の関係上、調査地を２分割して実施した。北側を１区とし、南側を２区とした。先ず、３月21日から調査区周辺の保全作業を行い、南側の２区から重機を導入して表土の掘削を行った。続いて遺構検出をし、遺構の完掘写真撮影を５月17日に行った。北側の１区の調査は５月22日に開始し、６月22日に遺構の完掘写真撮影を行った。発掘機材の撤去作業を行い、５月23日に調査を終了した。

現地説明会は、久米高畑遺跡27・28・29次調査と合同で６月８日（土曜日）に行った。

2．調査・刊行組織

調 査 地　松山市来住町887-4、888-1、889-1

遺 跡 名　久米高畑遺跡26次調査地

調査期間　1996（平成８）年３月21日～同年６月23日

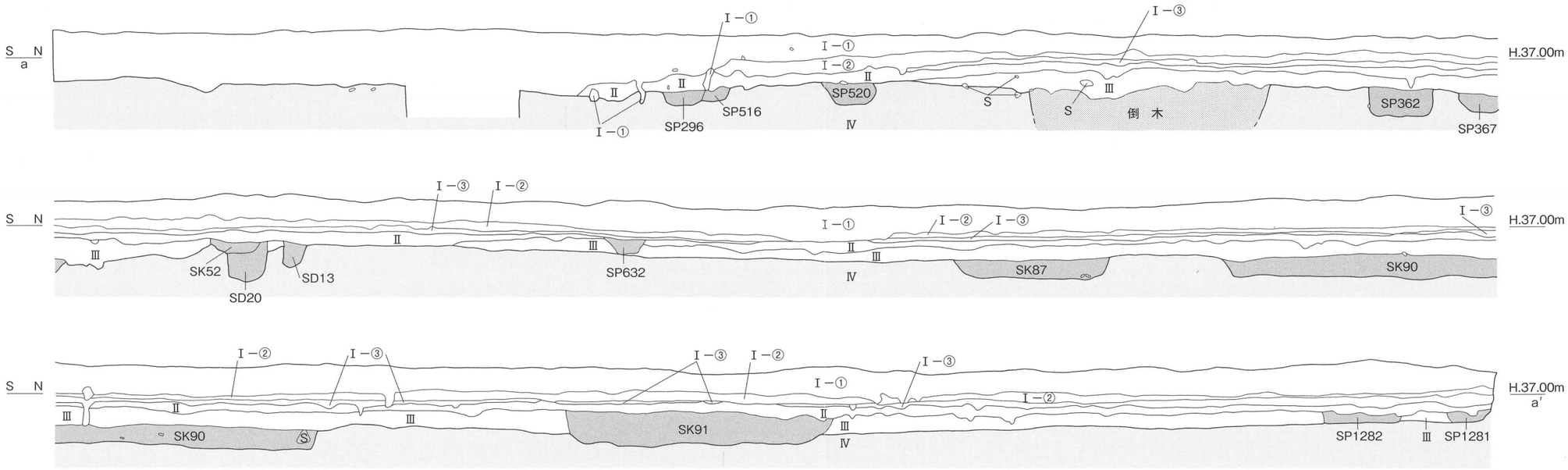
調査面積　1,326㎡

調査委託　財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

調査担当　相原浩二・小玉亜紀子

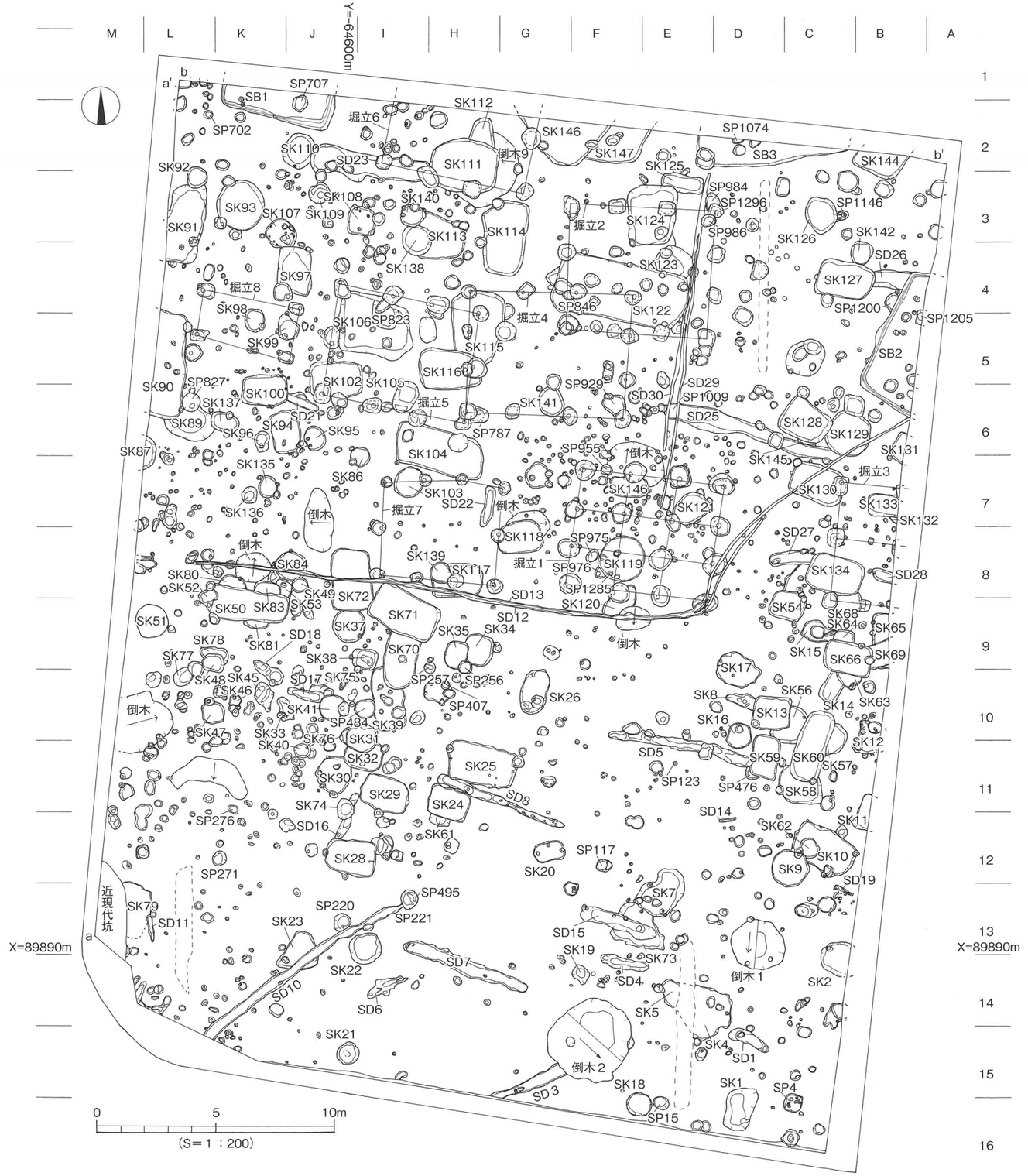
（平成20年３月31日現在）

松山市教育委員会	教育長	土居貴美
事務局	局長	石丸　修
	企画官	仙波和典
	企画官	田中郁夫
	企画官	田浦雅文
文化財課	課長	家久則雄
	主幹	森川惠克
	主査	栗田正芳
㈶松山市生涯学習振興財団	理事長	中村時広
	事務局長	吉岡一雄
埋蔵文化財センター	所長兼考古館館長	丹生谷博一
	次長兼教育普及担当リーダー	重松幹雄
	次長兼調査担当リーダー	田城武志
	調査員	相原浩二
	調査員	小玉亜紀子
	調査員	大西朋子（写真担当）



第Ⅰ層－① にぶい粘質土（2.5Y6/3）
－② 明黄褐色粘質土（10YR6/8）
－③ オリーブ黄色粘質土（2.5Y6/4）
第Ⅱ層 灰褐色粘質土（10YR4/2）
第Ⅲ層 暗褐色粘質土（10YR3/4）
第Ⅳ層 黄褐色粘質土（2.5Y5/6）＋極暗褐色粘質土（7.5YR2/3）

第２図 西壁・北壁土層図


M
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
Y=-94600m
X=89890m
X=89890m
a
a'
b
b'
SB1
SP707
SP702
SK112
掘立6
SK146
SP1074
SB3
SK144
SK110
SD23
SK111
倒木9
SK147
SK125
SK92
SK108
SK140
SP984
SP1296
SP1146
SK93
SK107
SK109
SK91
SK113
SK114
掘立2
SK124
SP986
SK126
SK142
SD26
SK138
SK123
SK97
SK127
掘立8
SP846
SK122
SP1200
SP1205
SK98
SK106
SP823
掘立4
SK99
SK115
SB2
SK116
SK90
SP827
SK102
SK105
SP929
SD29
SK100
SD30
SP1009
SK137
掘立5
SK141
SD25
SK89
SD21
SK128
SK129
SK96
SK94
SK95
SP787
SK87
SK104
SP955
倒木
SK131
SK135
SK145
掘立3
SK86
SK146
SK130
SK103
SD22
倒木
SK121
SK133
SK136
掘立7
SK132
倒木
SK118
SP975
SD27
SK139
SK84
掘立1
SP976
SK119
SK134
SD28
SK80
SK117
SK52
SK49
SK72
SD13
SP1285
SK50
SK83
SK53
SK120
SK54
SK68
SK51
SK71
SD12
SK64
SK65
SK37
SK35
SK34
SK78
SK81
SD18
SK15
SK66
SK69
SK77
SK38
SK70
倒木
SK48
SK45
SD17
SK75
SP257
SP256
SK17
SK46
SK26
SK8
SK56
SK41
SP407
SK13
SK14
SK63
倒木
SP484
SK39
SK16
SK33
SK47
SK40
SK76
SK31
SK12
SK32
SD5
SK59
SK60
SK57
SK25
SK30
SP123
SP476
SK58
SK29
SD8
SK74
SK24
SD14
SK62
SK11
SP276
SD16
SK61
SK10
SK28
SP117
SK9
SK20
SD19
SP271
SK7
SP495
近現代坑
SK79
SP220
SP221
SD11
SK23
SD15
SK19
SK73
SD7
SK22
SD4
倒木1
SK2
SD10
SD6
SK5
SK21
SK4
SD1
倒木2
SK18
SK1
SP4
SD3
SP15
0
5
10m
(S=1：200)

第３図　遺構配置図

第2章　層　　位

1．基本層位（第2図）

調査地は標高37mに立地し、調査以前は耕作地であった。基本層位は、基盤層を含めて４層に大別される。そのうち、第Ⅰ層は、土色や土質の微妙な違いから①・②・③の３層に分層した。色調は『新版標準土色帖　1989年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局　監修）を参照した。

第Ⅰ層－①：水田耕作土。にぶい黄色の粘質土（2.5Y6/3）。
－②：水田床土。明黄褐色の粘質土（10YR6/8）。
－③：水田床土。オリーブ黄色の粘質土（2.5Y6/4）。
第Ⅱ層　：遺物包含層で、弥生土器片が少量出土している。５cm前後の堆積で、北西部分に分布している。西になるほど厚くなり、15cm前後の堆積になる。灰黄褐色の粘質土（10YR4/2）。
第Ⅲ層　：遺物包含層で、弥生土器片が少量出土している。５～10cmの堆積で、北西部分に分布している。暗褐色の粘質土（10YR3/4）。
第Ⅳ層　：本層上面が遺構検出面になる。調査地全体に広がっている。明褐色の粘質土（7.5YR5/8）と極暗褐色の粘質土（7.5YR2/3）、黄褐色の粘質土（2.5Y5/6）が混在している。

2．検出遺構（第3図）

遺構の検出は、第Ⅳ層上面（地山直上）で確認した。これは、遺物包含層が後世に大幅な削平を受け、遺物も少量であったからである。

遺構は縄文時代から中世までのものがあり、竪穴式住居址３棟、掘立柱建物址８棟、土坑138基、溝27条、柱穴1,232基を検出した。また、遺物が出土した倒木痕を１基確認した。時代別の遺構数は以下のとおりである。

①縄文時代	土坑１基
②弥生時代	掘立柱建物址１棟、溝６条、土坑91基、柱穴14基
③古墳時代～古代	竪穴式住居址１棟、掘立柱建物址４棟、溝３条、土坑７基、柱穴３基
④中　　世	土坑１基、柱穴１基、倒木痕１基
⑤時期不明	竪穴式住居址２棟、掘立柱建物址３棟、溝14条、土坑37基、柱穴1,214基 倒木痕10基
⑥現　　代	溝４条、土坑１基

第３章　遺構と遺物

１．縄文時代の遺構と遺物（第４図）

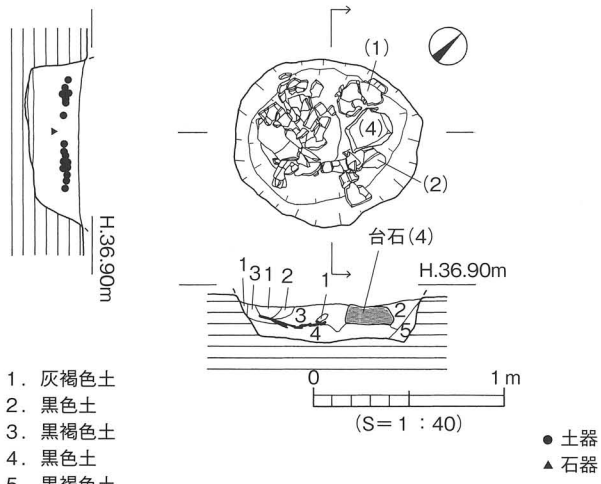
縄文時代の遺構には、晩期の土坑が１基ある。

第４図　縄文時代の遺構配置図

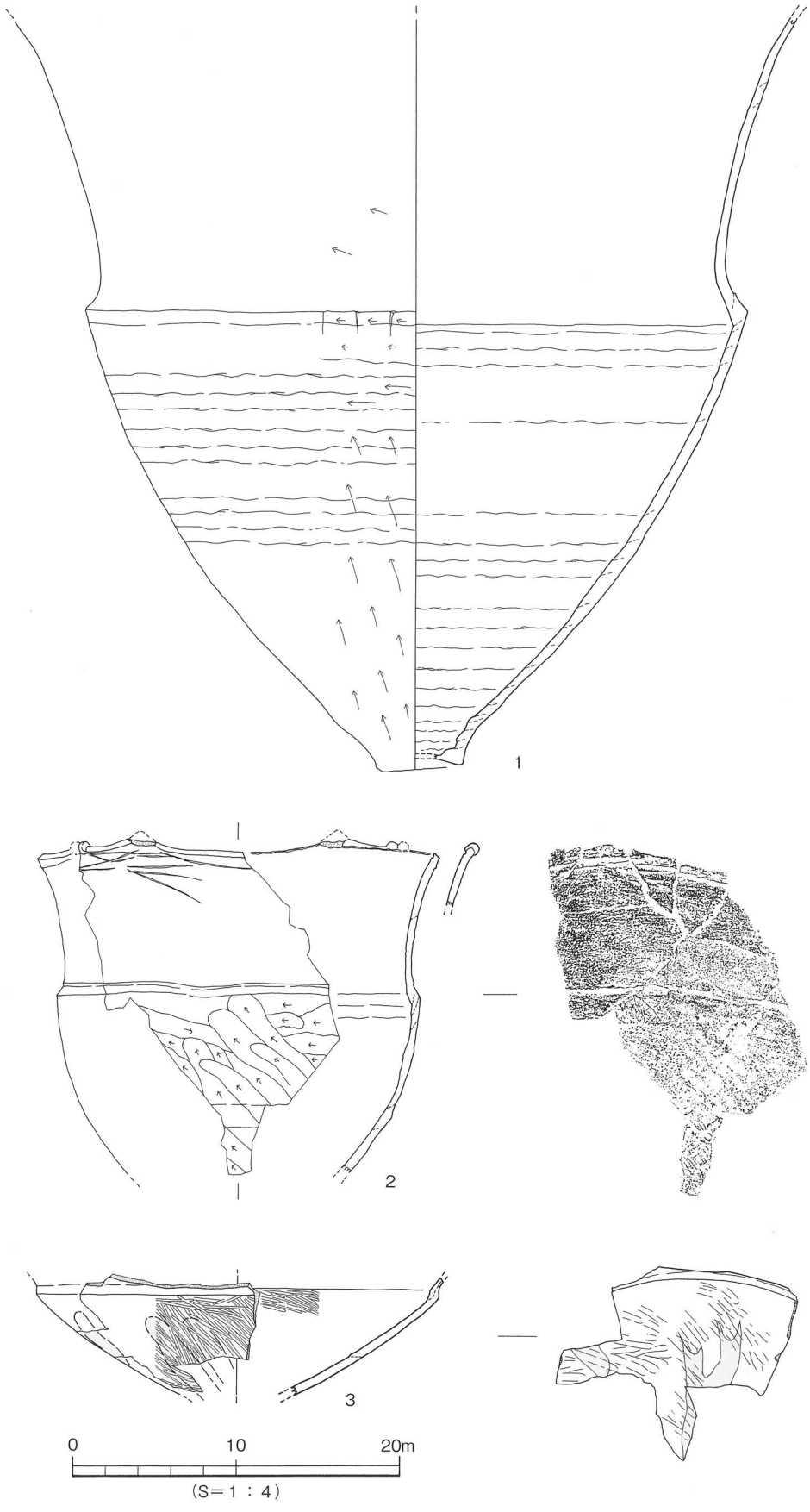
ＳＫ21（第５～７図、図版３・９）

調査区の南側、Ｊ15区に位置する。平面形態は円形で、規模は径0.97m、深さ0.28mを測る。底面は平坦で、断面形態は逆台形状である。埋土は５層に分層できる。最下層の５層は黒褐色土で、壁沿いにあり、次いで４層の黒色土がほぼ水平堆積をなす。４層上には、１・２・３層がブロック状になって混在している。遺物は、１～６で全て４層上面付近から出土した。深鉢４点、浅鉢２点、台石１点、用途不明石製品１点、焼土塊が１点ある。出土状況は、台石（４）の西側近くに深鉢（１）が据えられ、胴部～口縁部は南側に横倒しになっていた。深鉢（１）は口縁端部を除き、ほぼ完存していた。底部の中央部が焼成後に穿孔されていた。又、欠損していた口縁端部は故意か、後世に遺構上面が削平された際に失われたかは不明である。深鉢（２）・浅鉢（３）は、台石（４）の東側から出土した。浅鉢（３）には、外面に赤色顔料が付着していた。分析の結果、ベンガラであることが確認できた。

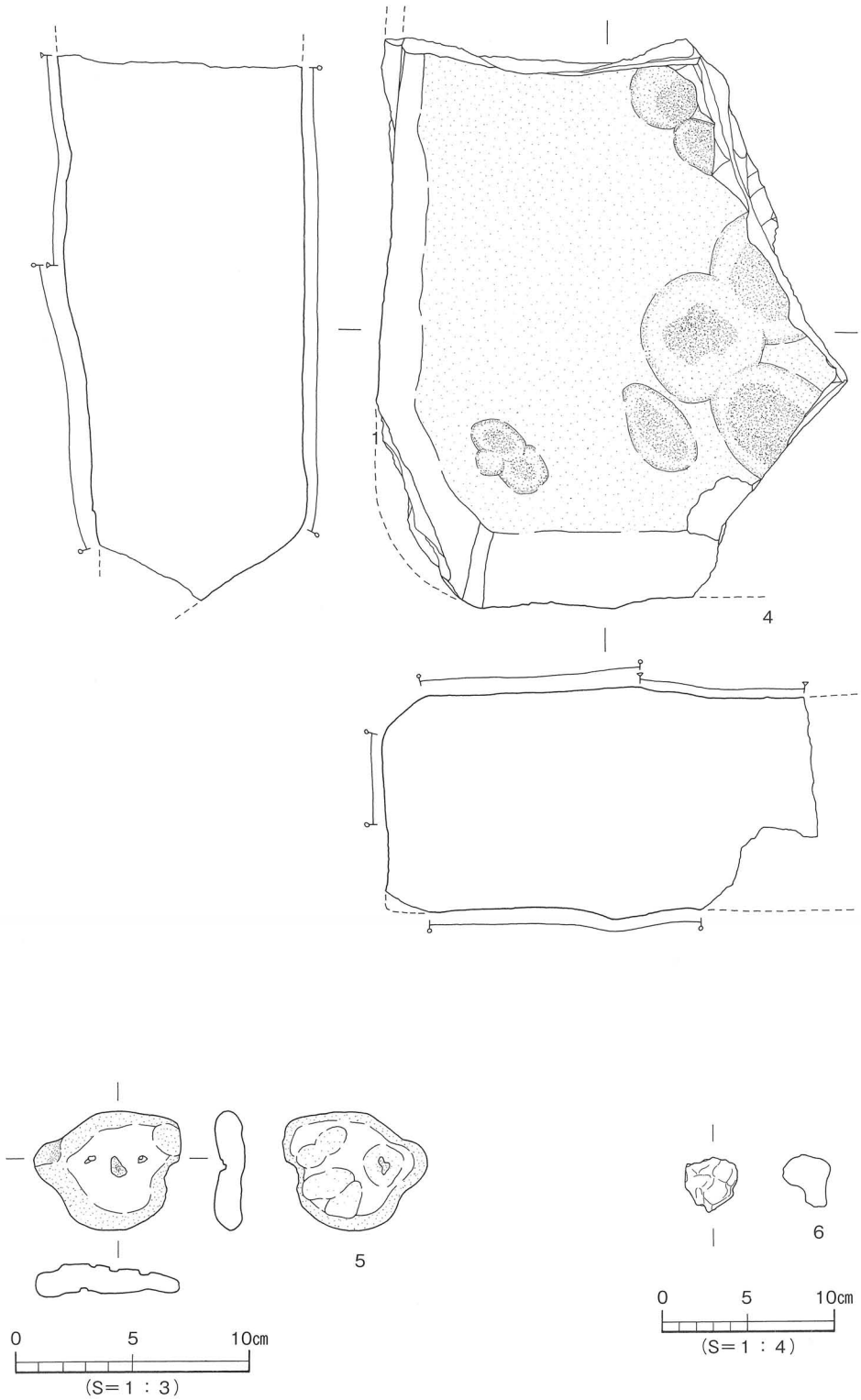
時期：出土した遺物から、ＳＫ21は縄文時代晩期前半とする。遺構の性格は、土器（１）の出土状況から墓と考える。１が棺身となるが、２～６は用途が特定できない。



第５図　ＳＫ21測量図



第６図　ＳＫ21出土遺物実測図(1)



第７図　ＳＫ21出土遺物実測図(2)

2．弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は、前期末～中期初頭、中期前葉、中期中葉、中期後葉～後期初頭に時期比定されるものがある。以下、時期ごとに主な遺構と遺物の説明をおこなう。

（1）弥生時代前期末～中期初頭（第８図）

遺構には、土坑78基、溝４条、柱穴８基がある。

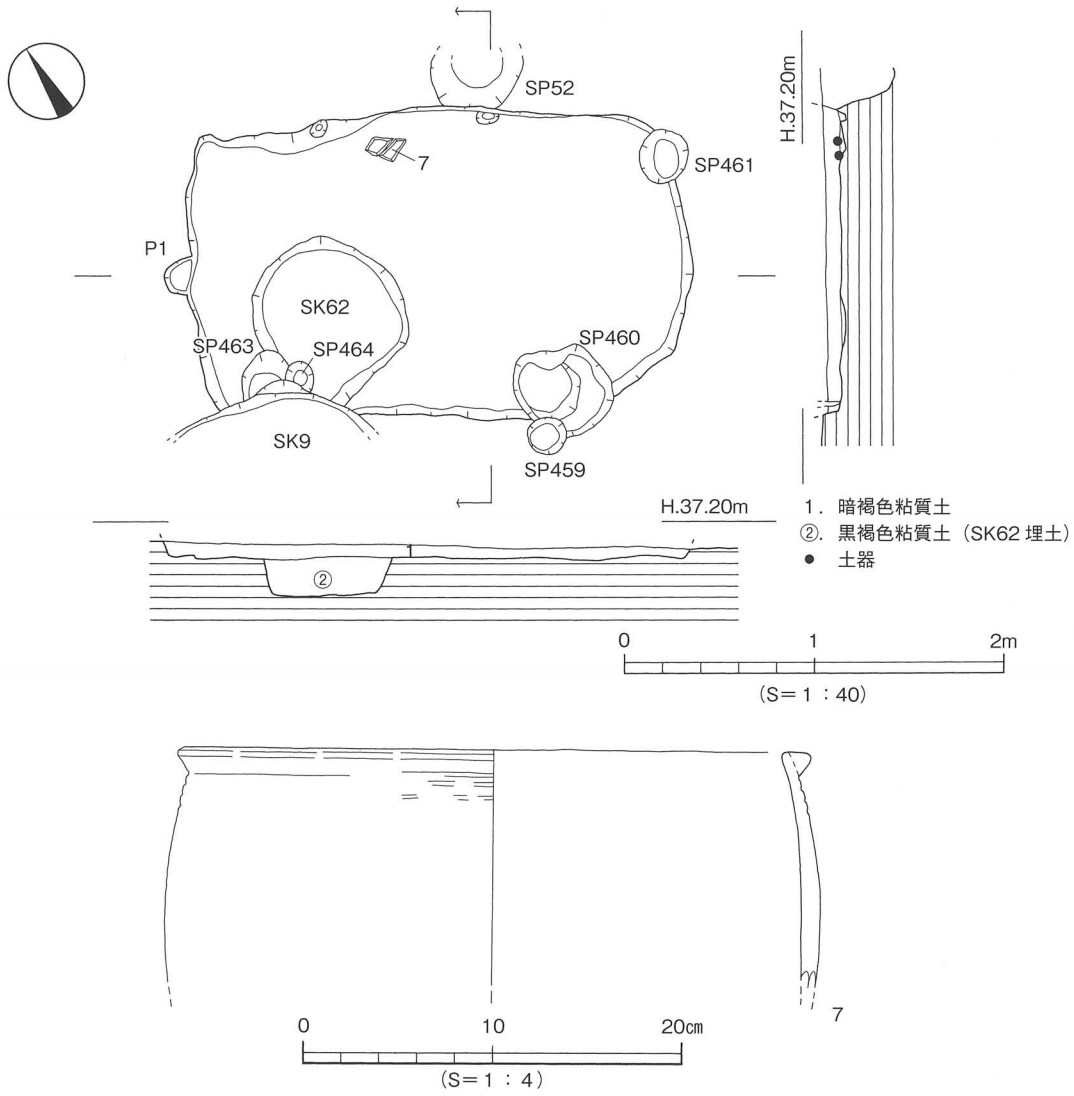
第８図　弥生時代前期末～中期初頭の遺構配置図

1）土　坑（ＳＫ）

この時期に比定される土坑は78基である。土坑の多くは、重複していた。平面形態には、長方形と円形の２種類があり、長方形は37基、円形は40基ある。断面形態は、長方形土坑では筒状･逆台形状･皿状、円形土坑では皿状・袋状に内湾するものがある。殆どの土坑は単一層で埋没し、底面は平坦であり、検出面からの深さは0.1～0.27ｍであった。

ＳＫ10（第９図）

Ｃ12区に位置し、ＳＫ９（古墳時代）・ＳＰ459・460・461（時期不明）に切られ、ＳＫ62（弥生時代前期末～中期初頭）を切る。平面形態は隅丸長方形で、規模は長軸2.63ｍ、短軸1.64ｍ、深さ0.1ｍを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦になる。埋土は暗褐色の粘質土単層である。西壁中央部では小穴を１基、東壁中央部では小穴を２基確認した。小穴埋土は土坑と同じである。遺物は、底面から甕形土器片（７）が内面を上にして出土した。



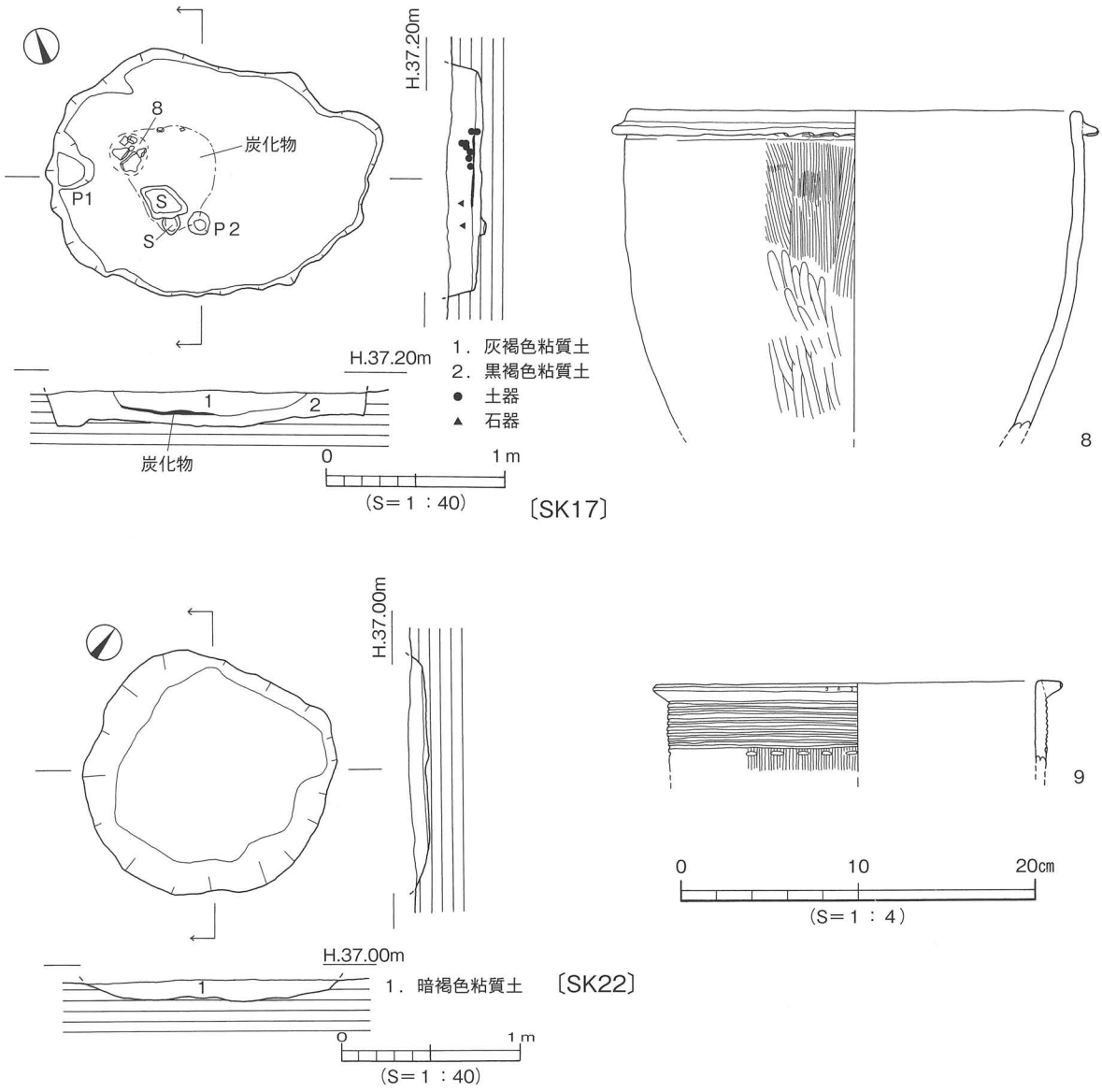
第９図　ＳＫ10測量図・出土遺物実測図

ＳＫ17（第10図）

Ｄ９・10区に位置する。平面形態は不整形な円形で、規模は長軸1.89m、短軸1.44m、深さ0.21mを測る。断面形態は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。埋土は２層に分層でき、上層は灰褐色の粘質土、下層は黒褐色の粘質土である。炭化層は遺構中央部分の２層上面で検出し、約１㎡に分布する。遺物の殆どが炭化物層上面から出土した。遺物は甕形土器片（８）と握り拳大の礫が４点ある。８は甕形土器で、口縁端部のやや下位に断面三角形の突帯を貼り付ける。

ＳＫ22（第10図）

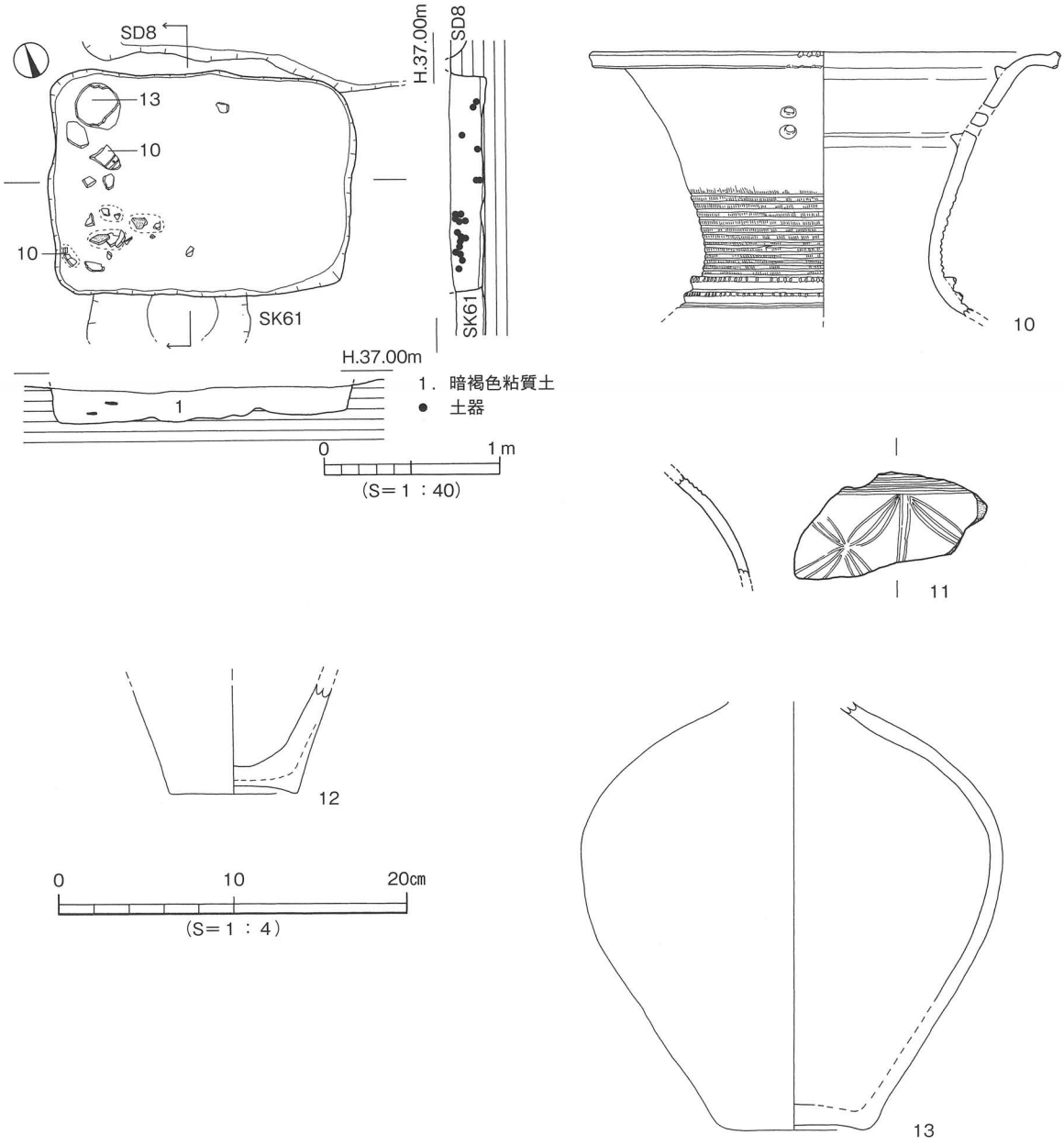
Ｉ13区に位置する。平面形態は円形で、規模は径1.41m、深さ0.11mを測る。断面形態は皿状で、底面はほぼ平坦になる。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は、甕形土器片（９）が底面より出土した。



第10図　ＳＫ17・22測量図・出土遺物実測図

ＳＫ24（第11図、図版４・10）

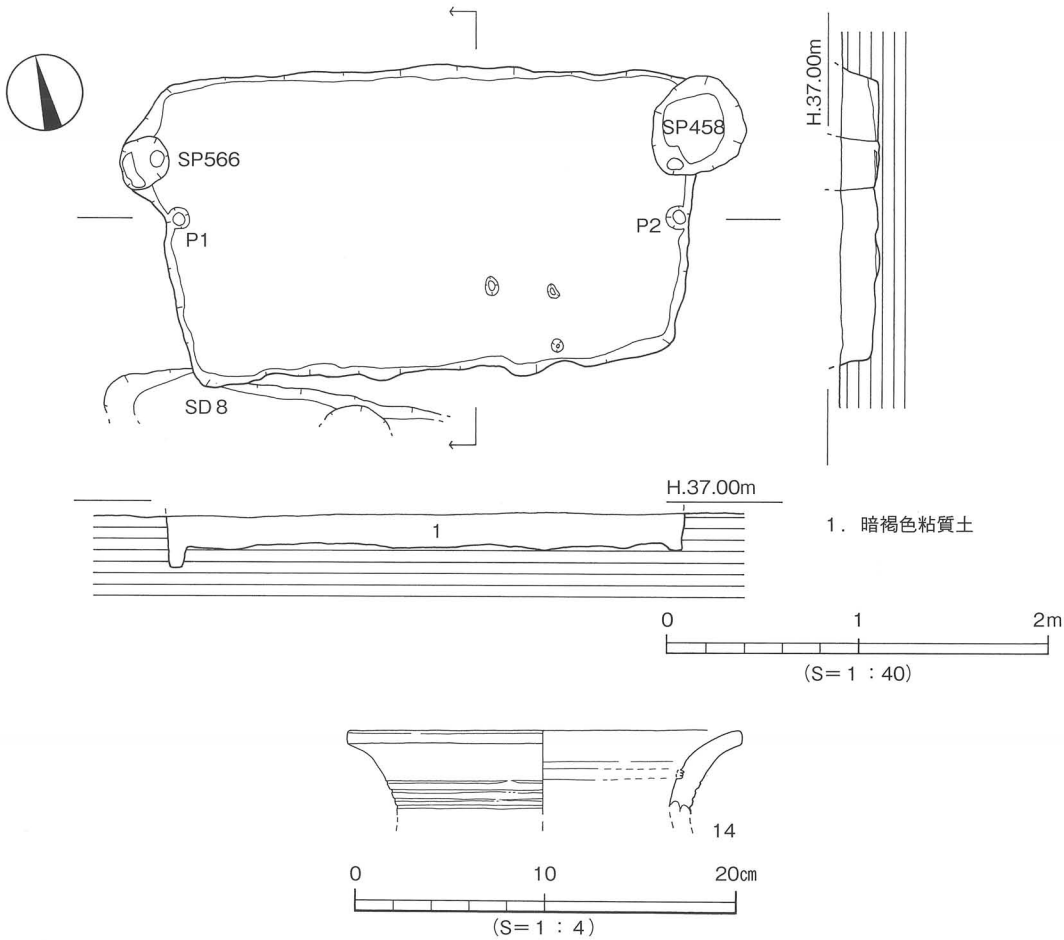
H11・12区に位置し、ＳＫ61（古墳時代）に切られ、ＳＤ８（弥生時代前期末～中期初頭）・ＳＰ398（時期不明）を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸1.72m、短軸1.27m、深さ0.19mを測る。断面形態は筒状であり、底面は平坦になる。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は10～13で、土坑の西側に分布し、10～12は埋土上位、13は底面から出土した。13の壺形土器は、胴部から底部までがほぼ完存し、土坑北西部の壁沿いで出土した。検出状況から、置かれていた可能性がある。この土器内からは炭化物が大量に検出した。



第11図　ＳＫ24測量図・出土遺物実測図

ＳＫ25（第12図）

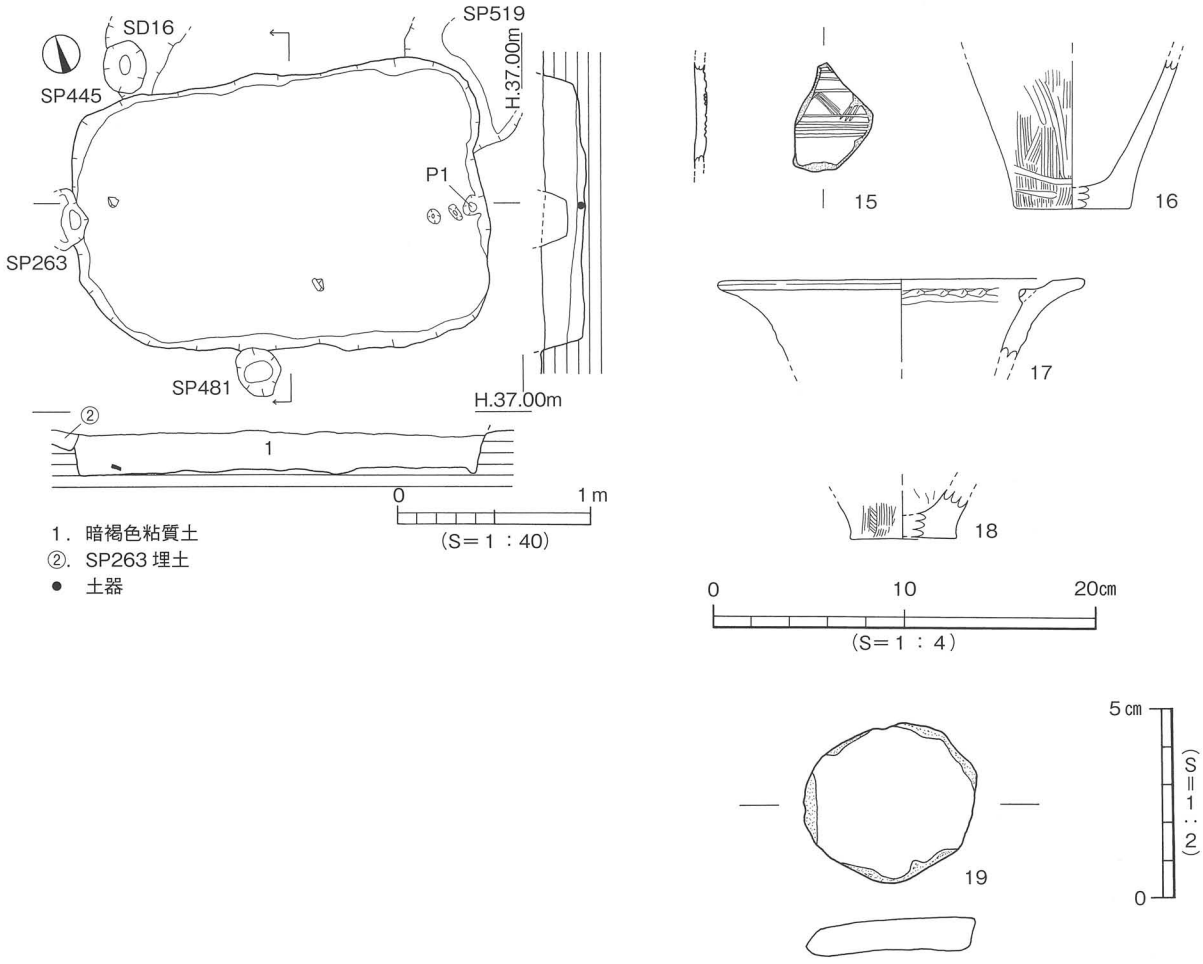
Ｇ・Ｈ11区に位置し、ＳＤ８（弥生時代前期末～中期初頭）を切り、ＳＰ458・566（時期不明）に切られる。平面形態は長方形で、規模は長軸2.73m、短軸1.59m、深さ0.19mを測る。断面形態は筒状で、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。両短辺中央部には小穴（Ｐ１・Ｐ２）がある。小穴埋土は土坑と同じであり、土坑に伴うものと考えられる。小穴の断面は、土坑壁面側が垂直にたちあがる。14は壺形土器の口縁部で、口縁部内面の突帯は剝離している。



第12図　ＳＫ25測量図・出土遺物実測図

ＳＫ28（第13図）

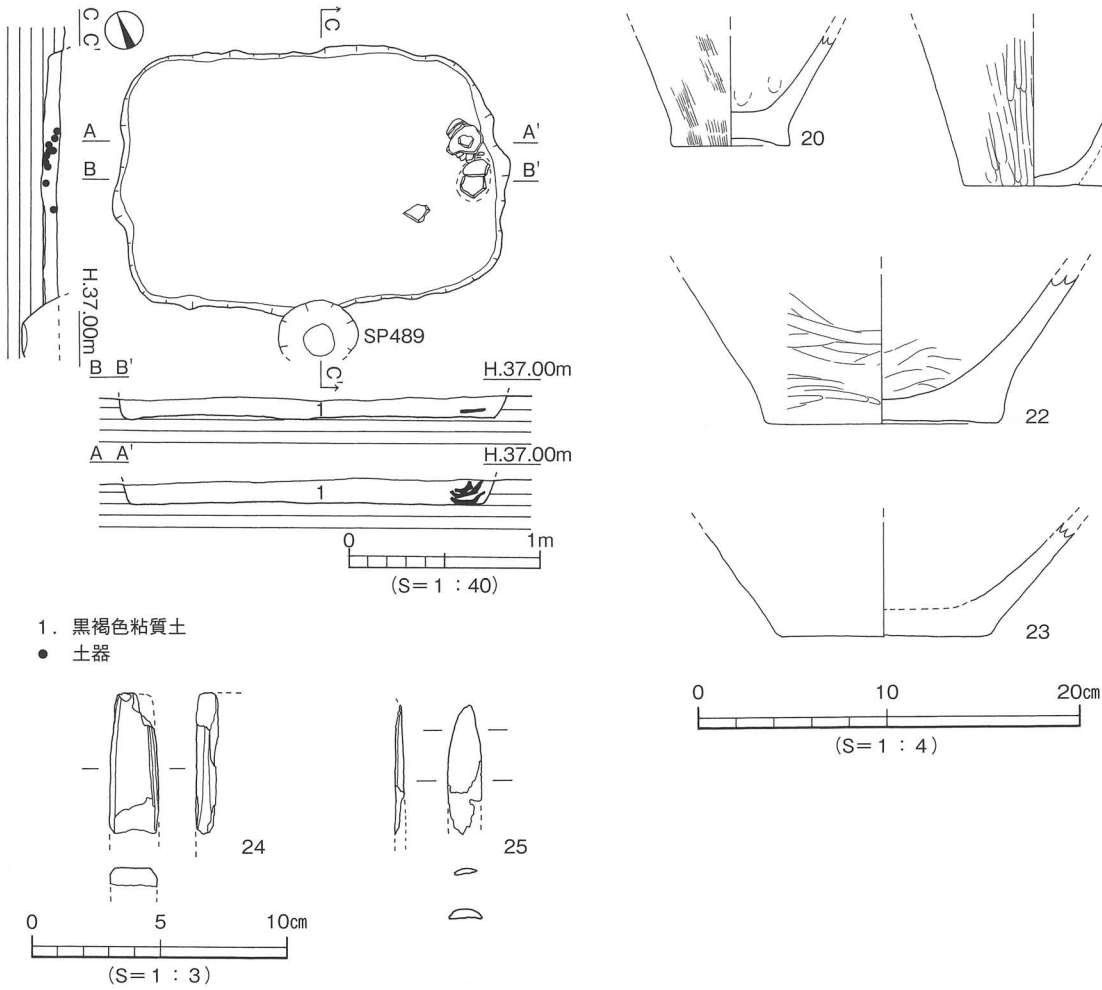
Ｊ・Ｉ12区に位置し、ＳＰ263・481（時期不明）に切られ、ＳＤ16・ＳＰ519（時期不明）を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸2.10m、短軸1.48m、深さ0.21mを測る。断面形態は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。ＳＫ25と同様に、短辺中央部に小穴（Ｐ１）を持つ。東壁はＳＰ263に切られ小穴の有無は判断できない。埋土は暗褐色の粘質土単層、小穴埋土も土坑埋土と同じであった。遺物は、底面から甕形土器（15・16）、壺形土器（17・18）の破片と用途不明土製品１点（19）が出土した。このうち、18の底部内面には全体に赤色顔料が付着していた。分析の結果、水銀朱であることが判明した。その他の遺物や遺構からは、赤色顔料は検出されなかった。



第13図　ＳＫ28測量図・出土遺物実測図

ＳＫ29（第14図）

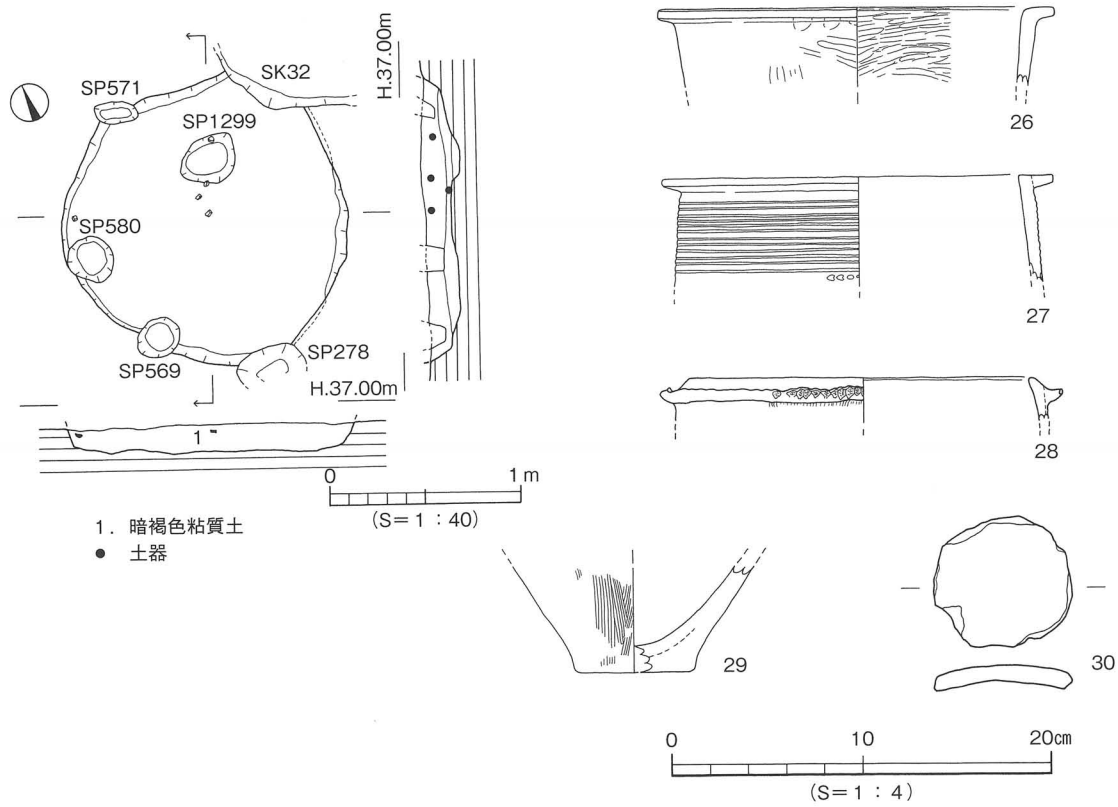
Ｉ11区に位置する。平面形態は長方形で、ＳＰ489（時期不明）に切られる。規模は長軸2.02m、短軸1.37m、深さ0.11mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦であった。埋土は黒褐色の粘質土単層である。遺物は20～25で、土坑の東辺付近に集中して出土した。甕形土器と壺形土器の底部が上から20・21・22・23の順に重なっていた。なお、22は断面図の軸線からずれているために記載がなされていない。24・25は土器からやや離れて出土した。24は加工斧で、25は用途不明石製品である。



第14図　ＳＫ29測量図・出土遺物実測図

ＳＫ30（第15図）

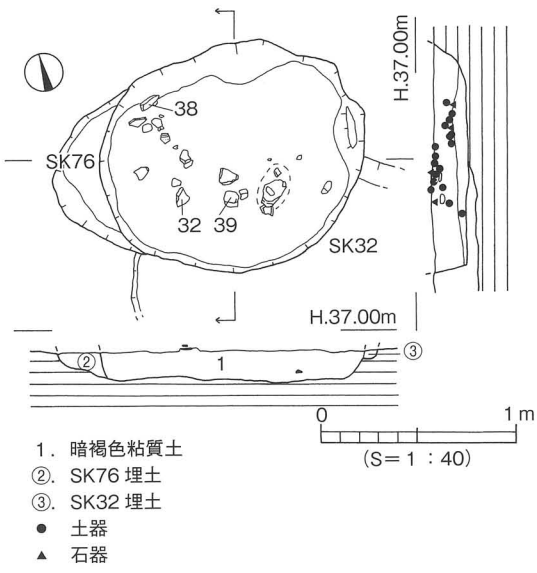
Ｊ11区に位置し、ＳＫ32（弥生時代前期末～中期初頭）・ＳＰ278・569・570・571（時期不明）に切られ、ＳＰ1299（時期不明）を切る。平面形態は円形で、規模は径1.50m、深さ0.16mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は東側部分が平坦で、西側は若干の凸凹をもつ。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は26～30で、土坑中央部の埋土上位から甕形土器（26～28）が、土坑西側で壺形土器（29）と用途不明土製品（30）が出土した。28は甕形土器の口縁部で、口縁端部よりやや下がった位置に断面三角形の凸帯を貼り付ける。



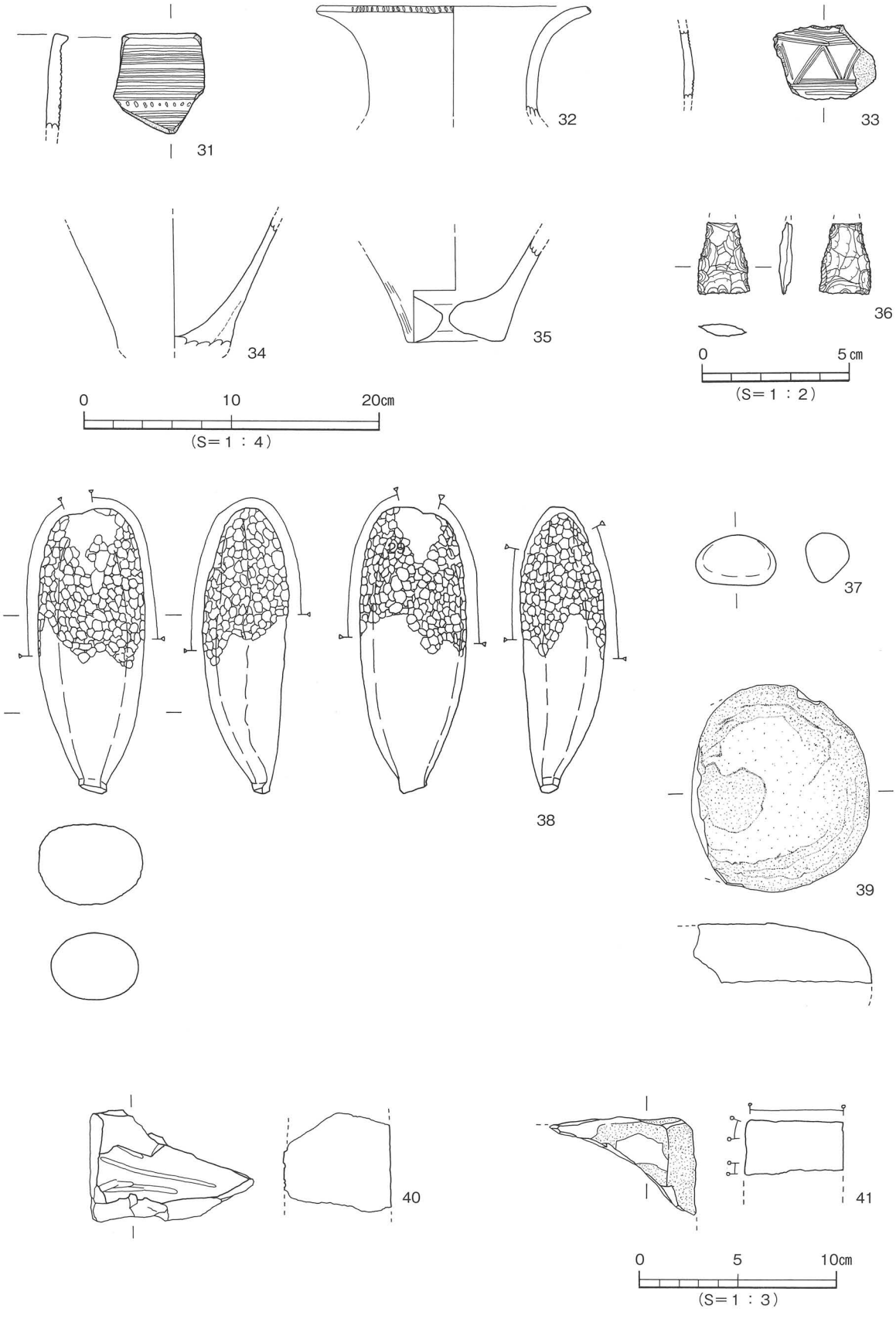
第15図　ＳＫ30測量図・出土遺物実測図

ＳＫ31（第16・17図、図版４・10）

Ｊ・Ｉ～10・11区に位置し、ＳＫ32・76（弥生時代前期末～中期初頭）を切る。平面形態は楕円形で、規模は長軸1.60m、短軸1.21m、深さ0.19mを測る。断面形態は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。出土した遺物は31～41で、いずれも二次焼成を受けていた。しかし、遺構の埋土は焼成を受けておらず、焼土も含有していない。35・39～41は中央部上面で、31～34・36～38は西側の底面付近から出土した。



第16図　ＳＫ31測量図



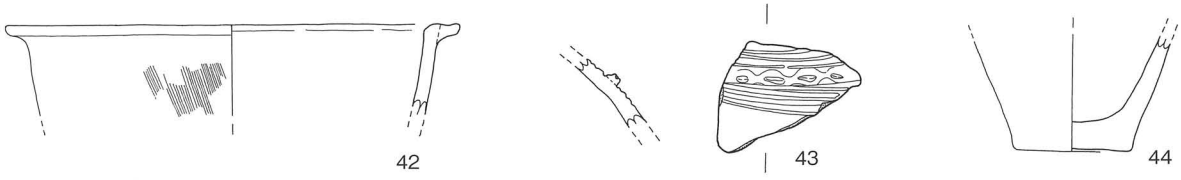
第17図　ＳＫ31出土遺物実測図

ＳＫ32（第18図、図版10）

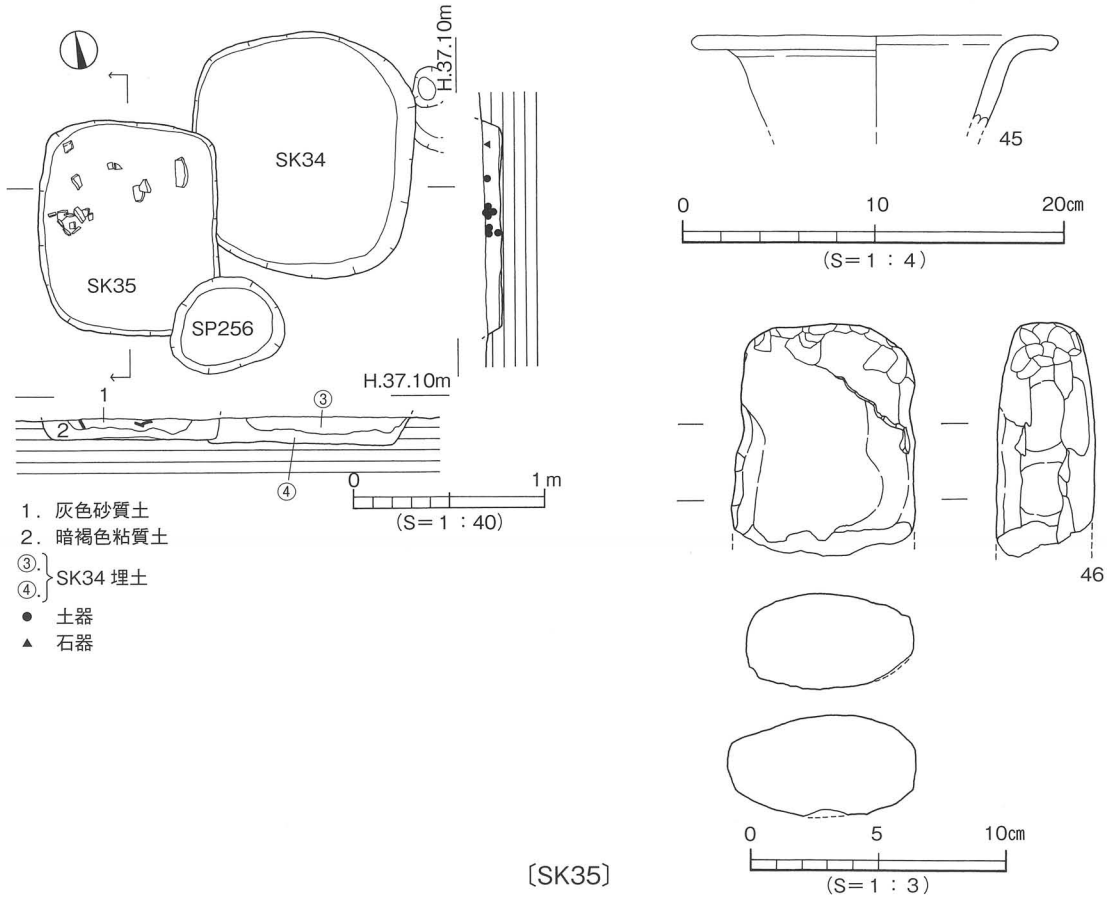
Ｉ・Ｊ10区に位置し、ＳＫ31（弥生時代前期末～中期初頭）に切られる。平面形態は長方形で、規模は長軸1.70m、短軸1.26m、深さ0.19mを測る。底面は凹凸がある。埋土は黒褐色の粘質土単層である。遺物は41～44で、甕形土器と壺形土器の小片が数点出土している。

ＳＫ35（第18図）

Ｈ９区に位置し、ＳＰ256（時期不明）に切られ、ＳＫ34（弥生時代前期末～中期初頭）を切る。平面形態は隅丸方形で、規模は長軸1.16m、短軸0.98m、深さ0.09mを測る。断面形態は逆台形状で、



〔SK32〕



〔SK35〕

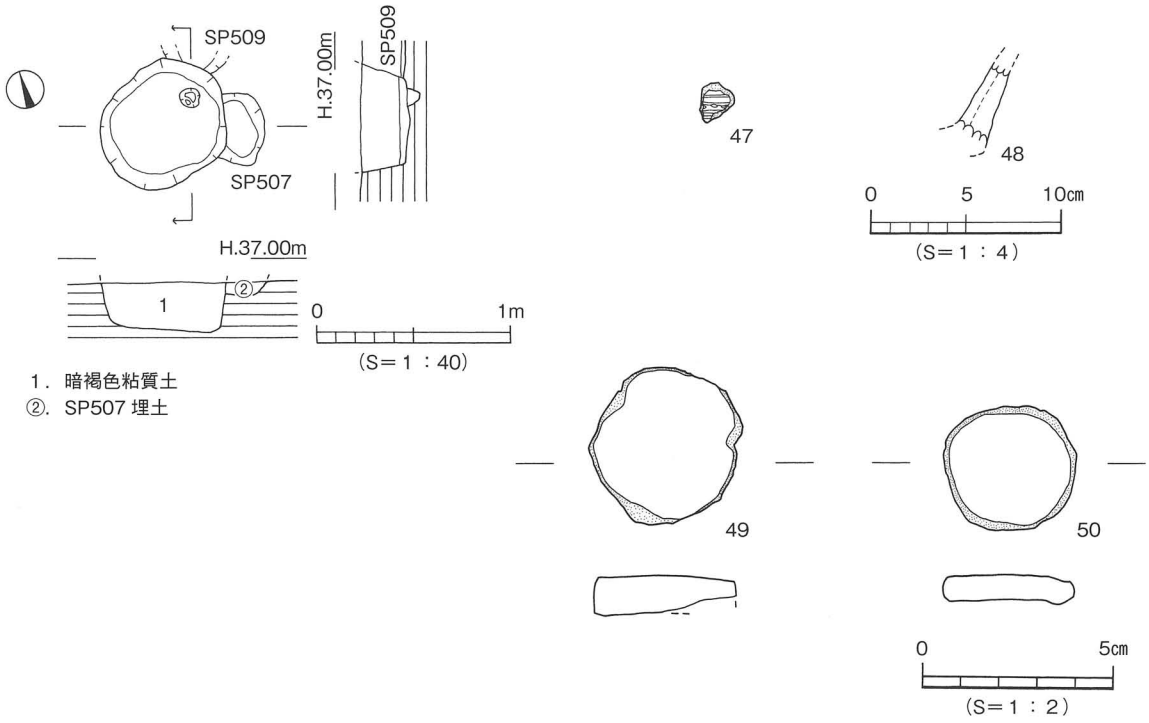
第18図　ＳＫ35測量図・ＳＫ32・35出土遺物実測図

底面はほぼ平坦である。埋土は２層で、上層が灰色の砂質土、下層が暗褐色の粘質土である。遺物は45・46で、上層から、壺形土器片（45）や伐採斧の柄基部（46）が出土した。

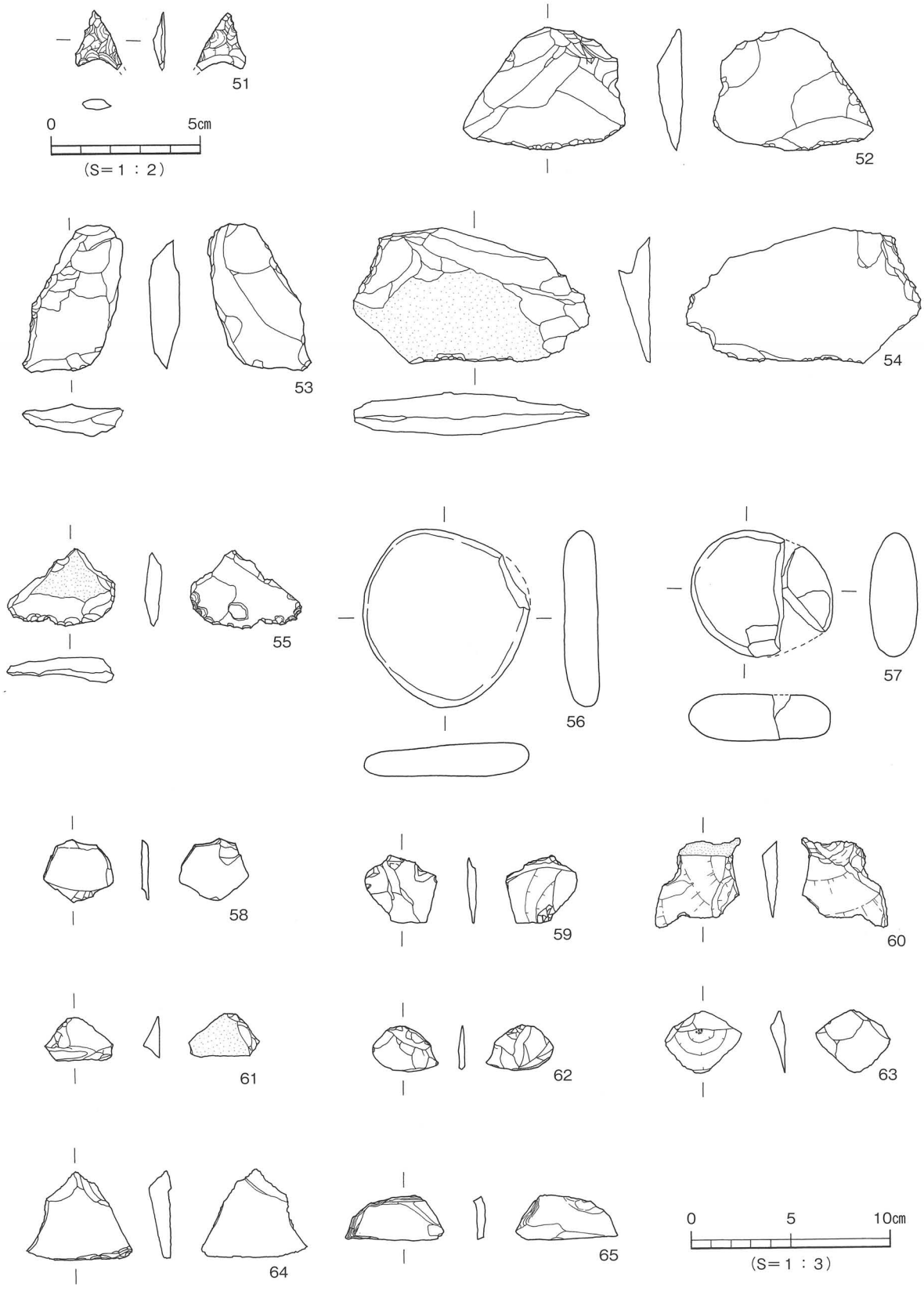
ＳＫ40（第19・20図、図版11）

Ｊ11区に位置する。ＳＰ507・509（時期不明）を切る。平面形態は円形で、規模は径0.69m、深さ0.26mを測る。断面形態は逆台形状である。底面はほぼ平坦で、東側の壁際には小穴が１基ある。土坑埋土は暗褐色の粘質土単層で、小穴も同じ埋土であった。遺物は47～65で、石器の成品や石器素材が多数出土した。成品は打製石鏃が１点（51）、スクレイパーが４点（52～55）、円盤状の用途不明石製品が２点（56・57）で、石器素材はサヌカイト片が８点（58～65）出土した。土器は小片が出土したにすぎない。他に、用途不明土製品が２点（49・50）が出土した。

石器の成品と素材が、ひとつの土坑で出土した遺構はＳＫ40に限られる。



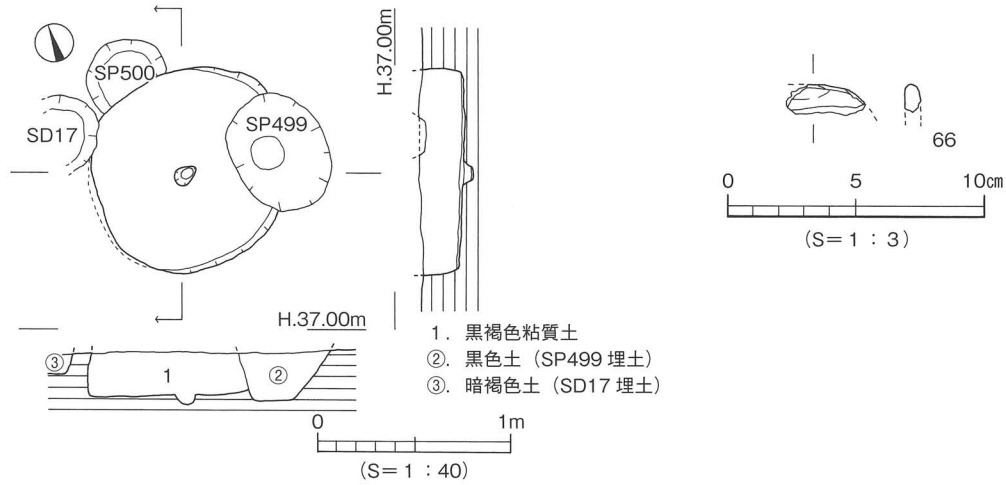
第19図　ＳＫ40測量図・出土遺物実測図(1)



第20図　ＳＫ40出土遺物実測図(2)

ＳＫ41（第21図）

Ｊ10区に位置し、ＳＰ499・ＳＤ17（時期不明）に切られ、ＳＰ500（時期不明）を切る。平面形態は円形で、規模は径1.19m、深さ0.23mを測る。断面形態は袋状となる。底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色の粘質土単層である。土坑中心部分には径10cmの小穴があり、埋土は遺構埋土と同じである。遺物は少なく、実測可能な遺物は１点（66）で、石庖丁の破片となる。



第21図　ＳＫ41測量図・出土遺物実測図

ＳＫ50（第22図、図版12）

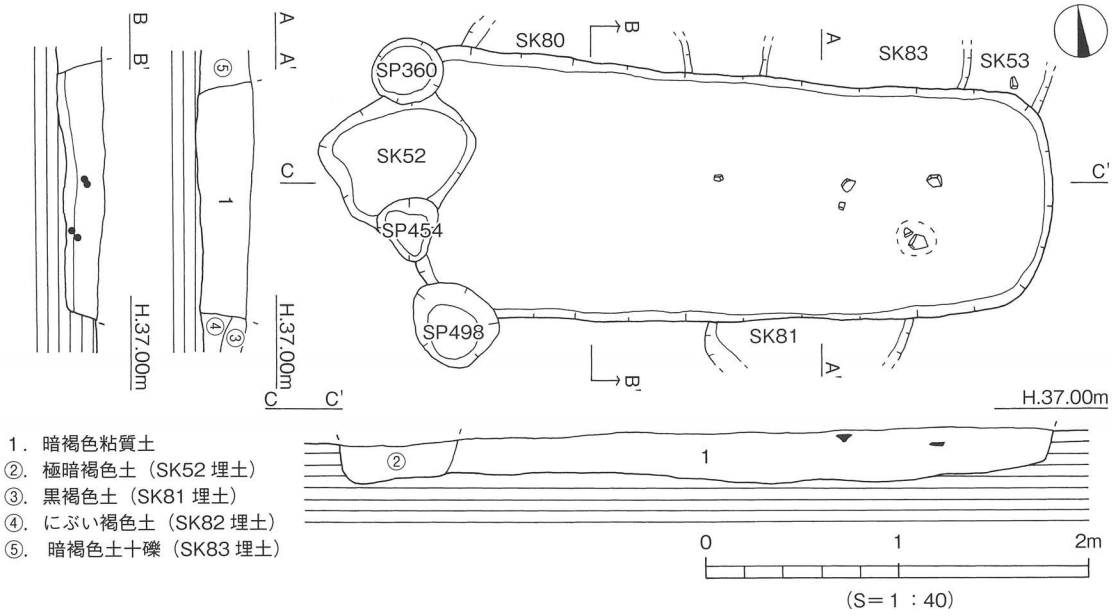
Ｋ・Ｌ～８・９区に位置し、ＳＫ52・ＳＰ360・454・498（時期不明）に切られ、ＳＫ53・80・81・83（弥生時代前期末～中期初頭）を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸3.32m、短軸1.40m、深さ0.26mを測る。断面形態は逆台形状で、底面はほぼ平坦であった。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は67～71で、埋土上位から中位にかけて、甕形土器（67）、壺形土器（68）、加工斧の扁平片刃石斧（69）、棒状叩き石（70）が出土した。

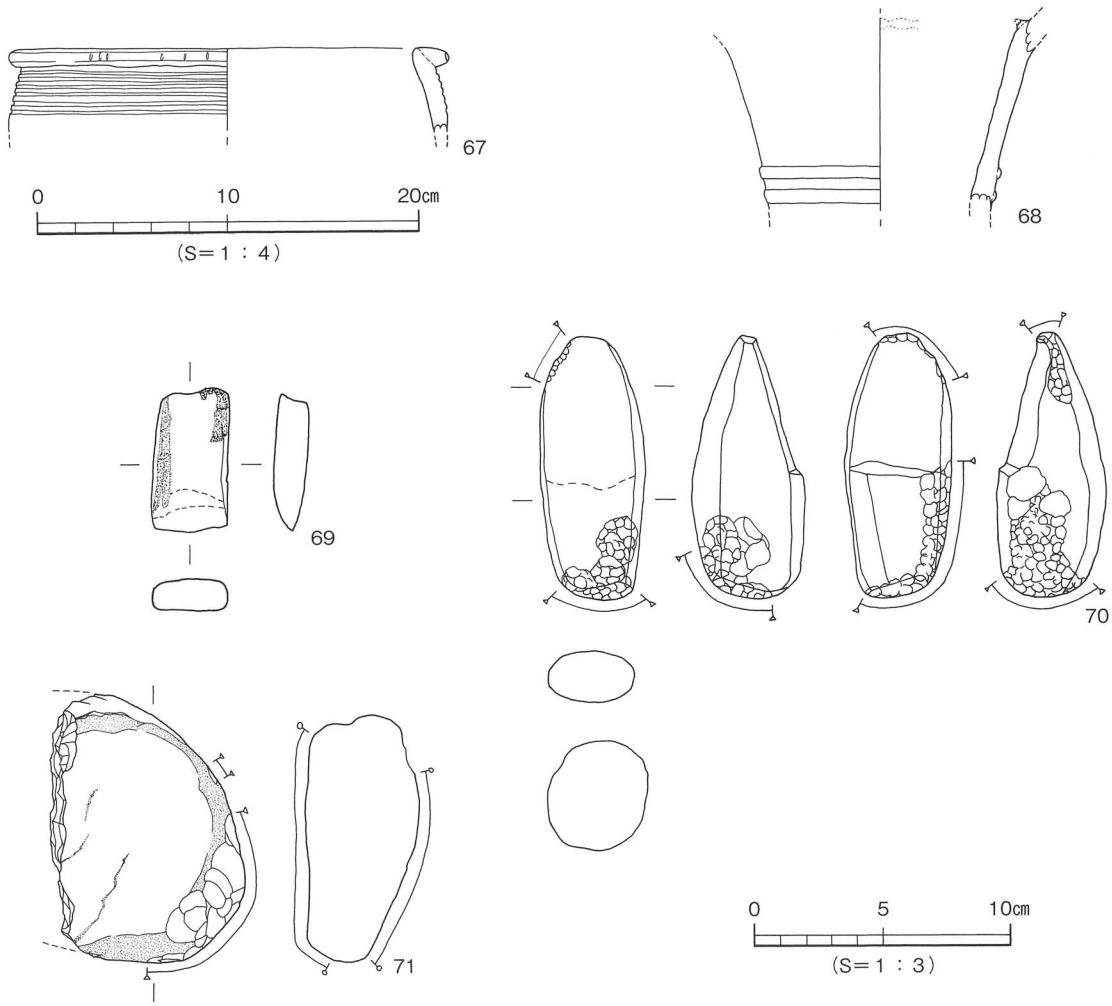
ＳＫ53（第23図、図版12）

Ｊ・Ｋ８区に位置し、ＳＫ49（時期不明）・50・83・84（弥生時代前期末～中期初頭）に切られる。平面形態は長方形で、規模は長軸1.11m、短軸0.70m、深さ0.26mを測る。底面はテラス状になった浅い部分と、深い部分からなり、深い部分の壁体は斜めに立ち上がる。埋土は褐色の粘質土単層である。遺物は、72の壺形土器がほぼ完形で出土した。この土器は口縁部分を下にして検出された。

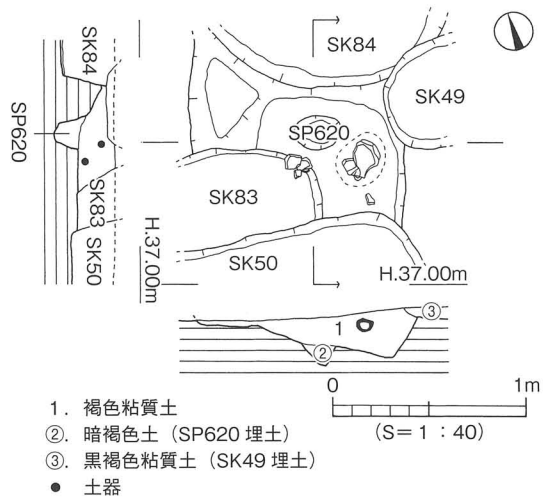
ＳＫ60（第23図）

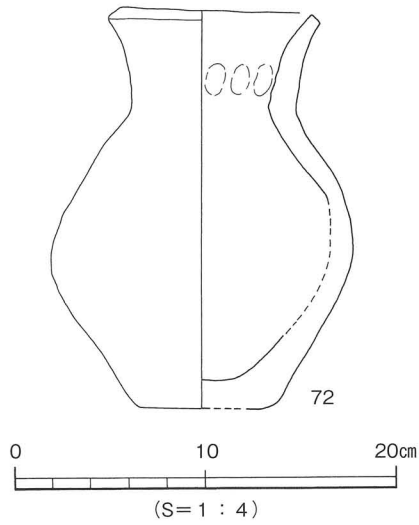
Ｃ10・11区に位置し、ＳＰ560（時期不明）に切られ、ＳＫ56・57・58（弥生時代前期末～中期初頭）を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸2.99m、短軸1.28m、深さ0.16mを測る。断面形態は逆台形状で、底面はほぼ平坦であった。埋土は黒褐色の粘質土単層である。遺物は73と74で、土坑の東壁面付近の埋土上位から土器の底部１点（73）と石器１点（74）が出土した。



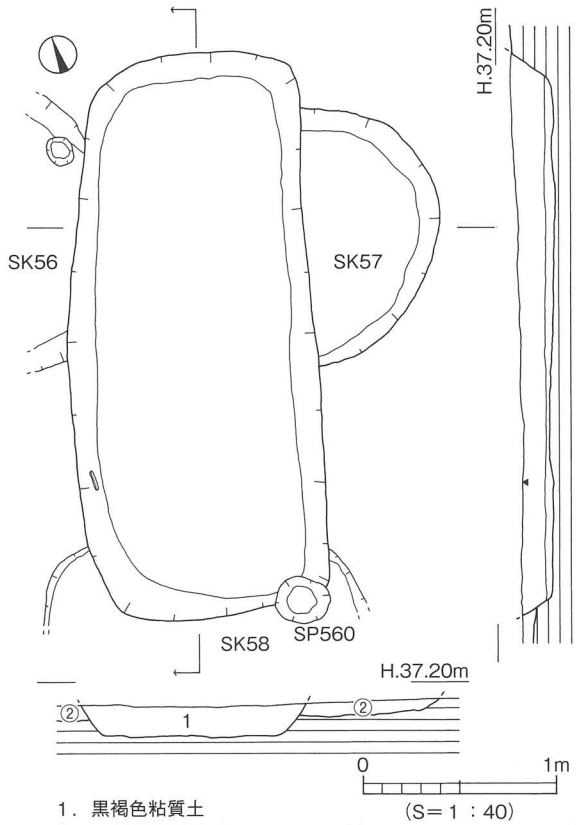


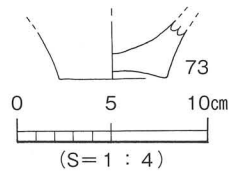
第22図　ＳＫ50測量図・出土遺物実測図

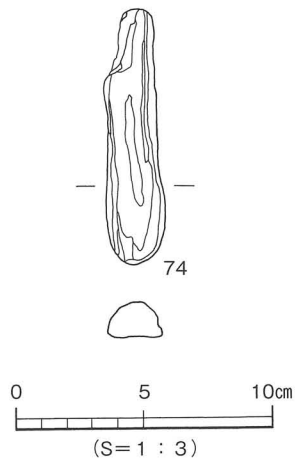




〔SK53〕





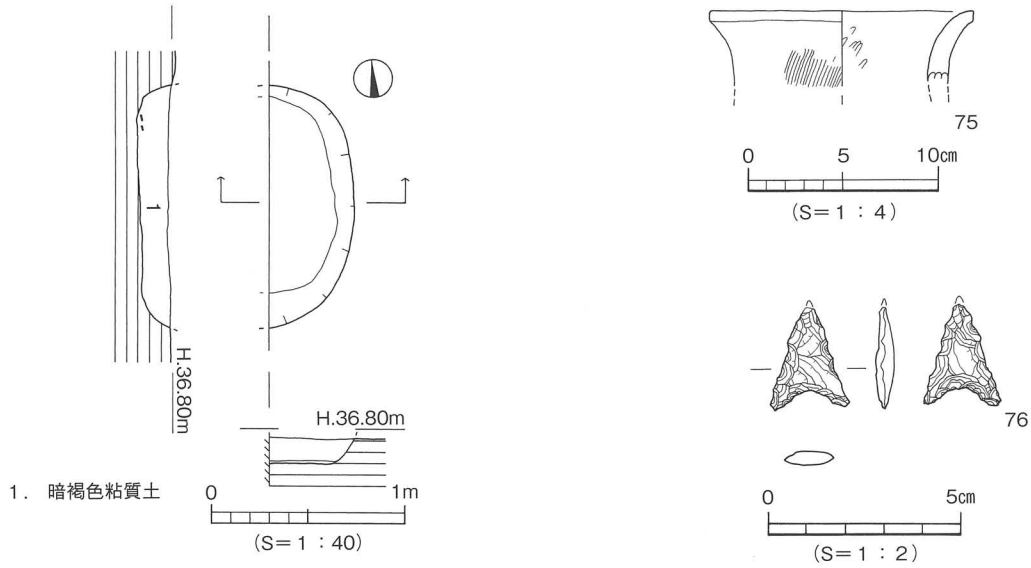


〔SK60〕

第23図　ＳＫ53・60測量図・出土遺物実測図

ＳＫ87（第24図）

Ｌ６・７区に位置し、遺構西半部が調査区外に続く。平面形態は円形と推測され、検出規模は径1.29m、深さ0.16mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は75と76で、壁体直下の底面から壺形土器の口縁部片１点（75）、埋土中位から打製石鏃１点（76）が出土した。



第24図　ＳＫ87測量図・出土遺物実測図

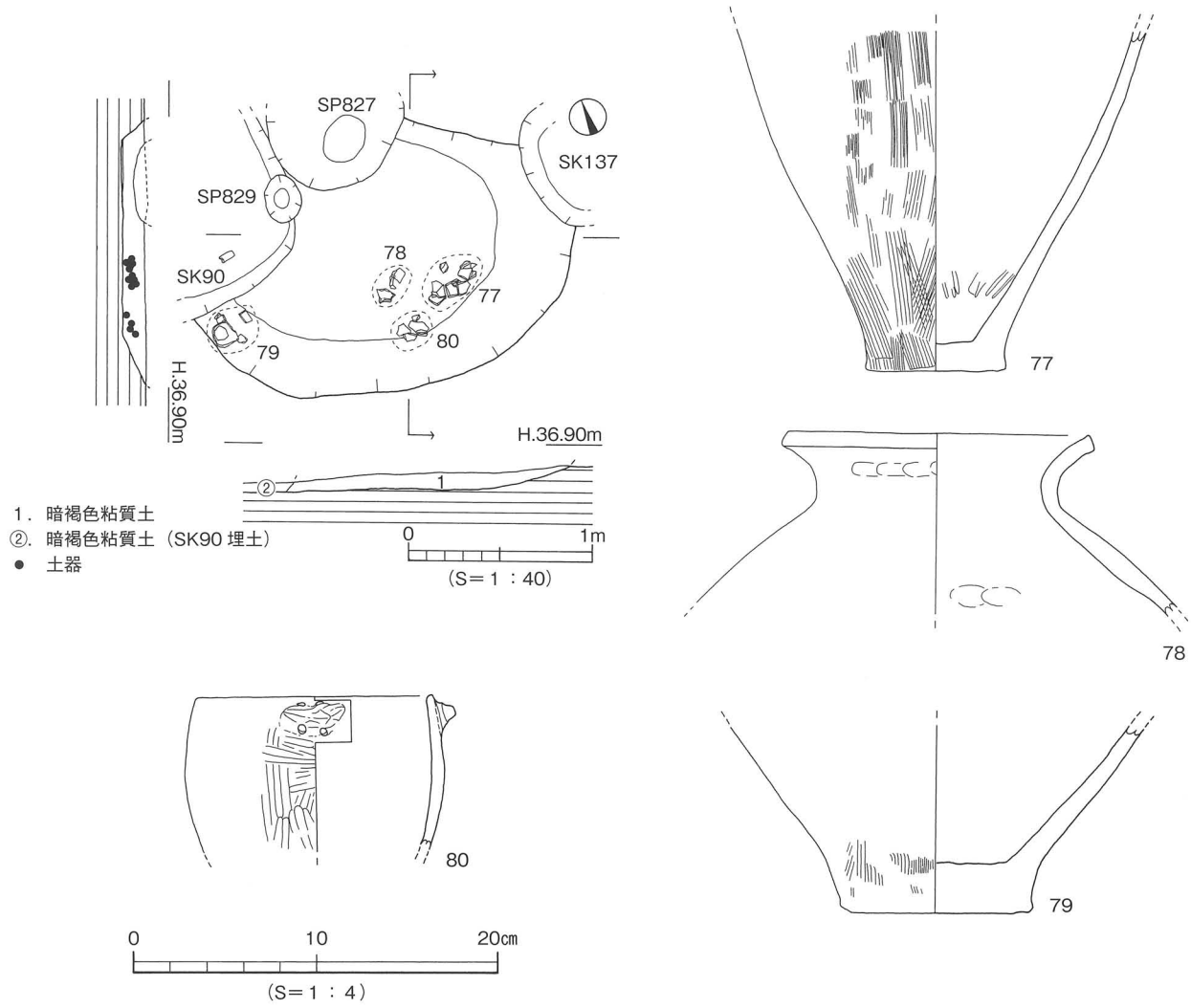
ＳＫ89（第25図）

Ｌ６区に位置し、ＳＫ90・137（弥生時代前期末～中期初頭）・ＳＰ827・829（時期不明）に切られる。平面形態は楕円形で、規模は長軸1.52m、短軸1.49m、深さ0.1mを測る。断面形態は皿状を呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層。遺物は77～81で、南東側と南西側にそれぞれ密集し、底面から高さ５cm付近で出土した。南東側の土器（77・78・80）は各個体ごとに折り重なって出土した。南西側では土器（79）が、中央部分からは石器（81）が出土した。81は用途不明品で、石材は堆積岩である。破損しているが、ａ面には円形の窪みが、ｂ面には緩かな窪みが観察できる。

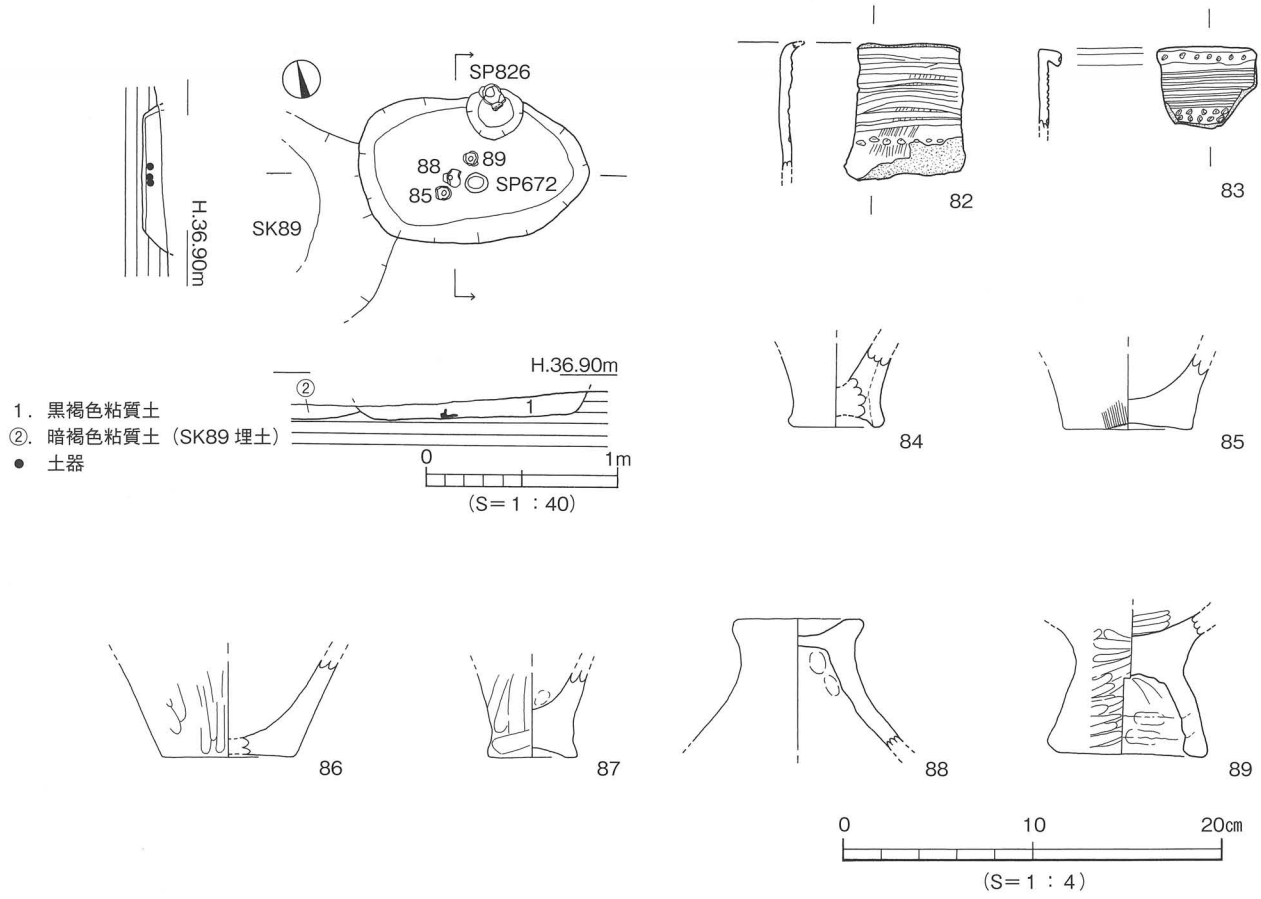
ＳＫ137（第26図、図版６）

Ｋ６区に位置し、ＳＰ826（弥生時代前期末～中期初頭）に切られ、ＳＫ89（弥生時代前期末～中期初頭）・ＳＰ672（時期不明）を切る。平面形態は楕円形で、規模は長軸1.16m、短軸0.79m、深さ0.08mを測る。断面形態は逆台形状を呈し、底面は東から西へ緩やかな傾斜をなす。埋土は黒褐色の粘質土単層である。遺物は82～89で、底面中央部から底部２点（87・89）と蓋１点（88）が出土し、埋土中からは底部片が３点（84・85・86）出土している。

このうち、87の鉢の底部内面には赤色顔料が付着していた。分析の結果、ベンガラであることが判明した。その他の遺物や遺構からは、赤色顔料は検出されなかった。



第25図　ＳＫ89測量図・出土遺物実測図



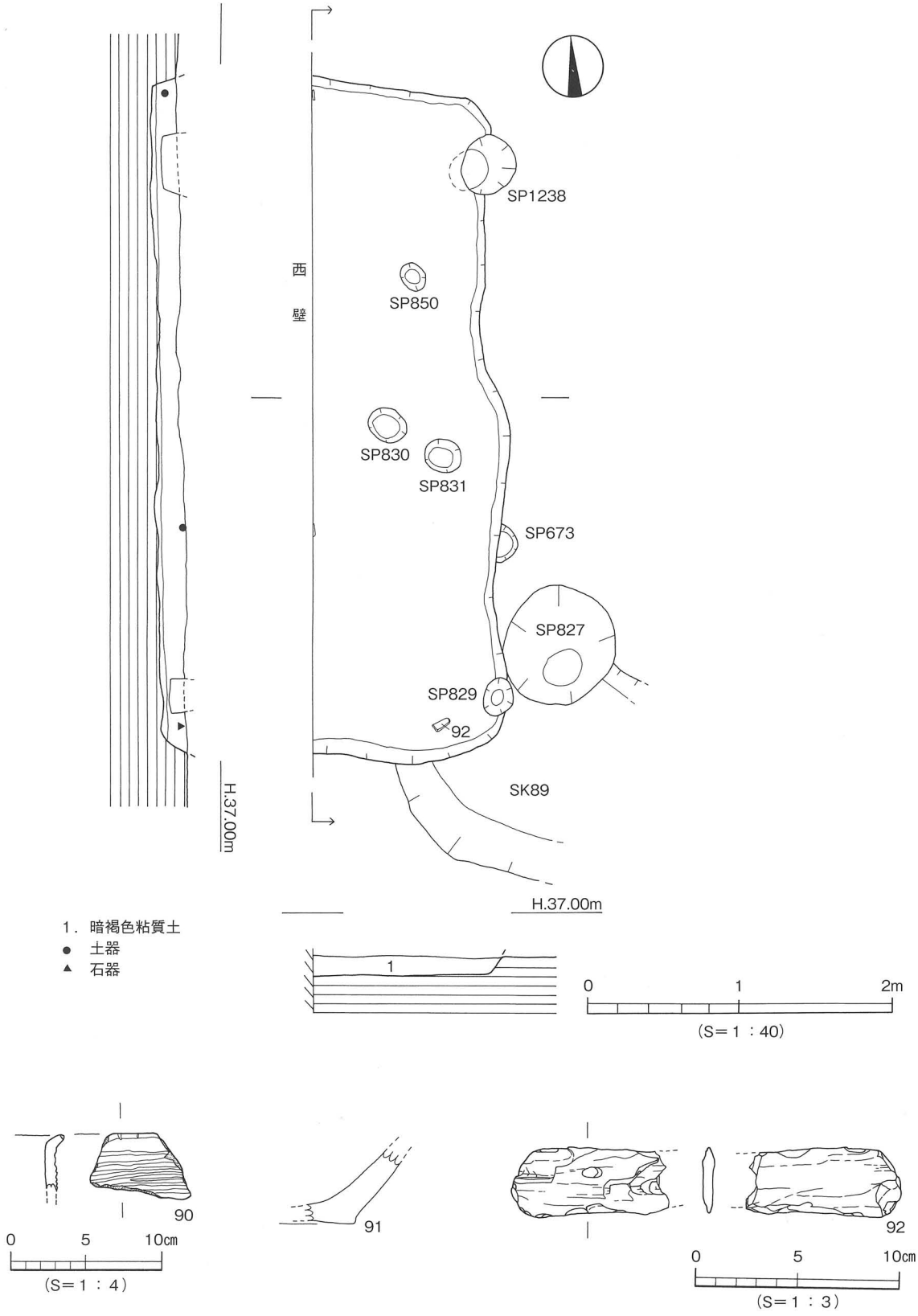
第26図　ＳＫ137測量図・出土遺物実測図

ＳＫ90（第27図）

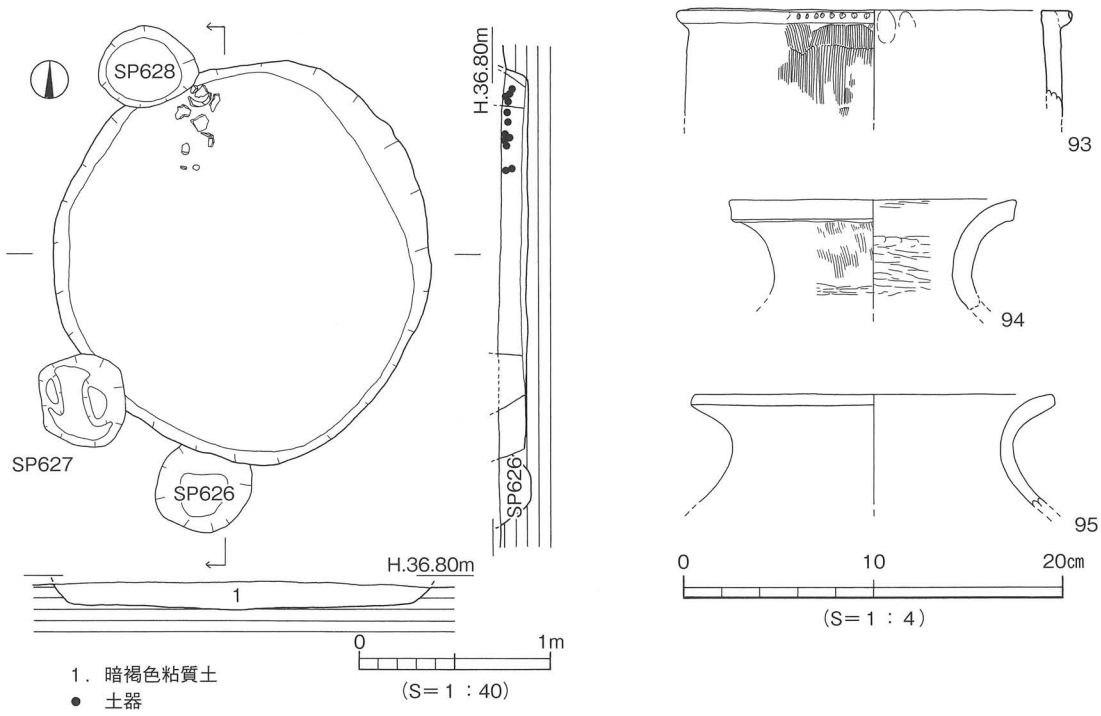
Ｌ５・６区に位置する。ＳＰ829･1238（時期不明）に切られ、ＳＫ89（弥生時代前期末～中期初頭）・ＳＰ673･830･831･850（時期不明）を切り、調査区に続く。平面形態は長方形で、規模は長軸4.42m、深さ0.1mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦であった。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は90～92で、南側上位から土器２点（90・91）と石庖丁の未製品（92）が出土した。

ＳＫ93（第28図）

Ｋ３区に位置し、ＳＰ627･628(時期不明)に切られ、ＳＰ626(時期不明)を切る。平面形態は円形で、規模は径2.00m、深さ0.16mを測る。断面形態は皿状で、底面は平坦であった。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は93～95で、北側の埋土上位から密集して甕形土器１点(93)と壺形土器２点(94･95）が出土した。



第27図　ＳＫ90測量図・出土遺物実測図



第28図　ＳＫ93測量図・出土遺物実測図

ＳＫ98（第29図）

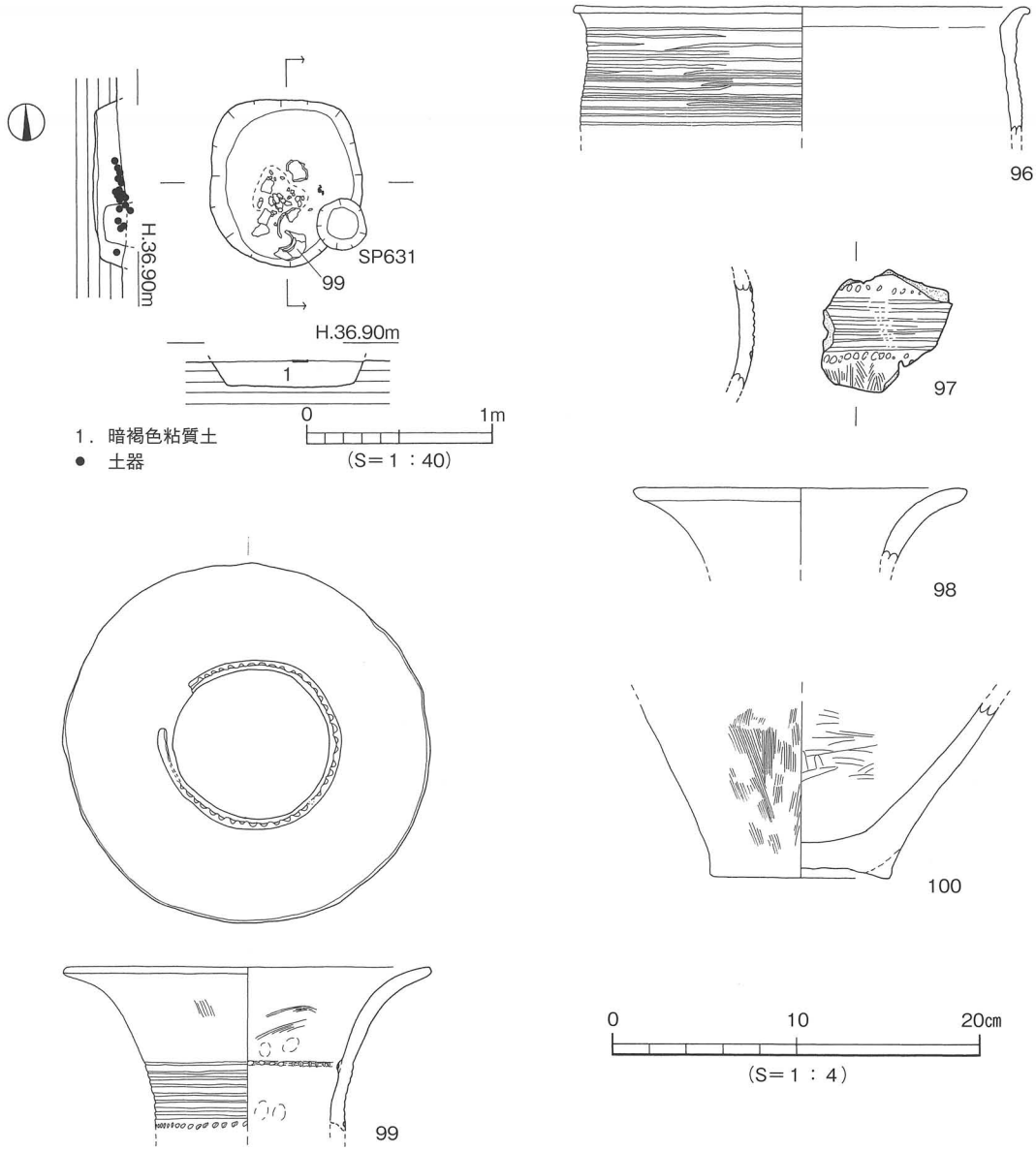
Ｋ４・５区に位置する。ＳＰ631（時期不明）に切られる。平面形態は楕円形で、規模は長軸0.90m、短軸0.81m、深さ0.14mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は埋土上位から、土器（96～100）と炭化物が密集して出土した。

ＳＫ103（第30図、図版５・12）

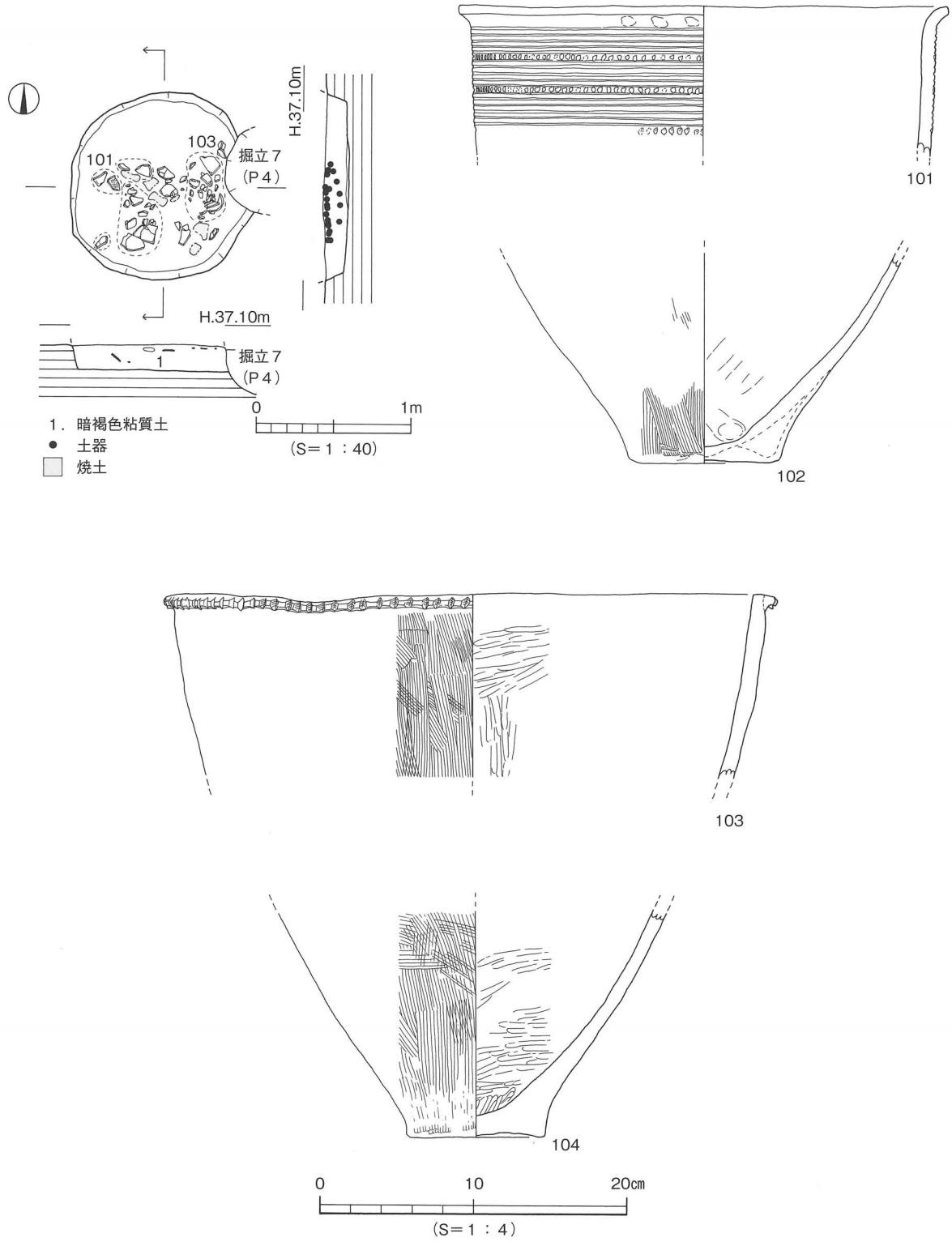
Ｉ７区に位置し、掘立柱建物７（上限：弥生時代中期後葉）の柱穴に切られる。平面形態は円形で、規模は径1.22m、深さ0.17mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は101～104で、土坑南半分に分布し、埋土上位から中位部分でバラバラな状態で出土した。他に、土器と共に若干の焼土塊が出土した。出土品には２個体分の甕形土器がある。

ＳＫ106（第31図、図版12）

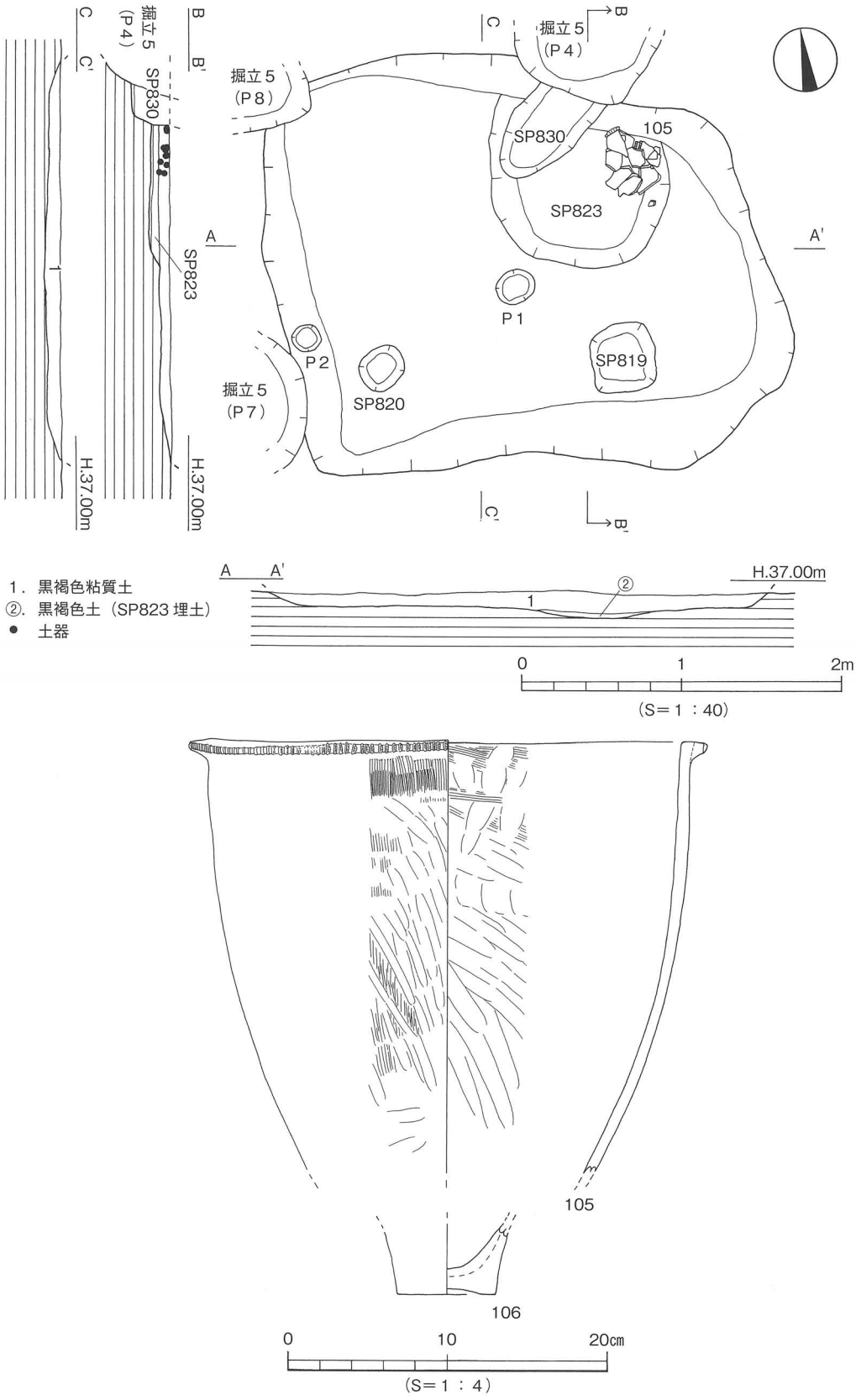
Ｉ、Ｊ４・５区に位置し、掘立柱建物５（古墳時代～古代）・ＳＰ819・820・830（時期不明）に切られ、ＳＰ823（時期不明）を切る。平面形態は不整形な長方形で、規模は長軸2.98m、短軸2.56m、深さ0.14mを測る。断面形態は皿状で、底面はほぼ平坦であった。埋土は黒褐色の粘質土単層である。Ｐ１・２は当遺構と同じ埋土であることから、ＳＫ106に伴うものと考えられる。遺物は105・106で、底面の北西部分から土圧で潰れた甕形土器（105）が出土した。105・106は同一個体の可能性がある。



第29図　ＳＫ98測量図・出土遺物実測図



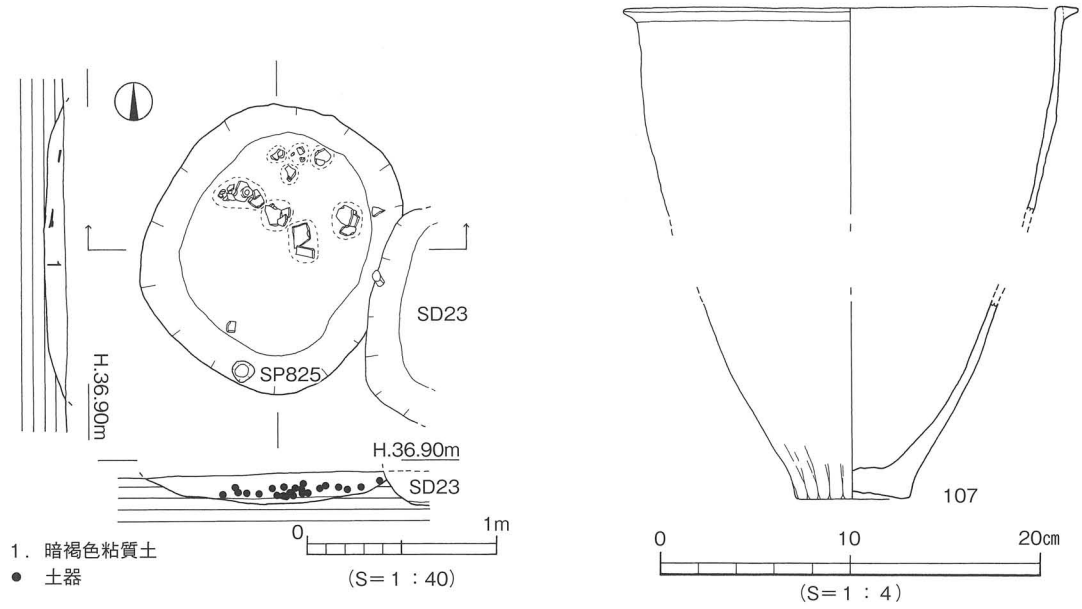
第30図　ＳＫ103測量図・出土遺物実測図



第31図　ＳＫ106測量図・出土遺物実測図

ＳＫ110（第32図）

Ｊ２区に位置し、ＳＤ23（弥生時代中期中葉）・ＳＰ825（時期不明）に切られる。平面形態は円形で、規模は径1.52m、深さ0.16mを測る。断面形態は皿状で、埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は北側の底面付近から出土し、甕形土器が１個体分（107）あった。



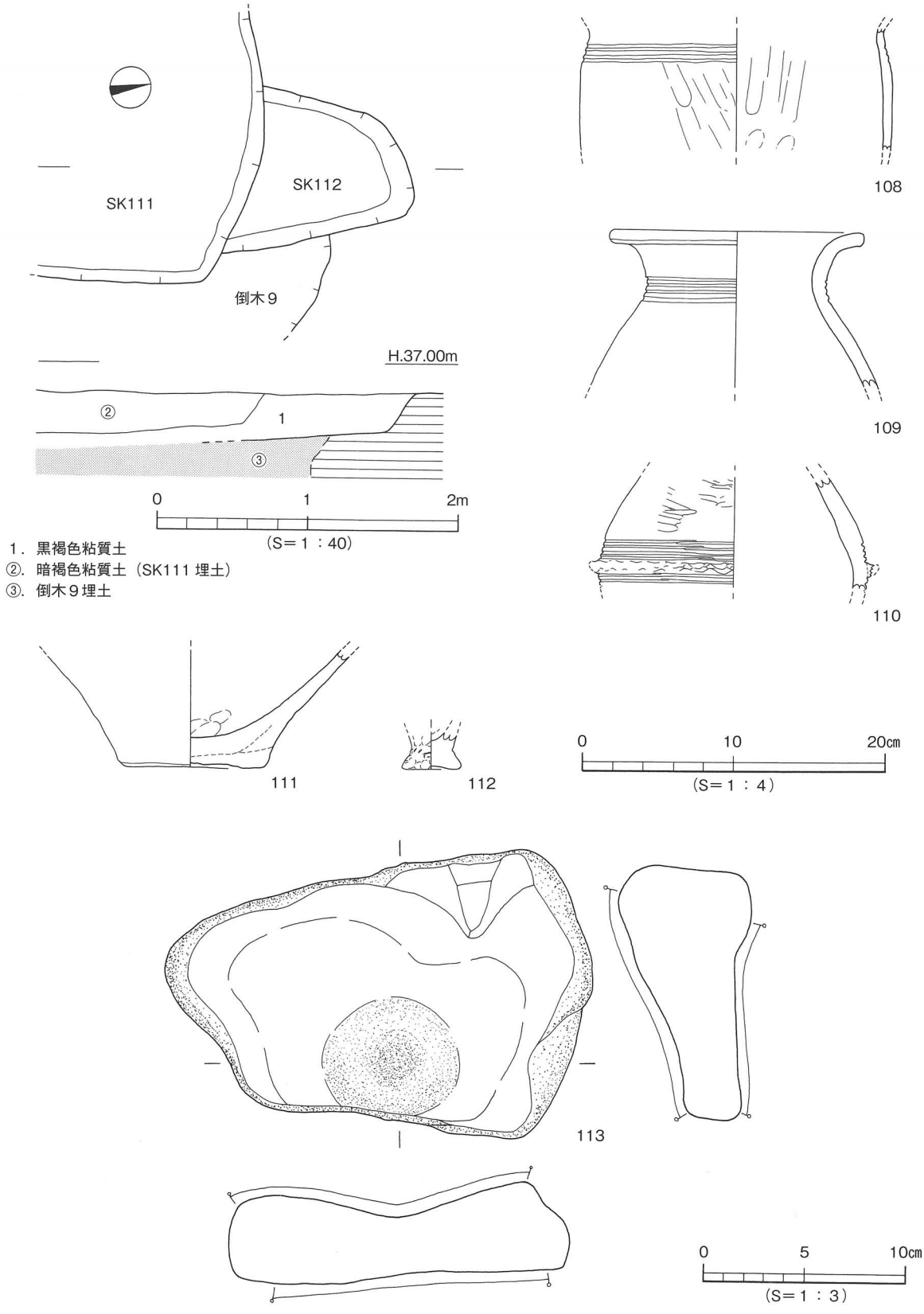
第32図　ＳＫ110測量図・出土遺物実測図

ＳＫ112（第33図）

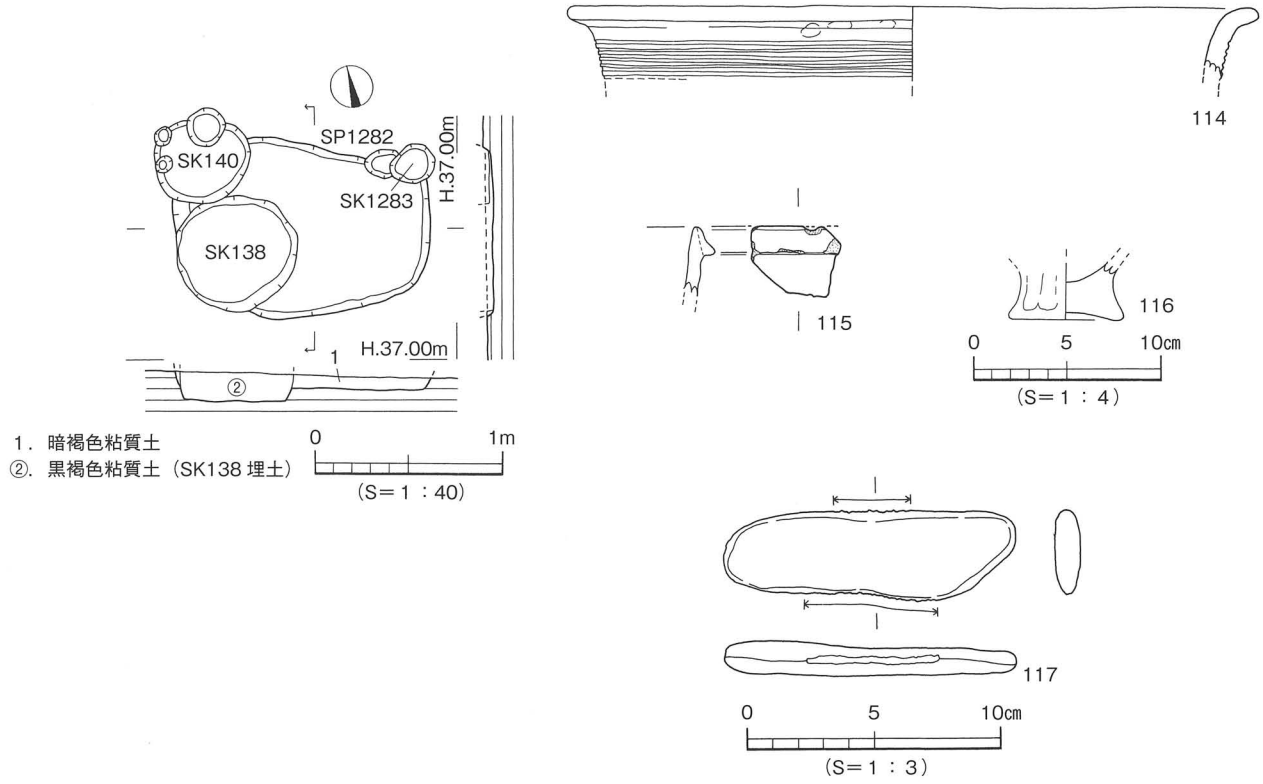
Ｈ２区に位置し、ＳＫ111（弥生時代中期中葉）に切られる。平面形態は不整形な長方形で、規模は長軸1.10m、短軸1.06m、深さ0.27mを測る。断面形態は逆台形状で、壁面はやや斜めにたちあがり、底面は南に向かって緩やかに下がる。埋土は黒褐色の粘質土単層であった。遺物は108～113で、南側の底面から、甕形土器片１点（108）、壺形土器片３点（109～111）、ミニチュア土器１点（112）、台石１点（113）が出土した。

ＳＫ113（第34図）

Ｈ、Ｉ３・４区に位置し、ＳＫ138（弥生時代前期末～中期初頭）・140・ＳＰ1282・1283（時期不明）に切られる。平面形態は不整形な長方形で、規模は長軸2.80m、短軸1.77m、深さ0.08mを測る。断面形態は皿状で、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は114～117で、底面から甕形土器片２点（114・115）、底部片１点（116）、石器１点（117）が出土した。



第33図　ＳＫ112測量図・出土遺物実測図



第34図　ＳＫ113測量図・出土遺物実測図

ＳＫ119（第35図）

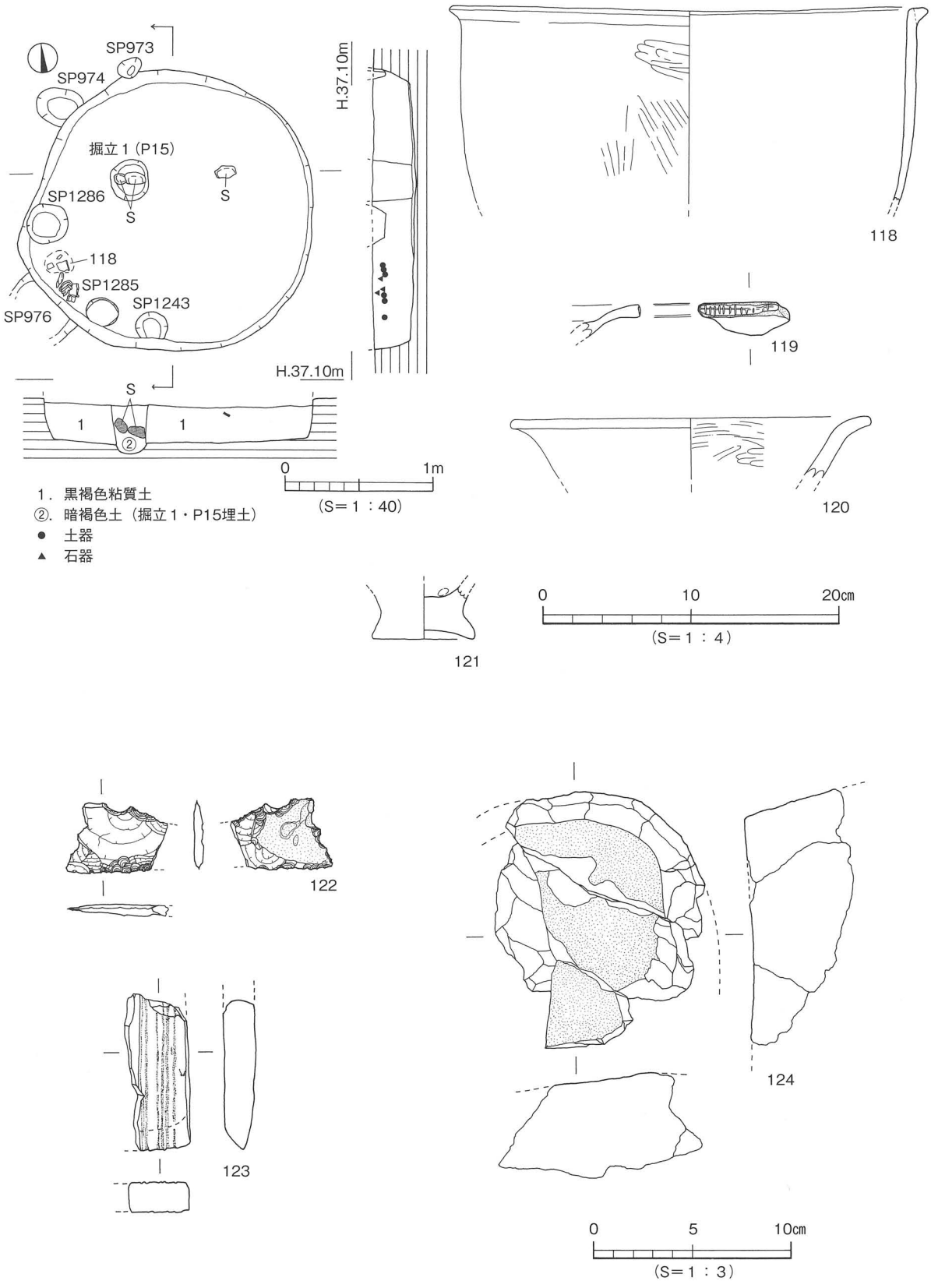
Ｆ８区に位置し、掘立柱建物１（時期不明）の柱穴やＳＰ973・1286（時期不明）に切られ、ＳＰ974・976・1243・1285（時期不明）を切る。平面形態は円形で、規模は径1.96m、深さ0.25mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は黒褐色の粘質土単層である。遺物は、南西部の埋土上位から中位で118～124が密集して出土した。118は甕形土器、119は壺形土器である。石器（122・123・124）が出土した。

ＳＫ126（第36図、図版12）

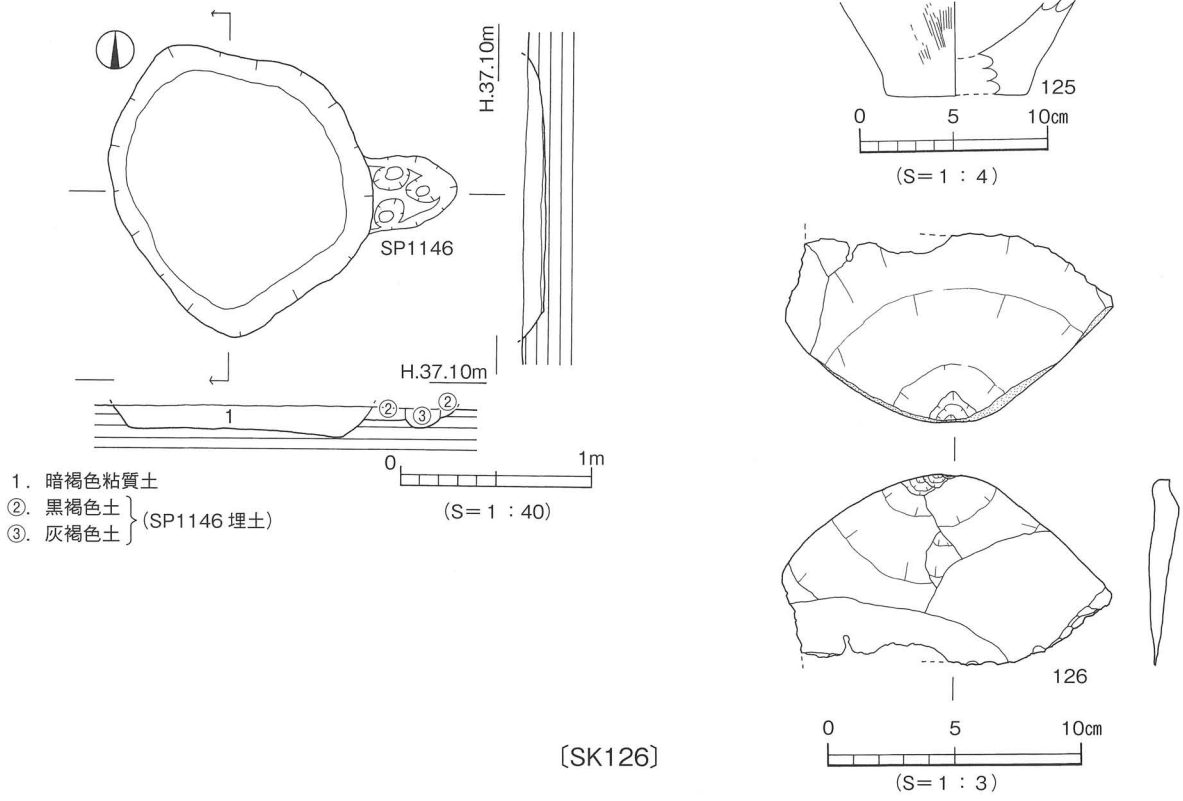
Ｃ３区に位置する。平面形態は不整円形で、ＳＰ1146（時期不明）を切る。規模は径1.55m、深さ0.12mを測る。断面形態は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は、壺形土器の底部片（125）と剝片刃器１点（126）が出土した。

ＳＫ130（第36図）

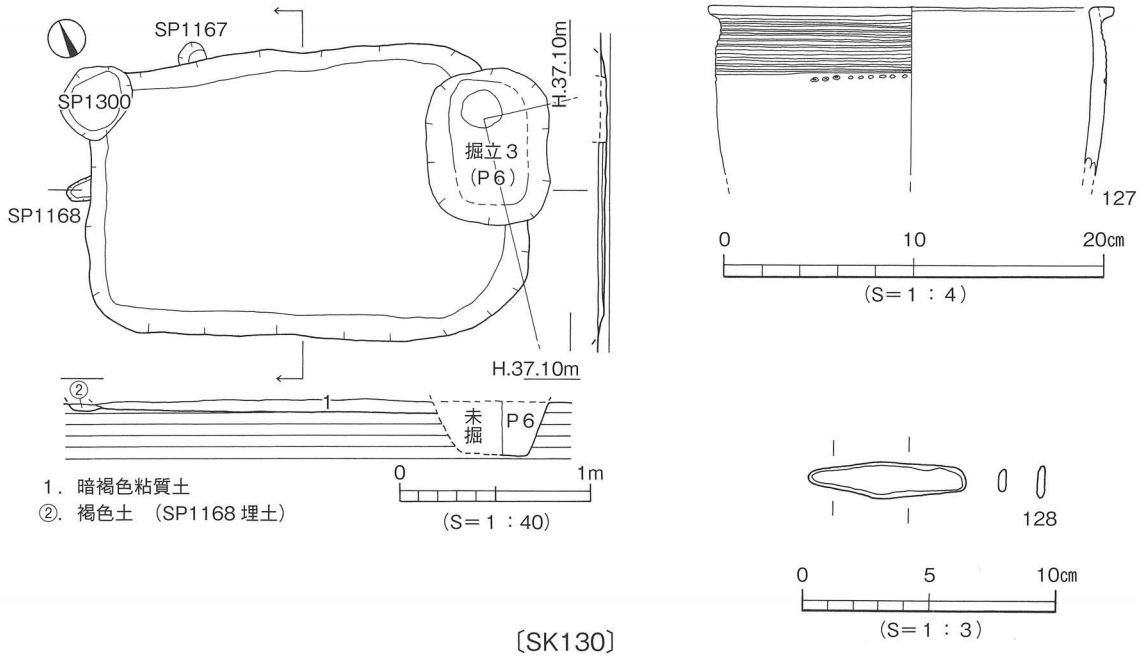
Ｃ７区に位置し、掘立柱建物３（時期不明）の柱穴やＳＰ1300（時期不明）に切られ、ＳＰ1167・1168（時期不明）を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸2.35m、短軸1.55m、深さが0.04mを測る。断面形態は皿状で、底面は平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は甕形土器（127）と石器１点（128）が出土している。



第35図　ＳＫ119測量図・出土遺物実測図



〔SK126〕

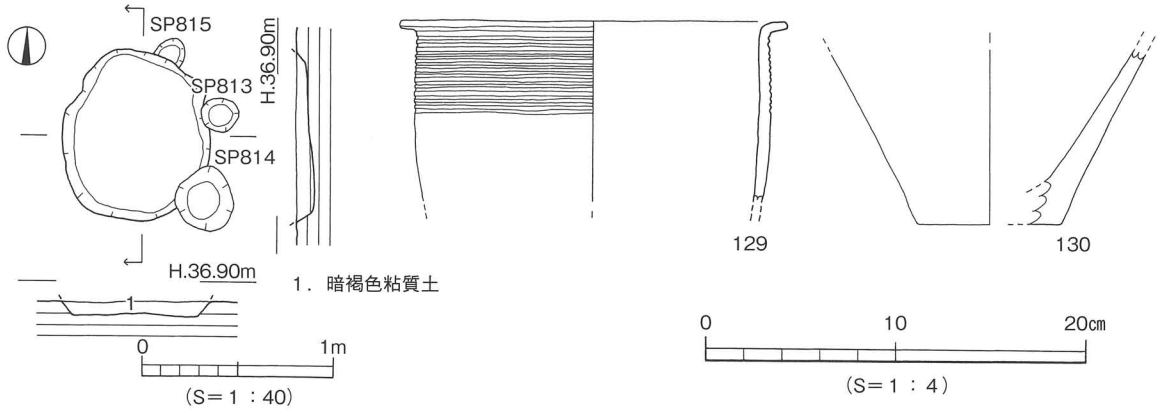


〔SK130〕

第36図　ＳＫ126・130測量図・出土遺物実測図

ＳＫ135（第37図）

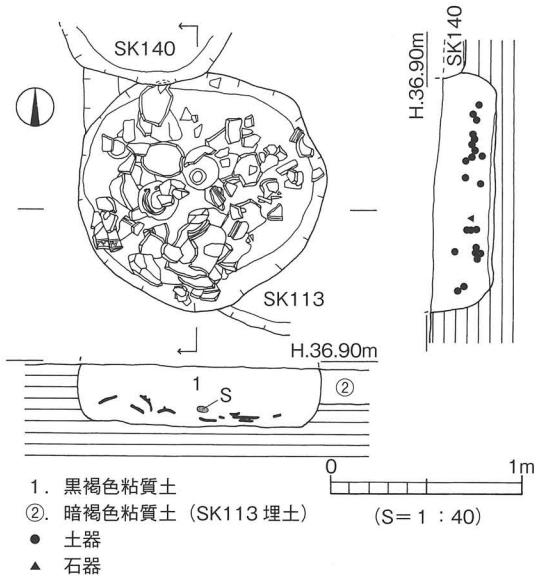
Ｋ７区に位置する。ＳＰ813・814（時期不明）に切られ、ＳＰ815（時期不明）を切る。平面形態は楕円形で、規模は径0.90m、深さ0.06mを測る。断面形態は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は、甕形土器の口縁部（129）と底部（130）が出土した。



第37図　ＳＫ135測量図・出土遺物実測図

ＳＫ138（第38～41図、図版５・13・14）

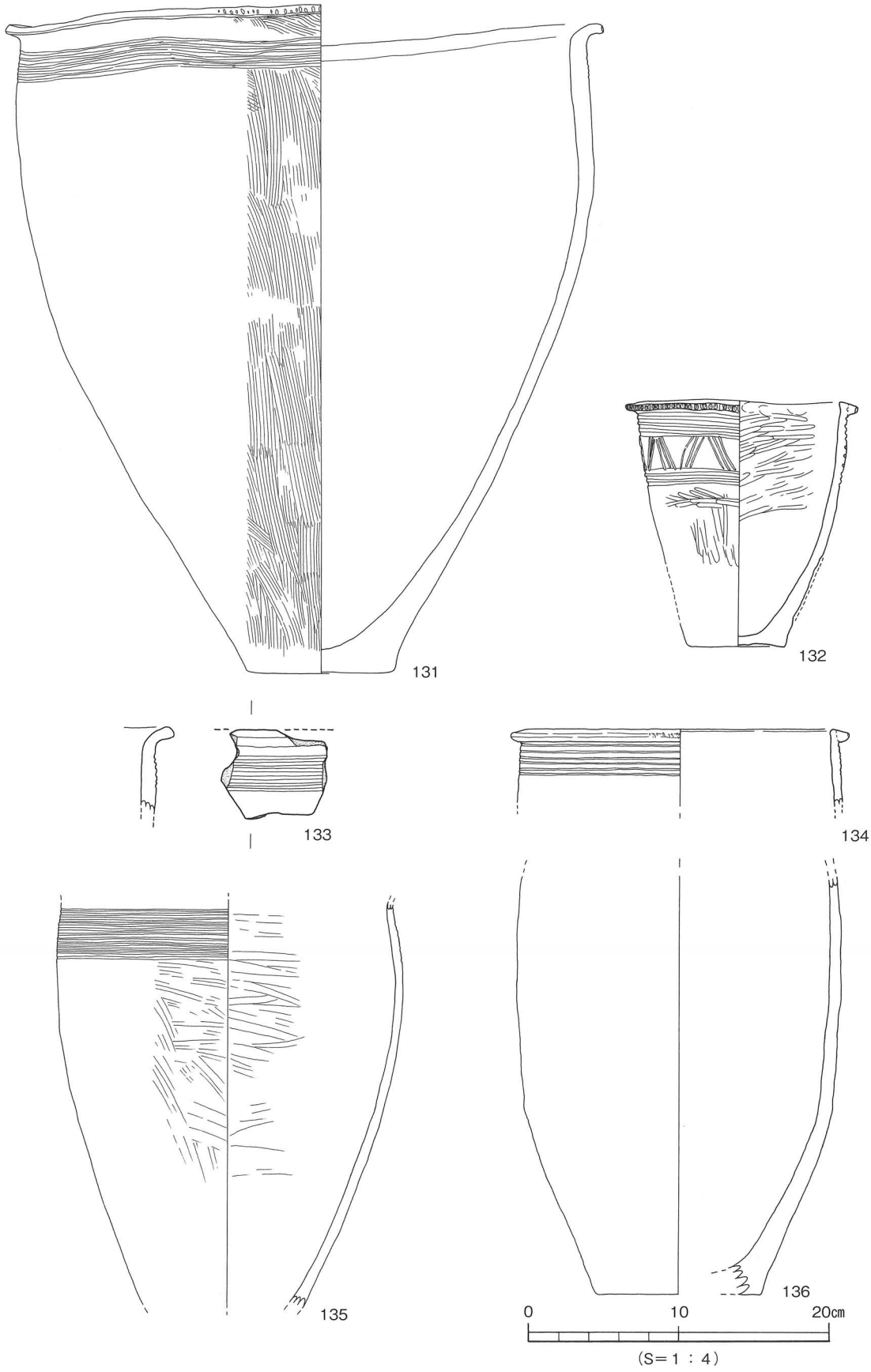
Ｉ３区に位置し、ＳＫ140（時期不明）に切られ、ＳＫ113（弥生時代前期末～中期初頭）を切る。平面形態は円形で、規模は径1.30m、深さ0.32mを測る。断面形態は袋状になり、壁体は内湾し、底面は平坦になる。埋土は黒褐色の粘質土単層であった。遺物の出土状況は、底面上から中位までにあり、人頭大の石や拳大の礫も土器にまじって多く出土した。土器は全て破損した状態で出土し、このうち131・132は接合するとほぼ完形になった。遺物は131～149で、土器は甕形土器６点、壺形土器４点、蓋形土器１点、底部５点、石器はスクレイパー１点、磨石１点、磨石・敲石１点が出土した。



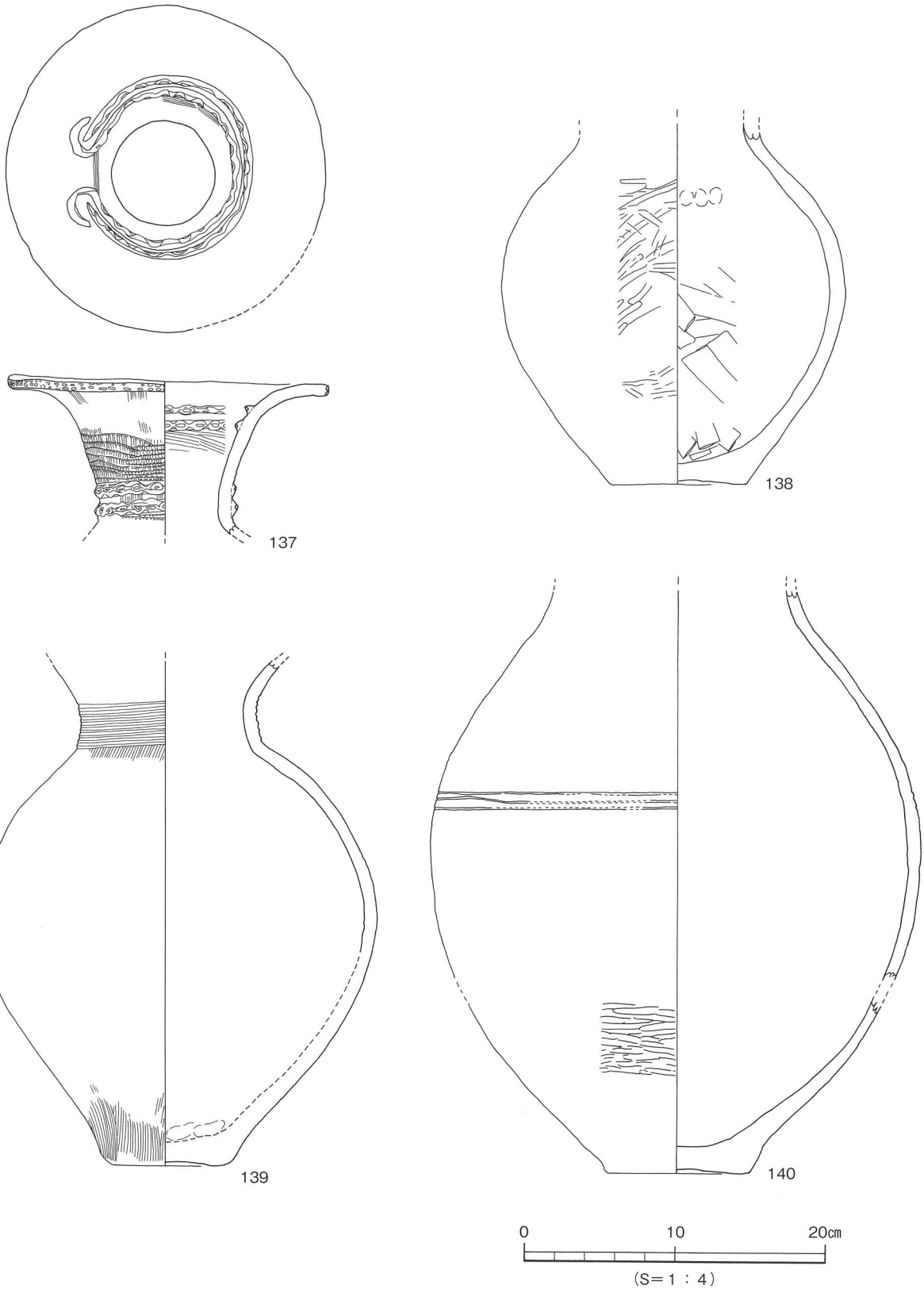
第38図　ＳＫ138測量図

ＳＫ147（第42図）

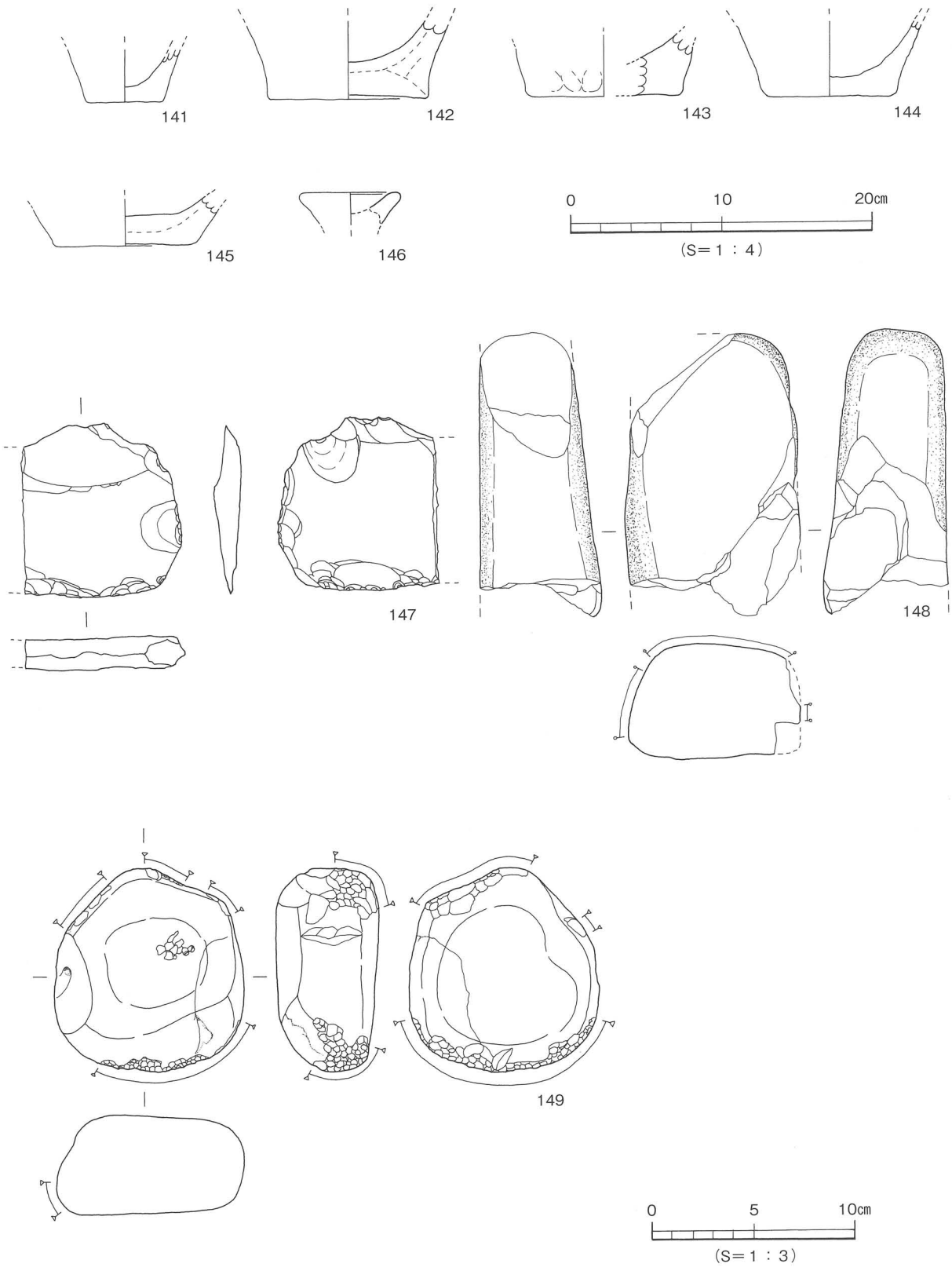
Ｆ２区に位置し、ＳＫ146（古墳時代）・ＳＰ898・902・903（時期不明）に切られる。遺構は調査区外へ延びるが、平面形態は方形又は、長方形であると推測される。規模は長軸2.26m、短軸1.60m、深さ0.24mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は起伏が激しい。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は150～154で、北壁沿いの埋土中位から甕形土器（150）が出土した。



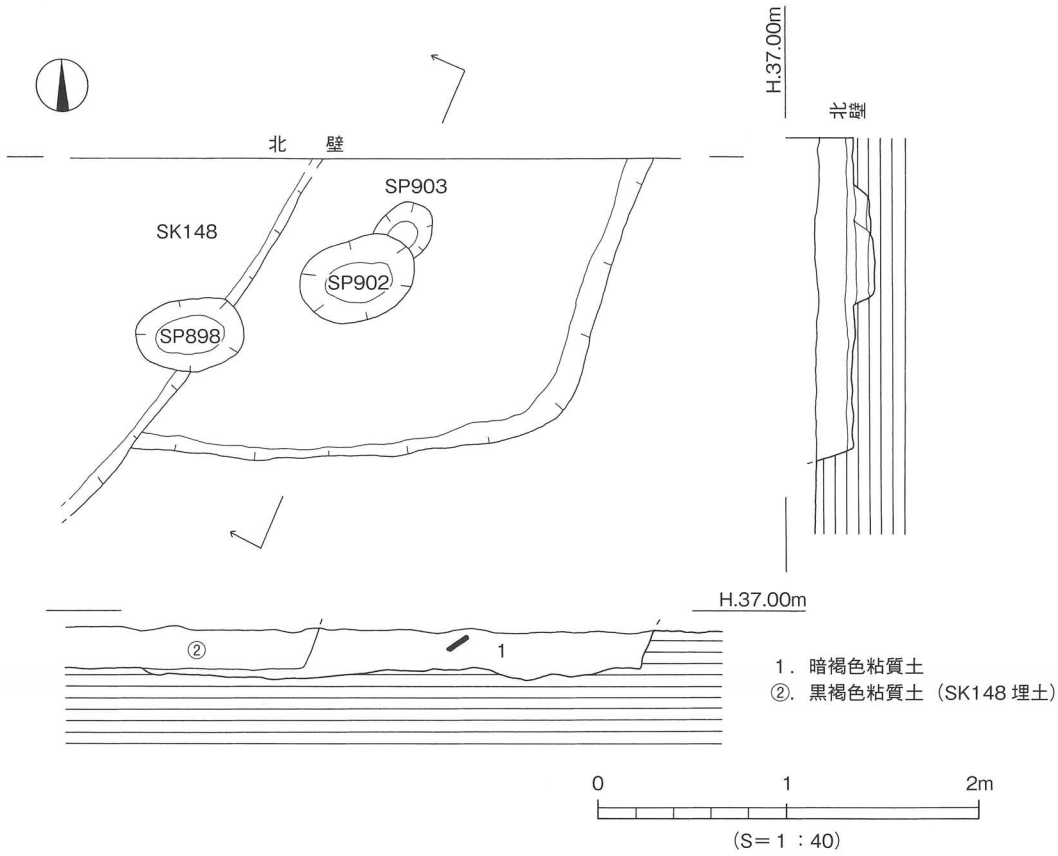
第39図　ＳＫ138出土遺物実測図(1)

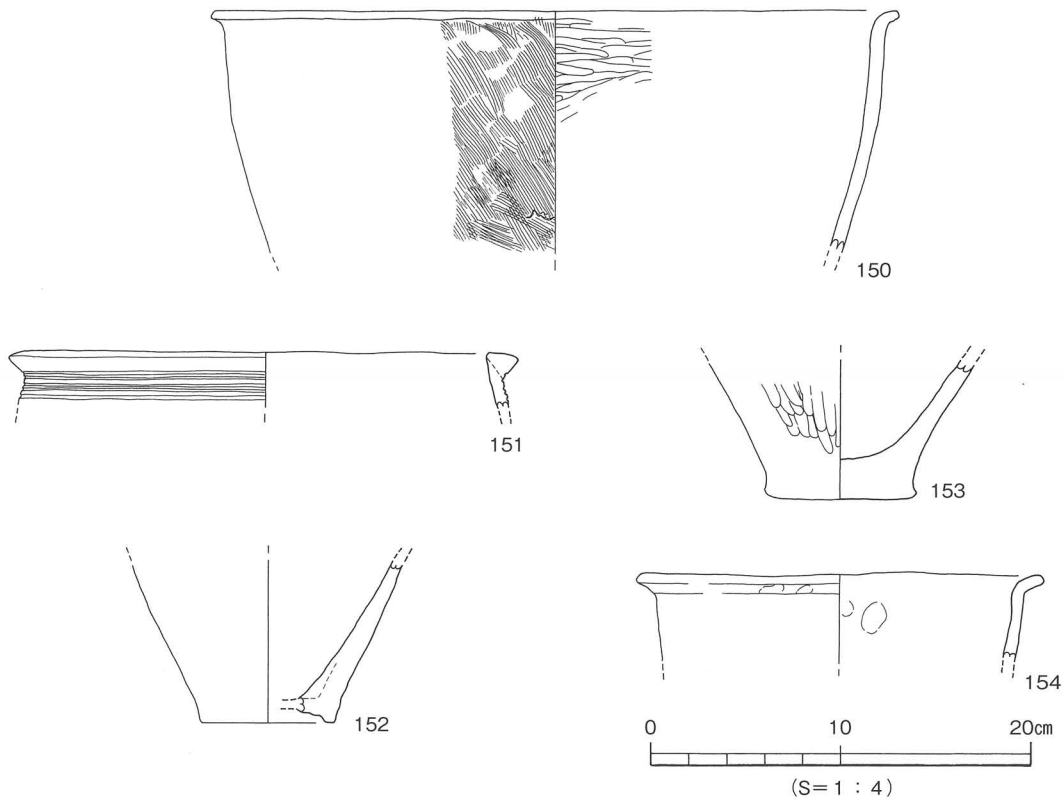


第40図　ＳＫ138出土遺物実測図(2)



第41図　ＳＫ138出土遺物実測図(3)





第42図　ＳＫ147測量図・出土遺物実測図

2）土坑出土遺物（第43・44図）

前述の土坑のほか、弥生時代前期末～中期初頭の遺物が出土した土坑は20基ある。

155は壺形土器の底部で、ＳＫ４出土品。156・157はＳＫ37出土品。156は甕形土器の口縁部、157はミニチュア土器の底部である。158は壺形土器の頸部で、ＳＫ48出土品。159は甕形土器の口縁部で、ＳＫ63出土品。160～162はＳＫ65出土品。160は壺形土器の頸部、161は胴部、162は底部である。163～165はＳＫ70出土品。163は甕形土器の口縁部、164・165は底部である。166～168はＳＫ71出土品。166は甕形土器の底部、167は壺形土器の頸部、168は焼土塊である。169はミニチュア土器の底部で、ＳＫ77出土品。170は大型の甕形土器の口縁部で、ＳＫ97出土品。171は甕形土器の底部で、ＳＫ99出土品。172は壺形土器の頸部で、ＳＫ102出土品。173は鉢形土器の口縁部で、ＳＫ104出土品。174は壺形土器で、ＳＫ109出土品。175～177はＳＫ115出土品。175は壺形土器の頸部、176は甕形土器の口縁部、177は底部である。178は壺形土器の底部で、ＳＫ116出土品。179～181はＳＫ123出土品。179は壺形土器の口頸部、180は底部、181は甕形土器転用のコシキである。182は甕形土器の底部で、ＳＫ124出土品。183は壺形土器の底部で、ＳＫ144出土品。184・185はＳＫ39出土品。184は剥片刃器、185は磨石・敲石である。

3）溝

溝は、ＳＤ５・８・21・25の４条を検出した。

ＳＤ５（第45図）

Ｃ～Ｆ10、Ｅ11区に位置する直線溝である。断面形態は逆台形状で、底面は部分的に凸凹を持ちながら、全体的には東から西へ向かって低くなる。規模は長さ3.07m、幅0.7mを測る。埋土は２層で、上層が黒褐色の粘質土、下層は褐色・明褐色・橙色の粘質土が混在していた。遺物は186・187で、壺形土器の頸部１点（186）と、伐採斧の柄の部分の可能性がある石製品１点（187）が出土した。

4）柱穴・小穴

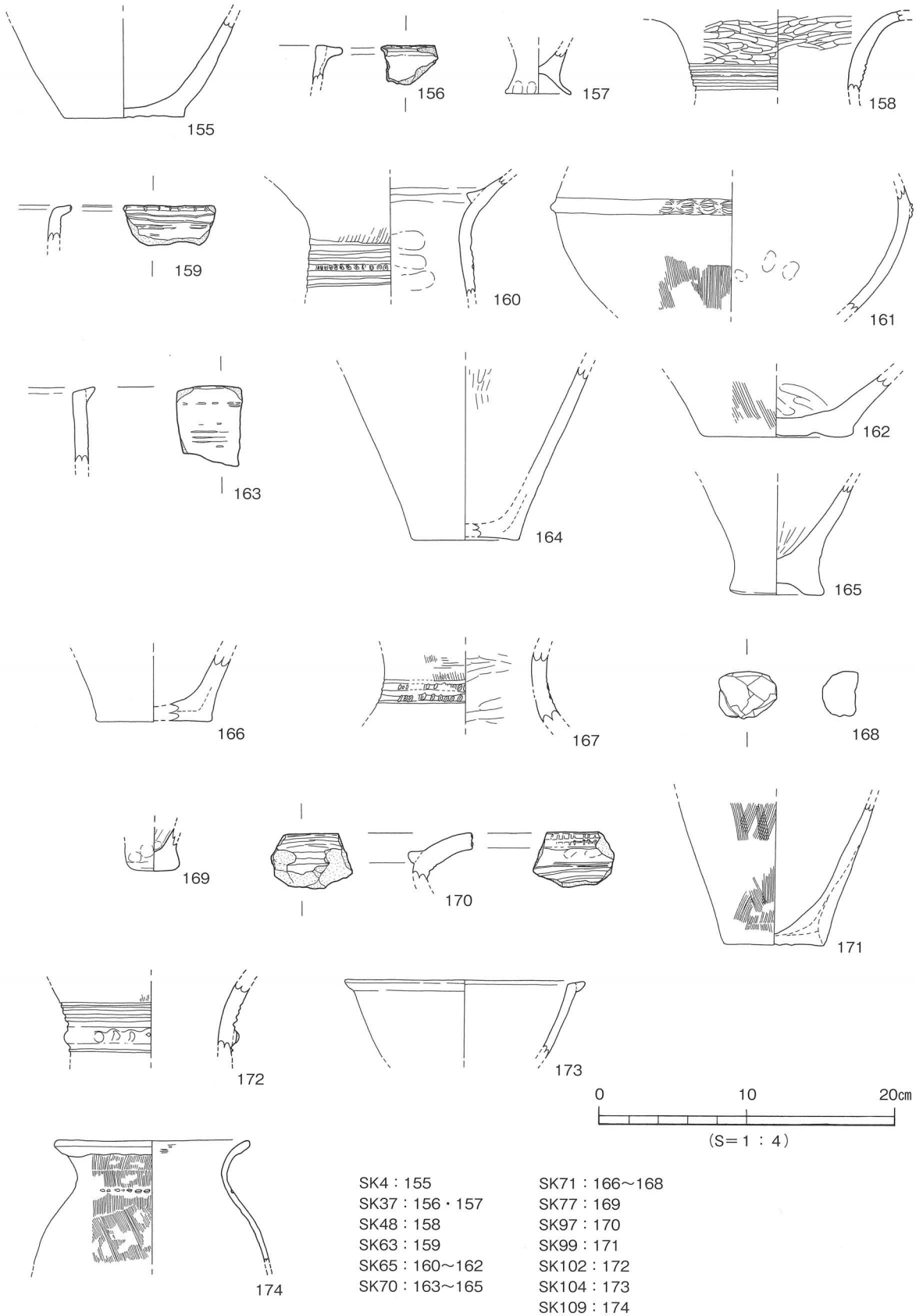
遺物の出土した柱穴・小穴は８基ある。

ＳＰ826（第46図）

Ｋ６区に位置する小穴で、ＳＫ137（弥生時代前期末～中期初頭）を切る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は、壁沿いの底面から１個体になる甕形土器の口縁部（188）と底部（189）が重なって出土した。

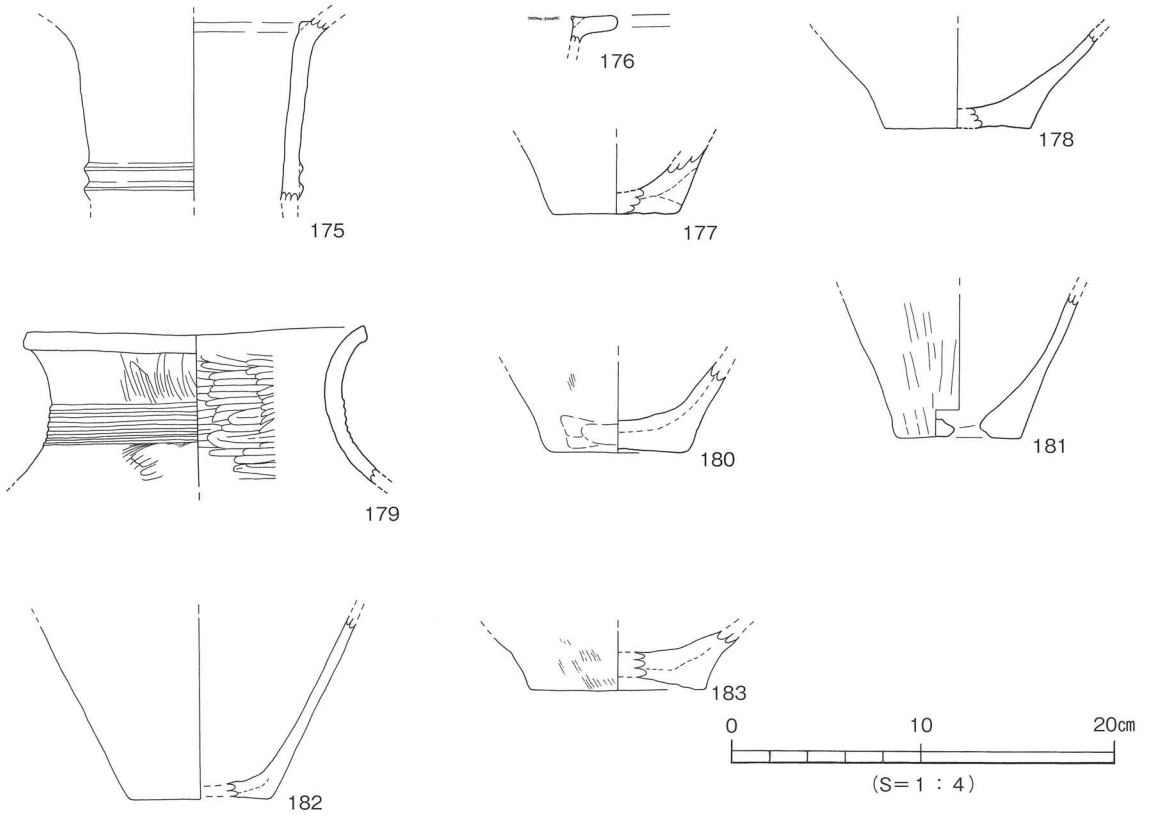
柱穴・小穴出土遺物（第46図、図版14）

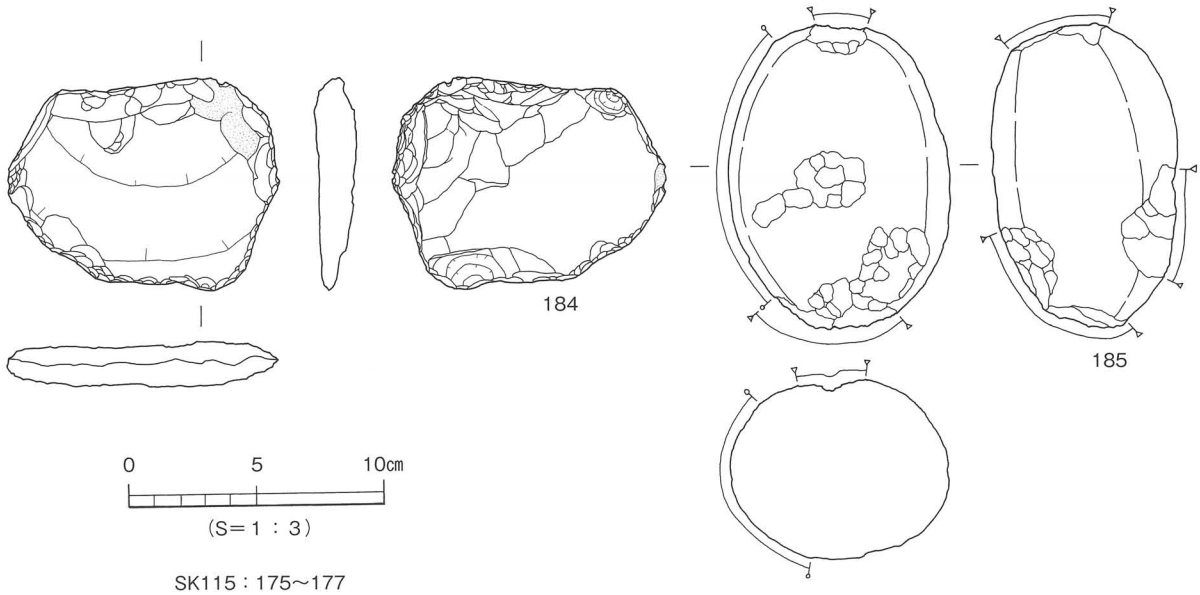
190は壺形土器の口縁部で、ＳＰ948出土品。191は壺形土器で、ＳＰ1009出土品。192は壺形土器の胴部片で、ＳＰ846出土品。193は壺形土器の胴部で、ＳＰ1074出土品。194は鉢形土器で、ＳＰ276出土品。195は鉢形土器の口縁部で、ＳＰ298出土品。196は円形の用途不明土製品で、ＳＰ1285出土品。



SK4：155
SK37：156・157
SK48：158
SK63：159
SK65：160～162
SK70：163～165
SK71：166～168
SK77：169
SK97：170
SK99：171
SK102：172
SK104：173
SK109：174

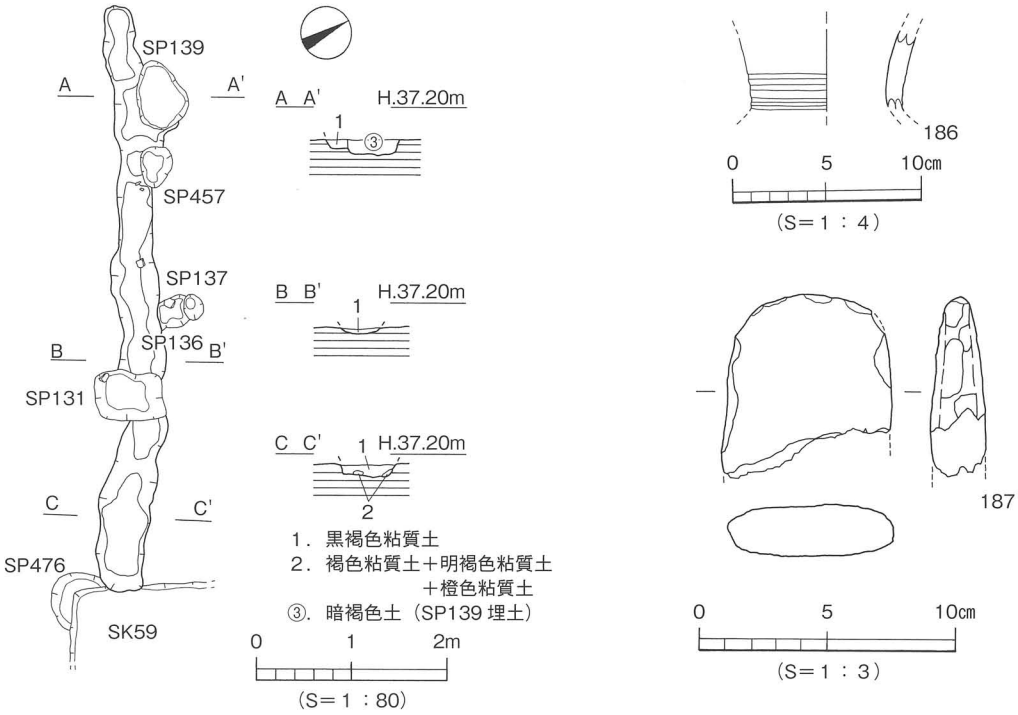
第43図　ＳＫ出土遺物実測図(1)



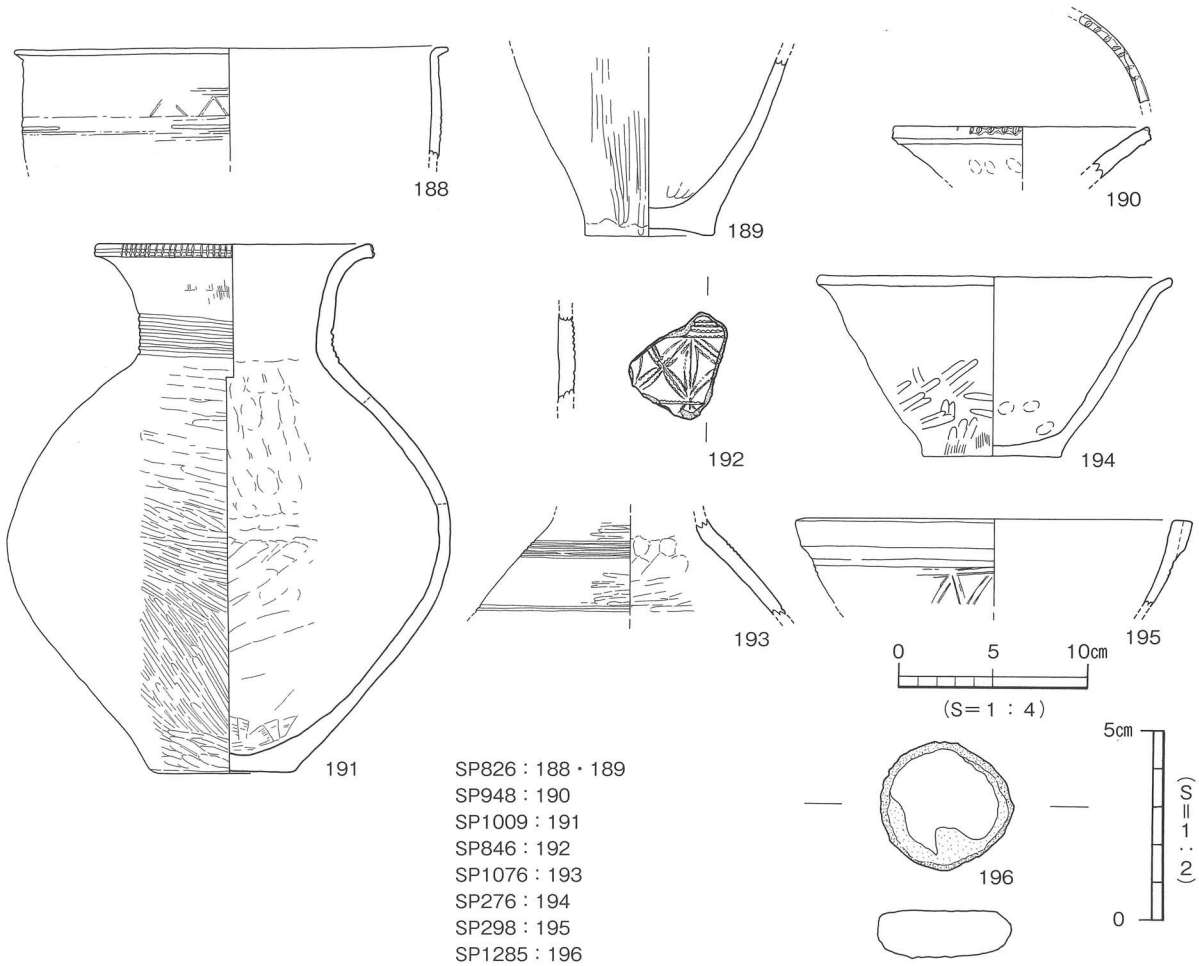


SK115：175～177
SK116：178
SK123：179～181
SK124：182
SK144：183
SK39：184・185

第44図　ＳＫ出土遺物実測図(2)



第45図　ＳＤ5測量図・出土遺物実測図



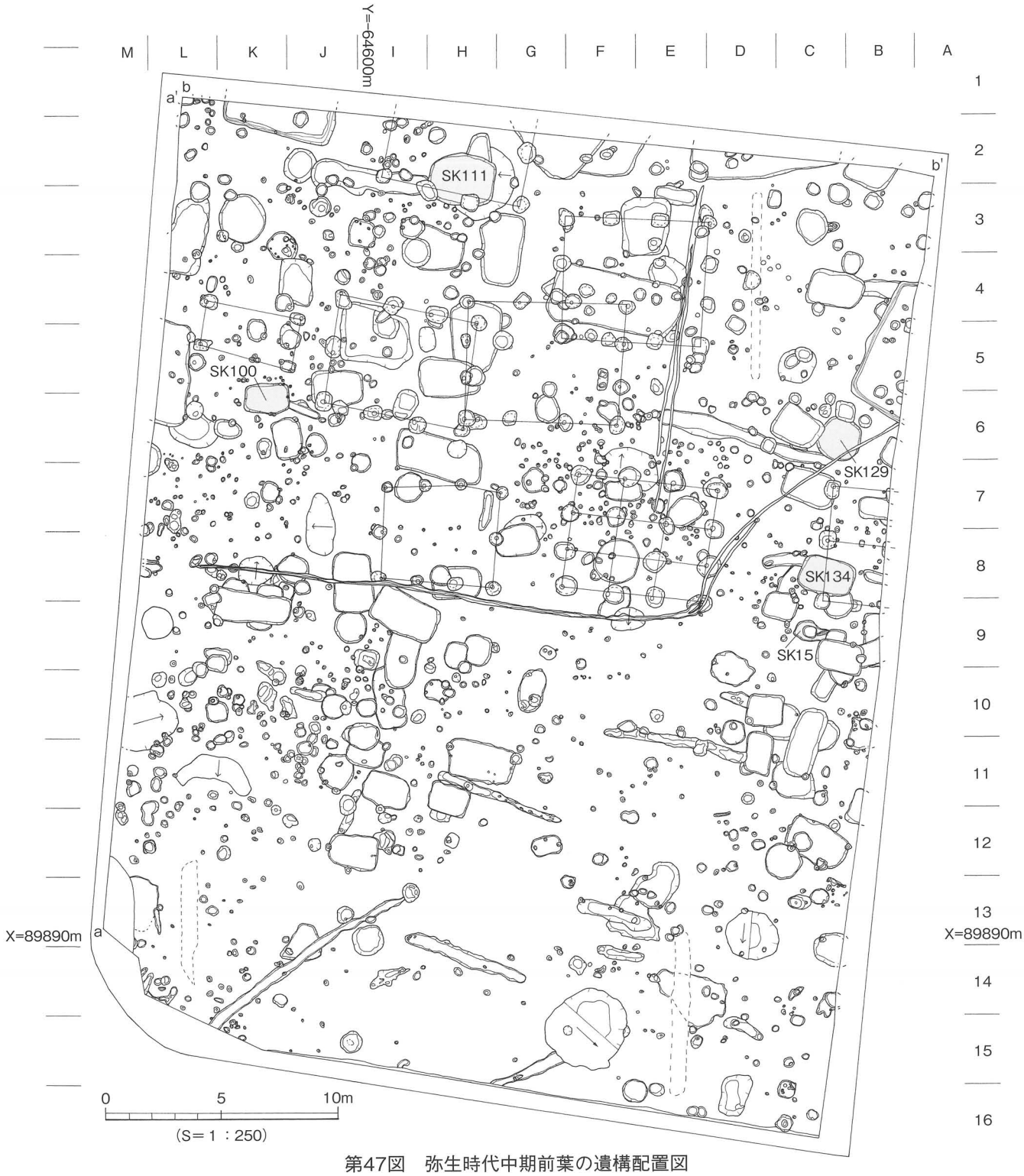
第46図　ＳＰ出土遺物実測図

（2）弥生時代中期前葉（第47図）

弥生時代中期前葉の遺構には土坑５基（ＳＫ15・100・111・129・134）がある。

1）土　坑

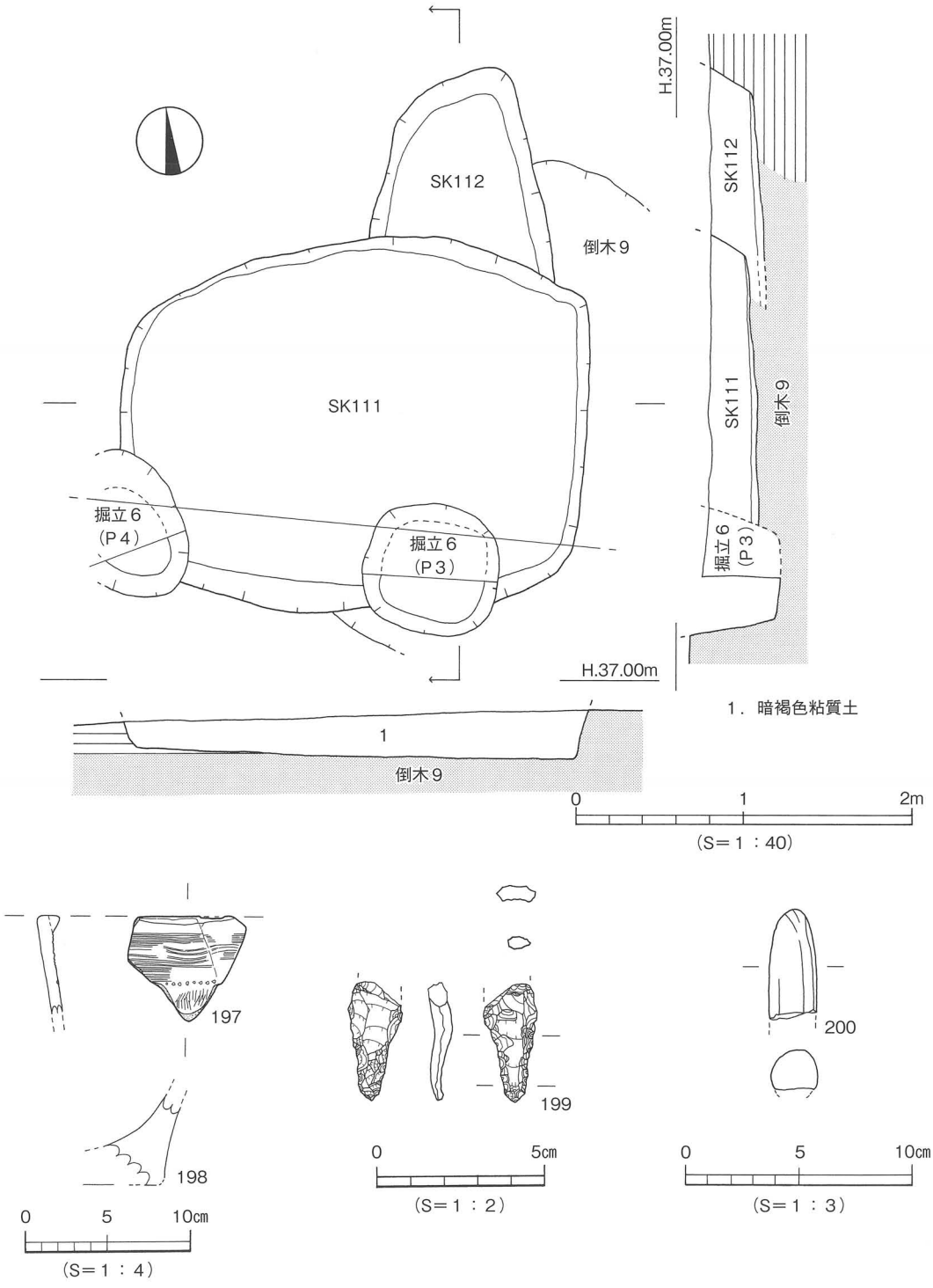
この時期の土坑は５基で、長方形が４基、円形が１基ある。



第47図　弥生時代中期前葉の遺構配置図

ＳＫ111（第48図）

Ｈ２・３区に位置する。掘立柱建物６（古墳時代～古代）に切られ、ＳＫ112（弥生時代前期末～中期初頭）を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸2.77m、短軸2.19m、深さ0.28mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は197～200で、底面から中位に甕形土器１点、底部片１点、石器２点が出土した。197は口縁部で、櫛描文を施す。



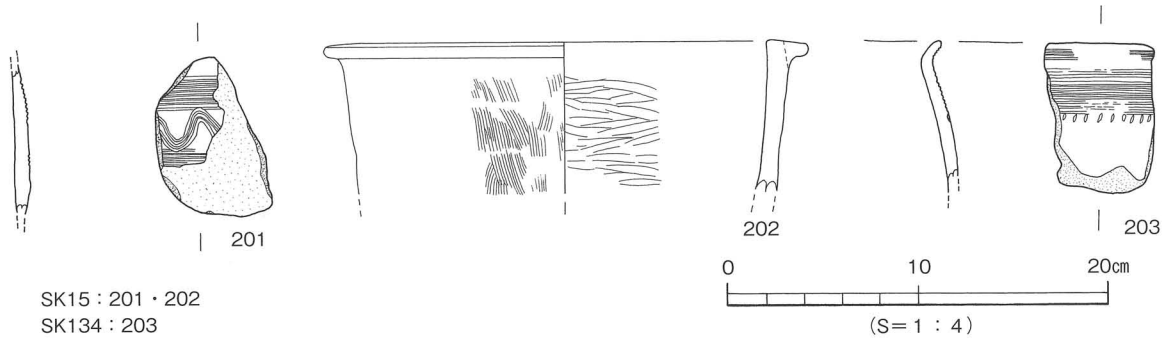
第48図　ＳＫ111測量図・出土遺物実測図

ＳＫ15（第49図）

Ｃ９区に位置し、ＳＫ64・66（時期不明）に切られる。平面形態は不整長方形で、規模は長軸1.32m、短軸0.94m、深さ0.09mを測る。断面形態はレンズ状であり、埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は201・202で、底面から埋土中位までに甕形土器２点が出土した。201は胴部片、202は口縁部である。

ＳＫ134（第49図）

Ｃ８区に位置し、掘立柱建物３（時期不明）に切られ、ＳＫ68（弥生時代前期末～中期初頭）とＳＤ27（時期不明）を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸2.23m、短軸1.65m、深さ0.06mを測る。断面形態は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は極暗褐色の粘質土単層である。遺物は甕形土器の口縁部が１点（203）出土した。



第49図　ＳＫ15・ＳＫ134出土遺物実測図

（3）弥生時代中期中葉（第50図）

弥生時代中期中葉の遺構には、溝２条（ＳＤ１・23）・土坑４基（ＳＫ23・46・122・145）・柱穴１基がある。

第50図　弥生時代中期中葉の遺構配置図

1）土　坑

この時期の土坑は４基で、長方形が２基、円形は２基である。

ＳＫ122（第51図、図版６・14）

Ｅ・Ｆ～４・５区に位置し、掘立柱建物２・４（古墳時代～古代）、ＳＰ807・846・907・912・913・1257・1312（時期不明）に切られ、ＳＫ123（弥生時代前期末～中期初頭）、ＳＰ843・905・997（時期不明）を切る。平面形態は長方形で、規模は長軸6.04m、短軸2.36m、深さ0.26mを測る。調査地内検出の他の長方形土坑に比べると、規模は２～３倍大きい。断面形態は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は204～207で、204・205が埋土中位、207は南東隅埋土上位から出土した。207は碧玉製の管玉で、1/2の遺存である。

ＳＫ23（第52図）

Ｊ・Ｋ～13・14区に位置し、ＳＤ10（時期不明）に切られる。平面形態は不整楕円形で、規模は長軸1.60m、短軸1.50m、深さ0.07mを測る。断面形態は皿状である。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は、甕形土器の口縁部が１点（208）出土した。

2）溝

溝は２条を検出した。

ＳＤ１（第53図）

Ｄ15区に位置する直線溝である。断面形態は、逆台形状で、底面は南東から北西に向かって低くなる。規模は長さ1.80m、幅0.4m、深さ0.16mを測る。埋土は２層で、上層が暗褐色の粘質土、下層が褐色の粘質土である。遺物は210～212で、南西部の底面付近から甕形土器２点（210・211）、鉢形土器１点（212）、底部１点（213）が出土した。

ＳＤ23（第54図）

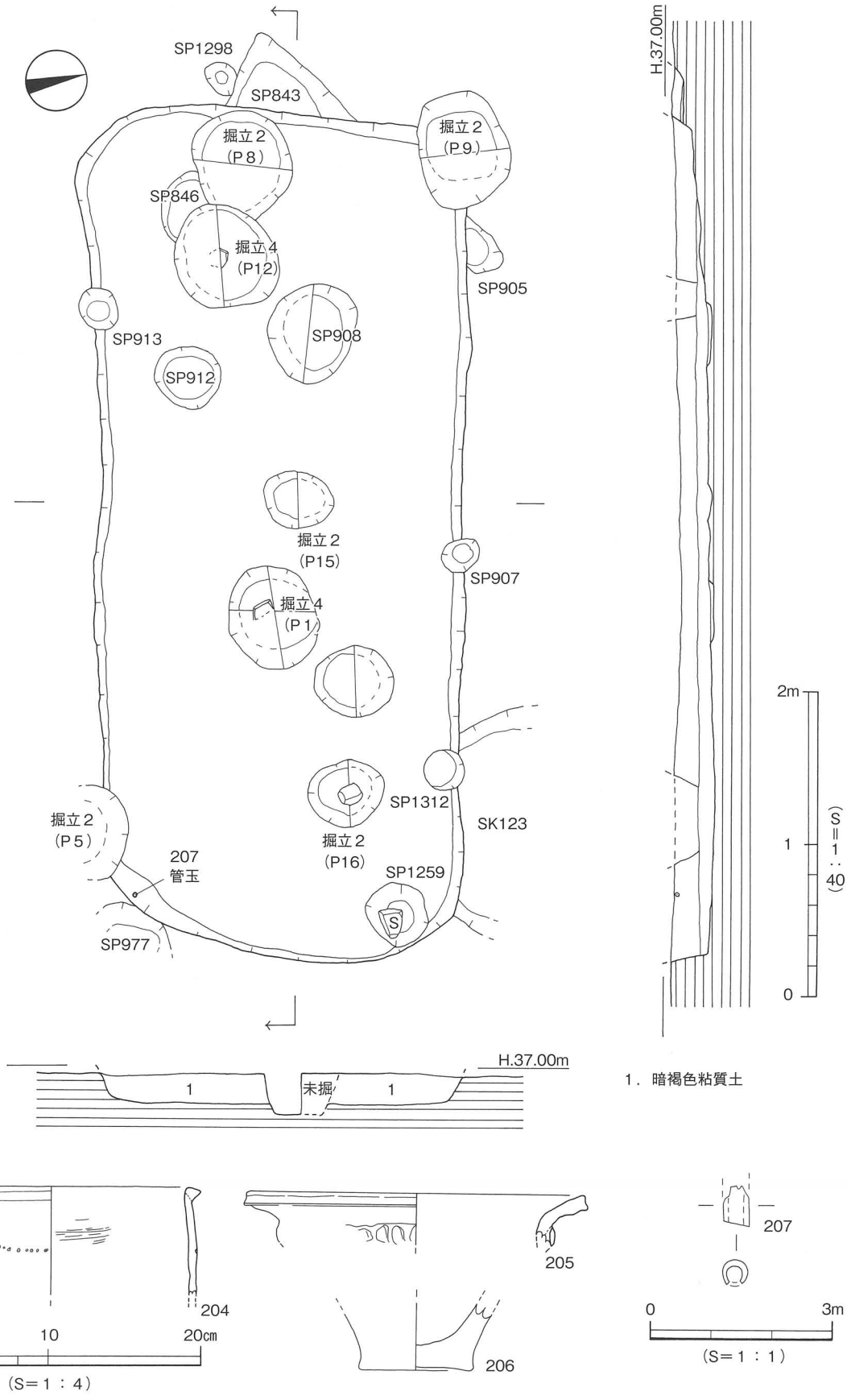
Ｉ・Ｊ２区に位置する直線溝である。掘立柱建物６・ＳＰ710・711・712・833（時期不明）に切られ、ＳＫ110・111（弥生時代前期末～中期初頭）を切る。規模は長さ4.40m、幅1.25m、深さ0.18mを測る。断面形態は皿状である。埋土は暗褐色の粘質土単層であった。遺物は、底面付近から甕形土器が２点（214・215）出土した。

3）柱穴・小穴

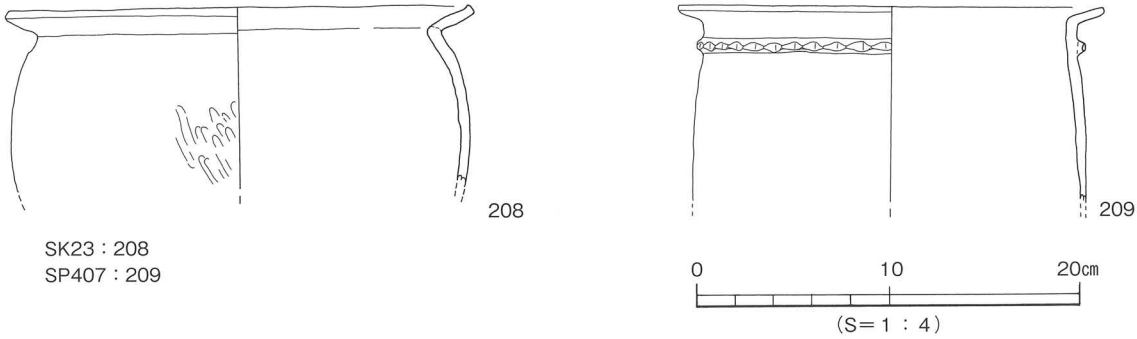
出土遺物から、この時期に確認できる柱穴・小穴はＳＰ407の１基である。

ＳＰ407出土遺物（第52図）

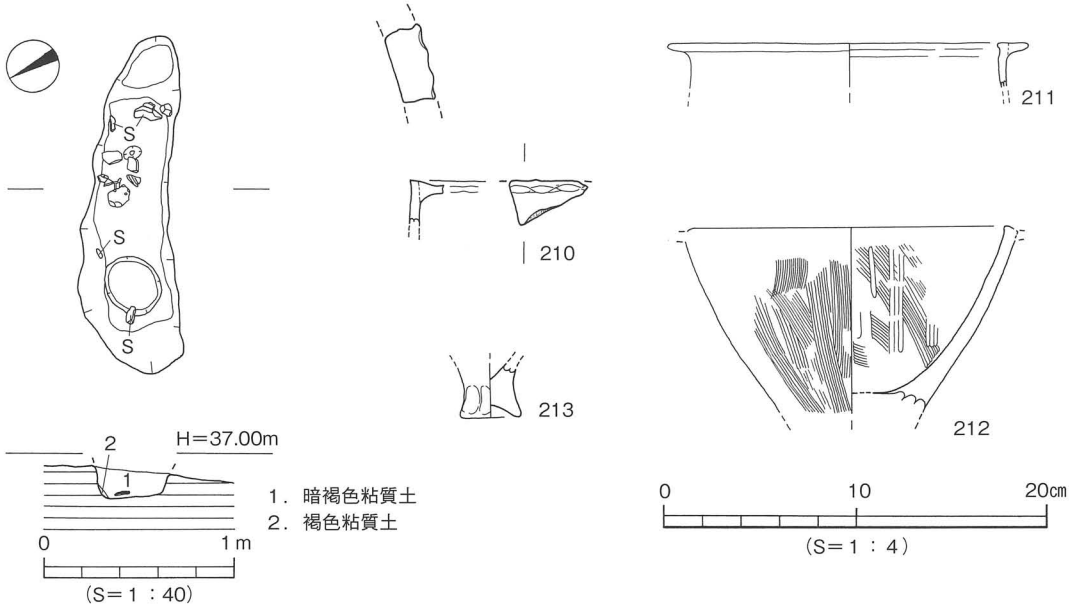
209は甕形土器の口縁部である。



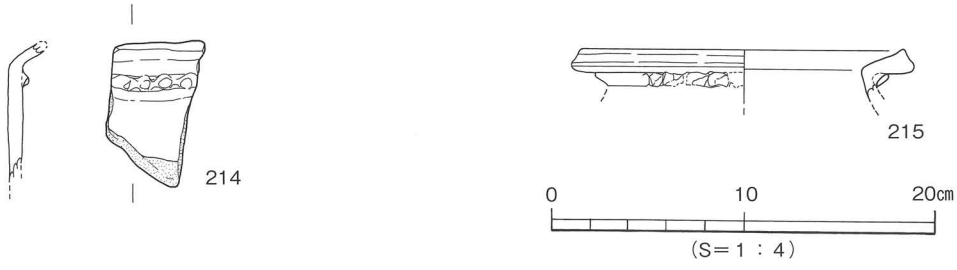
第51図　ＳＫ122測量図・出土遺物実測図



第52図　ＳＫ23・ＳＰ407出土遺物実測図



第53図　ＳＤ１測量図・出土遺物実測図



第54図　ＳＤ23出土遺物実測図

（4）弥生時代中期後葉～後期初頭（第55図）

弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構には、掘立柱建物址１棟・土坑４基（ＳＫ８・73・121・128）・柱穴５基がある。

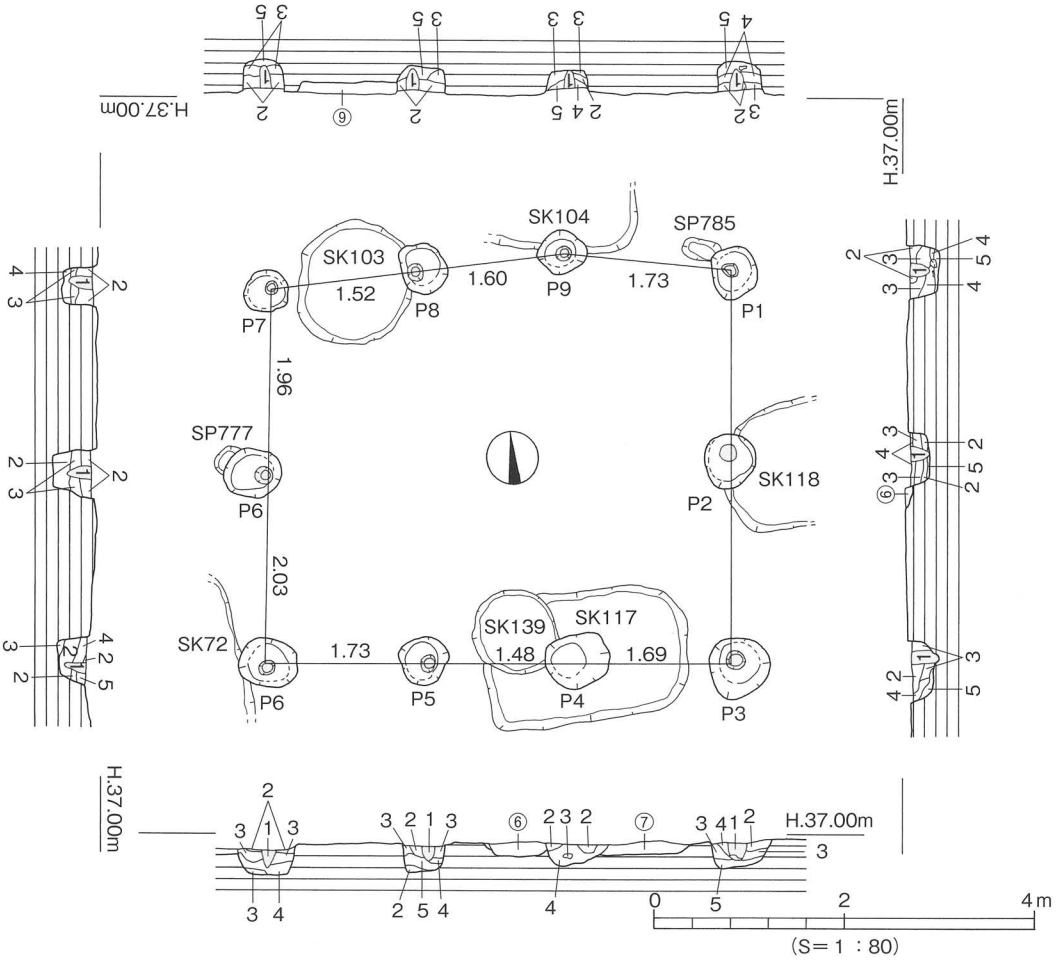
第55図　弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構配置図

1）掘立柱建物址

掘立柱建物７（第56・57図）

Ｈ・Ｉ～７・８区に位置し、ＳＫ72・103・104・117（弥生時代前期末～中期初頭）・118（時期不明）、ＳＰ777・785（時期不明）を切っている。東西棟で、建物方位をＮ－３°－Ｅにとる。規模は桁行長３間（4.90m）、梁行長２間（3.99m）、底面積19.55㎡で、柱間寸法は桁間が1.73・1.48・1.69m、梁間が1.96・2.03mである。

柱穴の平面形態は円形で、径0.6m、深さ0.4mを測る。各柱穴には、径0.15mの柱の痕跡が残っており、いずれからも礎石・根石・栗石・礎板は検出されていない。掘り方埋土は、黒色土、黒褐色土、暗褐色土が交互にはいる。



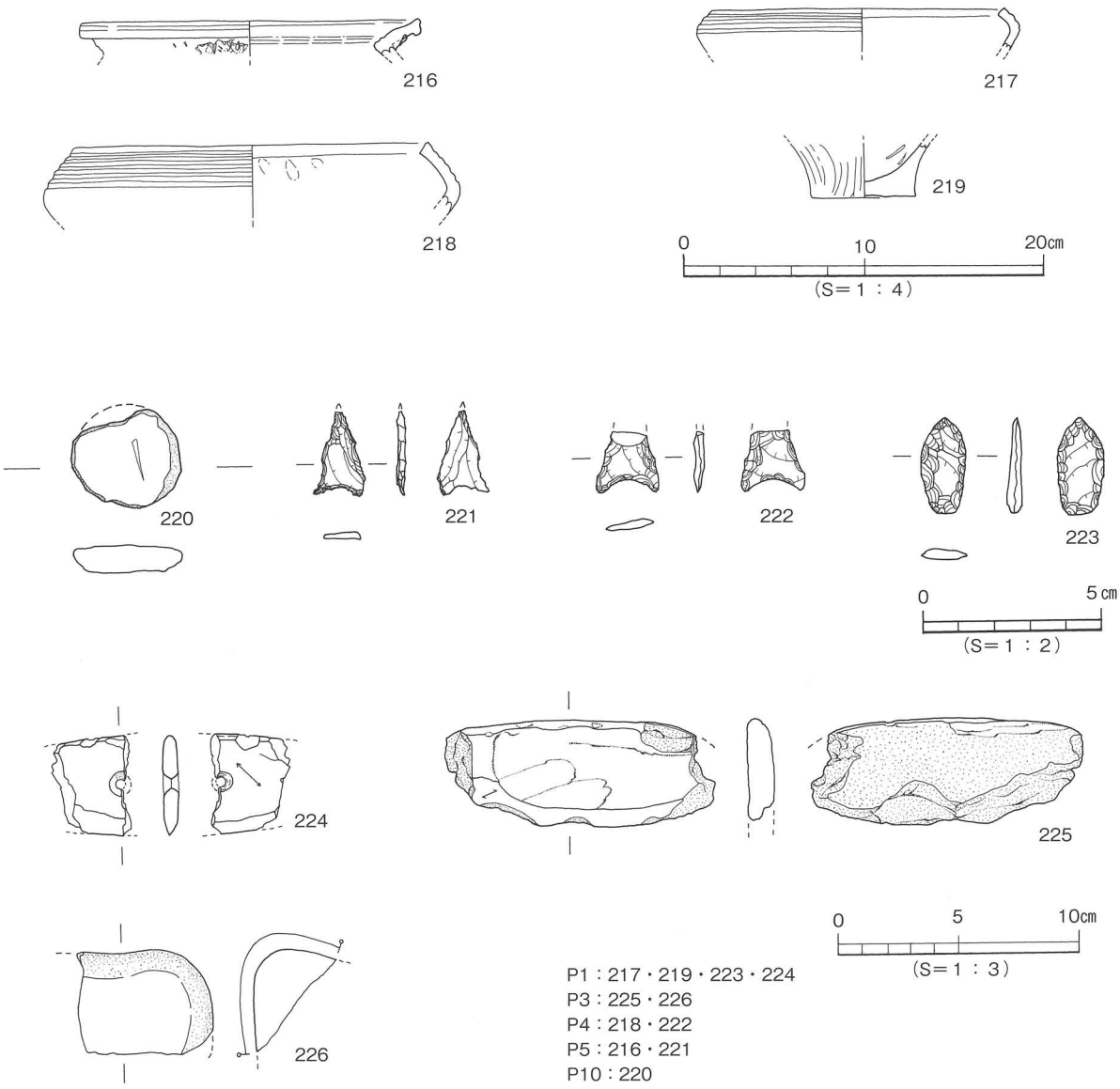
1．暗褐色土（柱痕）
2．黒褐色土（φ0.5～1㎝大の地山粒混入）
3．暗褐色土（φ1㎝大の地山粒多量に混入）
4．黒色土（２より地山粒少ない）
5．明褐色土＋暗褐色土（φ2～3㎝大の地山粒多量に混入）
⑥．暗褐色粘質土（SK139・SK118・SK103 埋土）
⑦．極暗褐色粘質土（SK117 埋土）

第56図　掘立７測量図

掘立柱建物７の柱穴埋土は、明褐色土が調査区内の掘立柱建物１や３と比べて少ない。

遺物は、各柱穴とも小破片が出土したが、柱穴掘り方か、柱痕跡からかは判断できない。実測可能な遺物は216～226である。Ｐ１からは、217の高坏形土器口縁部、219の底部、223の打製石鏃、224の石庖丁が出土した。Ｐ３からは225の石庖丁未製品と226の磨石破片が、Ｐ４からは218の高坏形土器口縁部と打製石鏃（222）が、Ｐ５からは216の甕形土器口縁部と打製石鏃（221）が各柱穴で出土している。このうち216～219は、弥生時代中期後葉の土器である。

時期：掘立柱建物７が切っている土坑５基と柱穴２基は、弥生時代前期末～中期初頭の時期の遺構である。掘立柱建物址の柱穴から出土した土器は弥生時代中期後葉に限られることから、掘立柱建物７の上限を弥生時代中期後葉とする。



第57図　掘立７出土遺物実測図

2）土　坑

この時期の土坑は４基であり、長方形が３基、円形が１基である。

ＳＫ128（第58図）

Ｃ６区に位置し、ＳＰ1160（時期不明）に切られ、ＳＫ129（弥生時代中期前葉）・145（弥生時代中期前葉～中葉）を切る。平面形態は不整形な方形で、規模は長軸2.10m、短軸1.60m、深さ0.13mを測る。断面形態は皿状で、西から東に0.1m程立ち上がる。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は227～230で、高坏形土器、底部片、打製石鏃、石庖丁がそれぞれ１点出土した。

時期：出土した遺物から、弥生時代中期後葉とする。

ＳＫ121（第59図）

Ｅ７区に位置し、ＳＰ1043・1044・1045・1053・1055（時期不明）を切る。平面形態は不整形な楕円形で、規模は長軸1.45m、短軸1.25m、深さ0.09mを測る。断面形態は皿状、埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は、壺形土器の頸部（231）が出土した。

時期：出土した遺物から、弥生時代中期後葉～後期初頭とする。

ＳＫ８（第59図）

Ｄ10区に位置し、ＳＫ13（時期不明）に切られる。平面形態は不整形な長方形で、規模は長軸1.34m、短軸0.59m、深さ0.05mを測る。断面形態はレンズ状、埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は、高坏形土器の坏部（232）が出土した。

時期：出土した遺物から、弥生時代後期初頭とする。

ＳＫ73（第55図）

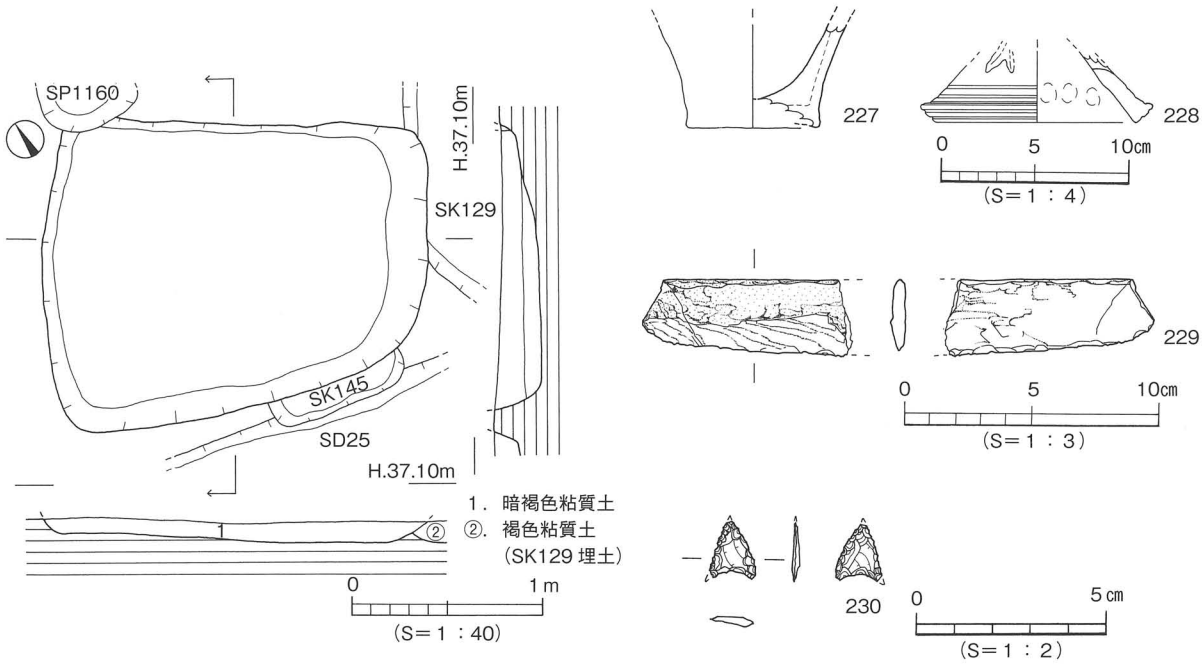
Ｅ～Ｆ13区に位置し、ＳＫ７（古墳時代）・ＳＤ15（古墳時代）に切られる。平面形態は不整形な楕円形で、規模は長軸2.40m、短軸1.59m、深さ0.05mを測る。断面形態は皿状、埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は出土していない。

時期：遺構の切り合い関係から、弥生時代中期後葉とする。

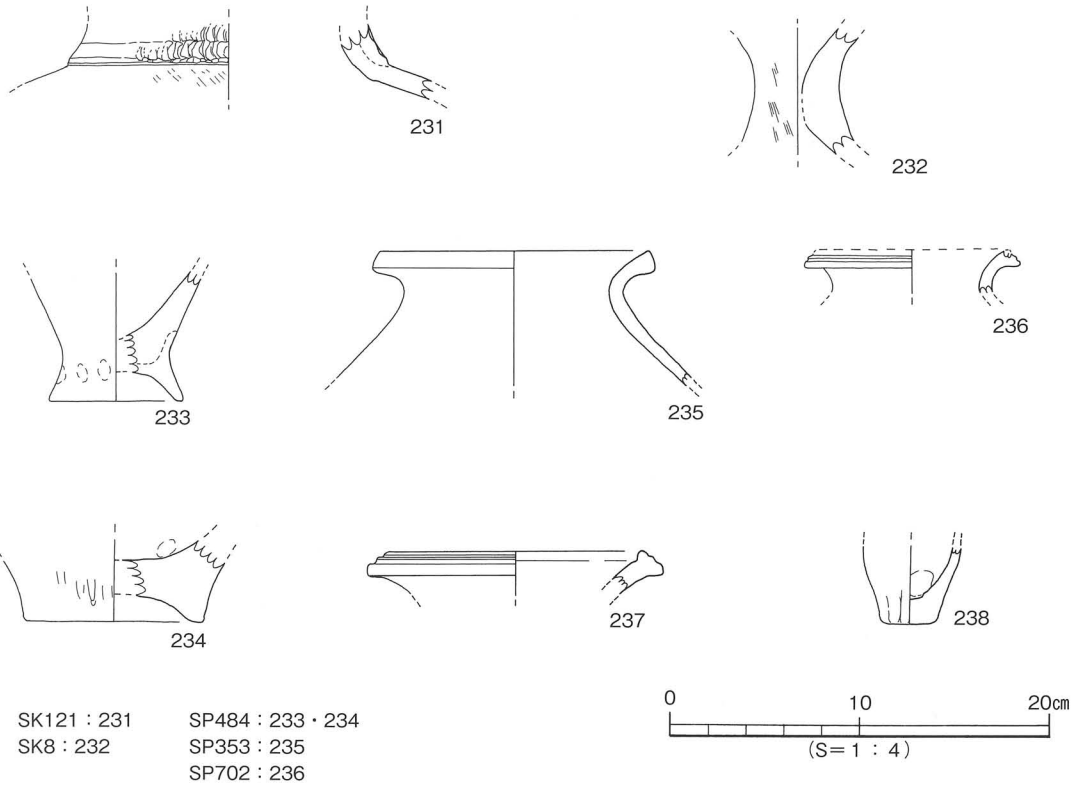
3）柱穴・小穴（第59・82図）

この時期の遺物が出土した柱穴・小穴は５基ある。

233は甕形土器の底部、234は壺形土器の底部で、ＳＰ484出土品。なお、第82図330の石器は、ＳＰ484出土品で、砥石になる。235は壺形土器の口縁部で、ＳＰ353出土品。236は壺形土器の口縁部で、ＳＰ702出土品。237は壺形土器の口縁部で、ＳＰ925出土品。238はミニチュア土器の底部で、ＳＰ973出土品。



第58図　ＳＫ128測量図・出土遺物実測図



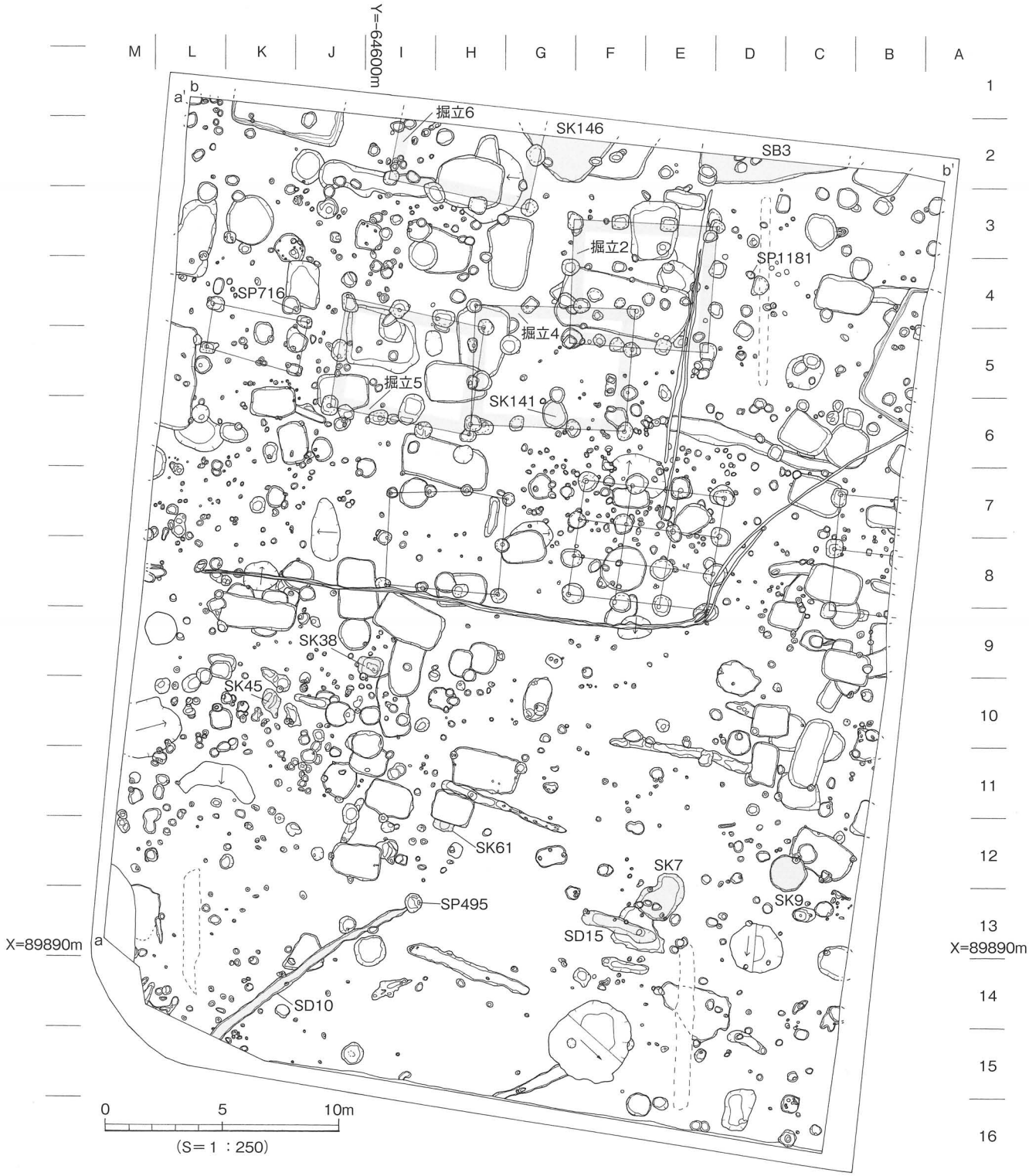
SK121：231
SK8：232

SP484：233・234
SP353：235
SP702：236
SP925：237
SP973：238

第59図　ＳＫ・ＳＰ出土遺物実測図

3．古墳時代～古代の遺構と遺物（第60図）

この時代の遺構には、竪穴式住居址１棟、掘立柱建物４棟、土坑７基、溝３条、柱穴３基がある。



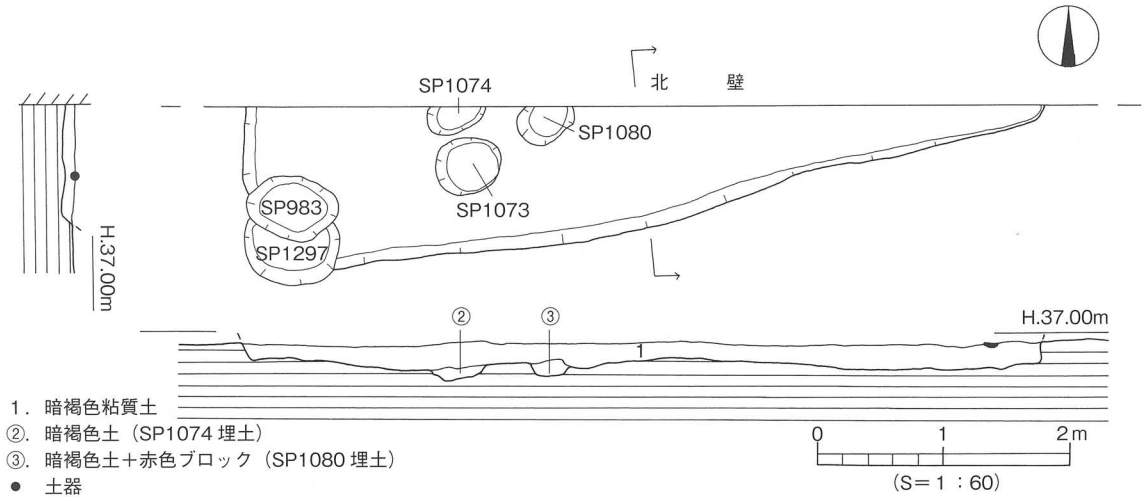
第60図　古墳時代～古代の遺構配置図

（1）竪穴式住居址

ＳＢ３（第61図）

Ｃ・Ｄ２区に位置し、ＳＰ983・1297（時期不明）に切られ、ＳＰ1073・1074・1080を切る。住居址の殆どが調査区外にある。Ⅳ層上面での検出で、Ⅱ層がわずかに覆う。平面形態は方形もしくは長方形で、規模は南辺6.2m、壁高0.1mを測る。周壁溝と柱穴は確認できなかった。埋土は暗褐色の粘質土単層である。遺物は須恵器が２点出土した。239は坏蓋で、240は胴部である。

時期：出土した須恵器の特徴から、６世紀後半とする。



第61図　ＳＢ３測量図・出土遺物実測図

（２）掘立柱建物址

掘立柱建物２（第62図、図版６・８）

Ｅ、Ｆ４～６に位置する総柱の建物址である。掘立柱建物４（古墳時代～古代）、ＳＰ1296（中世）に切られ、ＳＫ122・124（弥生時代）を切る。東西棟で、建物方位をＮ-２°-Ｅにとる。規模は桁行３間（5.92m）、梁行３間（5.29m）、床面積31.31㎡である。柱間寸法は、桁間が2.03・2.01・1.88m、梁間が1.88・1.59・1.82mとなる。

柱穴の平面形態は方形と円形とがある。規模は、方形が一辺0.5m、円形は径0.3～0.5m、深さは0.3～0.5mを測る。掘り方の断面形態は逆台形状である。根石はＰ16のみで検出された。

出土遺物は、各柱穴に土器の小破片があり、実測可能な遺物は241～244の４点である。241はＰ７出土で、須恵器の壺または甕の胴部片である。242はＰ11出土の須恵器の坏身片で、時期は６世紀末～７世紀前半に比定される。243はＰ７出土の甕形土器の口縁部で、弥生時代中期後半になる。244はＰ６出土の壺形土器の口縁部である。

時期：柱穴出土の須恵器片から上限は６世紀末～７世紀前半となり、下限は掘立柱建物４が建てられる（時期は不特定）までとなる。

掘立柱建物４（第63図）

Ｆ、Ｇ、Ｈ４～６に位置する側柱の建物址である。西側では掘立柱建物５の柱穴（Ｐ１・２・３）を、東側では掘立柱建物２と切り合い、掘立柱建物２の柱穴（Ｐ８）を切る。したがって、掘立柱建物４は掘立柱建物２・５に後出する建物になる。このほかに、掘立柱建物４はＳＫ115・116・122（弥生時代）・ＳＰ787・846・924（時期不明）を切っている。建物は東西棟で、建物方位はＮ-３°-Ｅになる。規模は桁行３間（6.65m）、梁行３間（5.04m）、床面積33.51㎡である。柱間寸法は、桁間が1.94・2.35・2.36m、梁間が1.61・1.65・1.78mとなる。

柱穴の平面形態は円形が８基で、方形が４基ある。規模は径0.4～0.8m、深さは0.1～0.2mを測る。掘り方の断面形態は筒状であった。柱穴には、柱痕跡が残り、直径は0.1mであった。根石は柱穴Ｐ１・８・９・12の底面で検出した。栗石はない。埋土の堆積状況からは、掘り方埋土は、黒褐色土、暗褐色土、褐灰色土が交互にある。掘り方内を埋める工程とその単位が確認できた。

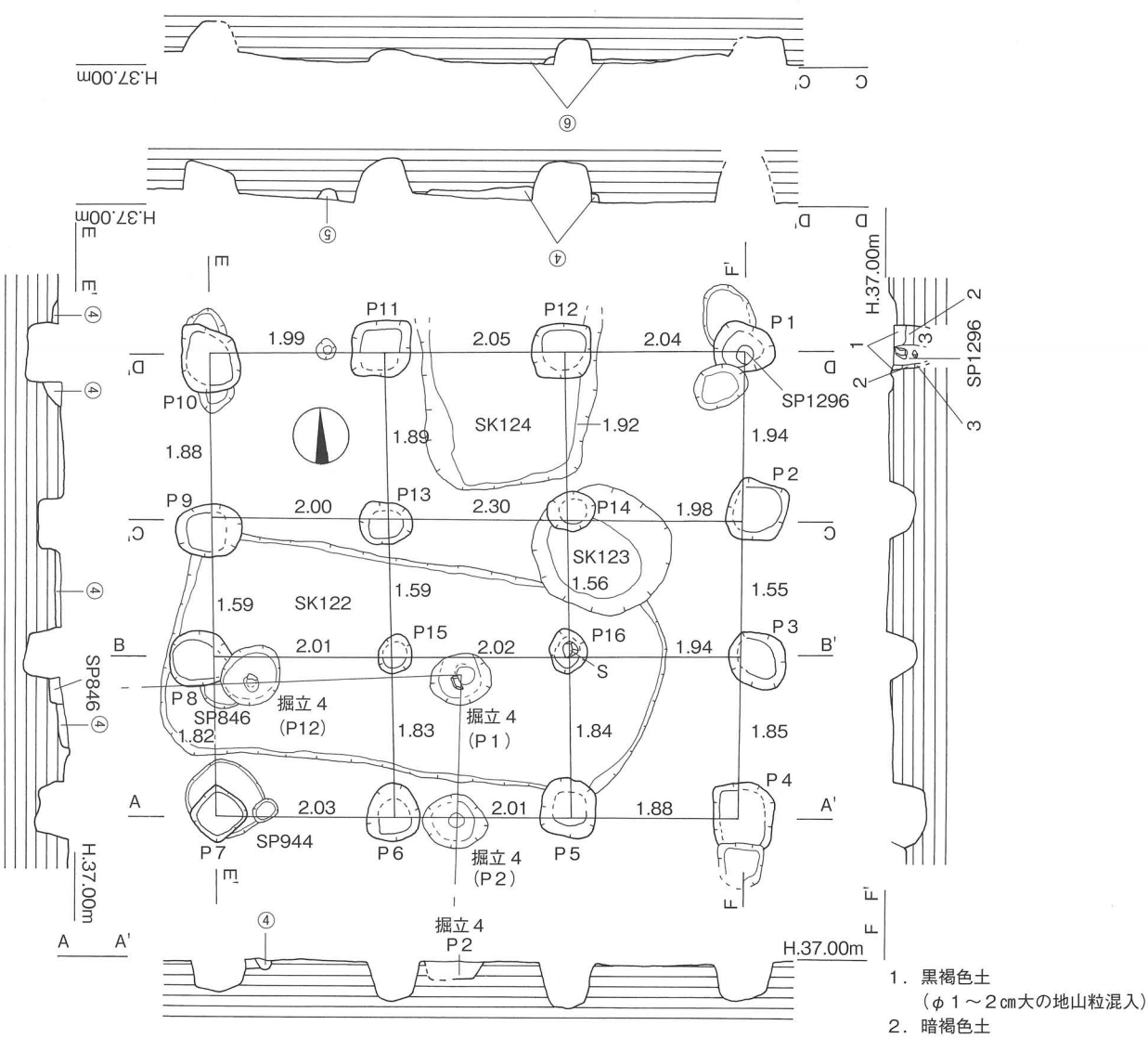
出土遺物は、各柱穴に土器の小破片があり、実測可能な遺物は245・246の２点である。245はＰ10から出土した弥生時代の甕形土器である。246はＰ12から出土した台石で、根石に転用されている。また、小片で図化は不可能だが、須恵器の胴部片（壺か甕）も出土している。

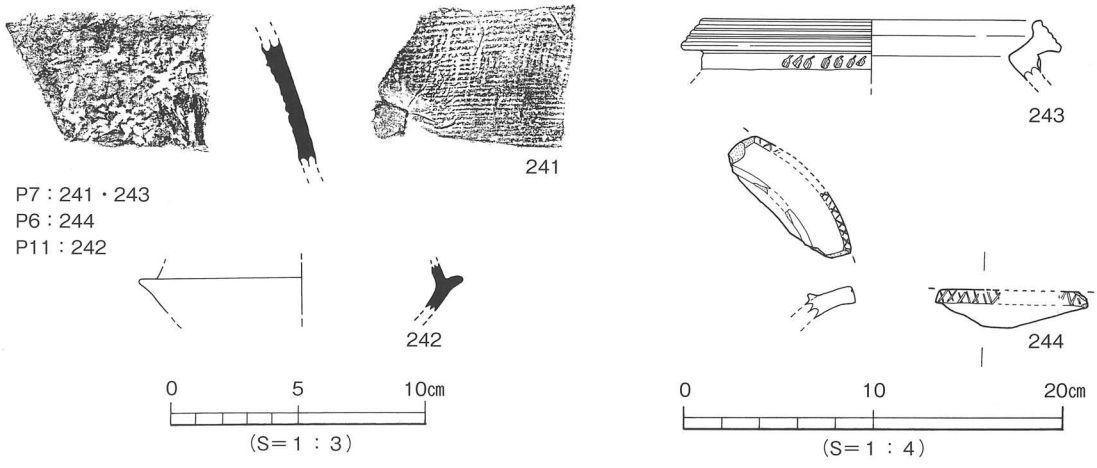
時期：掘立柱建物４の上限は掘立柱建物２・５の廃棄された後となり、６世紀末～７世紀前半になる。下限は不明。

掘立柱建物５（第64図）

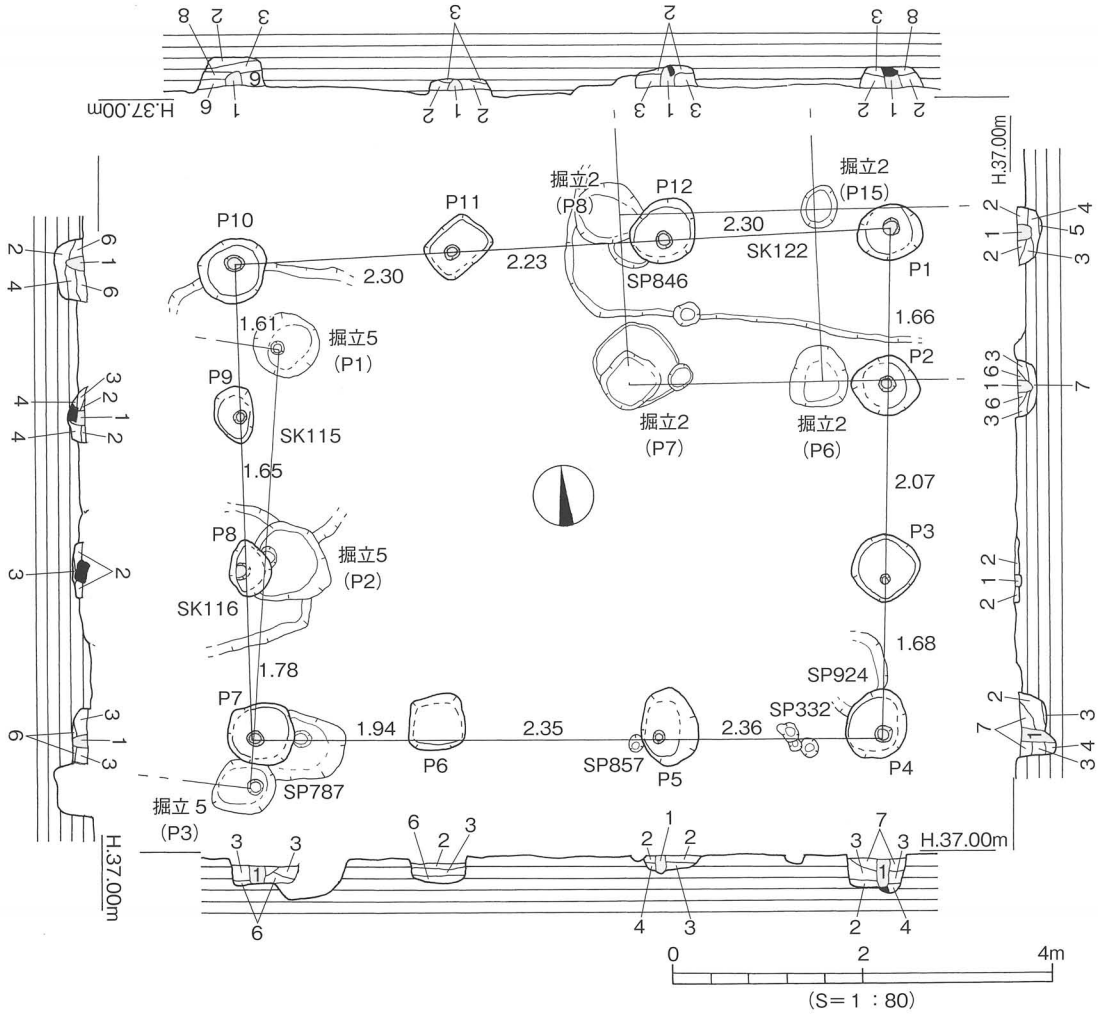
Ｈ・Ｉ・Ｊ～４・５・６区に位置する側柱の建物址である。掘立柱建物４に切られ、ＳＫ102・106・115・116（弥生時代）を切る。建物は東西棟で、建物方位はＮ-９°-Ｅとなる。規模は桁行３間（6.19m）、梁行２間（4.69m）、床面積29.03㎡である。柱間寸法は、桁間が2.25・1.76・2.18m、梁間が2.49・2.20mであった。

柱穴の平面形態は方形や楕円形で、直径0.6m、深さ0.4～0.8mを測る。掘り方の断面形態は逆台形

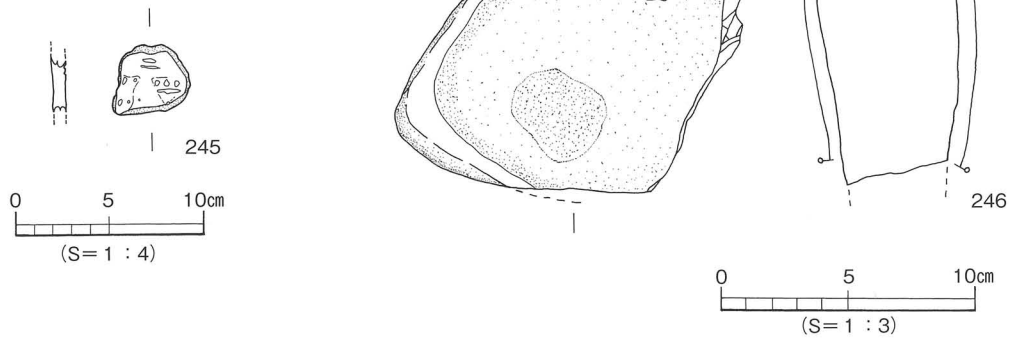




第62図　掘立２測量図・出土遺物実測図



1．黒褐色土（柱痕）
2．黒褐色土（φ0.5～1.0cm大の地山粒混入）
3．暗褐色土（φ1.0cm大の地山粒多含）
4．褐色土＋暗褐色土（φ1.0cm大の地山粒多含）
5．褐灰色土（4より地立粒多含）
6．黒褐色土（4より地山粒多含）
7．黒褐色土＋褐色土（φ1mm大の地山粒多含）
8．褐灰色土



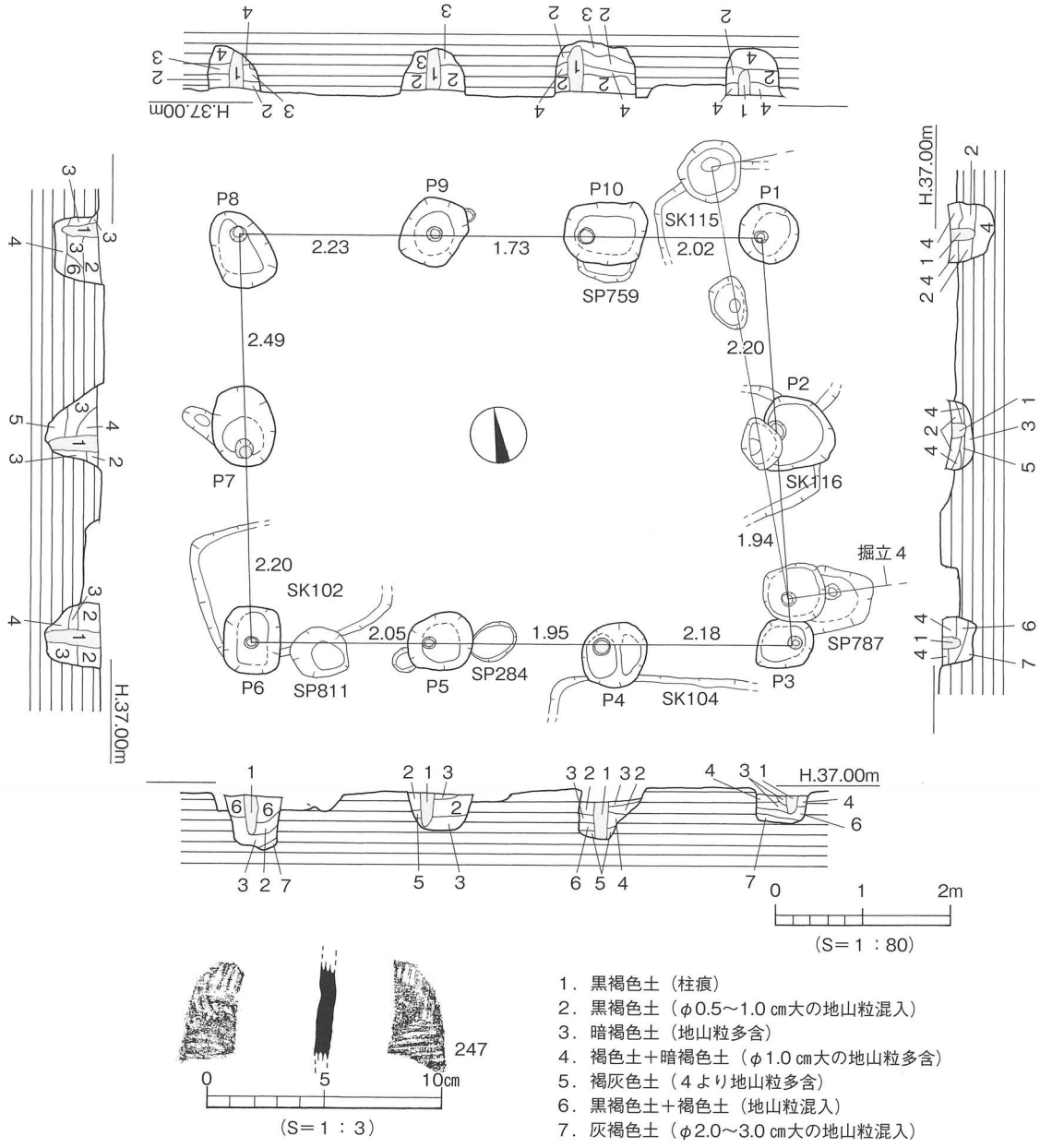
P10：245
P12：246

第63図　掘立４測量図・出土遺物実測図

状であるが、Ｐ４は一段浅くなる箇所をもつ。柱穴には、柱痕跡が残っており、直径は0.15mを測る。掘り方埋土は、黒褐色土、暗褐色土、灰褐色が交互にある。埋土の堆積状況からは、柱をすえて掘り方内を埋める工程とその単位が確認できた。礎石・根石・栗石・礎板は検出されていない。

出土遺物は、各柱穴に土器の小破片があり、実測可能な遺物は１点である。247は、Ｐ４から出土した須恵器の胴部片である。

時期：掘立柱建物址の上限は出土した須恵器片から６世紀以降になり、下限は掘立柱建物４が建てられるまで（６世紀末～７世紀前半）となる。



第64図　掘立５測量図・出土遺物実測図

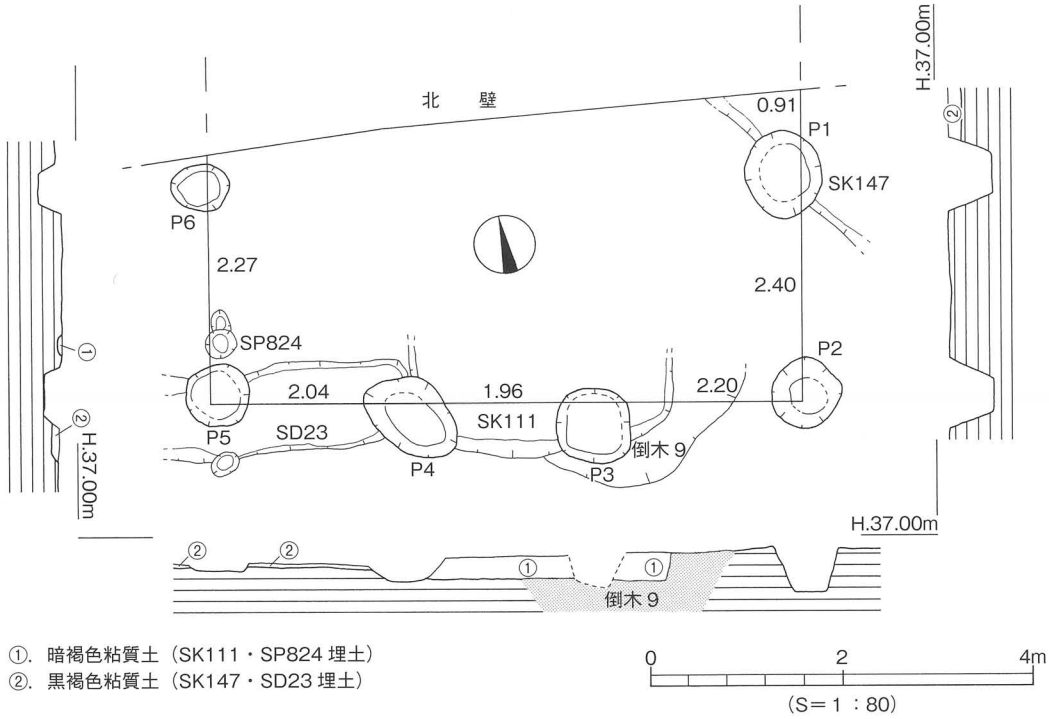
掘立柱建物６（第65・83図）

Ⅰ・G・H～２・３区に位置する側柱の建物址である。遺構は調査区外につづき、ＳＤ23・ＳＫ111（弥生時代）・146（古墳時代）・倒木痕（時期不明）を切っている。建物は東西棟で、建物方位はＮ－９°－Ｅとなる。検出規模は、桁行１間以上（2.63m以上）、梁行３間（6.20m）、床面積は16.30㎡以上である。柱間寸法は、桁間が2.04・1.96・2.20m、梁間が2.27・0.36m以上となる。

柱穴の平面形態は方形・円形・楕円形で、直径0.6～0.8m、深さ0.1～0.5mである。掘り方の断面形態は逆台形であった。礎石・根石・栗石・礎板は検出されていない。

出土遺物は、各柱穴から土器と石器の小破片がある。第83図334は用途不明石器である。

時期：掘立柱建物６は、５世紀末～６世紀初頭のＳＫ146を切ることから、上限は６世紀初頭以降である。下限は判断できる資料がない。



第65図　掘立６測量図

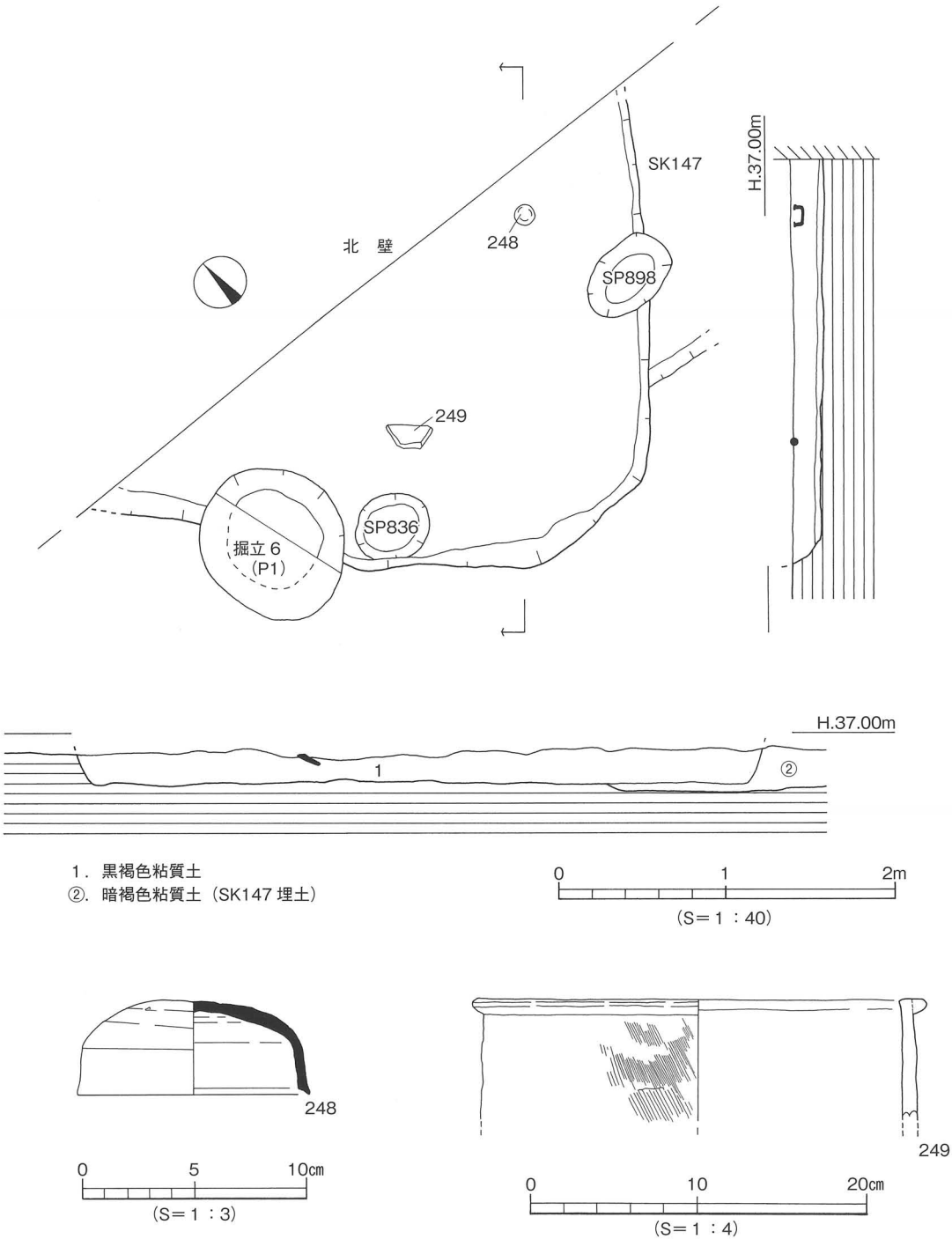
（３）土　坑

この時期の土坑は７基（ＳＫ７・９・38・45・61・141・146）で、長方形は３基、円形は４基である。

ＳＫ146（第66図）

Ｆ・Ｇ２区に位置し、調査区外につづく。掘立柱建物６（古墳時代～古代）・ＳＰ898（時期不明）に切られ、ＳＰ836（時期不明）・ＳＫ147（弥生時代）を切る。平面形態は、方形又は長方形と考えられる。規模は長軸3.34m、深さ0.2mを測る。断面形態は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。埋土は黒褐色の粘質土単層である。遺物は248・249で、埋土上位から、須恵器の坏蓋が１点と弥生時代の甕形土器１点が出土した。

時期：出土した須恵器から、古墳時代後期、５世紀末～６世紀初頭とする。



第66図　ＳＫ146測量図・出土遺物実測図

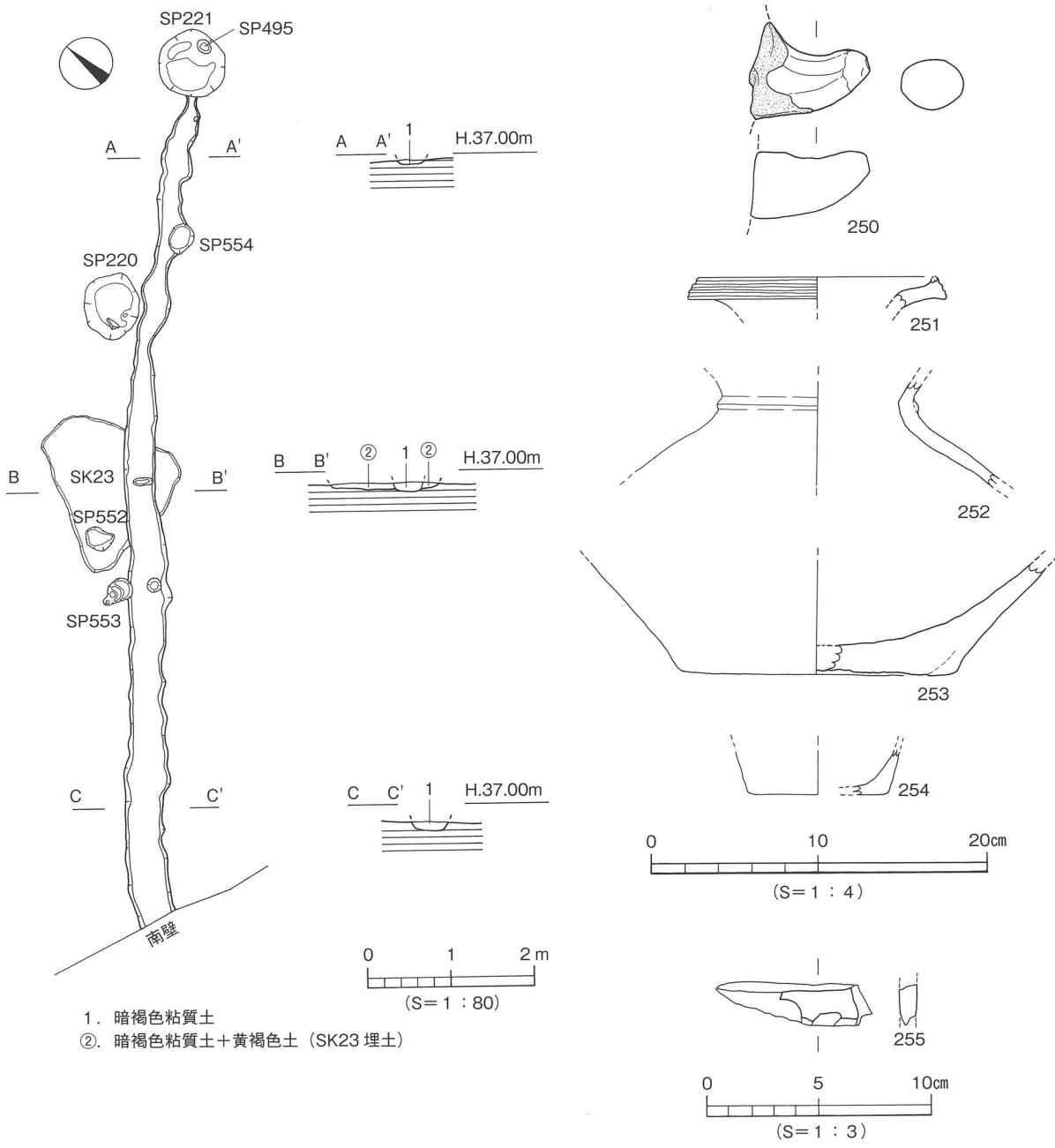
（4）溝

溝は３条検出した。ＳＤ４・10・15である。

ＳＤ10（第67図）

Ｉ13～Ｌ15区に位置する東西方向の直線溝である。ＳＰ353（弥生時代）・221・495・554（時期不明）に切られ、ＳＫ23（弥生時代）を切る。規模は長さ9.86m、幅0.42m、深さ0.1mを測る。断面形態は皿状で、埋土は暗褐色の粘質土である。底面はほぼ平坦である。遺物は250～255で、底面から甑の把手（250）、弥生土器（251～254）、石器（255）が出土した。

時期：出土した甑の把手から古墳時代中期、５世紀以降の遺構になる。

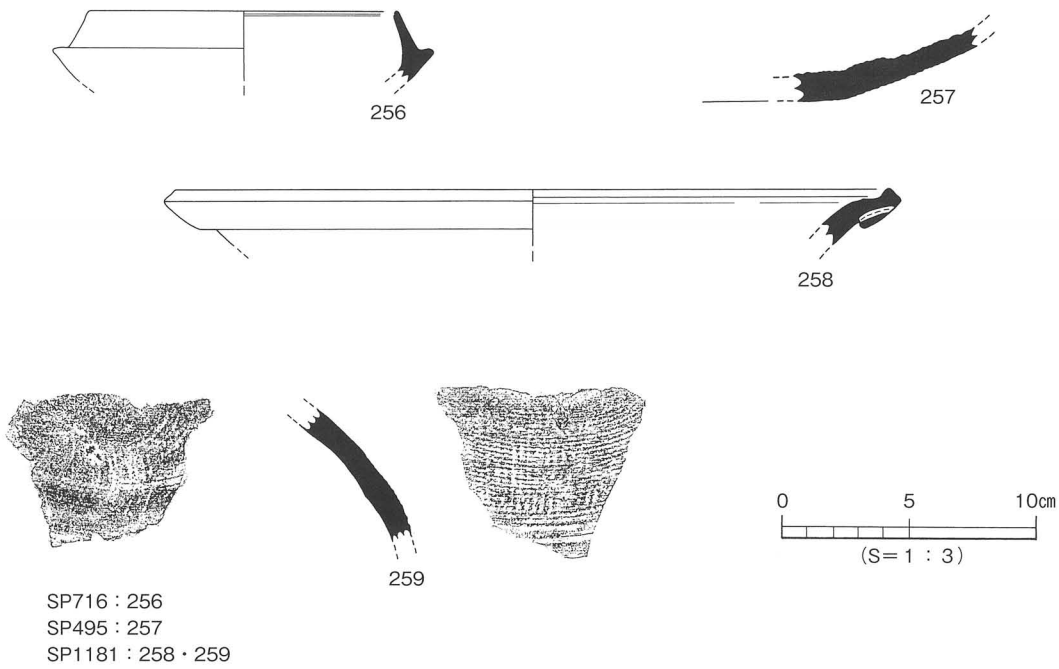


第67図　ＳＤ10測量図・出土遺物実測図

（5）柱　穴（第68図）

この時期の遺物が出土した柱穴・小穴は３基である。

256は坏身で、ＳＰ716出土物である（６世紀中葉）。257は甕、又は壺の胴部で、ＳＰ495出土物（６世紀後半以降）。258･259はＳＰ1181の出土物である。258は甕の口縁部で、６世紀末以降。259は甕、又は壺の肩部片で、５世紀末～６世紀前半。

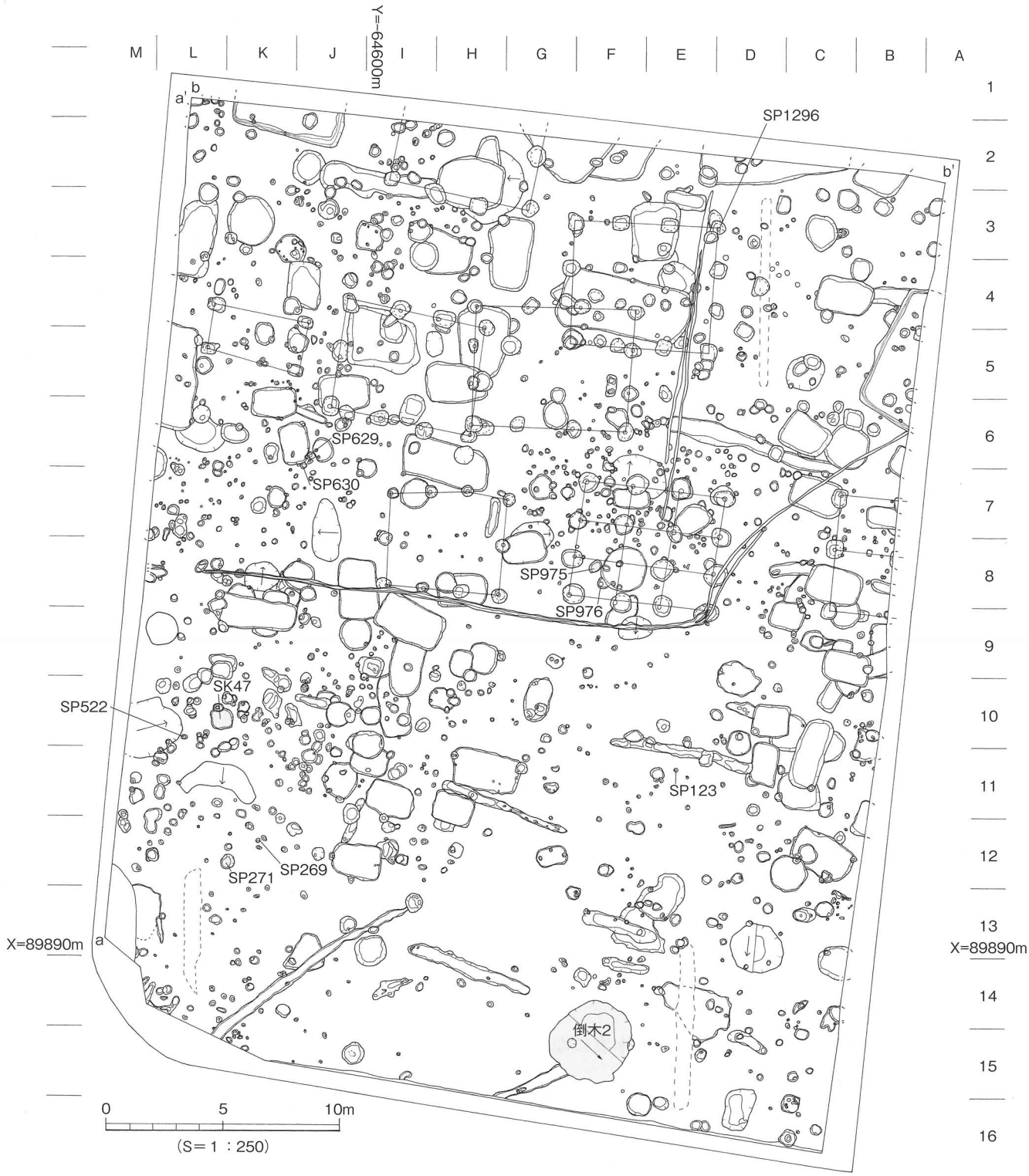


SP716：256
SP495：257
SP1181：258・259

第68図　ＳＰ出土遺物実測図

4．中世の遺構と遺物（第69図）

中世の遺構は、柱穴１基（ＳＰ1296）、土坑１基（ＳＫ47）、倒木１基（倒木２）である。



第69図　中世の遺構配置図

（1）柱　穴

ＳＰ1296（第70・71図、図版８・15・16）

Ｄ３区に位置する小穴で、掘立柱建物２の柱穴（Ｐ１）を切る。湧水のために完掘ができなかった。したがって、深さと出土状況の一部は、記録できていない。平面形態は円形で、規模は径0.2mである。埋土は灰褐色の粘質土単層である。

出土物は同一埋土中から土器と石が交互に出土した。検出状況は、取り上げ順に上から１回目には長さ15cmの礫（260）、２・３回目には瓦質の碗と６cm大の河原石（261・262）、４回目には焼成をうけている15cm大の礫（263～269）、５回目には土師器の坏や瓦質の碗（270～274）が出土した。６回目には長さ10cm大の棒状の河原石（275～287）が多数見つかった。棒状の河原石は、長軸を横にして検出された。なお、未掘のため、６回目以下の遺物の有無は不明である。遺物の出土状況から、これらの遺物は人為的に埋められた可能性をもつ。調査区内では、同様な遺物の出土状況を示した小穴はなく、ＳＰ1296の付近には、同じ埋土をもつ掘立柱建物がない。したがって、小穴は単独で存在していたものとみられ、その性格は祭祀遺構を考えている。273は円盤高台の皿で、内面を削り出している。他に来住台地上で出土の円盤高台は、来住廃寺15次調査地で坏が２点出土している。

時期：出土した遺物から13世紀後半とする。

（2）土　坑

ＳＫ47（第69図）

Ｋ、Ｌ10区に位置し、ＳＰ513（時期不明）に切られる。平面形態は方形で、規模は長軸0.95m、短軸0.85m、深さ0.19mを測る。断面形態は舟底状である。埋土は黒褐色の粘質土単層である。遺物は中世土師器の小片が出土している。

時期：出土品から中世とするが、それ以上の時期特定はできない。

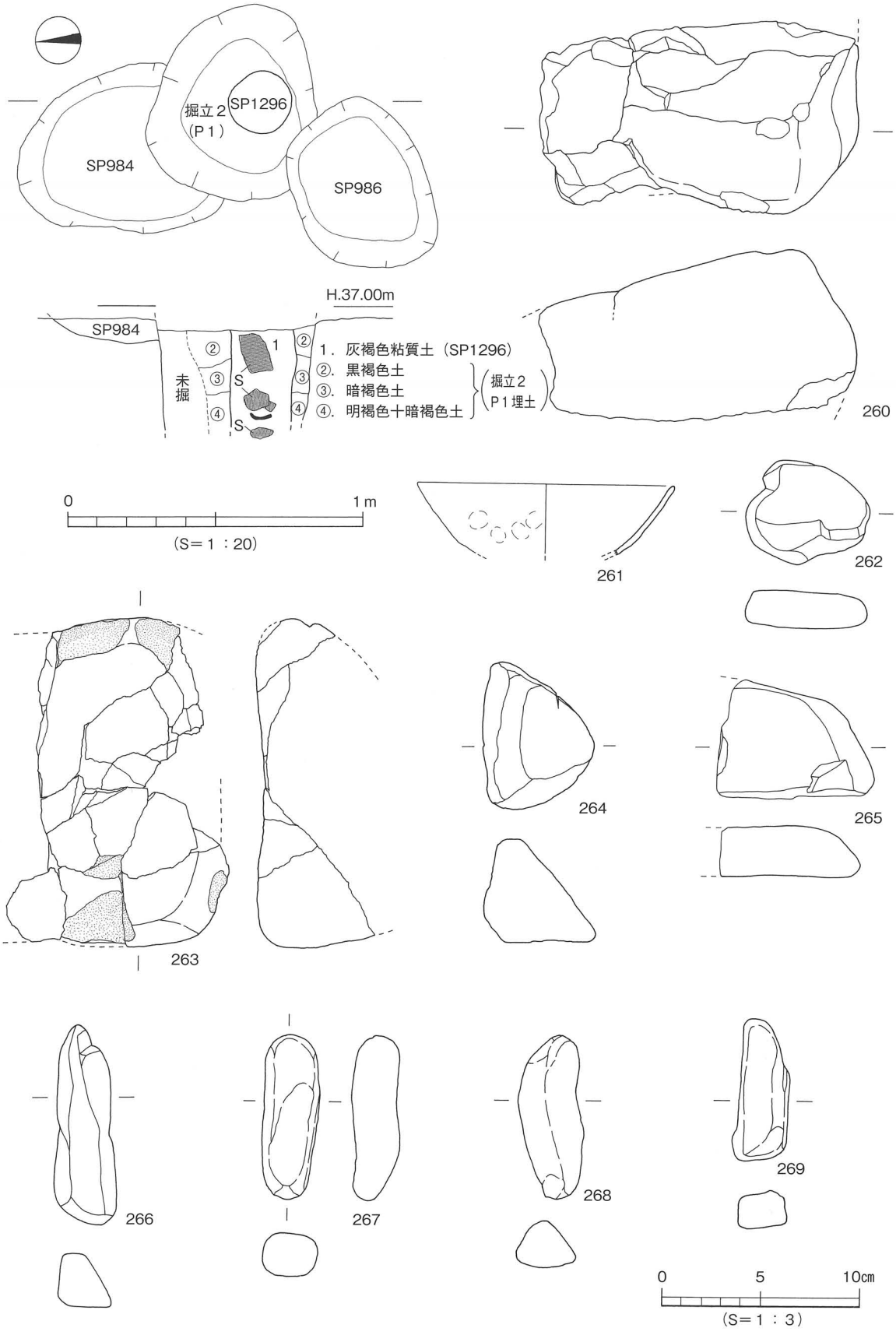
（3）倒　木

調査区内では、倒木痕は11基検出されたが、遺物を伴うものは倒木２の１基に限られる。

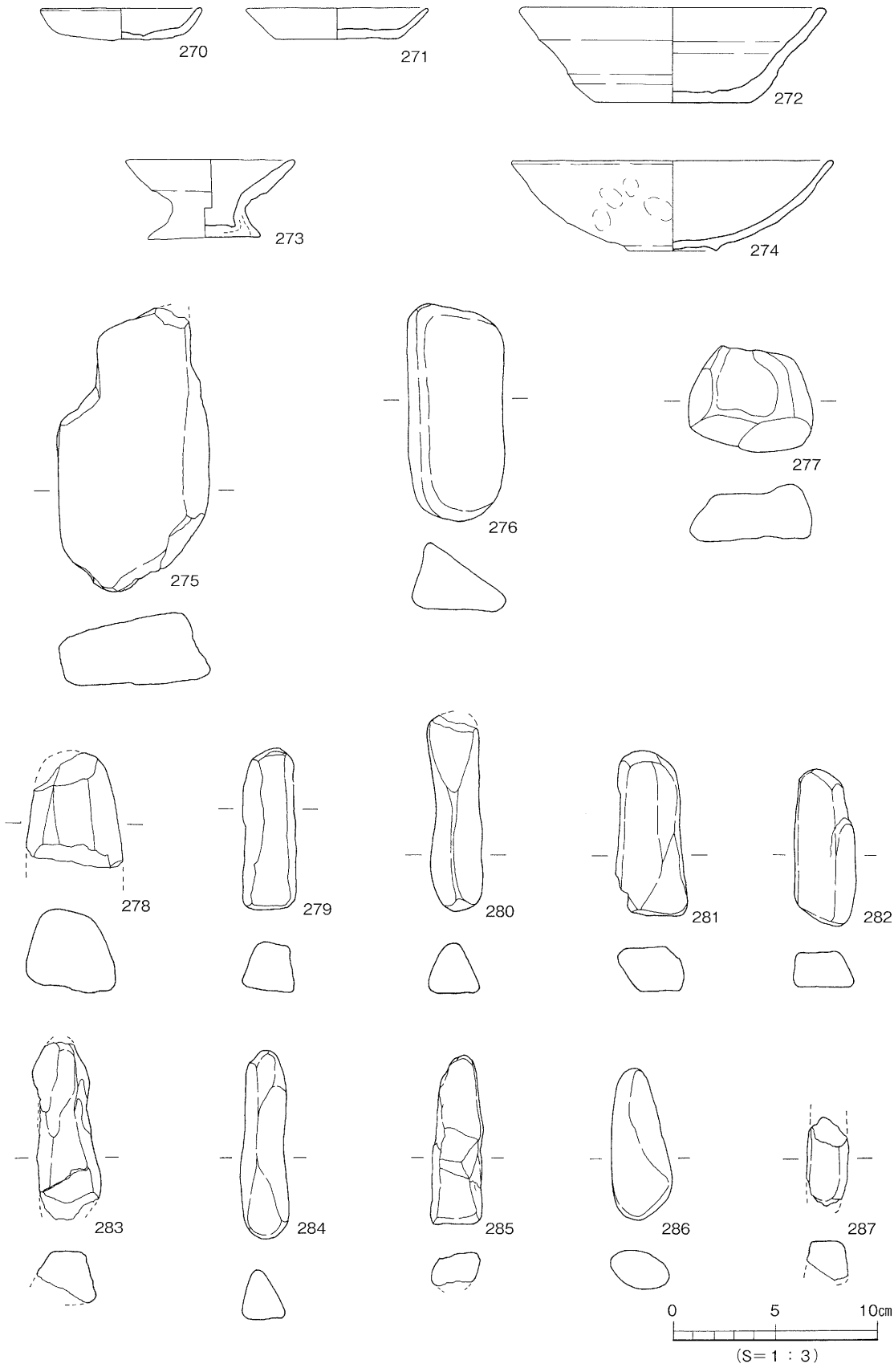
倒木２（第72図）

Ｆ、Ｇ14・15区に位置する倒木痕で、ＳＤ３、ＳＰ533（時期不明）を切る。２～７層は「根の周辺の地山層が木が倒れる時に根に絡んだ状態で垂直に倒立した層（半球形）」にあたる。今回検出の倒木痕の場合は「地山層」だけでなく、「倒木以前に既存していた遺構」も含まれていた。遺構が検出された層は、１層と６層である。１層は「流入層」にあたり、この層からは288～292の土器が出土した。288～290は中世の土師皿、291は８世紀前半の須恵器の坏蓋、292は古墳時代の土師器の甕形土器口縁部である。

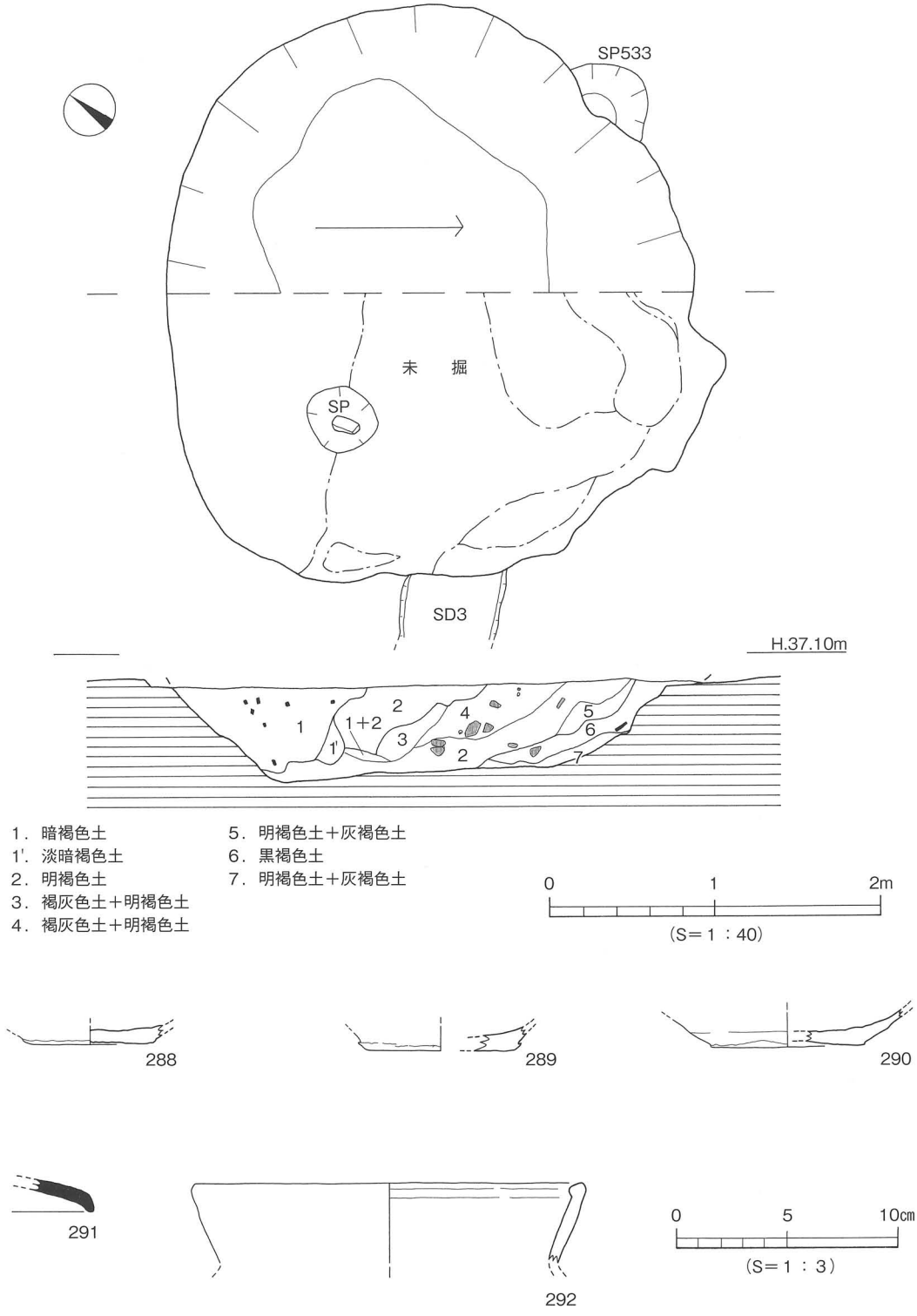
時期：出土遺物から、中世以降の倒木痕になる。



第70図　ＳＰ1296測量図・出土遺物実測図(1)



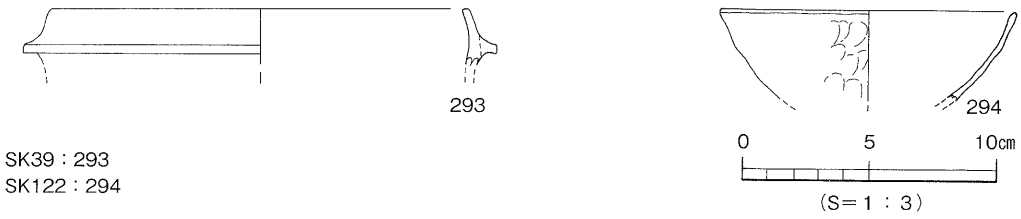
第71図　ＳＰ1296出土遺物実測図(2)



第72図　倒木２測量図・出土遺物実測図

（4）中世の遺物（第73図）

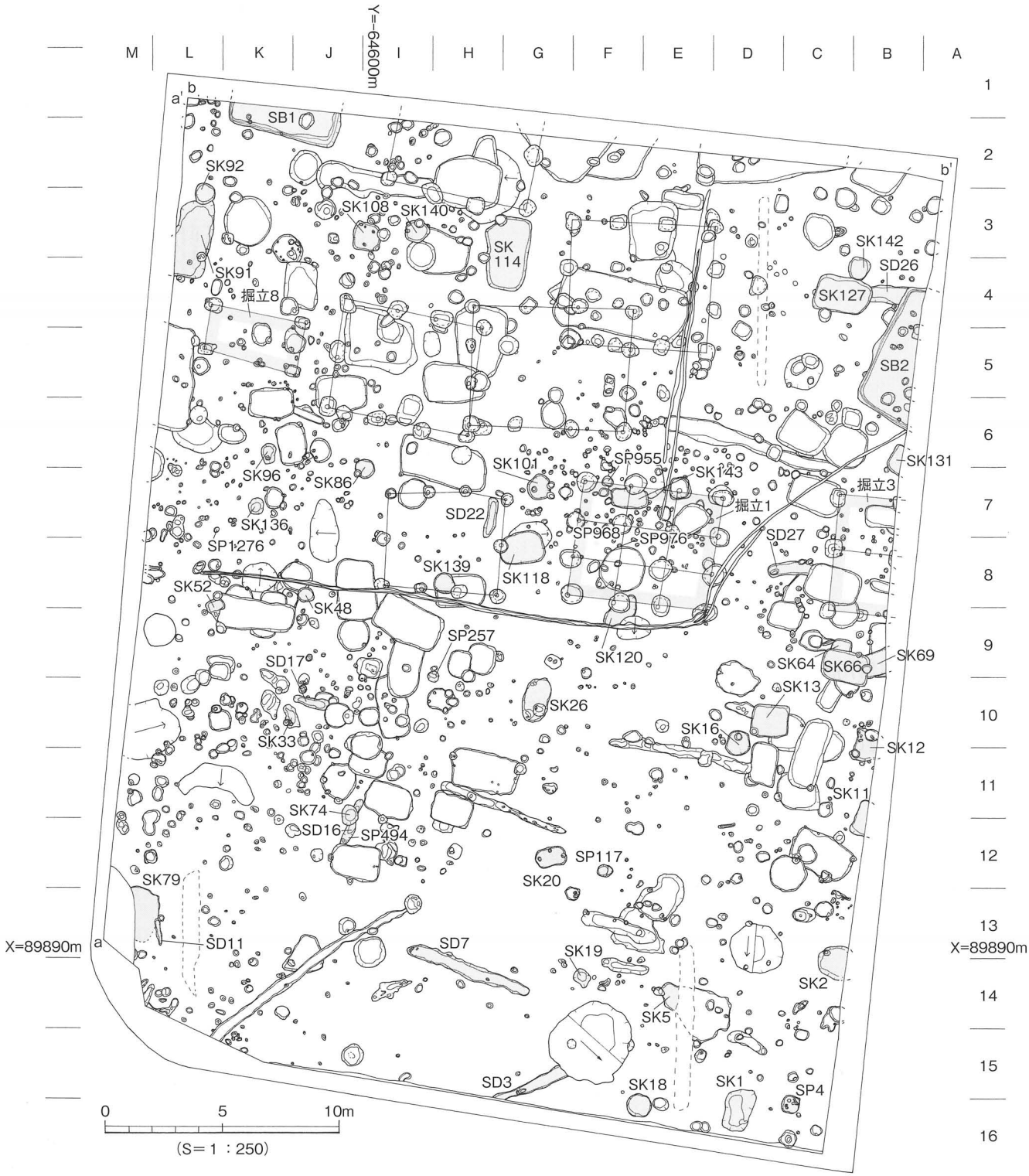
293はＳＫ39に混入していた遺物とみられ、土師質三足羽釜の口縁部になる。時期は13世紀後半とする。294はＳＫ122に混入していた遺物とみられ、瓦質碗の口縁部になる。時期は13世紀後半とする。



第73図　ＳＫ出土遺物実測図

5．時期不明の遺構と遺物（第74図）

ここでは、時期の特定ができなかった、もしくは難しい遺構と遺物を掲載する。



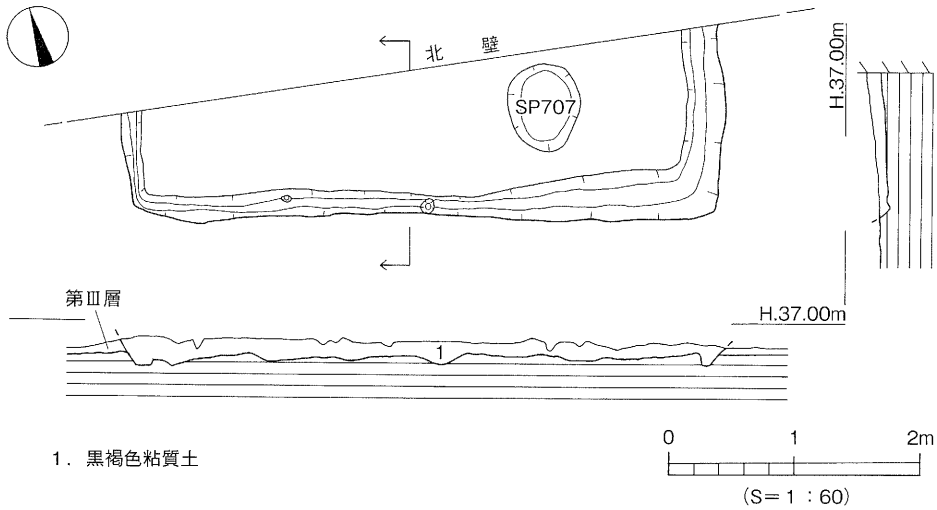
第74図　時期を特定できなかった遺構の配置図

（1）竪穴式住居址

ＳＢ１（第75図）

Ｊ、Ｋ２区に位置し第Ⅲ層を切り、第Ⅱ層が覆い、ＳＰ707（時期不明）を切る。平面形態は方形で、規模は南辺4.60mで、壁高0.1～0.15mである。遺構の殆どが調査区外に位置し、南部の検出に限られた。遺構は大きく削平され、貼床と周壁溝が遺存しているにすぎず、カマド・柱穴は検出していない。埋土は黒褐色の粘質土である。出土遺物はない。

時期：遺物が検出層からもなく、時期の特定ができない。

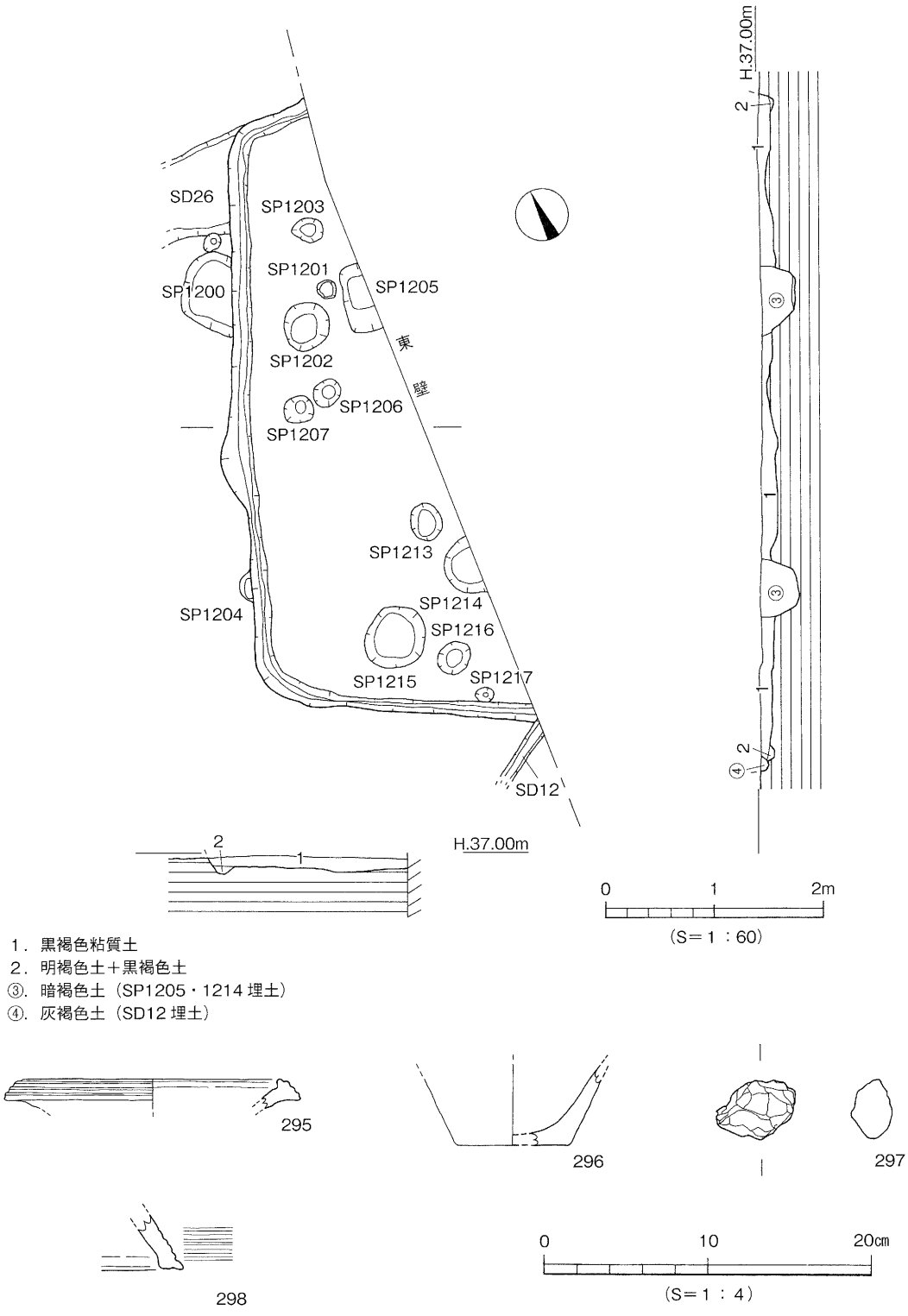


第75図　ＳＢ１測量図

ＳＢ２（第76図）

Ｂ４～６区に位置し、遺構の殆どが調査区外に位置し、西部の検出に限られた。ＳＤ12（現代）・ＳＰ1205･1214（時期不明）に切られ、ＳＤ26（弥生時代）、ＳＰ1200～1207、1213～1217（時期不明）を切る。平面形態は方形で、規模は西辺5.20mで、壁高0.14mである。遺構は削平され、貼床と周壁溝が残存し、カマド・柱穴は検出していない。埋土は黒褐色の粘質土である。出土物は295～298で、高坏形土器１点と壺形土器又は甕形土器の底部が１点と焼土塊が出土した。

時期：出土遺物は弥生時代中期後葉で、遺構の時期は、弥生時代中期後葉以降となる。



第76図　ＳＢ２測量図・出土遺物実測図

（2）掘立柱建物

掘立柱建物１（第77・81図、図版７）

Ｄ７～Ｇ７・Ｄ８～Ｇ８区に位置する総柱建物址である。ＳＤ12（現代）に切られ、ＳＫ119・120・121（弥生時代）・143（時期不明）、ＳＰ869・885・1072・1249・1264・倒木痕（時期不明）を切る。東西棟で、建物方位はＮ－９°－Ｅとなる。規模は桁行３間（6.00m）、梁行３間（4.94m）、床面積29.64㎡である。柱間寸法は、桁間が2.02・2.00・1.98m、梁間が1.68・1.60・1.66mとなり、等間隔であった。

柱穴の平面形態は円形や楕円形で、径0.8m、深さ0.2～0.5mを測る。掘り方の断面形態は殆どが筒状ないし逆台形状であるが、段掘になっているもの（Ｐ３）もある。柱穴には、柱の痕跡が残っており、直径は0.1mであった。根石はＰ７で検出され、それ以外の柱穴にはない。また、礎石・栗石・礎板もない。掘り方埋土は、黒褐色土、地山の明褐色土、暗褐色土が交互に混じる。柱をすえて、掘り方内を埋める工程とその単位がはっきりと検出された。

なお、柱穴16基のうちＰ１とＰ12では柱穴の重複を確認している。

遺物は、各柱穴から土器の小片と石器が出土した。実測可能な遺物は299～301・323でＰ５・Ｐ９・Ｐ10・Ｐ16に各１点ある。299はＰ９から出土した甕形土器の口縁部で、弥生時代中期初頭になる。300はＰ10から出土した複合口縁壺の口縁部分で、弥生時代後期になる。299・300とも柱穴の掘り方からか、柱の痕跡からの出土状況は判断できていない。301はＰ５の掘り方埋土から出土した石器で、破損した台石になる。第81図323はＰ16の掘り方埋土から出土した石器で、抉り入りの方柱状片刃石器になる。

時期：掘立柱建物１の上限は弥生時代中期末～後期となり、下限は掘立柱建物１を切るＳＤ12の時期（現代）となる。

掘立柱建物３（第78図）

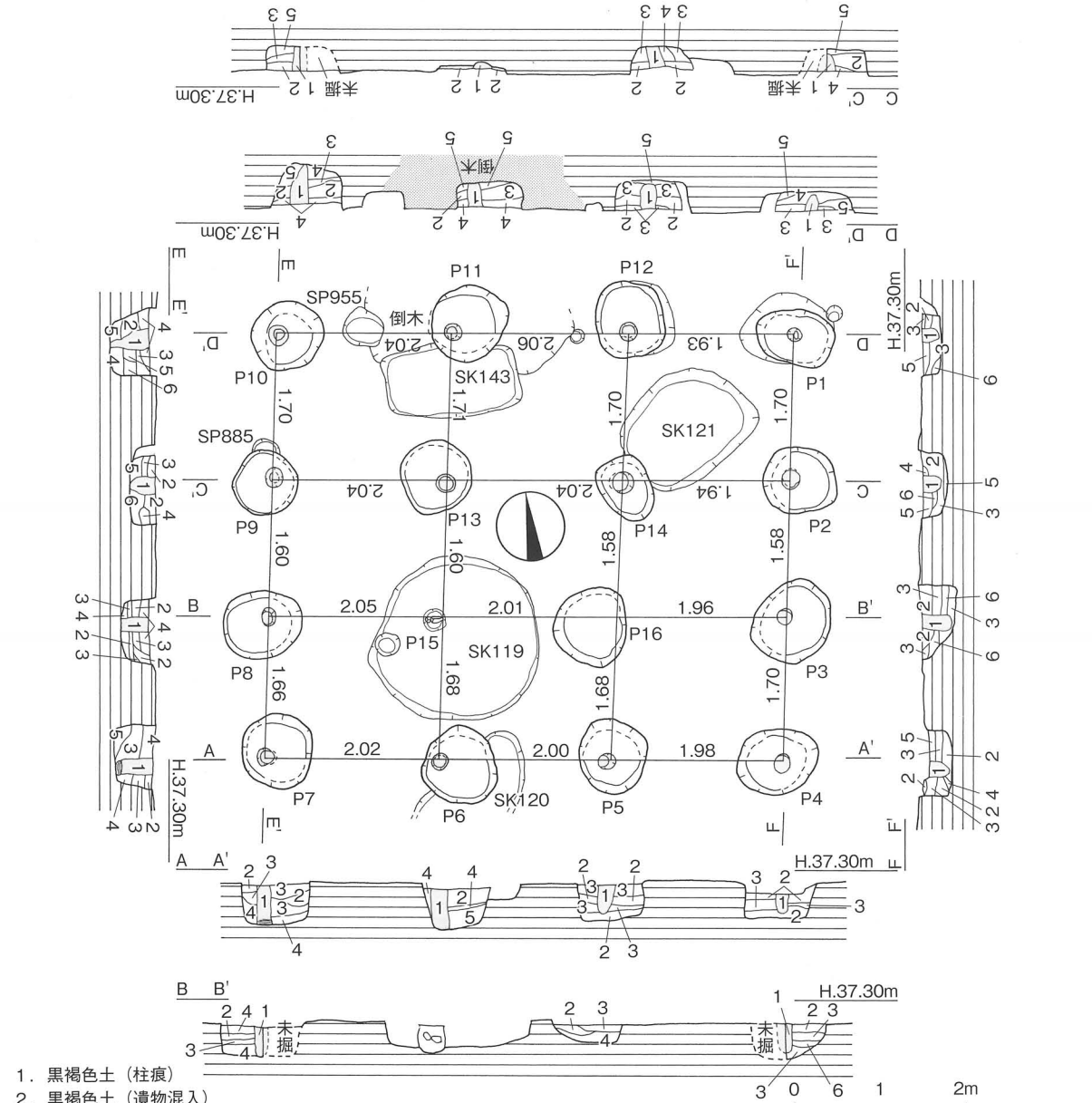
Ｂ７・８～Ｃ７・８区に位置し、総柱建物址と考えられる。遺構は調査区の東側につづき、ＳＫ68・130・132・134（弥生時代）、ＳＰ1185（時期不明）を切る。東西棟で、建物方位はＮ－６°－Ｅとなる。

検出規模は、桁行１間以上（2.53m以上）、梁行２間（5.12m）、床面積12.95m以上である。柱間寸法は、桁間が2.53m、梁間が2.41・2.71mを測る。

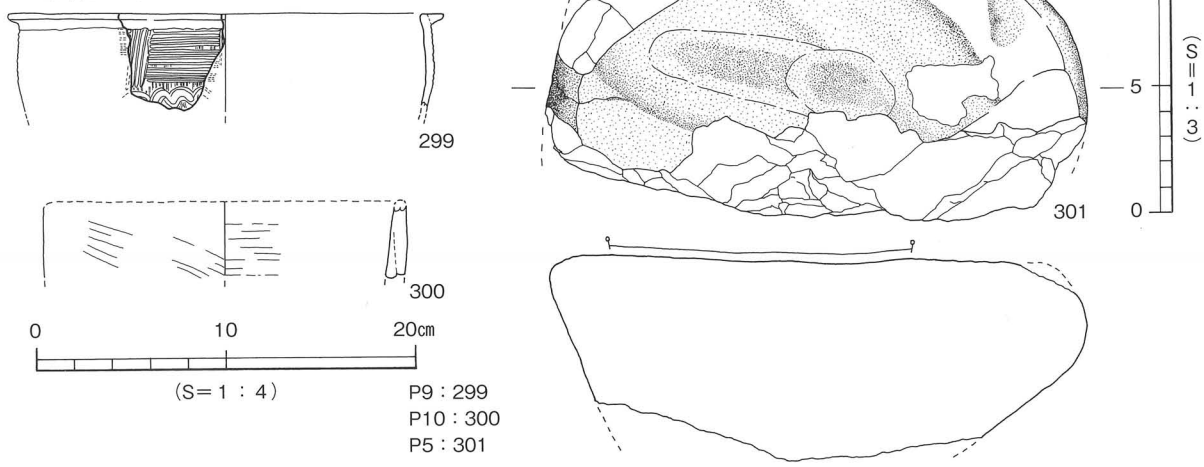
柱穴の平面形態は方形で、規模は一辺0.9m、深さ0.5mを測る。断面形態は筒状ないし逆台形状である。柱穴には、柱の痕跡が残っており、直径は0.1mである。埋土は、黒褐色土と暗褐色土とが交互にあり、掘り方内を埋める工程とその単位が確認できた。

出土遺物は、各柱穴に土器の小片が出土し、実測可能な遺物は１点である。302はＰ５から出土した打製石鏃である。

時期：切り合い関係から、掘立柱建物３の上限は弥生時代前期末～中期初頭となるが、掘立柱建物３を切っている遺構がない為、下限については判断できない。

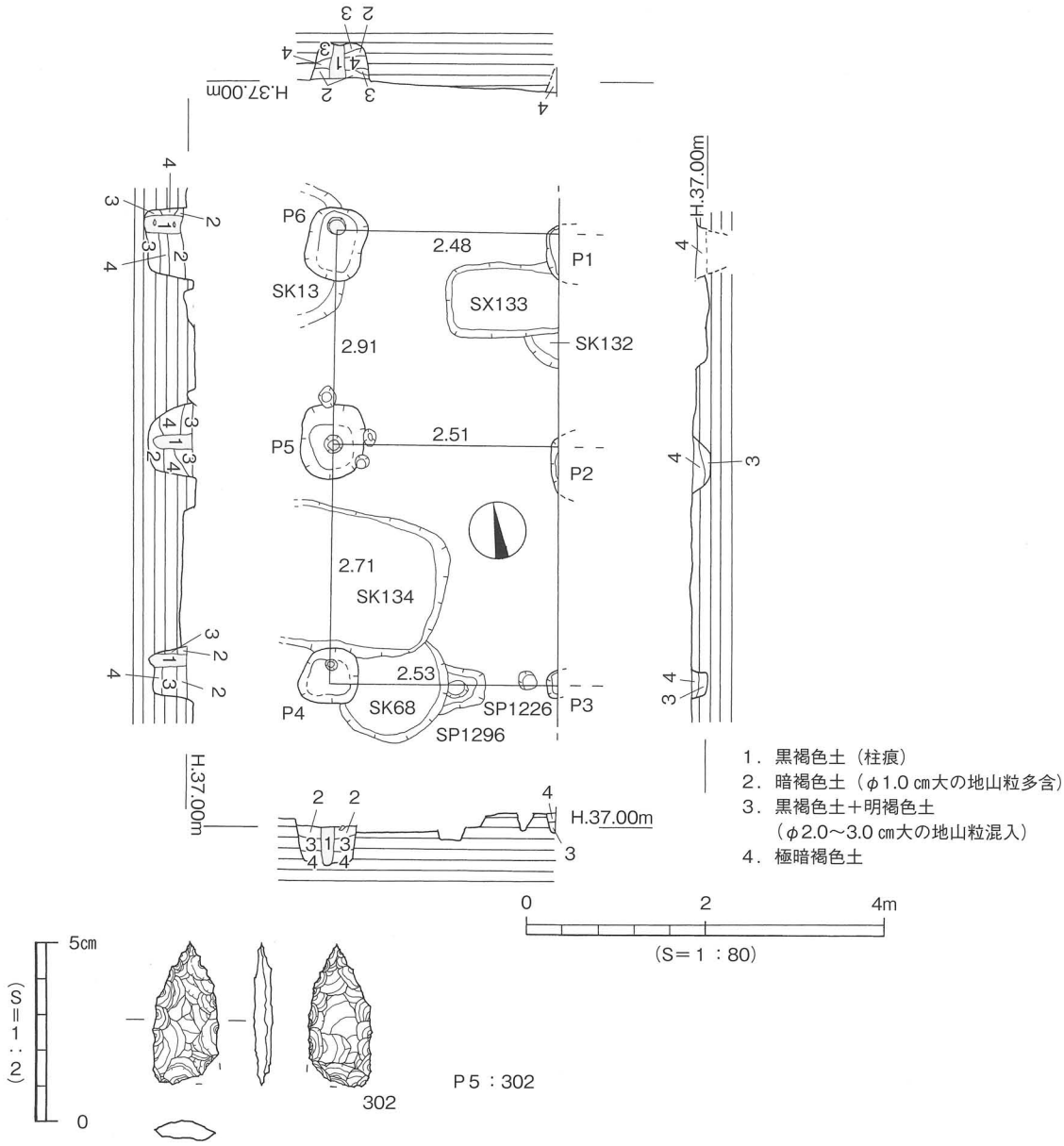


1．黒褐色土（柱痕）
2．黒褐色土（遺物混入）
3．橙色土＋黒褐色土（φ１～２㎜大の地立粒混入）
4．黒色土（φ１～２㎜大の地山粒少量混入）
5．明褐色土＋褐色土（φ２～３㎜大の地山粒多含）
6．暗褐色土＋灰色土＋茶色土（φ１～２㎜大の地山粒混入）
7．黒褐色土（地山粒少含）



P9：299
P10：300
P5：301

第77図　掘立１測量図・出土遺物実測図



第78図　掘立３測量図・出土遺物実測図

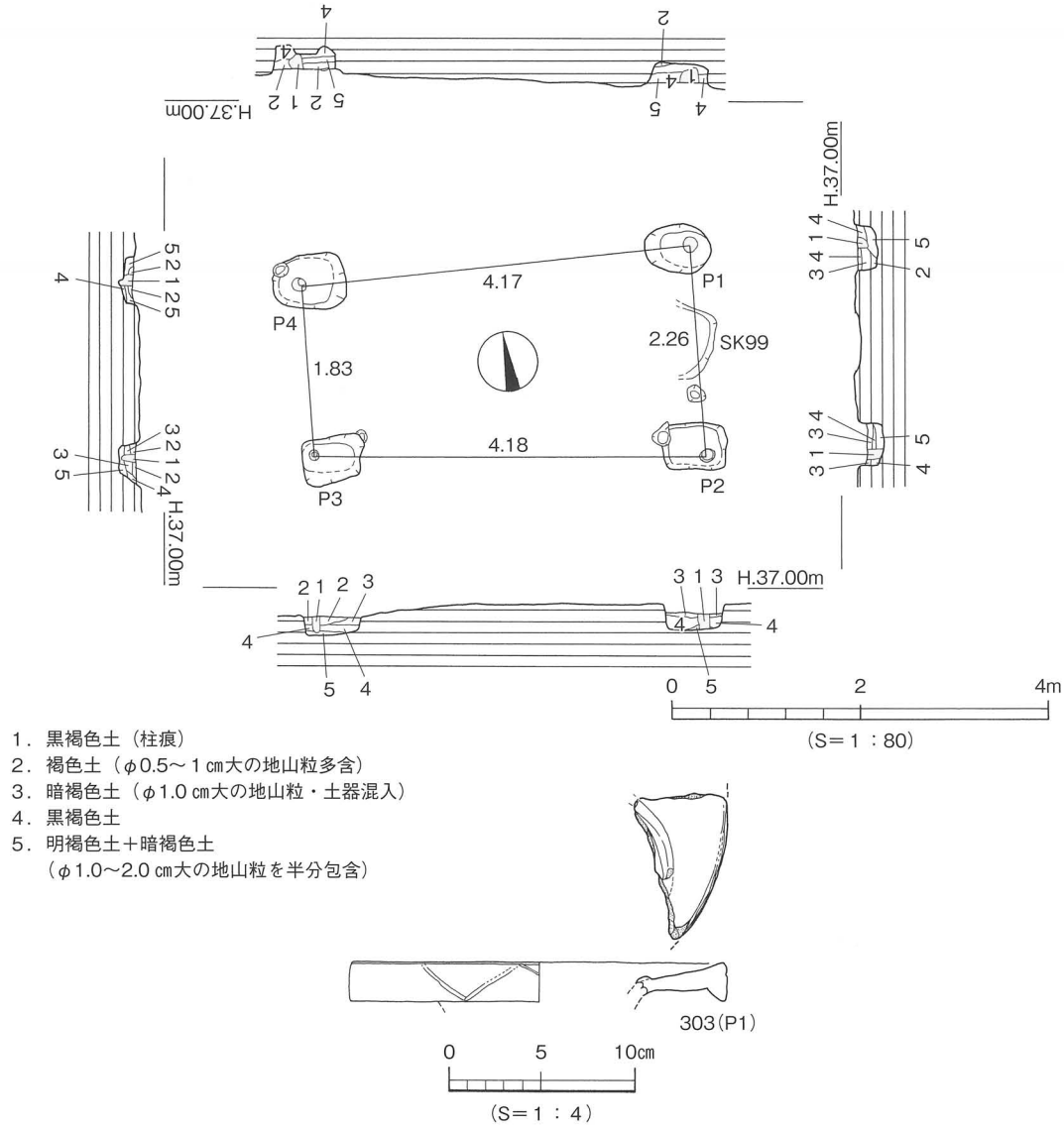
掘立柱建物８（第79図）

Ｊ・Ｋ・Ｌ～４・５区に位置する掘立柱建物址である。東西棟で、建物方位はＮ-10°-Ｅとなる。規模は桁行１間（4.18m）、梁行１間（1.83m）、床面積は7.65㎡である。

柱穴の平面形態は方形と楕円形で、規模は長軸0.7m、短軸0.5m、深さ0.2mを測る。掘り方の断面形態は筒状である。柱穴には、柱の痕跡が残っており、直径は0.1mである。掘り方埋土は、黒褐色土、地山の明褐色土、暗褐色土、褐色土が交互にあり、掘り方内を埋める工程とその単位を確認することができた。礎石・根石・栗石・礎板は検出されていない。

出土遺物は、各柱穴からは土器の小片が出土し、実測可能な遺物は１点であった。303はＰ１から出土した壺形土器の口縁部で、弥生時代中期中葉頃になる。

時期：出土遺物より、掘立柱建物８の上限は弥生時代中期中葉になるが、掘立柱建物８を切っている遺構がない為、下限については判断できない。



第79図　掘立８測量図・出土遺物実測図

（３）土坑出土遺物（第80図）

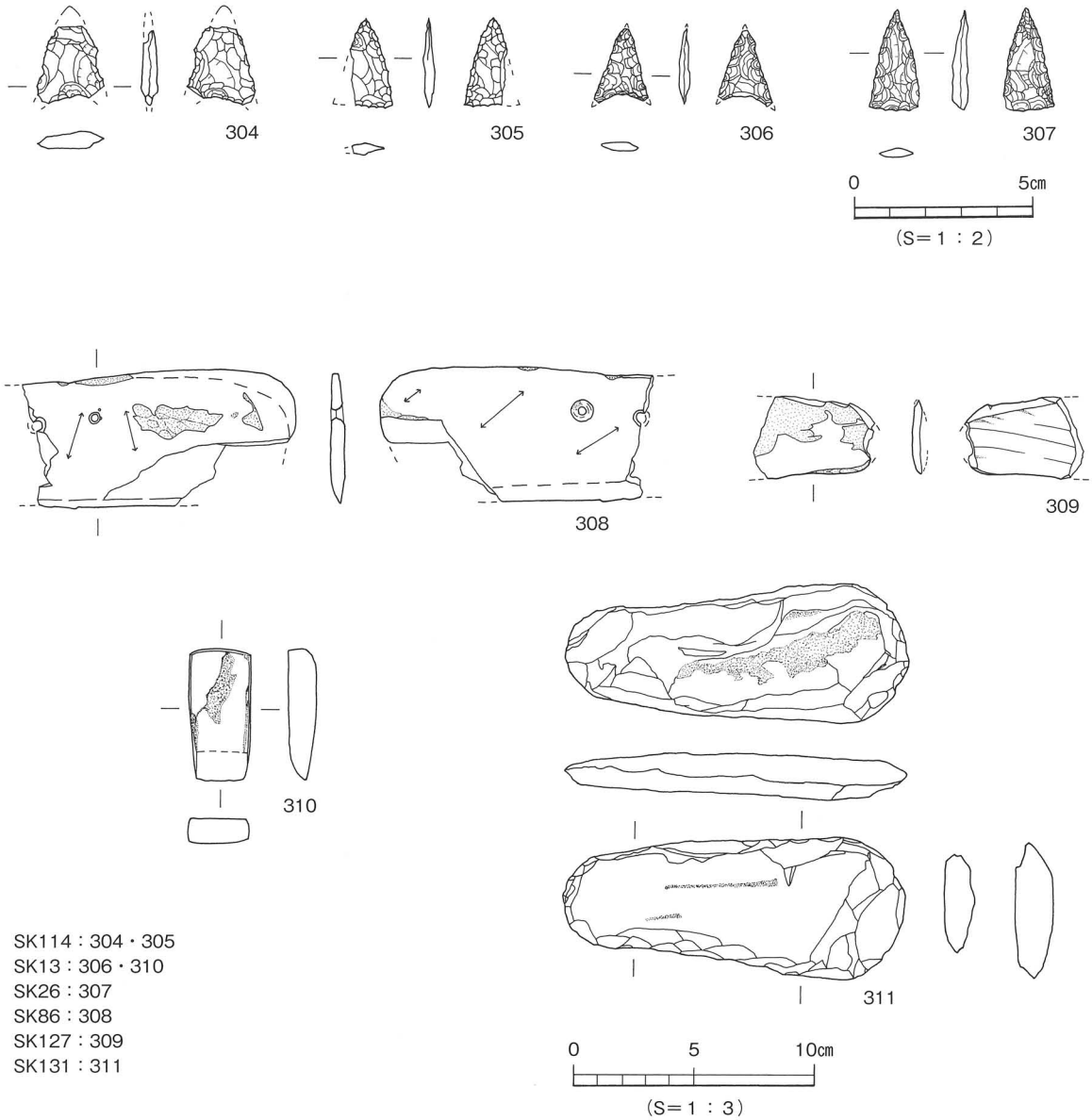
時期不明な土坑のうち、遺物の出土した土坑は22基ある。

304・305は打製石鏃で、ＳＫ114出土品。306・310はＳＫ13出土品。306は打製石鏃、310は扁平片刃石斧である。307は打製石鏃で、ＳＫ26出土品。308は石庖丁で、ＳＫ86出土品。309は石庖丁で、ＳＫ127出土品。311は石庖丁の素材で、ＳＫ131出土品。

（４）柱穴・小穴出土遺物（第81～83図、図版14・15）

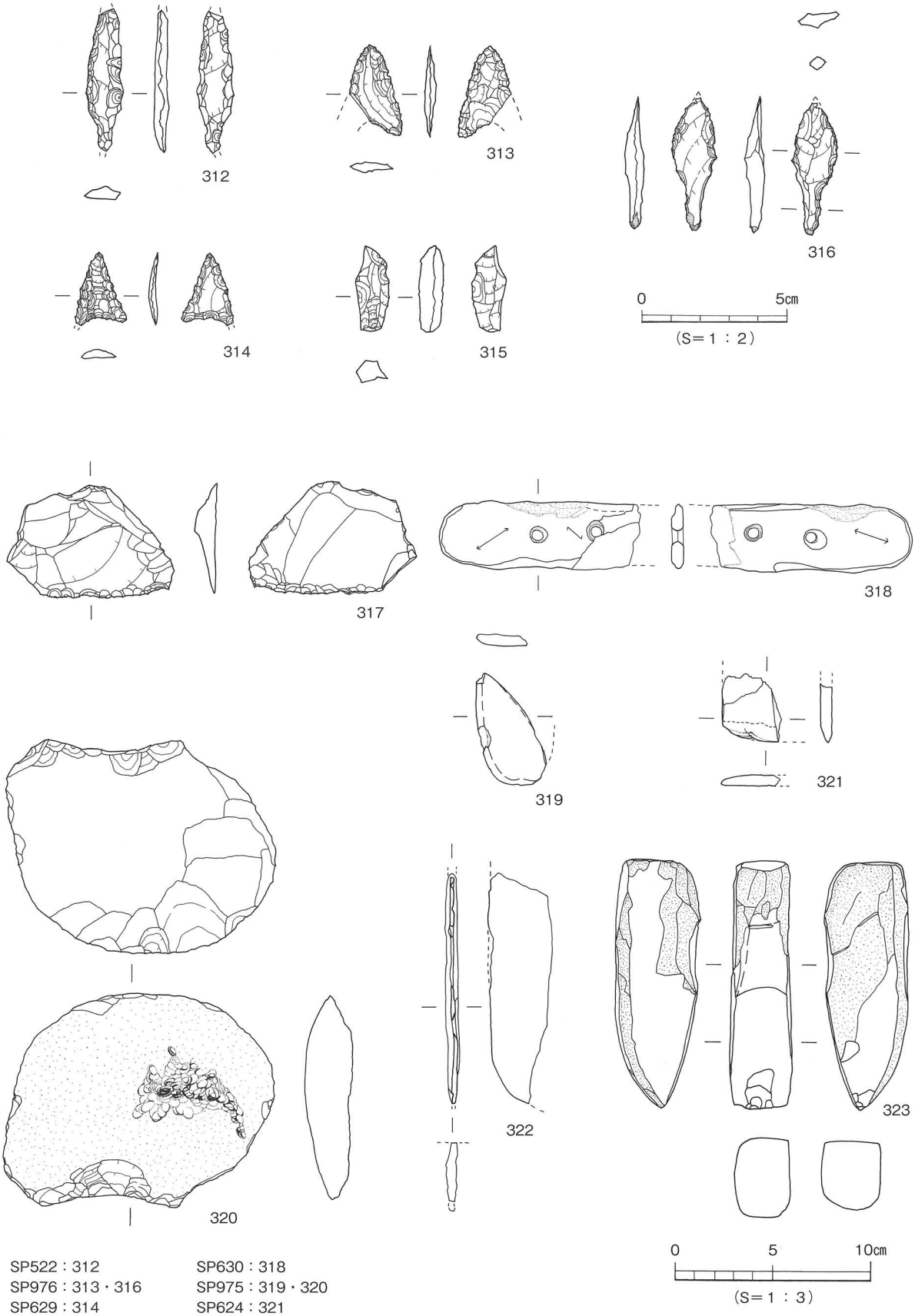
時期を特定できない柱穴・小穴のうち、遺物の出土した遺構は22基ある。

312は打製石鏃で、ＳＰ522出土品である。313は打製石鏃で、ＳＰ976出土品。314は打製石鏃で、ＳＰ629出土品。315は石鏃の未製品で、ＳＰ271出土品。316は石錐もしくはスクレイパーで、ＳＰ976出土品。



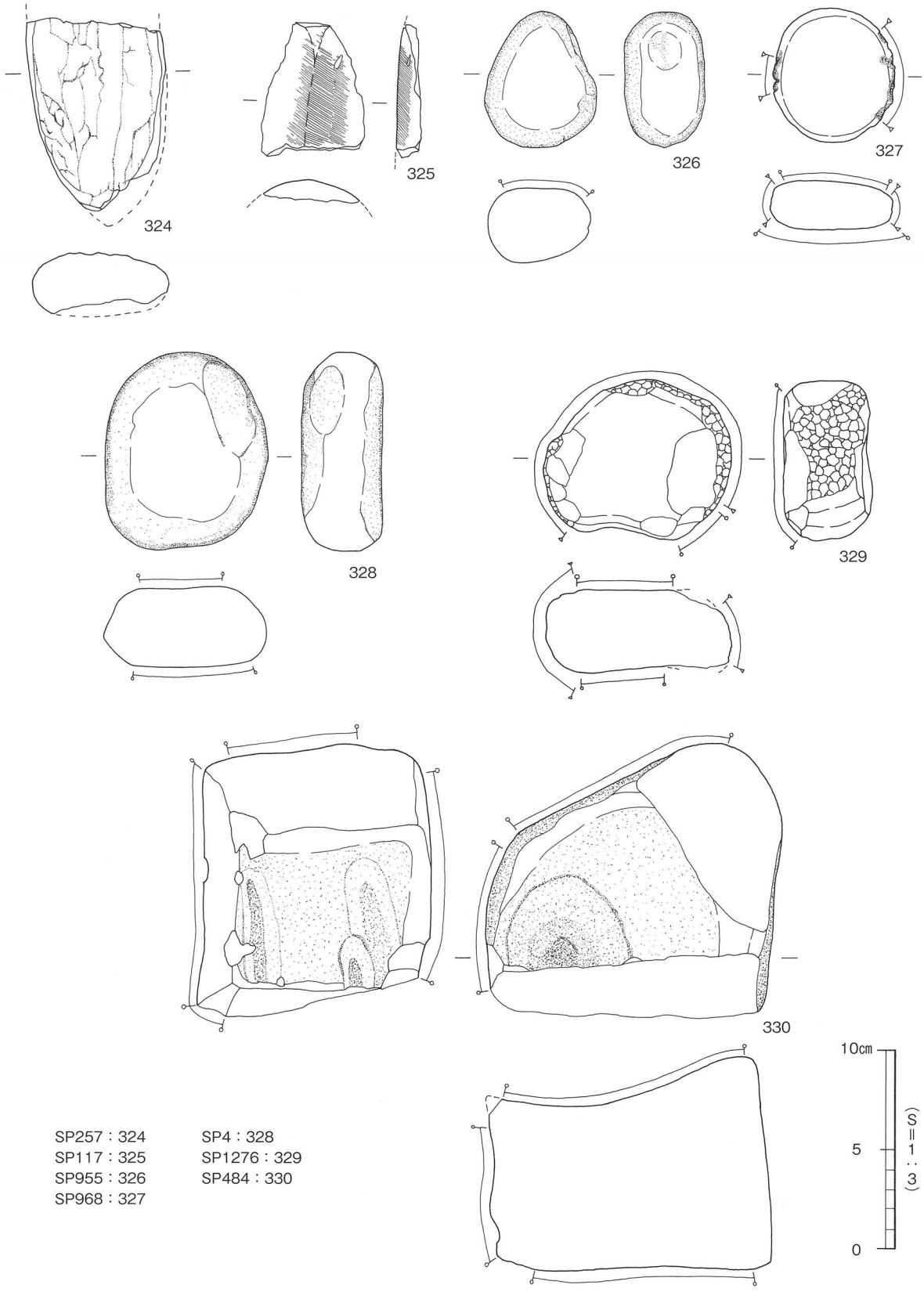
第80図　ＳＫ出土遺物実測図

317はスクレイパーで、ＳＰ269出土品。318は石庖丁で、ＳＰ630出土品。319・320はＳＰ975出土品。319は扁平片刃石斧、320は粗製剝片石器である。321は扁平片刃石斧で、ＳＰ624出土品。322は伐採斧（柱状片刃石斧）で、ＳＰ15出土品。324は伐採斧（太型蛤刃石斧）で、ＳＰ257出土品。325は伐採斧（太型蛤刃石斧）でＳＰ117出土品。326は磨石で、ＳＰ955出土品。327は磨石・擦石で、ＳＰ968出土品。328は磨石で、ＳＰ４出土品。329は擦石で、ＳＰ1276出土品。331は砥石で、ＳＰ494出土品。332は掘立柱建物の根石に転用された結晶片岩の不明石製品で穿孔が２つある、掘立９（Ｐ１）出土品。333は不明石製品で、ＳＰ123出土品。



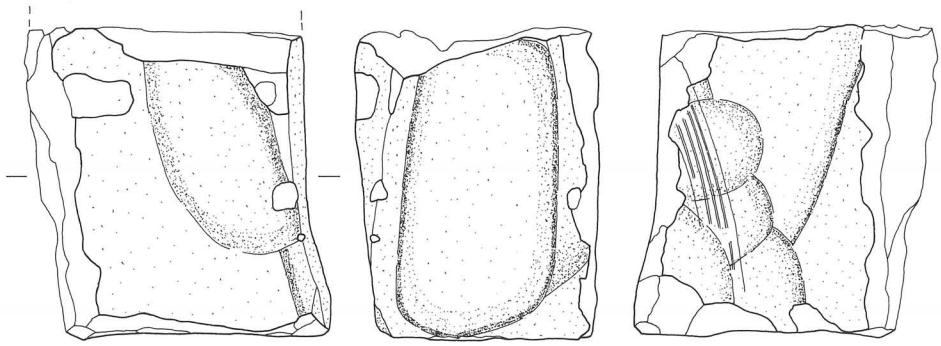
SP522：312
SP976：313・316
SP629：314
SP271：315
SP269：317
SP630：318
SP975：319・320
SP624：321
SP15：322
掘立1（P16）：323

第81図　ＳＰ出土遺物実測図(1)

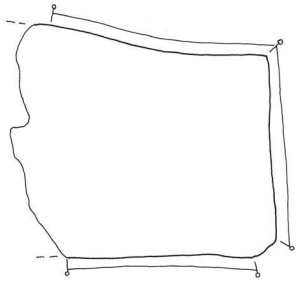


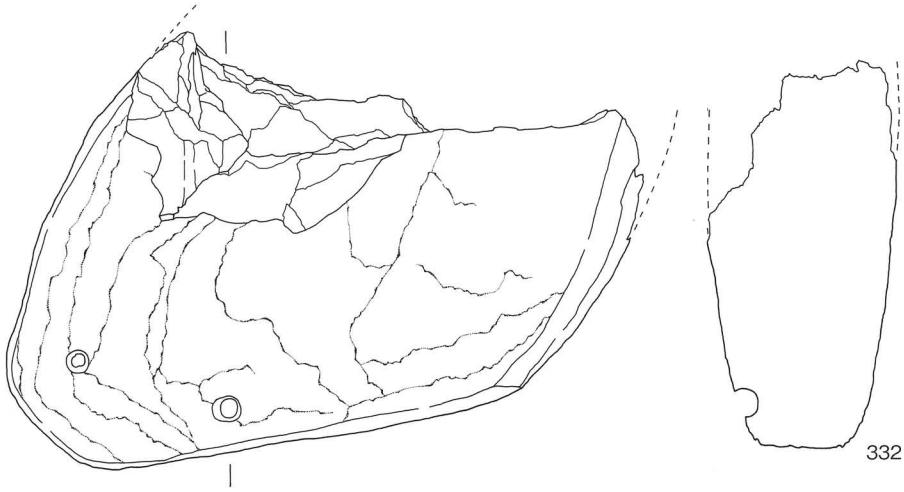
SP257：324
SP117：325
SP955：326
SP968：327
SP4：328
SP1276：329
SP484：330

第82図　ＳＰ出土遺物実測図(2)

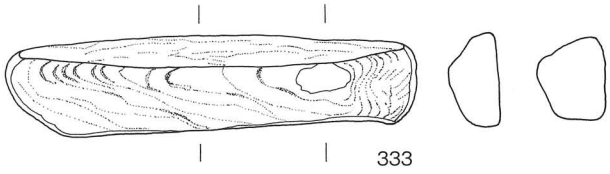


331

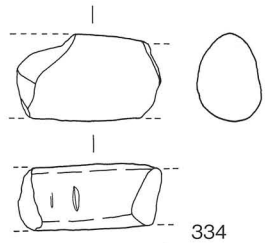




332



333



334

0　5　10cm

（S＝1：3）

SP494：331
掘立9（P1）：332
SP123：333
掘立6（P3）：334

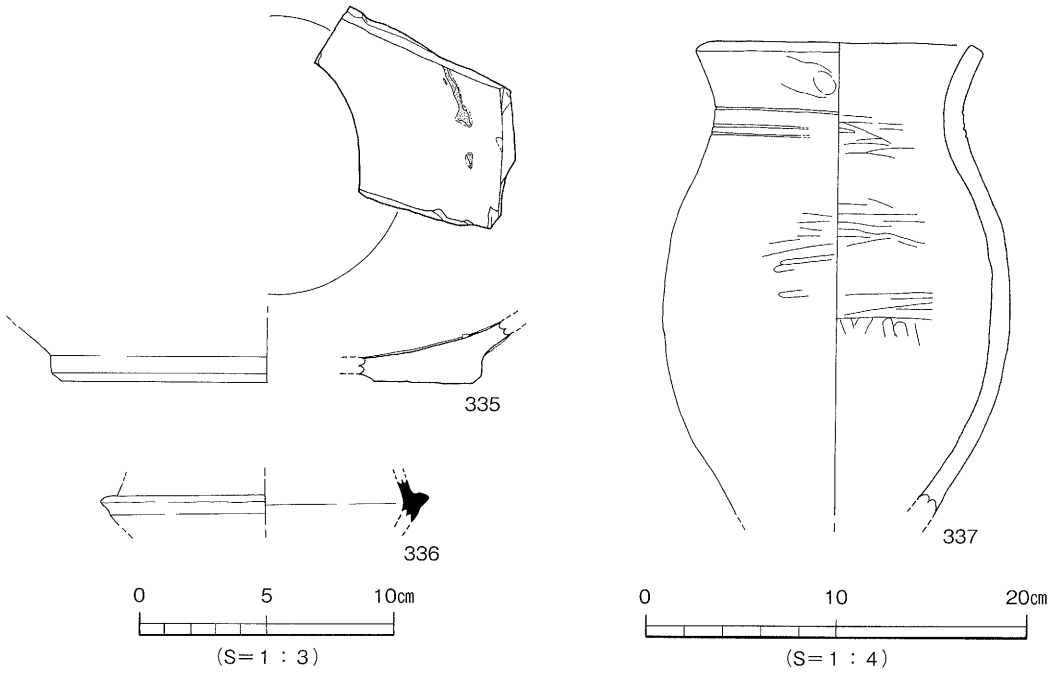
第83図　ＳＰ出土遺物実測図(3)

6．表採遺物（第84・85図、図版15）

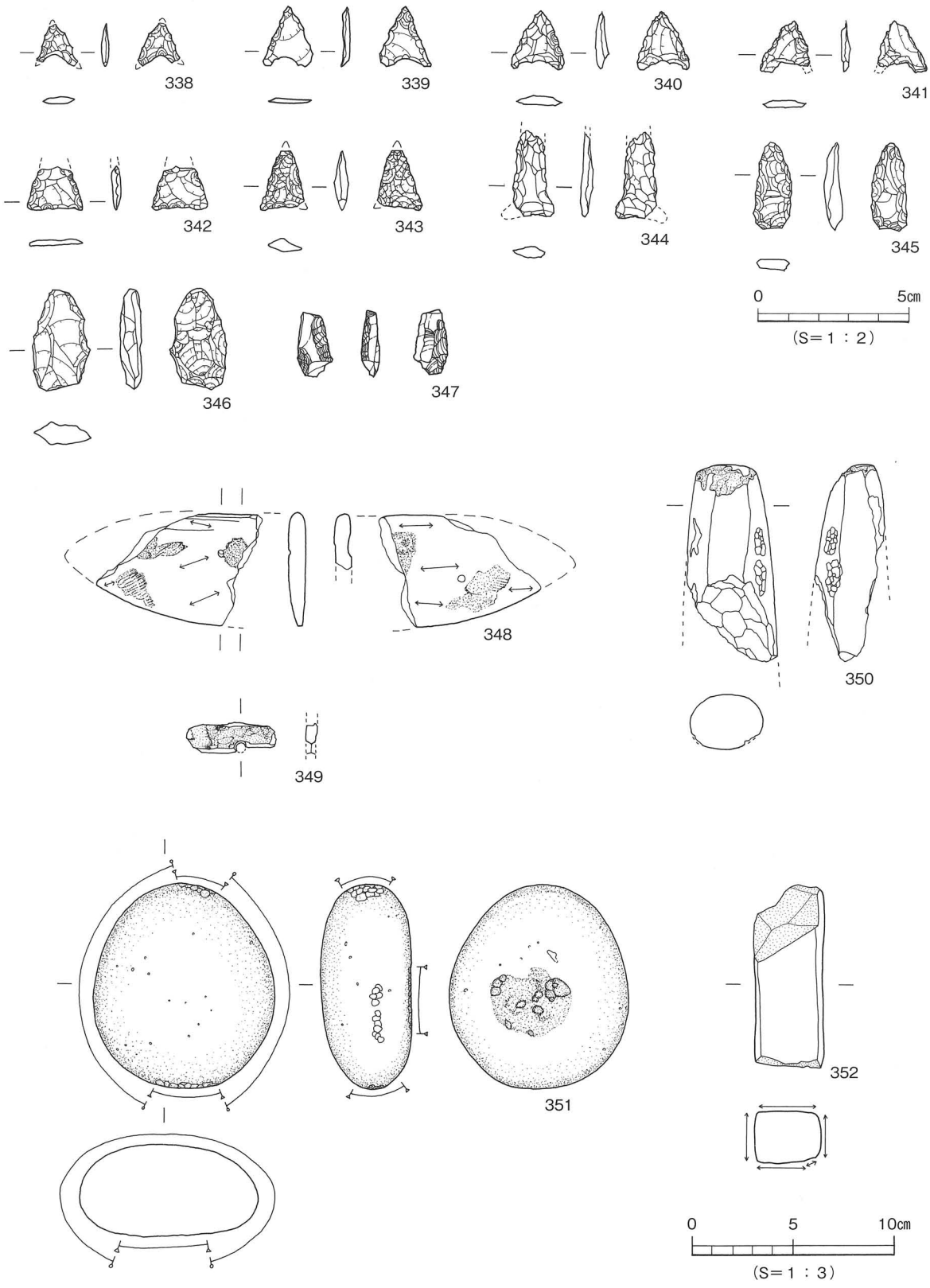
335～337は土器、338～352は石器である。

335は陶磁器の皿の底部である。内外面には施釉がある。336は須恵器の坏身で、６世紀末～７世紀前半。337は弥生土器の壺形土器で、弥生時代前期末～中期初頭。

338～346は打製石鏃、347は黒曜石の使用痕のある剥片。348・349は石庖丁で348は未製品、350は伐採斧（太型蛤刃石斧）、351は擦石・磨石になる。352は砥石。携帯用の手持ち砥石と考えられる。



第84図　表採遺物実測図(1)



第85図　表採遺物実測図(2)

第4章　小　　結

久米高畑遺跡26次調査地では、弥生時代の集落遺構と、古代の官衙関連遺構の確認を主目的として調査を開始した。その結果、調査では縄文時代の墓、弥生時代前期末～中期初頭の土坑群と溝、中期中葉の土坑群と溝、中期後葉の掘立柱建物址、土坑群と溝、古墳時代の竪穴式住居址、古墳時代～古代の掘立柱建物群、中世の祭祀遺構を検出した。

また、古代の官衙関連遺構については、その可能性のある掘立柱建物址を確認するにいたった。

縄文時代　晩期前半の遺構が１基（ＳＫ21）ある。ＳＫ21からは、大型と小型の深鉢、浅鉢、台石が出土し、出土状況からは人為的に土器を置いていたことを確認した。したがって、遺構の性格は墓の可能性が高く、深鉢内に遺体を埋納していたと考えられる。ただし、伴出した土器の性格は明らかにすることができなかった。また、当該期の一括資料の出土は、松山平野では類例が少ないため、貴重な資料を得ることになった。

ところで、来住台地上の遺跡からは、近年、同時期とされる遺構が見つかっている。本調査地の15ｍ南にある久米高畑遺跡35次調査地では、ＳＫ21と同規模の円形土坑１基が、南方130ｍの久米高畑遺跡36次調査地では直径3.6ｍの円形竪穴式住居址が１基検出されている。さらには、晩期後半の長方形土坑１基が26次調査地から東130ｍで確認されている。このように、本調査地周辺では130ｍ四方の範囲で縄文時代晩期の遺構が検出されており、当平野でも数少ない縄文時代晩期の遺跡地帯になってきている。したがって、今後の調査でも、遺構や遺物が検出される可能性は高い。

弥生時代　土坑90基、掘立柱建物址１棟、溝７条、柱穴14基を検出した。

土坑は、平面形態で２種類に分類でき、長方形は45基、円形は45基ある。そのうち、弥生時代前期末から中期初頭の時期に比定できる土坑には、長方形37基、円形40基の計77基がある。これらは数基ごとに重複し、比較的短い期間で、幾度もの作り直しがなされている。土坑からの遺物は少なく、かつ小片である場合が多い。ただし、下記にあげる遺構からは、多くの遺物が出土している。円形土坑のＳＫ31・89・98・103・110・138は、断面形態が筒状や袋状となり、貯蔵穴の形態をもつ。遺物の出土状況から、廃棄したと考えられた。一方、ＳＫ17・40・137では、土坑内に遺物を置いた様子がうかがえた。長方形土坑は、遺物の出土は少ないが、ＳＫ24・29・106では、遺物が据え置かれたままの状態で出土している。

今回、弥生時代前期末～中期初頭の住居址と掘立柱建物址は全く検出されなかったが、土坑が数多く確認されており、同時期の住居址が周辺に存在していると思われる。

中期前葉になると５基の土坑（長方形３基、円形２基）、中期中葉には４基の土坑（長方形２基、円形２基）、中期中葉～後葉では３基の土坑（長方形）、中期後葉～後期では３基の土坑（長方形３基、円形１基）が構築されている。土坑の数は、中期前葉以降激減する。その一方で、規模は前期末～中期初頭の土坑（長方形）に比べると２～４倍の大きさを持つ土坑（ＳＫ122）も出現してくる。

掘立柱建物７は、弥生時代中期後半を上限とする。当平野の弥生時代中期後半の掘立柱建物址は、

床面積が20㎡代の建物がみられる。掘立柱建物７は一般的な面積を持つ建物といってよい。

また、調査地南側の久米高畑遺跡35次調査地では、中期後半の円形竪穴式住居址が２棟確認されており、竪穴式住居址２～３棟と掘立柱建物址１棟が集落の１単位を構成する可能性をもつ。

古墳時代～古代　竪穴式住居址１棟と掘立柱建物址４棟、溝３条、土坑６基、柱穴３基を検出した。

掘立柱建物２は総柱建物で、掘立柱建物４・５・６は側柱建物となり、両者は床面積が30㎡前後の同規模建物になる。詳細な時期は出土遺物だけでは特定できなかったが、掘立柱建物２の上限は６世紀末～７世紀前半、下限は掘立柱建物４の構築までになる。掘立柱建物４は上限を６世紀末以降（掘立２・５の廃棄後）、掘立柱建物５は掘立柱建物４よりも古く、掘立柱建物６は上限を６世紀初頭以降にする。したがって、これらの掘立柱建物址は古墳時代～古代の遺構になると考えている。

掘立柱建物２付近では、時期が特定できない掘立柱建物址３棟を検出している。すべて東西棟の掘立柱建物址で、掘立柱建物１は総柱建物、掘立柱建物３・８は側柱建物になる。また、掘立柱建物１・３は掘立２・４・５・６と同規模の建物になる。

建物は方位で、３つのグループに分けられ、①ほぼ真北のもの（掘立２・４）、②北から東に６°振るもの（掘立３）、③北から東に９°振るもの（掘立５・６）になる。また、グループ内での遺構の切り合い関係が存在する（掘立２と掘立４）。

建物は方位や規模等で分類できるが、調査地の北・東・西側の調査が行われていない現段階では、遺構配置からの時期推定と性格づけは保留しておく。

さて、本調査地は、７世紀代の道路と推定される場所から北に位置する。久米高畑遺跡32次調査地で検出された『正倉院』以前の掘立柱建物址は道路の北側に位置し、ほぼ真北の総柱建物址であった。掘立柱建物２は方位と規模がこれらの遺構に類似する。したがって、掘立柱建物２は官衙関連遺構の可能性が高い。本調査地の北及び東側の調査がなされ、遺構の検出が進めば、今回の掘立柱建物もその性格が明確になるだろう。

中世　注目される小穴としてＳＰ1269があげられる。

遺物の出土状況からは、人為的に土器や石を置いていたことが確認でき、祭祀的性格の強い遺構であることが明確になった。

以上、調査結果についてのまとめを行った。今後は既往の調査成果との比較や検討を重ね、来住台地上における縄文時代～中世の歴史的役割と集落構造を解明してゆきたい。

【参考文献】

佐原　真ほか　『紫雲出－香川県三豊郡詫間町紫雲出弥生式遺跡の研究』　1964
小田富士雄　「九州」『弥生土器Ⅰ』ニュー・サイエンス社　1983
金関恕・佐原真編　「弥生土器Ⅰ」『弥生文化の研究３』　1986
金関恕・佐原真編　「道具と技術Ⅰ」『弥生文化の研究５』　1985
中野良一　「愛媛県における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』　1988
平井　勝　『考古学ライブラリー64　弥生時代の石器』ニュー・サイエンス社　1991
出原恵三　「四国の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会　1991
埋蔵文化財研究会　『弥生時代の掘立柱建物－資料（西日本・九州・四国）編－』　1991

梅木謙一　「松山平野の弥生後期土器－編年試案－」『松山大学構内遺跡－第２次調査－』松山大学・松山市教育委員会・松山市立埋蔵文化財センター　1991
栗田正芳・河野史知「久米高畑遺跡21次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報　Ⅳ　平成３年度』㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1992
梅木謙一　「西瀬戸内地方の弥生時代前期土器－松山平野を中心として－」『牟田裕二君追悼論集』牟田裕二君追悼論集刊行会　1994
梅木謙一・武正良造・加島次郎　「斉院烏山遺跡」『斉院の遺跡』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1994
橋本雄一　「倒木痕跡について」『北久米浄蓮寺遺跡～３次調査地～』　松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1994
梅木謙一　「西瀬戸内地方における弥生中期の土器様相」『古文化談叢　第34集』九州古文化研究会　1995
宮本長二郎　『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版　1996
橋本雄一　「久米高畑遺跡24次～25次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報　Ⅷ　平成７年度』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1996
橋本雄一　「久米高畑遺跡26次～32次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報　Ⅸ　平成８年度』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1997
橋本雄一　「久米官衙遺跡群～平成８年度調査の成果～」『松山市埋蔵文化財調査年報　Ⅸ　平成８年度』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1997
橋本雄一　「久米高畑遺跡33次～40次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報　Ⅹ　平成９年度』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1998
山田康弘　「交流と墓制（後晩期を中心に）」『第９回　中四国縄文研究会　本州西部地域における文化交流の諸問題』　1998
橋本雄一　「久米高畑33・35～36次遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報　Ⅹ　平成８年度』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1998
河野史知　「久米高畑35次遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報　Ⅹ　平成８年度』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1998
中村健二　「墓と墓地構造　西日本」『季刊考古学　第69号　特集 縄文時代の東西南北』　1999
加島次郎　『乃万の裏遺跡　２次調査地』松山市教育委員会・㈶松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1999

表1　縄文時代の出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
1	深鉢	底径 5.4 残高 45.9	胴部は、直線的に立ち上がり、口縁部との接合部で「く」の字に曲がる。口縁部は、強く外反する。	㊋工具痕(板ナデ) (一部ナデ) ㊎ナデ	ナデ	黄橙色 灰白色	石・長（1～3） 金 ◎	煤付着 SK21	9
2	深鉢	口径 (24.7) 残高 20.3	波状の口縁部。口縁端に浮文が付く。胴部は丸みをおびながら立ち上がり、口縁部は強く外反する。	工具痕（板ナデ）	㊐工具痕 (板ナデ) ㊋ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長（1～3） 金 ◎	SK21	9
3	浅鉢	残高 7.4	外面に筋状に赤色顔料が塗布される。胴部は直線的に立ち上がる。口縁部は破損している。	ミガキ	ミガキ（ナデ）	明褐灰色 黒褐色	石・長（1～2） ◎	赤色顔料 SK21	9
6	焼土塊	残高 3.2	焼土の塊。	－	－	橙 （5YR6/6）	石・長（1～2） △	SK21	

表2　縄文時代の出土遺物観察表　石製品

番号	器種	石材	形状	法量 長さ(cm)	法量 幅（cm）	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
4	台石	不明	四側面の内、三側面が欠損。両面と1側面に複数の敲打による凹部と擦痕による平坦面がある。	(20.2)	(24.6)	9.9	7450.0	SK21	9
5	用途不明	不明	両面ともに自然面。若干凸凹がある扁平な礫である。中央部に凹部がある。側面は抉(えぐ)りが入る。	6.1	5.3	1.2	48.0	完存 SK21	9

表3　弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
7	甕	口径 (33.8) 残高 12.3	断面三角形の貼付口縁の甕。口縁端直下にヘラ描き沈線文を10条施す。胴部は、張りを持つ。	マメツ	マメツ・ハクリ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～4） △	SK10	
8	甕	口径 (25.3) 残高 18.0	直口口縁部のやや下位に突帯を貼り付ける。突帯は、垂下気味。胴部は直線的に立ちあがる。無文。	㊐ナデ ㊋上ハケ(7~8本/cm) ㊋下ミガキ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～4） △	煤付着 SK17	
9	甕	口径 (23.0) 残高 4.9	断面三角形の貼付口縁を持つ。口縁端直下にヘラ描き沈線文を9条、下位に刺突文を施す。	㊐ナデ ㊋ハケ（6～7本/cm）	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～4） △	SK22	
10	壺	口径 (26.9) 残高 15.2	口縁部は水平。長頸で外傾する。外面頸部に2条の刻目突帯と13条の沈線文。内面口縁に2条の突帯。口縁には焼成前の円孔が2孔。	㊐マメツ ㊎ハケ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ○	外面に赤色顔料 SK24	10
11	壺	残高 6.0	胴部上半部分。5条以上のヘラ描き沈線文と木葉文を施す。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～4） △	SK24	10
12	甕	底径 (7.4) 残高 6.2	やや上げ底の底部。直線的に立ち上がる胴部。	マメツ（ハケ痕） ㊎マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～5） △	黒斑 SK24	
13	壺	底径 8.0 残高 24.5	器壁が厚い。肩が強く張る胴部。底部は、やや上げ底。	マメツ	マメツ	橙色 灰白色	石・長（1～6） △	黒斑 SK24	10
14	壺	口径 (20.7) 残高 4.4	ゆるやかに外反する口縁部。口縁部外面下半には沈線文が4条以上、内面には貼付突帯が施される。	ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～3） 砂 ○	SK25	
15	甕	残高 5.7	上下不明。3～4条のヘラ描き沈線文を施し、3条1組の工具による山形文を施す。	ナデ	ナデ	にぶい赤橙色 橙色	石・長（1） ◎	SK28	
16	甕	底径 (6.2) 残高 7.8	平底。直線に立ち上がる。	ハケ→ミガキ (タテ→ヨコ) ㊎ナデ	ミガキ（ヨコ） →ナデ	黒褐色 灰黄褐色	石・長（1～5） ◎	SK28	
17	壺	口径 (19.1) 残高 4.3	ゆるやかに外反する口縁部。口縁内面に貼り付け突帯を持つ。突帯には刻目を施す。	マメツ	マメツ ハクリ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～4） 砂・金 △	SK28	
18	壺	底径 (5.5) 残高 2.6	壺の底部。平底。	ハケ（ナナメ→タテ）→ナデ ㊎ナデ	ナデ	明褐灰色 明褐灰色	石・長（1～2） ○	内面に赤色顔料 SK28	
19	土製品	直径 4.4	側面を交互に打ちかいている。転用品。	ハケ→ナデ	ナデ	橙色	石・長（1～2） ○	SK28	

弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
20	甕	底径 6.2 残高 5.8	上げ底でややくびれる底部。	ハケ ㊦ナデ	マメツ （指頭痕）	橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） 金 ◎	黒斑 SK29	
21	甕	底径 7.2 残高 8.1	直線的に立ち上がる。平底。	ミガキ（マメツ） ㊦ナデ	ナデ ㊦マメツ	橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） 金 ◎	黒斑 SK29	
22	壺	底径 12.0 残高 7.7	平底。	ミガキ ㊦ナデ	ナデ （一部ハクリ）	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～4） 砂・金 ◎	SK29	
23	壺	底径 11.3 残高 5.9	平底。	ハクリ・マメツ	ハクリ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～4） 砂 △	SK29	
26	甕	口径 （20.9） 残高 4.1	口縁端部は水平に折り曲げられている。やや内傾ぎみの胴部。	㊐ヨコナデ ㊒ヘラミガキ	ヘラミガキ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長（1～3） ◎	黒斑 SK30	
27	甕	口径 （20.6） 残高 5.6	口縁端に断面三角形の貼り付け口縁を持つ。直下に12条の沈線文と刺突文を巡らす。	㊐ナデ ㊒ナデ	ナデ	灰白色 灰白色	石・長（1～4） 金 △	SK30	
28	甕	口径 （18.1） 残高 2.3	やや内傾する口縁部。口縁端のやや下位に断面三角形の突帯を貼り付ける。突帯上に工具で刻目を施す。	㊐端ヨコナデ ㊐ハケ→ナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） ○	SK30	
29	壺	底径 （6.0） 残高 5.6	平底。	㊒ハケ ㊦ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～5） 赤 ◎	黒斑 SK30	
30	土製品	直径 7.3	壺の転用品。	ナデ	ナデ	橙色	石・長（1～2） 金 ◎	SK30	
31	甕	残高 6.5	断面三角形の貼付口縁を持つ。口縁端直下に10条と5条以上のヘラ描き沈線文とその間に刺突文を施す。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～3） ○	SK31	
32	壺	口径 （18.0） 残高 7.5	筒状の頸部にゆるやかに外反する口縁部を持つ。口縁端に刻目を施す。	マメツ	マメツ	明赤褐色 橙色	石・長（1～3） △	SK31	
33	壺	残高 5.0	胴部上半分。5～6条以上の沈線文とその間に2条1組の山形文を施す。	ミガキ→ナデ	ナデ	褐灰色 橙色	石・長（1～2） 金 ○	SK31	
34	壺	残高 8.8	壺の底部。立ち上がりは直線的。	ナデ	ナデ	橙色 灰黄褐色	石・長（1～5） 砂 △	2次焼成 SK31	
35	甑	底径 6.6 残高 7.1	壺の底部の転用品。焼成後穿孔。底部は、上げ底。	マメツ	マメツ	橙色 浅黄橙色	石・長（1～4） ○	煤付着 SK31	
42	甕	口径 （24.0） 残高 4.8	口縁端にやや方形の貼り付け突帯を施す。	㊐ヨコナデ ㊒ハケ→ナデ	ナデ	にぶい褐色 にぶい黄橙色	石・長（1～2） ◎	SK32	
43	壺	残高 5.9	胴部片。貼り付け突帯に指頭押圧と刺突文を施す。突帯上下にヘラ描き沈線文を施す。	ナデ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～3） ○	SK32	
44	甕	底径 6.2 残高 6.1	甕の底部。平底。直線的に立ち上がる。	マメツ	マメツ	橙色 橙褐色	石・長（1～5） △	SK32	
45	壺	口径 （19.2） 残高 4.8	頸部は強く外傾する。口縁部は強く折り曲げられ、水平を呈す。	マメツ	ナデ	灰黄褐色 暗灰黄褐色	石・長（1～5） 金 △	SK35	
47	甕	残高 2.1	上下不明の胴部片。4条以上の沈線文と刺突文を施す。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～2） △	SK40	
48	甕	残高 4.6	甕の底部。	マメツ	ナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長（1～3） △	SK40	
49	土製品	直径 4.1 厚さ 1.0	土器片を転用した品。平面形は円形で断面は長方形に仕上げられている。円孔は穿孔されていない。	ナデ	－	黒色	石・長（1～3） ○	SK40	11
50	土製品	直径 3.4 厚さ 0.8	土器片を転用した品。平面形は円形。断面はやや丸みを帯びている。側面も丸い。無穿孔。	ナデ	－	黒色	石・長（1～3） ○	SK40	11

弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表　土製品

(3)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
67	甕	口径 (22.9) 残高 4.5	断面三角形の貼付口縁を持つ。口唇部には刻目を施す。口縁直下に6条の沈線文を施す。	㊐マメツ ㊓マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～4） 金 △	SK50	
68	壺	残高 10.3	長頸で口頸部が上外方に開く。頸部下位に突帯を2条巡らす。口縁部内面に貼り付け突帯を持つ。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 灰色	石・長（1～5） 金 △	SK50	
72	壺	口径 9.8 器高 21.1 底径 6.2	器壁が厚い。やや外傾する頸部を持つ。胴部中位が張り、平底。	㊐ナデ マメツ	マメツ （指頭痕）	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～3） 金 ○	SK53	12
73	甕	底径 (5.5) 残高 3.0	やや上げ底。	ナデ	マメツ	赤褐色 灰褐色	石・長（1～3） ○	SK60	
75	壺	口径 (13.7) 残高 4.0	筒状の頸部に外反する口縁部を持つ。	㊐ヨコナデ ㊒ハケ （6本／cm）	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） 砂 ◎	SK87	
77	甕	底径 7.6 残高 18.7	平底。	ハケ（6本／cm） ㊎ナデ	ナデ（工具痕）	橙色 橙色	石・長（1～3） ○	SK89	
78	壺	口径 (16.4) 残高 10.0	短い頸部を持つ。口縁部は、ゆるやかに外反する。胴部上半が張るものと考える。	㊐・㊒ナデ （指頭痕） ㊓ミガキ→ナデ	マメツ（指頭痕）	橙色 橙色	石・長（1～4） 砂・赤 ○	79と同一か SK89	
79	壺	底径 10.7 残高 10.4	器壁の厚い平底。	マメツ ㊍ハケ→ナデ(6～12本/cm) ㊎ナデ	マメツ	明褐色 明褐色	石・長（1～4） 砂 ○	78と同一か SK89	
80	鉢	口径 (12.9) 残高 8.5	胴部中位が張り、口縁はやや内湾する。口縁端直下に把手状の貼り付けを持つ。焼成前穿孔の2つの円孔あり。	ミガキ	㊐ヨコナデ ナデ	灰黄褐色 にぶい褐色	石・長（1～3） 赤 ◎	SK89	
82	甕	残高 7.2	折り曲げによる口縁部を持つ。9条の沈線文の直下に刺突文を巡らす。	ハケ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～5） 砂 △	SK137	
83	甕	残高 4.3	方形の貼り付け突帯を持ち、突帯上に刺突を施す。7条の沈線文の直下に2列の刺突文を巡らす。	㊐端ナデ 施文	マメツ	灰褐色 灰褐色・橙色	石・長（1～4） ○	SK137	
84	甕	底径 (4.6) 残高 4.4	上げ底。直線的に立ち上がる。	ナデ	ナデ	赤橙色 赤橙色	石・長（1～9） △	黒斑 SK137	
85	甕	底径 (6.7) 残高 4.0	平底。直線的に立ち上がる。	ハケ （8～9本／cm） ㊎ナデ	ナデ	橙色 灰褐色	石・長（1～3） 砂・金 ○	SK137	
86	壺	底径 (7.0) 残高 5.1	壺の底部。平底。 直線的に立ち上がる。	ナデ→ミガキ ㊎ナデ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～5） 赤 ○	SK137	
87	鉢	底径 4.7 残高 4.5	鉢の底部。上げ底。 直線的に立ち上がる。	ナデ上げ ㊍ヨコナデ ㊎ナデ	ナデ（指頭痕）	黒色・橙色 黒色	石・長（1～3） ◎	内面に赤色顔料 SK137	
88	蓋	天井径 16.8 残高 7.0	大きく凹む。天井部は長く、器壁は厚い。ゆるやかに開く体部を持つ。	ハクリ	ナデ（指頭痕）	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～5） 金 ○	SK137	
89	台付鉢	底径 8.5 残高 7.6	やや内湾する高脚。器壁が厚い。	ミガキ	㊎底ミガキ ㊋強い指ナデ （指頭痕）	灰褐色 暗褐色	石・長（1～5） 金・赤 ○	黒斑 SK137	
90	甕	残高 4.4	折り曲げによる口縁部。口縁部直下に7条以上の沈線文を施す。	ナデ	ナデ（指頭痕）	橙色 橙色	石・長（1～2） ○	SK90	
91	壺	残高 4.9	平底。直線的に立ち上がる。	ミガキ ㊎ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ◎	SK90	
93	甕	口径 (20.8) 残高 5.6	断面三角形の貼付口縁を持つ。口唇部には刻目を施す。	㊐ヨコナデ ㊓ハケ	ナデ	黒褐色 にぶい黄橙色	石・長（1～3） 砂・金 ◎	SK93	
94	壺	口径 (15.0) 残高 5.7	口頸部はゆるやかに外反する。	㊐ナデ ㊒ハケ→ナデ ㊓ヨコミガキ	㊐・㊒ミガキ ㊓ナデ	橙色 橙色	石・長（1～3） 砂・金 ◎	SK93	
95	壺	口径 (18.8) 残高 5.9	口頸部はゆるやかに外反する。	マメツ	マメツ	淡赤橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～3） 砂・赤 △	SK93	

弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表　土製品

(4)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
96	甕	口径 (24.8) 残高 6.9	折り曲げによる口縁部を持つ。口縁直下に16条以上のヘラ描き沈線文を施す。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～4） △	SK98	
97	甕	残高 5.7	胴部片。上下不明。上下に1列の刺突文が巡り、間に7条のヘラ描き沈線文を施す。	ハケ	ナデ	灰白色 にぶい橙色	石・長（1～4） △	SK98	
98	壺	口径 (18.2) 残高 4.1	ゆるやかに外反する口縁部。	マメツ	マメツ	黄橙色 黄橙色	石・長（1～2） △	SK98	
99	壺	口径 19.6 残高 8.8	長頸で上方に外反する口縁部。頸部内面に刻目を持つ貼り付け突帯あり。外面は8条のヘラ描き沈線文と刺突文が巡る。	マメツ	マメツ（ハケ） 頸下ナデ	橙色 橙色	石・長（1～4） 金 △	SK98	
100	壺	底径 9.8 残高 9.6	やや上げ底。直線的に立ち上がる。	ハケ 底ナデ	ミガキ 底ナデ	にぶい黄橙色 にぶい赤褐色	石・長（1～4） 金 ◎	SK98	
101	甕	口径 (32.0) 残高 9.8	折り曲げによる口縁部。口縁直下に5条1組のヘラ描き沈線文とその間に刺突文を巡す。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～5） 赤 ◎	102と同一か SK103	
102	甕	底径 9.0 残高 14.8	器壁が厚い。平底。やや内湾しながら立ち上がる。	胴ハケ 底ナデ	ミガキ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～3） ○	101と同一か SK103	
103	甕	口径 40.0 残高 12.0	断面が方形の貼り付け口縁を持つ。貼り付け突帯上に工具による刻目。胴部は内傾する。	口ナデ 胴ハケ	口マメツ 胴ミガキ	橙色 橙色	石・長（1～3） ○	104と同一か SK103	
104	甕	底径 (10.0) 残高 13.8	わずかに上げ底。	胴中ハケ→ナデ 胴下ハケ 底ナデ	胴上ナデ 胴下ナデ(ミガキ?) （指頭痕）	橙色 橙色	石・長（1～3） 金 ○	103と同一か SK103	12
105	甕	口径 32.5 残高 27.0	断面三角形の貼り付け突帯を持つ口縁。突帯上に工具による刻目あり。直口口縁を呈する。	口ナデ 胴ハケ→ナデアゲ	口ハケ（指頭痕） 胴ナデ	淡赤褐色 橙色	石・長（1～4） 砂 ○	106と同一か SK106	12
106	甕	底径 (6.2) 残高 4.5	器壁が厚い。上げ底。	マメツ 底ナデ	マメツ	橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） 金 ○	105と同一か SK106	
107	甕	口径 (24.1) 残高 6.0	断面三角形の貼り付けの口縁を持つ。直口口縁を呈する。器壁が薄い。やや上げ底。	マメツ（一部ハクリ）	マメツ	黄橙色 橙色	石・長（1～5） △	黒斑 SK110	
108	甕	残高 8.0	胴部。口縁直下に4条のヘラ描き沈線文を施す。肩部にやや張りを持つ。	ナデ	ミガキ	にぶい橙色 灰褐色	石・長（1～3） ◎	SK112	
109	壺	口径 (16.7) 残高 10.3	胴部中位又は下位に最大径が来る。頸部はやや短く、筒状を呈する。口縁部は、強く外反。外面に4条の沈線文。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～3） 砂・赤 △	SK112	
110	壺	残高 7.3	貼り付け突帯に指頭押圧を施す。その後、突帯の上下に3～4条のヘラ描き沈線文を施す。	ミガキ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～2） 砂 ○	SK112	
111	壺	底径 9.7 残高 7.8	やや上げ底。	マメツ （一部ナデ）	ナデ（指頭痕）	灰黄色 灰黄色	石・長（1～2） 砂（4） ○	SK112	
112	ミニチュア	底径 3.9 残高 2.4	くびれのやや上げ底の底部	指押え （指頭痕・ツメ痕） 底ナデ	ナデ	灰褐色 灰褐色	石・長（1～2） 砂 ◎	黒斑 SK112	
114	甕	口径 (36.4) 残高 3.8	折り曲げによる口縁を持つ。口縁下に6条以上の沈線文を施す。	口端マメツ ヨコナデ （指頭痕）	マメツ	浅黄色 浅黄橙色	石・長（1～4） 金 △	SK113	
115	甕	残高 3.7	直口口縁を持つ。口縁部下位に粘土紐を貼付する。粘土紐は垂下する。	ナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） 砂・赤 ◎	SK113	
116	鉢	底径 6.0 残高 3.0	やや上げ底の底部。	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色 淡橙色	石・長（1～4） ◎	黒斑 SK113	
118	甕	口径 (32.4) 残高 13.3	断面三角形の貼り付けの口縁を持つ。無文。	口ヨコナデ 胴ミガキ （マメツ）	マメツ （一部ミガキ？）	明赤橙色 赤褐色	石・長（1～4） △	黒斑 SK119	
119	壺	残高 2.2	ゆるやかに外反する口縁部。口唇部には1条の沈線と刻目を施す。口縁内面に1条の突帯を巡らす。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～3） △	SK119	

弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表　土製品

(5)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
120	鉢	口径 (24.4) 残高 4.1	胴部は、外傾し、口縁はゆるやかに外反する。	㊐ヨコナデ ナデ	ミガキ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～5） ◎	SK119	
121	鉢	底径 7.0 残高 3.7	底部。くびれて上げ底。	ナデ	ナデ（指頭痕）	黄橙色 にぶい橙色	石・長（1～4） 金 ◎	黒斑 SK119	
125	壺	底径 (7.3) 残高 5.0	壺の底部。平底。	ハケ ㊒ヨコナデ ㊎マメツ	マメツ	淡赤橙色 浅黄橙色	石・長（1～3） 砂・金 △	SK126	
127	甕	口径 (21.4) 残高 8.8	断面三角形の貼り付け口縁を持つ。口縁直下に10条のヘラ描き沈線文と刺突文を施す。肩部に張りを持つ。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長（1～4） 砂・赤 ○	SK130	
129	甕	口径 (20.4) 残高 9.5	折り曲げによる口縁を持つ。口唇部には指頭押圧による刻目。口縁直下に12条のヘラ描き沈線文。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） △	SK135	
130	壺	底径 (7.5) 残高 9.2	壺の底部。直線的に立ち上がる。平底か？	ナデ ㊒ヨコナデ ㊎ナデ	ナデ	灰褐色 にぶい褐色	石・長（1～2） 砂（4） ◎	SK135	
131	甕	口径 39.4 器高 44.7 底径 9.8	折り曲げによる口縁を持つ。口縁下に6条のヘラ描き沈線文を施す。底部は平底。	㊐ナデ ㊒ハケ ㊎ナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） ○	黒斑 SK138	13
132	甕	口径 15.4 器高 16.6 底径 6.4	断面三角形の貼り付け口縁を持つ。肩部に張りを持つ。口唇部に刻目。外面に4条と3条のヘラ描き沈線文と間に2条1組の山形文を施す。	㊐ヨコナデ ㊒中ナデ→ミガキ ㊒下ハクリ・ナデ	㊐ナデ ㊒上ミガキ ㊒下・㊎ナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長（1～3） 金 ◎	黒斑 SK138	13
133	甕	残高 6.0	折り曲げによる口縁を持つ。口縁直下に6条のヘラ描き沈線文を施す。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～3） ○	SK138	
134	甕	口径 (22.5) 残高 5.2	断面三角形の貼り付け口縁を持つ。口縁直下に6条以上の沈線文を持つ。	ナデ（マメツ）	マメツ	淡黄橙色 淡黄橙色	石・長（1～3） △	SK138	
135	甕	残高 27.4	肩部に張りを持つ。口縁直下に12条のヘラ描き沈線文を施す。	㊒上ミガキ ㊒下マメツ	㊒上ミガキ ㊒下マメツ	にぶい赤褐色 明赤褐色	石・長（1～5） 金 ◎	黒斑 赤色顔料？ SK138	13
136	甕	底径 (11.0) 残高 28.0	胴部は外傾し、中位から直線的に立ち上がる。	ナデ （一部マメツ）	ナデ （一部マメツ）	橙色 黄橙色	石・長（1～4） 砂・赤 ◎	黒斑 SK138	
137	壺	口径 21.1 残高 10.7	長頸で口縁部は強く外反する。口縁部内面と頸部外面に2条の貼付突帯を、外面に二枚貝の平行沈線文を突帯の上(9条)下(3条以上)施す。	㊐端施文 ㊐頭ハケ→ナデ	㊐マメツ ㊎ハケ→ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～5） ○	赤色顔料 SK138	13
138	壺	底径 9.0 残高 24.1	やや肩部が張る胴部。底部は、やや上げ底。	㊒ミガキ ㊎ナデ	㊒上ナデ ㊒下・㊎ハケ→ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長（1～4） 金 ◎	黒斑 SK138	14
139	壺	底径 8.0 残高 33.9	短頸で頸部は外反する。胴部は中位で張る。底部はやや上げ底。頸部外面に8条のヘラ描き沈線文。	㊎マメツ ㊒マメツ ㊎ナデ	㊎ナデ ㊒・㊎マメツ （指頭痕）	黄褐色 灰黄褐色	石・長（1～5） 砂・金 △	黒斑 赤色顔料？ SK138	14
140	壺	残高 13.5	やや肩部が張る胴部。肩部に3条のヘラ描き沈線文を施す。	マメツ （一部ミガキ）	マメツ	浅黄橙色 明褐灰色	石・長（1～4） △	黒斑 SK138	
141	甕	底径 (5.2) 残高 3.6	小片、平底か？	マメツ	ナデ	にぶい橙色 灰褐色	石・長（1～3） △	SK138	
142	壺	底径 10.6 残高 5.3	平底。器壁が厚い。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～5） 金 △	SK138	
143	壺	底径 (10.2) 残高 4.2	小片。平底か？器壁が厚い。	ナデ（指頭痕）	ナデ	にぶい赤褐色 灰褐色	石・長（1～4） 砂 ○	SK138	
144	壺	底径 8.4 残高 5.2	平底。	マメツ ㊎ナデ	マメツ	浅黄橙色 灰白色	石・長（1～4） ○	SK138	
145	壺	底径 9.7 残高 3.3	平底。	ナデ	ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長（1～5） ◎	SK138	
146	蓋	天井径 (6.5) 残高 2.1	大きく凹む天井部。強くくびれる。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～2） △	SK138	

弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表　土製品

(6)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
150	甕	口径 (35.8) 残高 12.6	折り曲げによる口縁部。	㊐ヨコナデ ㊒ハケ（8～9本/cm）（工具痕）	㊐ヨコナデ ㊒ミガキ→ヨコナデ	橙色 橙色	石・長（1～2） 砂・金 ○	SK147	
151	甕	口径 (26.8) 残高 2.9	断面が三角形の突帯を口縁端に貼り付ける。口縁下に2条の沈線文。	ナデ	ナデ	にぶい橙色 灰褐色	石・長（1～3） △	SK147	
152	甕	底径 (7.1) 残高 8.5	上げ底。	マメツ （ミガキ？）	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～4） ○	SK147	
153	壺	底径 7.9 残高 7.3	厚手の平底。	ミガキ ㊒下ヨコナデ ㊓ナデ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長（1～3） 砂 ○	黒斑 SK147	
154	鉢	口径 (21.4) 残高 4.6	折り曲げによる口縁部。	㊐ヨコナデ （指頭痕） ㊒ナデ	㊐ヨコナデ ㊒ナデ（指頭痕）	淡灰黄色 淡灰黄色	石・長（1～2） 砂（3）・金 ○	SK147	
155	壺	底径 (8.0) 残高 6.7	平底。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 浅黄橙色	石・長（1～3） △	SK4	
156	甕	残高 2.6	口縁端に断面三角形の突帯を貼り付ける。	㊐ミガキ（ナデ） ㊒マメツ	㊐ヨコナデ ㊒ミガキ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1） ◎	黒斑 SK37	
157	ミニチュア	底径 4.4 残高 3.0	上げ底。	ナデ	ナデ	暗赤灰色 赤黒色	密 ○	SK37	
158	壺	残高 5.4	強く外反する口縁部。頸部に5条以上の沈線文を施す。	ミガキ	㊐ミガキ ㊓ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） 砂 ◎	SK48	
159	甕	残高 2.5	折り曲げる口縁。口縁下に3条以上の沈線文。	マメツ	ナデ	にぶい橙色 橙色	石・長（1～2） ○	SK63	
160	壺	残高 8.1	口縁の内面に断面三角形の突帯を貼り付ける。頸部の外面に6条の沈線文と間に刺突文を施文。	ナデ	㊐ヨコナデ ㊓ナデ	明褐色 明褐色	石・長（1～4） 砂 △	SK65	
161	壺	残高 8.6	胴部最大径上に突帯を巡らし、爪形文を施す。	㊒上ナデ ㊒下ハケ （10本/cm）	ナデ	赤褐色 赤褐色	石・長（1～4） ○	SK65	
162	壺	底径 10.0 残高 4.3	平底。	㊒ナデ （一部ハケ6本/cm） ㊓ナデ	ナデ	にぶい黄褐色 褐灰色	石・長（1～4） ◎	黒斑 SK65	
163	甕	残高 5.2	口縁端に断面三角形の突帯を貼り付ける。口縁下に沈線文あり。	㊐ナデ ㊒マメツ	ナデ	浅黄橙色 褐灰色	石・長（1～4） 金 △	SK70	
164	甕	底径 (7.2) 残高 11.7	平底。	マメツ	ミガキ（ナデ）	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1） △	黒斑 SK70	
165	甕	底径 6.3 残高 7.4	上げ底。	マメツ（一部ナデ） ㊓ナデ （一部マメツ）	ナデ	明赤褐色 灰褐色	石・長（1～5） △	SK70	
166	甕	底径 (7.7) 残高 4.5	平底。	ナデ ヨコナデ	ナデ	にぶい橙色 にぶい黄褐色	石・長（1～3） ◎	SK71	
167	壺	残高 4.7	頸部と胴部の境目に沈線文と刺突文を交互に施文する。	ナデ ハケ （5～6本/cm）	ミガキ ナデ	にぶい橙色 にぶい褐色	石・長（1～2） 金 ◎	SK71	
168	焼土	直径 3.9	焼土の塊。	－	－	橙色	石・長 △	SK71	
169	ミニチュア	底径 3.2 残高 3.0	平底の底部。	ナデ ㊓マメツ	ナデ（一部板状の工具痕あり）	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～2） 金 △	SK77	
170	甕	残高 3.2	強く外反する口縁部。口縁端に刻目と1条の沈線文。内面には断面三角形の突帯を貼り付ける。	ナデ	㊐ミガキ ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～4） ○	SK97	
171	甕	底径 (6.6) 残高 9.6	平底。胴部は直線的に立ち上がる。	㊒ハケ （8～10本/cm） ㊓ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～4） ○	黒斑 SK99	

弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表　土製品

(7)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整		色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
172	壺	残高　5.0	頸部の外面に沈線文を施し、胴部との境に突帯を貼り付け、押圧する。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～2） △	SK102	
173	鉢	口径　(16.2) 残高　5.2	直線的に立ち上がった口縁。口縁端に断面三角形の突帯を貼り付ける。	ナデ	ナデ	明褐色 明褐色	石・長（1～3） ○	SK104	
174	壺	口径　(12.9) 残高　8.2	口縁端がやや肥大する。頸部に刺突文が巡る。	㊐ナデ ㊒ハケ （11～12本／cm）	マメツ	橙色 黄橙色	石・長（1～4） ○	黒斑 SK109	
175	壺	残高　9.1	口縁の内面に断面三角形の突帯を貼り付ける。頸部の外面には2条の断面三角形の突帯。	マメツ	マメツ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長（1～5） 砂・金 △	SK115	
176	甕	口径　(21.2) 残高　7.9	口縁端に断面三角形の突帯を貼り付ける。	㊐ヨコナデ ㊒ハケ （6～7本／cm）	㊐ヨコナデ ㊒ミガキ	灰褐色 褐灰色	石・長（1～3） 砂・赤 ◎	SK115	
177	甕	底径　(6.6) 残高　3.6	平底。	マメツ	マメツ	橙色 明茶灰色	石・長（1～2） 砂・金 △	SK115	
178	壺	底径　(7.6) 残高　5.2	平底。	マメツ	ナデ	橙色 浅黄橙色	石・長（1～4） △	黒斑 SK116	
179	壺	口径　(17.6) 残高　8.4	筒状で短い頸部にゆるやかに外反する口縁部を持つ。頸部外面に5条のヘラ描き沈線文を施す。	㊐ヨコナデ ㊒上ハケ→ナデ ㊒下ハケ→ミガキ	㊐ヨコナデ ㊒ミガキ	にぶい橙色 明赤褐色	石・長（1～3） 砂・金 ◎	SK123	
180	壺	底径　(7.6) 残高　4.8	壺の底部。平底。	ナデ（マメツ） （指頭痕・一部ハケ痕） ㊒ナデ（マメツ）	ナデ	にぶい橙色 黒褐色	石・長（1～3） 砂（4）・金 ◎	SK123	
181	甑	底径　6.4 残高　7.7	甕の底部の転用品。焼成後穿孔。	ミガキ ㊒ナデ	ナデ	橙色 橙色	石・長（1～2） ◎	SK123	
182	甕	底径　(7.4) 残高　9.5	平底。	マメツ	マメツ	橙褐色 灰褐色	石・長（1～3） ○	SK124	
183	壺	底径　(9.2) 残高　3.0	上げ底。	㊒ハケ ㊒マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	石・長（1～2） 金 ○	SK144	
186	壺	残高　4.2	頸部。4条以上のヘラ描き沈線文を施す。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～3） ○	SD5	
188	甕	口径　(22.8) 残高　6.0	折り曲げ口縁部。多重沈線の間に山形文を施す。	マメツ	ナデ	にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	石・長（1～4） △	SP826	
189	甕	底径　6.8 残高　9.5	やや上げ底の底部。	粗いミガキ （マメツ） ㊒ナデ	ミガキか？ ㊒ナデ	橙色 褐灰色	石・長（1～6） 金 ◎	黒斑 SP826	
190	壺	口径　(13.3) 残高　2.7	口縁部は直線的に立ち上がる。口縁端部に刻目を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	長（2） 砂・金 ○	SP948	
191	壺	口径　(14.5) 器高　28.1 底径　7.6	完形品。頸部に6条の沈線。口縁端部に1条の沈線後、刻目を施す。口縁部外反。胴部最大径は中位。底部平底。	ミガキ・ナデ ㊒ナデ	ナデ （マメツ・ハクリ）	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長（1～3） 金 ◎	SP1009	14
192	壺	残高　5.7	有軸の木葉文を施す。貝殻文。	施文	ナデ	にぶい黄橙色 灰黄色	石・長（1～2） ○	SP846	
193	壺	残高　5.1	肩部と胴部に沈線文を施す。	ミガキ（ハクリ）	ナデ ミガキ（指頭痕）	橙色 橙色	石・長（1～4） ○	黒斑 SP1074	
194	鉢	口径　(18.6) 器高　9.6 底径　7.2	平底。口縁端をやや折り曲げる。	㊐・㊒上マメツ ㊒下ハケ→ミガキ ㊒ナデ	ナデ（指頭痕）	橙色 橙色	石・長（1～3） ◎	SP276	
195	鉢	口径　(20.8) 残高　4.5	口縁端に帯状に粘土を貼り付ける。その直下に山形文を施文する。	マメツ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～2） △	外来系 SP298	
196	土製品	直径　3.5 厚さ　1.3	壺、又は甕の転用品。側面に面取りは施さない。	マメツ	マメツ	赤橙色	石・長（1～4） △	SP1285	

表４　弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表　石製品　(1)

番号	器種	石材	形状	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
24	柱状片刃石斧	結晶片岩	欠損の為、抉りの有無は不明。基端面は、平茎。断面は隅丸。	(5.5)	1.9	(0.8)	15.3	SK29	
25	不明石製品	結晶片岩	横断面が山形になる。側面に研磨が施されている。	(5.1)	1.4	0.4	3.1	SK29	
36	石鏃	サヌカイト	打製品。平基無茎式。	(2.5)	1.8	0.4	1.9	残存4/5 先端欠損SK31	
37	磨石	不明	楕円。全面に擦痕あり。	4.0	2.5	2.2	25.2	SK31	
38	敲石	不明	棒状。先端を錐状に加工。下半分に敲打痕を残す。焼成痕あり。	14.7	5.4	4.1	395.0	完存 SK31	10
39	磨石	不明	凹面を除き、全面に擦痕がみられる。焼成痕あり。	10.6	(9.0)	3.0	395.0	SK31	
40	砥石	不明	a・b面も砥石面として利用。両面に線状痕あり。a面に敲打痕。鉄錆付着。焼成痕。	8.3	5.7	5.0	320.0	SK31	10
41	台石	不明	欠損品。擦痕あり。焼成痕あり。	7.4	5.0	5.0	172.0	SK31	
46	大型蛤刃石斧	結晶片岩	基部のみ。平面形は長方形。両側縁に抉りが入る。	(9.3)	7.3	3.8	485.0	残存1/2 SK35	10
51	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	2.0	1.6	0.4	0.8	ほぼ完存 基端を欠損SK40	11
52	スクレイパー	サヌカイト	2側縁に刃部を有す。1つは外湾、もう1つは直線状。2つとも両面調整。	8.0	6.2	1.3	61.1	完存 SK40	11
53	スクレイパー	不明	刃部は若干外湾する。片面調整。	7.4	5.2	1.5	51.3	完存？ SK40	11
54	スクレイパー	不明	刃部は直線状で両面調整。一方の面は自然面である。	11.9	6.9	2.2	121.9	完存？ SK40	11
55	スクレイパー	サヌカイト	刃部は外湾し、両面調整。一方の面は自然面である。	5.4	3.9	1.2	18.7	完存？ SK40	11
56	用途不明品	不明	両面には自然面が残る。扁平な円形の礫。	9.0	8.5	1.7	188.0	ほぼ完存 SK40	11
57	用途不明品	不明	両面とも磨滅が激しい。やや膨らみを持つ円形の礫。	6.4	7.1	2.4	86.8	残存2/3 SK40	11
58	剥片	サヌカイト	自然面なし。	3.5	3.1	0.4	4.2	SK40	11
59	剥片	サヌカイト	自然面なし。	3.6	3.4	0.5	5.3	SK40	11
60	剥片	サヌカイト	自然面あり。	4.5	4.3	0.8	12.2	SK40	11
61	剥片	サヌカイト	自然面あり。	3.5	2.2	0.8	4.6	SK40	11
62	剥片	サヌカイト	自然面なし。	3.4	2.3	0.3	2.9	SK40	11
63	剥片	サヌカイト	自然面なし。	3.8	3.1	0.8	5.8	SK40	11
64	剥片	サヌカイト	自然面なし。	5.3	4.5	1.1	19.4	SK40	11
65	剥片	サヌカイト	自然面なし。	5.0	2.3	0.6	7.4	SK40	11
66	石庖丁	結晶片岩	成品の背部分。	(3.1)	(1.1)	(0.6)	3.4	破片 SK41	
69	扁平片刃石斧	結晶片岩	平面形は不整長方形。全面に自然面が残存。基部形は平茎、隅角は鋭角。刃部は円刃。横断面は膨れ、鏑は甘い。	5.7	3.0	1.4	42.5	完存 SK50	12
70	敲石	不明	棒状。上半分は先細り、下半分は筒状を呈す。中位に段を持つ。全面を擦った後、先端と下半に敲打痕を残す。	10.5	4.2	4.3	218.9	完存 SK50	12

弥生時代前期末～中期初頭の出土遺物観察表　石製品

(2)

番号	器種	石材	形状	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
71	磨石・敲石	花崗岩	平面には両面とも擦痕あり。側面には敲打痕あり。	10.5	(7.7)	4.5	515.0	残存1/2 SK50	
74	不明	結晶片岩	棒状。扁平な面を持つ。両面とも自然面。石器素材の可能性あり。	10.1	2.4	1.4	43.5	ほぼ完存 SK60	
76	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	2.7	2.0	0.4	1.6	ほぼ完存 SK87	
81	不明石製品	不明	砂岩質の礫に円形の凹みがある。反対の面は、全体がゆるやかに凹んでいる。	10.2	5.0	4.0	233.1	ほぼ完存 SK89	
92	石庖丁	結晶片岩	未製品。打製段階。打製調整・研磨は確められない。	(7.7)	3.5	0.6	28.3	残存2/3 SK90	
113	凹石・台石	不明	凹部は片面のみに形成される。もう片面は平坦。凹部は擦痕が残る。	21.1	14.4	6.6	2550.0	完存 SK112	
117	不明	結晶片岩	扁平。両面とも自然面が残る。両側面の中央部に打ちかいた痕跡あり。石器素材の可能性あり。	11.5	3.6	1.0	87.0	完存 SK113	
122	スクレイパー	サヌカイト	大きく欠損する。片面に自然面を残す。刃部は直線状。両面調整。	(5.2)	3.6	0.6	10.1	SK119	
123	扁平片刃石斧	結晶片岩	基部と左側面が欠損。平面形は長方形。刃部は円刃、側部は真直。断面形は横が長方形。籾は円籾。	(8.0)	(3.3)	1.6	77.4	残存1/4 SK119	
124	砥石？	不明	平坦な面を一面持つ。擦痕あり。焼成を受けている。	(13.0)	(10.6)	5.2	733.0	SK119	
126	粗製剝片	不明	河原の円礫を打ち剝がしている。両面とも剝離面からなり、扇形。	13.0	7.4	1.2	91.0	ほぼ完存 SK126	12
128	不明	結晶片岩	棒状で扁平な石器素材。尖頭状になる。両面とも自然面。	6.2	1.5	0.3	5.6	完存 SK130	
147	スクレイパー	不明	欠損品。刃部は直線状である。両面調整。	8.7	(7.9)	1.7	142.7	SK138	
148	磨石	不明	欠損品。四面ともに擦痕あり。	(14.2)	(8.7)	5.8	1000.0	SK138	
149	磨石・敲石	不明	平坦面の両面に擦痕あり。側面には敲打痕がある。	10.3	9.5	5.0	777.5	完存 SK138	
184	スクレイパー	不明	片面に若干自然面を残す。平面形は撥形。両面調整。	10.6	8.4	1.7	183.8	完存 SK39	
185	磨石・敲石	不明	楕円形。面の一部分に擦痕がある。敲打痕は両端にみられる。	12.1	7.3	7.1	1045.8	SK39	
187	伐採斧？	不明	欠損品。刃部分。横断面形は、扁平。	(7.1)	(6.7)	(2.1)	129.5	残存1/2 SD5	

表５　弥生時代中期前葉の出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
197	甕	残高　5.7	肩部が張り、口縁がやや内傾する。口縁部は断面が三角形。直下に1単位3～4本の櫛描きによる沈線文と刺突文。	㊐ナデ ㊒ハケ	ナデ	にぶい橙色 浅黄橙色	石・長(1～5) △	SK111	
198	壺	残高　5.4	壺の底部。器壁が厚い。	マメツ	マメツ	にぶい赤橙色 灰褐色	石・長(1～3) △	SK111	
201	甕	残高　8.3	胴部片。8条の櫛描沈線文の間に波状文（櫛描文）が施文されている。	ナデ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～2) △	SK15	
202	甕	口径　(21.2) 残高　7.9	口縁端部に断面三角形の突帯を貼り付けている。	㊐ヨコナデ ㊒ハケ (6～7本/cm)	㊐ヨコナデ ㊒ヘラミガキ	灰褐色 褐灰色	石・長(1～3) 砂 ◎	SK15	
203	甕	残高　7.9	口縁部は「く」の字に曲がる。胴部は内湾している。口縁部と胴部に櫛描沈線文を施し、直下に刺突文あり。	ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～3) ○	SK134	

表6　弥生時代中期前葉の出土遺物観察表　石製品

番号	器種	石材	形状	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
199	石錐	チャート	頭部と錐部の境が不明瞭で、端に近くなるにつれて、しだいに細くなる。	(3.5)	1.6	0.6	3.1	頭部一部欠損 SK111	
200	不明	結晶片岩	棒状の石器素材。片端と側面が欠損する。	(4.8)	2.1	1.7	35.4	SK111	

表7　弥生時代中期中葉の出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
204	甕	口径 (19.6) 残高 7.1	断面三角形の貼り付け口縁を持つ。肩部に張りを持ち、口縁は内傾する。外面は剝離している。刺突文あり。	ハクリ	ナデ（マメツ）	にぶい赤褐色 赤褐色	石・長(1～4) △	SK122	
205	甕	口径 (22.1) 残高 3.3	「く」の字に強く屈曲する口縁部。頸部には粘土を貼り付け、指頭押圧を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	橙色 橙色	石・長(1) 金 ◎	SK122	
206	甕	底径 (7.4) 残高 4.4	平底。	㊦ナデ・ヨコナデ ㊥ナデ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) 金 ◎	SK122	
208	甕	口径 (23.9) 残高 9.5	口縁は強く外反し、胴部は肩上がりのもの。	㊐ナデ ㊥ミガキ	マメツ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～3) ○	煤付着 SK23	
209	甕	口径 (22.3) 残高 10.2	口縁部を折り曲げる。内・外面に、強い屈曲を有す。頸部下に突帯を貼り付け、端を押圧する。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～2) チャート ○	SP407	
210	甕	残高 2.3	断面が三角形な突帯を貼り付け、口縁端を押圧する。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～4) △	SD1	
211	甕	口径 (18.8) 残高 2.3	口縁端が上方で平らになる。	マメツ	ヨコナデ (マメツ)	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長(1～4) 砂 △	SD1	
212	鉢	口径 (16.2) 残高 9.7	やや丸みのある胴部。底部は欠損。口縁端は剝離している。	㊐ヨコナデ ㊥ハケ	㊐ヨコナデ ㊥ハケ→ミガキ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長(1～3) 金 ○	黒斑 SD1	
213	ミニチュア	底径 3.2 残高 2.8	くびれのある上げ底の底部。手捏土器。	ナデ（指頭痕）	ナデ	灰黄色 灰黄色	石・長(1～2) △	SD1	
214	甕	残高 7.3	ゆるやかに折れ曲がる口縁部。頸部に刻目のある突帯を持つ。	㊐ヨコナデ ㊥ヨコナデ	マメツ	黄橙色 淡黄色	石・長(1～3) 金 ○	SD23	
215	甕	口径 (16.6) 残高 2.7	強く「く」の字に折れ曲がる口縁部。頸部に突帯を貼り付け、指頭押圧による刻目を持つ。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい褐色 にぶい褐色	石・長(1) 金 ○	SD23	

表8　弥生時代中期中葉の出土遺物観察表　装身具

番号	器種	石材	形状	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
207	管玉	碧玉	破損している。孔径約2.5㎜を測る。	(0.6)	0.4	0.1	0.1	残存1/2 SK122	14

表9　弥生時代中期後葉～後期初頭の出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面) (内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
216	甕	口径 (18.8) 残高 2.0	口縁端部はつまみ上げ状になる。頸部に刺突を施し、その上に刻み目1条隆帯を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	明赤褐色 にぶい橙色	石・長(1～3) 金 ○	掘立7 P5	
217	高坏	口径 (16.2) 残高 2.4	口縁部に3条の凹線文を施す。	マメツ	ヨコナデ	明黄褐色 黄褐色	石・長(1) 金 △	掘立7 P1	
218	高坏	口径 (19.7) 残高 4.1	口縁部に5条の凹線文を施す。	ナデ	㊐端ヨコナデ ナデ	明褐色 にぶい橙色	石・長(1～4) 赤 ○	黒斑 掘立7 P4	
219	甕	底径 5.8 残高 3.1	平底。	ミガキ ㊦ナデ	ナデ（工具痕）	にぶい褐色 にぶい橙色	石・長(1) ◎	黒斑 掘立7 P1	

弥生時代中期後葉～後期初頭の出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
220	土製品	直径 3.1	壺か甕の転用品。側面に面は持たない。	ナデ	ナデ	明赤褐色	砂・赤 ○	掘立7 P10	
227	壺	底径 (6.9) 残高 5.4	壺の底部。	ナデ	ナデ	橙色 にぶい橙色	石・長（1～3） 砂・金 ○	SK128	
228	高坏	脚部径(10.6) 残高 3.4	脚部下端には3条の凹線文を施す。矢羽根透しを有す。	マメツ	マメツ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長（1～3） 金 △	黒斑 SK128	
231	壺	残高 4.0	胴部と頸部の屈曲部に粘土帯を貼り付け、押圧時に爪の跡がつく。	ミガキ	ヨコナデ	にぶい橙色 橙色	石・長（1～2） 金 ◎	SK121	
232	高坏	残高 6.6	脚部。充填技法。シボリ痕あり。	ハケ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～3） △	後期初頭 SK8	
233	甕	底径 (7.0) 残高 6.7	上げ底。	ナデ（指頭痕）	ナデ	橙色 にぶい赤褐色	石・長（1～3） 金・赤 ○	中期後葉 SP484	
234	壺	底径 (9.2) 残高 4.3	上げ底。	ミガキ (底)ナデ	ナデ（指頭痕）	明赤褐色 にぶい橙色	石・長（1～3） ○	後期初頭 SP484	
235	壺	口径 (14.0) 残高 7.1	やや肥大した口縁端を有す。	マメツ	マメツ	明赤褐色 明赤褐色	石・長（1） △	SP353	
236	壺	口径 (10.3) 残高 2.2	口縁部に凹線文を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	明赤褐色 明赤褐色	石・長（1） 金 ○	後期初頭 SP702	
237	壺	口径 (13.2) 残高 2.2	口縁部は強く外反する。口縁端部は肥厚し、2条の凹線文を有す。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1） △	中期後葉 SP925	
238	ミニチュア	底径 2.8 残高 4.1	平底。胴部は内湾する。	ナデ	ナデ	黄橙色 褐灰色	密 ○	黒斑 SP973	

表10　弥生時代中期後葉～後期初頭の出土遺物観察表　石製品

番号	器種	石材	形状	法量 長さ(cm)	法量 幅（cm）	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
221	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	(2.4)	1.5	0.2	0.8	掘立7 P5	
222	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	(1.7)	1.7	0.3	0.8	掘立7 P4	
223	石鏃	サヌカイト	打製品。凸基無茎式。	2.7	1.3	0.4	1.6	掘立7 P1	
224	石庖丁	結晶片岩	成品。破損品。刃部は扁両刃。	(3.3)	(4.2)	0.7	16.0	掘立7 P1	
225	石庖丁	結晶片岩	未製品。研磨段階。一部に荒い研磨が施されている。素材は扁平円礫、一方が自然面。	(11.4)	4.5	1.0	86.2	掘立7 P3	
226	磨石	不明	平坦な面と側面ともに擦痕を持つ。	(5.7)	(4.4)	－	94.2	掘立7 P3	
229	石庖丁	結晶片岩	未製品。研磨段階。打製により剝離調整を行い、一部荒い研磨を施す。	(8.2)	3.1	0.6	25.5	SK128	
230	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	(1.5)	1.2	0.2	0.3	SK128	

表11　古墳時代～古代の出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
239	坏蓋	口径 (14.5) 残高 2.3	口縁部は先細り。稜を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	須恵 自然釉 SB3	

古墳時代～古代の出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
240	壺	残高 6.3	壺の胴部片。	平行タタキ	青海波文	灰白色 灰白色	密 ○	須恵 SB3	
241	甕	残高 5.0	甕の胴部。	縄席文のタタキ→カキメ	同心円文のタタキ	灰色 灰色	密 ○	須恵 自然釉 掘立2P7	
242	坏身	残高 1.8	受け部の小片。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	須恵 掘立2 P11	
243	甕	口径 (17.5) 残高 3.2	「く」の字形に強く折れる口縁部。口縁端は上下に肥大し、4条の凹線文。頸部に刻目のある突帯を有す。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい赤褐色 にぶい赤褐色	石・長（1～2） 金 ◎	掘立2 P7	
244	壺	残高 1.8	口縁内面に突帯を有する。口縁端に斜格子文。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長（1～2） △	掘立2 P6	
245	甕	残高 3.2	上下不明。沈線文と刺突文が施されている。	マメツ	マメツ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長（1～2） 砂 △	掘立4 P10	
247	甕	残高 4.2	甕又は壺の胴部。	縄席文のタタキ	同心円文のタタキ	灰色 灰色	密 ○	掘立5 P4	
248	坏蓋	口径 10.3 器高 4.2	短頸壺の蓋。完形品。	㊍回転ヘラ削り ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密、石・長（4） △	須恵 SK146	
249	甕	口径 (27.0) 残高 7.2	断面三角形の突帯を口縁端に貼り付ける。	㊐ナデ ㊌ハケ （7～14本／cm）	ナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1～4） 砂・赤 ○	弥生 SK146	
250	甑	残高 7.1	把手。先端部は上方に折り曲げられる。端部は丸い。	マメツ	マメツ	橙色	密 △	土師 SD10	
251	壺	口径 (14.2) 残高 2.0	口縁部に3条の凹線を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい橙色 にぶい橙色	石・長（1） ○	SD10	
252	壺	残高 6.2	口頸部の外面に1条の突帯を施す。	㊎ヨコナデ ㊌ナデ（マメツ）	㊎ヨコナデ ㊌ナデ（マメツ）	にぶい赤褐色 橙色・黒色	石・長（1～3） ○	SD10	
253	壺	底径 (16.4) 残高 6.8	平底。	マメツ	ナデ	褐灰色 にぶい黄橙色	石・長（1～8） 赤 ○	SD10	
254	甕	底径 (8.4) 残高 2.6	平底。	マメツ	ナデ	にぶい褐色 灰白・黒色	石・長（1～4） △	SD10	
256	坏身	口径 (12.0) 残高 2.8	受け部は短く、口縁部は直線的に立ち上がる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ○	須恵 SP716	
257	甕	残高 2.8	底部。小片。	平行タタキ	青海波文	灰色 灰白色	密 ○	須恵 自然釉 SP495	
258	甕	口径 (27.8) 残高 2.2	口縁部。ゆるやかに外反して、内面に凹みを持つ。外面に粘土帯を貼り付ける。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 砂（3） ◎	SP1181	
259	甕	残高 4.9	胴部上半。	平行タタキ→カキメ 回転ナデ	回転ナデ→同心円文タタキ 回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎	SP1181	

表12　古墳時代～古代の出土遺物観察表　石製品

番号	器種	石材	形状	法量 長さ（cm）	法量 幅（cm）	法量 厚さ（cm）	法量 重さ（g）	備考	図版
246	台石	不明	扁平な礫。一面に凹みがある。	(13.9)	(11.2)	5.4	1220.0	掘立4 P12	
255	石庖丁	結晶片岩	破損品。	(6.9)	(1.9)	(0.8)	14.2	SD10	

表13　中世の出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
261	碗	口径 (13.0) 残高 3.5	瓦質。和泉型。口縁は内湾して立ち上がる。	㊀ナデ ㊄指頭痕	ナデ→ヨコミガキ	灰色 灰色	密 ◎	SP1296	
270	皿	口径 7.8 器高 1.6 底径 5.2	土師質。口縁は外方に開き、端部は丸くおさめる。	ヨコナデ ㊇回転糸切り （板圧痕）	ヨコナデ	にぶい黄橙色 灰白色	密 ◎	黒斑 SP1296	16
271	皿	口径 (9.0) 器高 1.5 底径 (6.0)	土師質。口縁は外方に開き、端部は丸くおさめる。	ヨコナデ ㊇回転糸切り	ヨコナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	密 ◎	SP1296	15 16
272	坏	口径 (15.0) 器高 4.6 底径 7.8	土師質。口縁は外方に大きく開く。	ヨコナデ ㊇回転糸切り	ヨコナデ	灰白色 灰白色	密 △	SP1296	15 16
273	皿	口径 8.2 器高 3.9 底径 5.5	土師質。円盤高台が付く皿。外方に大きく開く。	ヨコナデ ㊇回転糸切り	ヨコナデ （マメツ）	灰白色 灰白色	密 ○	SP1296	15 16
274	碗	口径 (15.5) 器高 4.4 底径 (4.2)	瓦質。和泉型の可能性が高い。体部は丸味を帯び、口縁端は丸くおさめる。高台の断面、三角形。	ナデ（指頭痕） ヨコナデ	ナデ	灰白色 灰白色	密 ○	SP1296	16
288	皿	底径 (5.8) 残高 0.8	土師質。底部。	ヨコナデ ㊇回転ヘラ切り	ナデ	橙色 淡黄色	密 △	倒木2	
289	皿	底径 (6.8) 残高 1.1	土師質。底部。	ヨコナデ ㊇回転ヘラ切り	ナデ	橙色 淡黄色	密 △	倒木2	
290	皿	底径 (6.9) 残高 1.6	土師質。底部。	ヨコナデ ㊇回転ヘラ切り	ヨコナデ ナデ	にぶい橙色 灰黄褐色	長（1～2） ○	倒木2	
291	坏蓋	残高 1.5	須恵器。口縁端部。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	須恵 倒木2	
292	甕	口径 (17.4) 残高 3.6	土師器。口縁部。やや内湾ぎみに立ち上がり、端部は内面につまみを持つ。	ヨコナデ	ヨコナデ （マメツ）	橙色 橙色	石・長（1～3） ○	倒木2	
293	羽釜	口径 (22.0) 残高 2.9	土師質。三足羽釜の口縁部。口縁部は内湾し、突帯を巡らせる。	ナデ	ナデ	橙色 橙色	長（1～3） △	煤付着 SK39	
294	碗	口径 (15.4) 残高 4.6	瓦質。和泉型。ゆるやかに内湾して立ち上がる。	㊀ヨコナデ ナデ	ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	密 ○	SK122	

表14　中世の出土遺物観察表　石製品　(1)

番号	器種	石材	形状	法量 長さ(cm)	法量 幅（cm）	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
260	礫	不明	河原石。	(16.2)	(9.8)	8.2	1840.0	SP1296	16
262	礫	不明	扁平な河原石。	6.3	5.3	1.8	84.8	SP1296	16
263	礫	不明	河原石。焼成を受け、破損している。	16.6	(11.3)	(6.0)	730.0	SP1296	16
264	礫	不明	平面、断面形とも三角形な河原石。	7.4	5.6	5.3	259.8	SP1296	16
265	礫	不明	扁平な河原石。破損している。	(8.0)	(6.0)	2.6	171.6	SP1296	16
266	礫	不明	棒状の河原石。	10.2	3.2	2.7	109.2	SP1296	16
267	礫	不明	棒状の河原石。	8.4	3.0	2.3	86.4	SP1296	16
268	礫	不明	棒状の河原石。	8.3	3.1	2.4	68.1	SP1296	16
269	礫	不明	棒状の河原石。	7.2	2.8	1.9	60.1	SP1296	16
275	礫	不明	扁平な河原石。	14.0	7.4	3.4	455.0	SP1296	16
276	礫	不明	棒状の河原石。	10.7	4.7	3.4	233.2	SP1296	16
277	礫	不明	扁平な河原石。	6.0	5.2	2.7	115.3	SP1296	16
278	礫	不明	棒状の河原石。破損している。	(5.6)	4.7	4.4	132.1	SP1296	16
279	礫	不明	棒状の河原石。	8.0	2.7	2.5	88.8	SP1296	16
280	礫	不明	棒状の河原石。	(9.7)	2.5	2.5	80.9	SP1296	16
281	礫	不明	棒状の河原石。	8.2	3.6	2.2	107.6	SP1296	16
282	礫	不明	棒状の河原石。	7.7	3.0	1.8	64.7	SP1296	16
283	礫	不明	棒状の河原石。	(8.8)	3.4	(2.6)	84.6	SP1296	16
284	礫	不明	棒状の河原石。	9.3	2.3	2.4	65.6	SP1296	16

中世の出土遺物観察表　石製品　(2)

番号	器種	石材	形状	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
285	礫	不明	棒状の河原石。	8.4	2.6	(1.5)	55.1	SP1296	16
286	礫	不明	棒状の河原石。	7.4	3.0	1.9	46.4	SP1296	16
287	礫	不明	棒状の河原石。	(4.3)	2.1	(2.0)	21.0	SP1296	16

表15　ＳＢ2出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
295	壺	口径 (15.8) 残高 1.8	口縁部。口縁部は外反する。口縁端部は肥厚し、3条の凹線文を施す。	㊐マメツ ヨコナデ	マメツ (ヨコナデ)	橙茶色 橙茶色	石・長(1) ○	SB2	
296	甕	底径 (7.0) 残高 4.9	平底。	マメツ	マメツ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～3) 金 ○	SB2	
297	焼土塊	長さ 4.8 幅 3.6	焼土の塊。	マメツ	－	浅黄橙色 (一部橙色)	石・長(1～2)	SB2	
298	高坏	残高 3.7	裾部に4条の凹線を有す。	マメツ	マメツ	灰色 浅黄橙色	石・長(1～2) △	SB2	

表16　掘立1出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
299	甕	口径 (23.0) 残高 5.2	口縁部に断面三角形の貼付突帯を施す。肩部に張りを持つ。口縁直下に4条1組の縦と横の沈線文と直下に波状文の櫛描文を施す。	㊐ヨコナデ ㊒ハケ	㊐ヨコナデ ㊒ナデ (ミガキか？)	橙色 橙色	石・長(1～2) 赤 △	黒斑 掘立1 P9	
300	壺	口径 (9.5) 残高 1.0	複合口縁部。口縁接合部が「く」字状を呈する。無文。	ヨコナデ	㊐端ヨコナデ ㊐ナデ	にぶい黄橙色 にぶい黄橙色	石・長(1～2) ◎	掘立1 P10	

表17　掘立1出土遺物観察表　石製品

番号	器種	石材	形状	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
301	凹石	不明	一面に凹み面がある。	21.2	(12.2)	(7.9)	2850.0	掘立1P5	

表18　掘立3出土遺物観察表　石製品

番号	器種	石材	形状	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
302	石鏃	サヌカイト	打製品。平基無茎式。	4.0	(1.8)	0.5	3.3	掘立3P5	

表19　掘立8出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
303	壺	口径 (19.7) 残高 2.1	口縁端部は下方に垂下する。内面には突帯が巡り、口縁端部にはヘラ描きの山形文を施す。	マメツ	マメツ	橙色 橙色	石・長(1～2) 砂 △	掘立8 P1	

表20　時期不明出土遺物観察表　石製品　(1)

番号	器種	石材	形状	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
304	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	(2.2)	(1.9)	0.5	2.1	SK114	
305	石鏃	サヌカイト	打製品。平基無茎式。	2.5	(1.2)	0.3	0.8	SK114	
306	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	(2.1)	(1.5)	0.2	0.5	SK13	
307	石鏃	サヌカイト	打製品。平基無茎式。	2.8	1.4	0.4	1.2	SK26	
308	石庖丁	結晶片岩	成品。隅丸長方形。	(11.4)	5.7	0.6	67.0	SK86	
309	石庖丁	サヌカイト	成品。平面形は隅丸長方形。	(5.0)	(3.5)	0.3	13.3	SK127	
310	扁平片刃石斧	結晶片岩	平面形は長方形。基部は円茎。	5.6	2.5	1.1	32.2	SK13	
311	石庖丁	結晶片岩	未製品。	14.4	6.0	1.9	202.6	SK131	
312	石鏃	サヌカイト	打製品。凸基有茎式。	(4.9)	1.3	0.5	3.0	SP522	
313	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	3.2	1.8	0.4	1.5	SP976	

時期不明出土遺物観察表　石製品

(2)

番号	器種	石材	形状	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
314	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	2.5	1.8	0.3	1.0	SP629	
315	石鏃	サヌカイト	打製品。	3.0	1.2	0.8	2.9	SP271	
316	石錐	サヌカイト	頭部両側面に刃部が有る。	4.5	1.5	0.4	3.2	SP976	14
317	スクレイパー	サヌカイト	刃部は若干外湾する。両面調整。	8.5	5.8	1.1	52.0	SP269	
318	石庖丁	結晶片岩	成品。破損品。刃が擦り減っている。	(10.3)	3.5	0.6	47.6	SP630	14
319	扁平片刃石斧	結晶片岩	石庖丁の転用品。	5.8	(3.6)	0.6	15.9	SP975	
320	粗製剝片	サヌカイト	河原の円礫を打ち剝がしている。	13.8	11.0	2.4	420.0	SP975	15
321	扁平片刃石斧	結晶片岩	刃部は円刃。横断面は胴膨れである。	(3.5)	(3.1)	(0.6)	10.4	SP624	
322	柱状片刃石斧	結晶片岩	前主面に鏑が無い。	(11.9)	(3.3)	(0.6)	30.5	SP15	
323	柱状片刃石斧	結晶片岩	有快式。基端面は平茎。	12.8	3.1	4.1	330.0	掘立1P16	14
324	太型蛤刃石斧	結晶片岩	刃部。破損品。横断面は扁平。	(9.8)	(7.0)	(3.0)	283.1	SP257	
325	太型蛤刃石斧	不明	破損品。研磨を施している。	(6.8)	(5.1)	(1.3)	39.1	SP117	15
326	磨石	花崗岩	平坦面の一面に擦痕あり。	6.9	5.6	3.8	212.1	SP955	
327	磨石・擦石	不明	扁平な円礫。側面に敲打痕あり。	6.8	6.1	2.5	142.4	SP968	
328	磨石	花崗岩	平坦面の両面に擦痕あり。	10.0	8.2	4.0	550.0	SP4	
329	擦石	不明	両端に敲打痕がみられる。	9.5	8.1	4.2	530.0	SP1276	
330	砥石	不明	欠損品。3面に擦痕あり。	14.8	13.8	10.8	3100.0	SP484	
331	砥石	不明	3面を使用している。1面に浅い溝が入る。	(11.9)	12.4	9.2	2050.0	SP494	
332	根石	結晶片岩	穿孔が2つある。掘立柱穴の根石。	(25.4)	(17.3)	7.6	4100.0	掘立9P1	
333	用途不明石製品	結晶片岩	石器素材の可能性あり。	16.3	3.9	2.7	233.1	SP123	
334	用途不明石製品	不明	両端を欠損。断面が円形。	(5.7)	3.4	2.5	67.6	掘立6P3	

表21　表採遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調 (外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
355	皿	底径 (16.2) 残高 2.6	龍泉窯の青磁皿の底部。見込みには目跡がみられる。	施釉 (底)回転ナデ	施釉	オリーブ色 オリーブ色	密 ◎	胎土： 浅灰黄色	
336	坏身	残高 1.7	器壁が厚い。受部が短く水平にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	明青灰色 明青灰色	密 ○	須恵	
337	壺	口径 (15.0) 残高 25.1	口縁部はやや外傾する。胴部は長胴。頸部に3条の沈線文を施す。	(口頸)ナデ (マメツ) (胴)ミガキ (マメツ)	(口頸)ナデ (頸胴)ミガキ (胴下)ナデ	浅黄橙色 浅黄橙色	石・長 (1～5) 金 ○	黒斑	

表22　表採遺物観察表　石製品

番号	器種	石材	形状	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
338	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	(1.4)	(1.4)	0.2	0.3	表採	
339	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	2.0	1.8	0.3	0.7	表採	
340	石鏃	サヌカイト	打製品。凹基無茎式。	2.0	1.8	0.4	0.4	表採	
341	石鏃	チャート(赤色)	打製品。凹基無茎式。	1.7	(1.6)	0.2	0.6	表採	
342	石鏃	サヌカイト	打製品。平基無茎式。	(1.4)	1.8	0.3	0.9	表採	
343	石鏃	チャート(赤色)	打製品。平基無茎式。	(2.0)	(1.5)	0.5	1.0	表採	
344	石鏃	サヌカイト	打製品。平基無茎式。	(2.8)	(1.4)	0.4	0.9	表採	
345	石鏃	サヌカイト	打製品。平基無茎式。	2.9	1.2	0.5	2.0	表採	
346	石鏃	チャート(赤色)	未製品。	3.4	1.9	0.7	5.6	表採	
347	刃器	姫島産黒曜石	端部を折り切り腹面側に調整を加えたもの。	(2.1)	1.2	0.5	1.6	表採	
348	石庖丁	結晶片岩	未製品。外湾刃半月形か？刃部は面を持つ。	(8.2)	(5.6)	(0.8)	51.5	表採	15
349	石庖丁	結晶片岩	成品の破損品。	(4.3)	(1.5)	(0.6)	5.9	表採	
350	太型蛤刃石斧	不明	成品。破損品。平面は長台形。	(9.8)	(4.6)	(2.8)	179.9	南カクラン	15
351	擦石・磨石	不明	扁平な円礫。	10.2	9.0	4.6	627.5	表採	
352	砥石	不明	両端が欠損している。	(9.0)	3.5	2.6	143.2	地点不明	

写 真 図 版

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、４×５判や６×７判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45Ａ	レンズ	スーパーアンギュロン　90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニューＦＭ２		ズームニッコール　28～85㎜他
フィルム	白　黒　プラスＸパン・ネオパンＳＳ・アクロス		
	カラー　エクタクロームＥＰＰ・ＲＤＰⅢ		

2．遺物は、４×５判または６×９判で撮影した。すべて白黒フィルムで撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー45Ｇ・69ロールフィルムホルダー
レンズ	ジンマーＳ　240㎜Ｆ5.6他
ストロボ	コメット／ＣＡ32・ＣＢ2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	白黒　プラスＸパン・ネオパンアクロス

3．単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

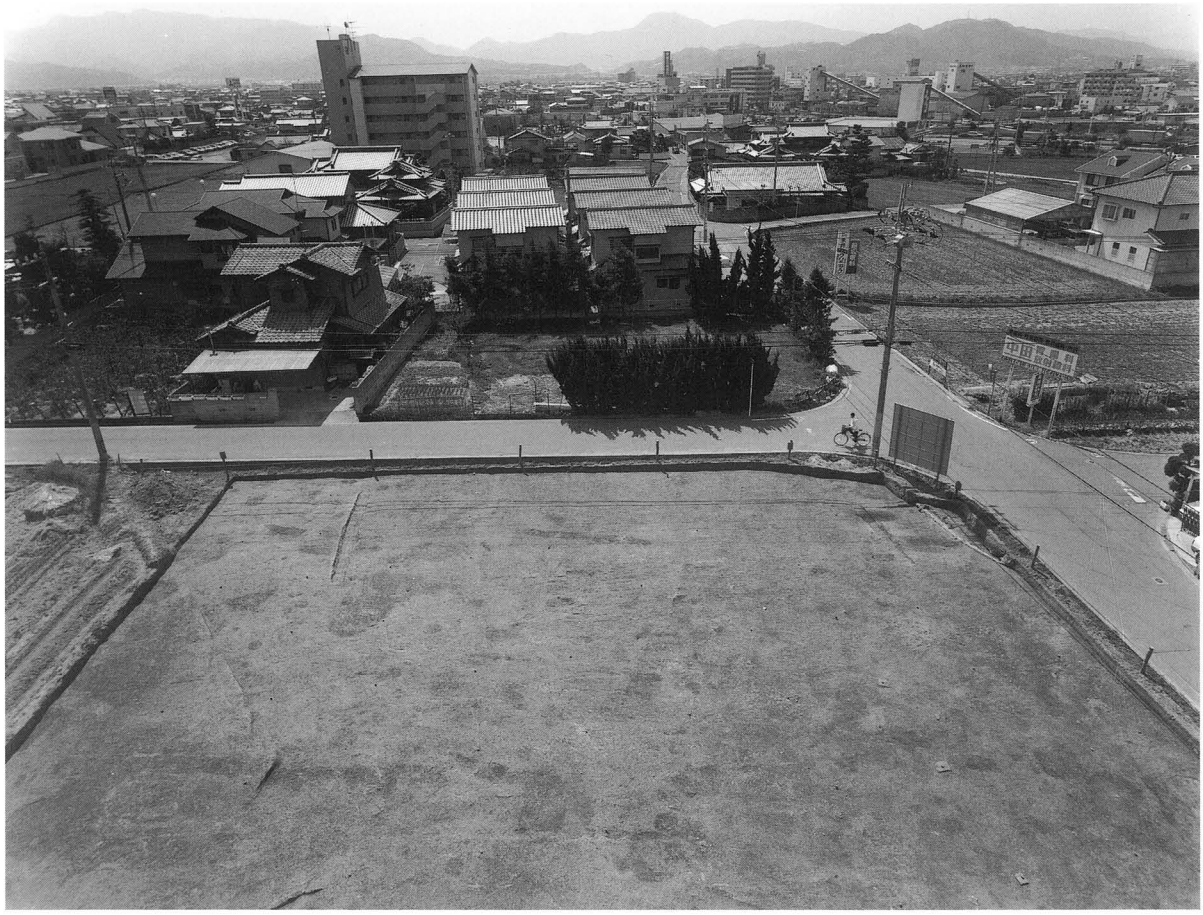
使用機材：

引伸機	ラッキーＭＤ・90ＭＳ
レンズ	エル・ニッコール135㎜　Ｆ5.6Ａ・50㎜　Ｆ2.8Ｎ
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ ＲＣペーパー

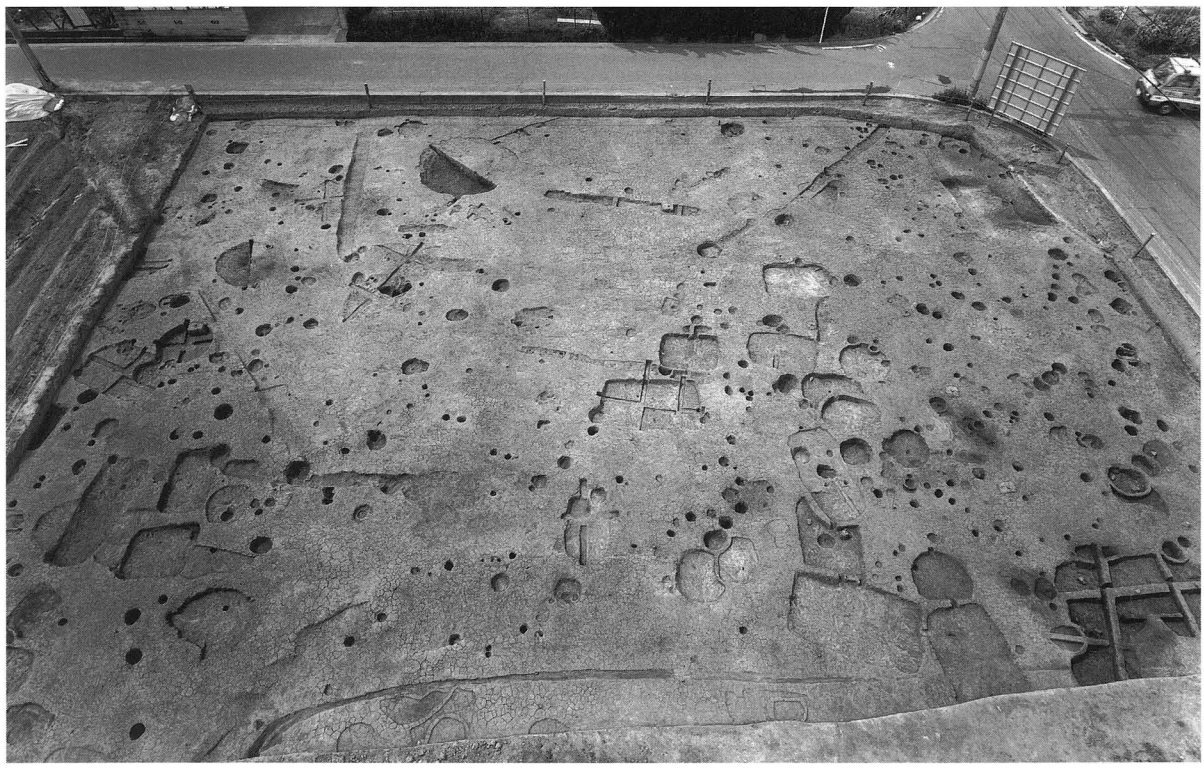
4．製版　写真図版－175線
印刷　オフセット印刷
用紙　ニューＶマットコート　菊判76.5㎏使用
製本　アジロ綴じ

【参考】『埋文写真研究』vol. 1～15 『報告書制作ガイド』

［大西朋子］



1．2区遺構検出状況（北より）



2．2区遺構完掘状況（北より）

1．1区遺構検出状況（南より）

2．1区遺構完掘状況（南より）

1．ＳＫ21遺物出土状況（北東より）

2．2区西側完掘状況（北より）

1．ＳＫ24遺物出土状況（南東より）

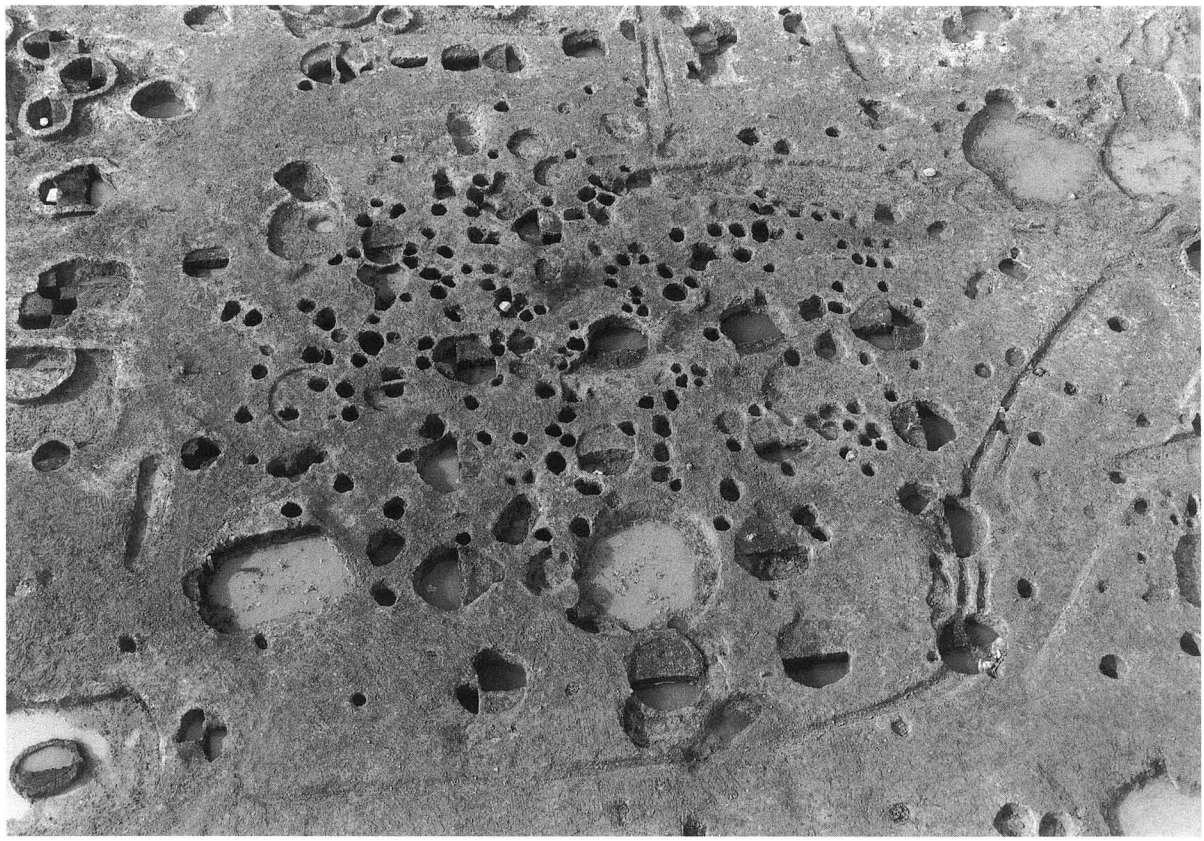
2．ＳＫ31遺物出土状況（南より）

1．ＳＫ138遺物出土状況（南より）

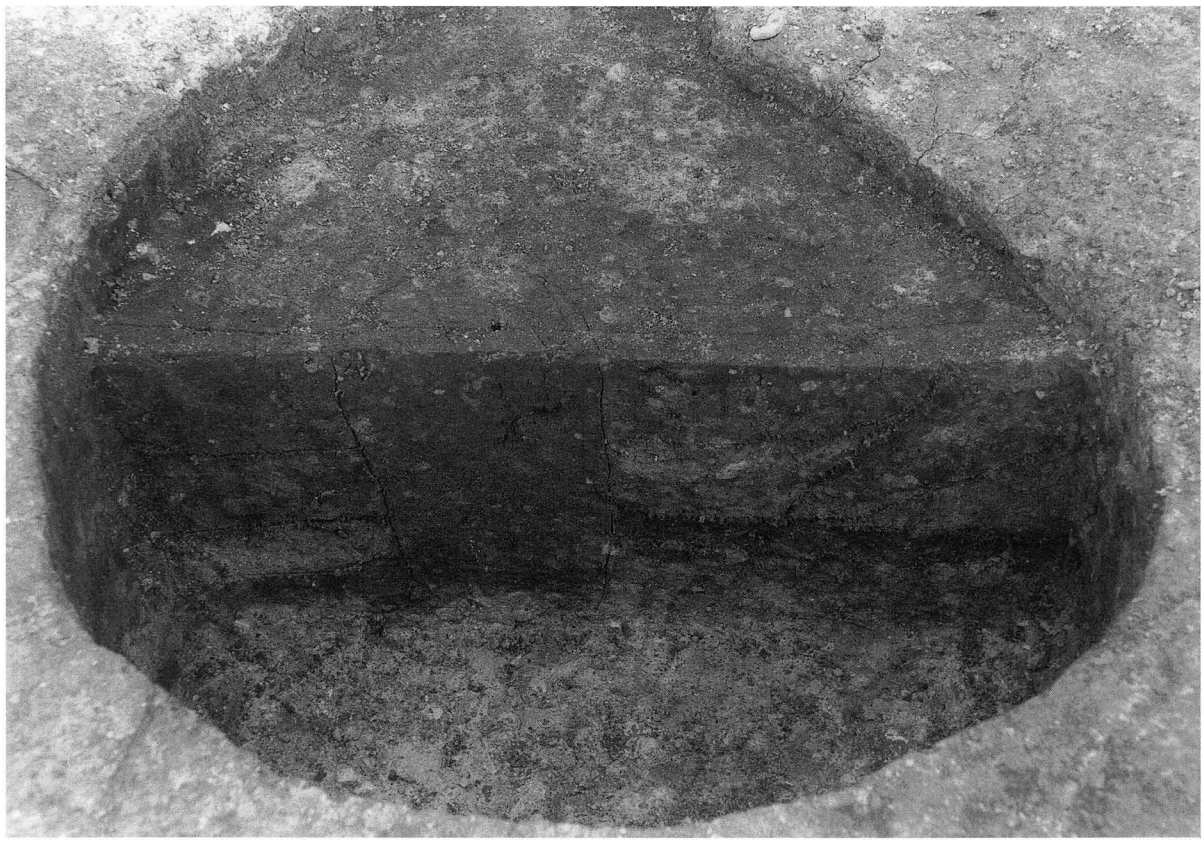
2．ＳＫ103遺物出土状況（南より）

1．ＳＫ137遺物出土状況（南より）

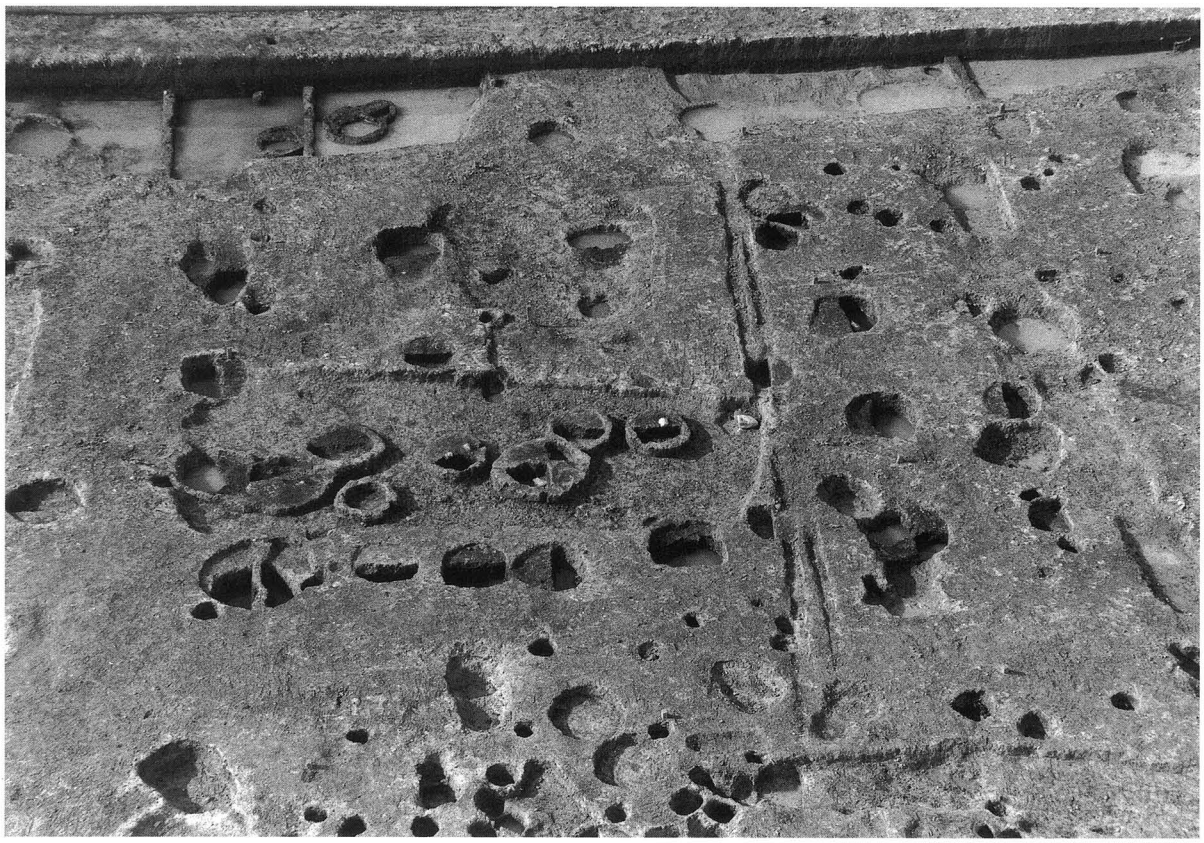
2．掘立２・ＳＫ122検出状況（南より）



1．掘立１完掘状況（南より）



2．掘立１ＳＰ955断面土層（西より）



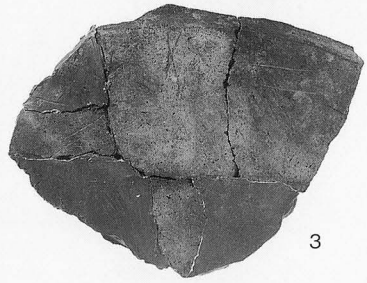
1．掘立２完掘状況（南より）

2．ＳＰ1296断面土層（西より）

1

1の内面

2



3

4

5

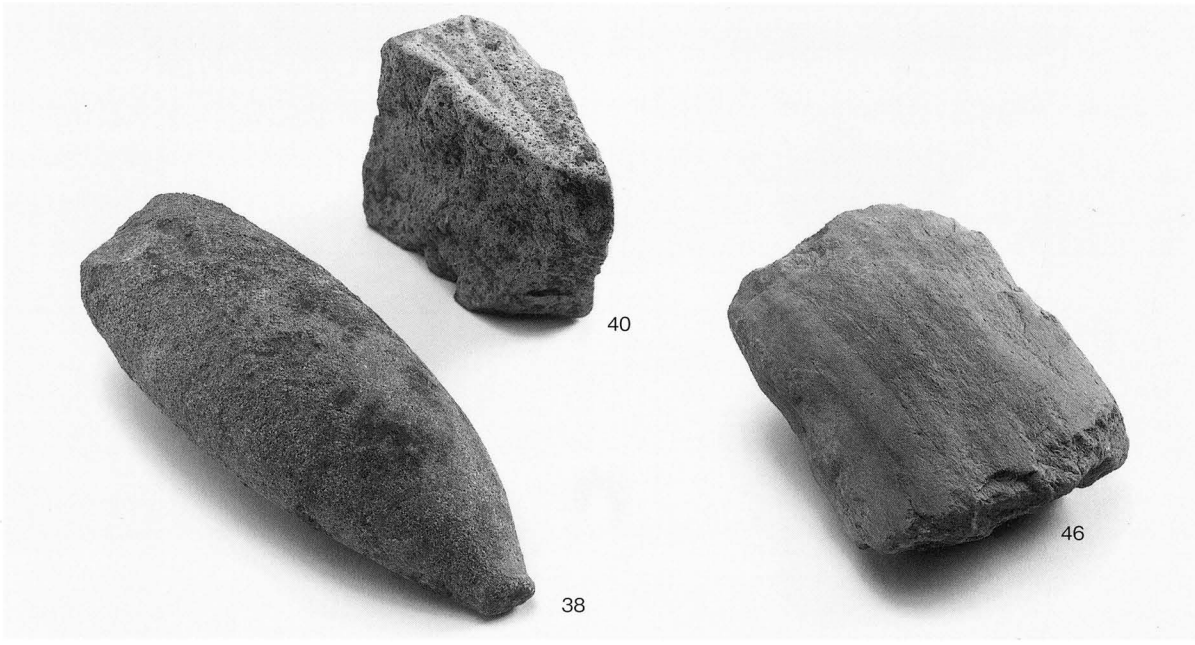
1．ＳＫ21出土遺物

10

10

13

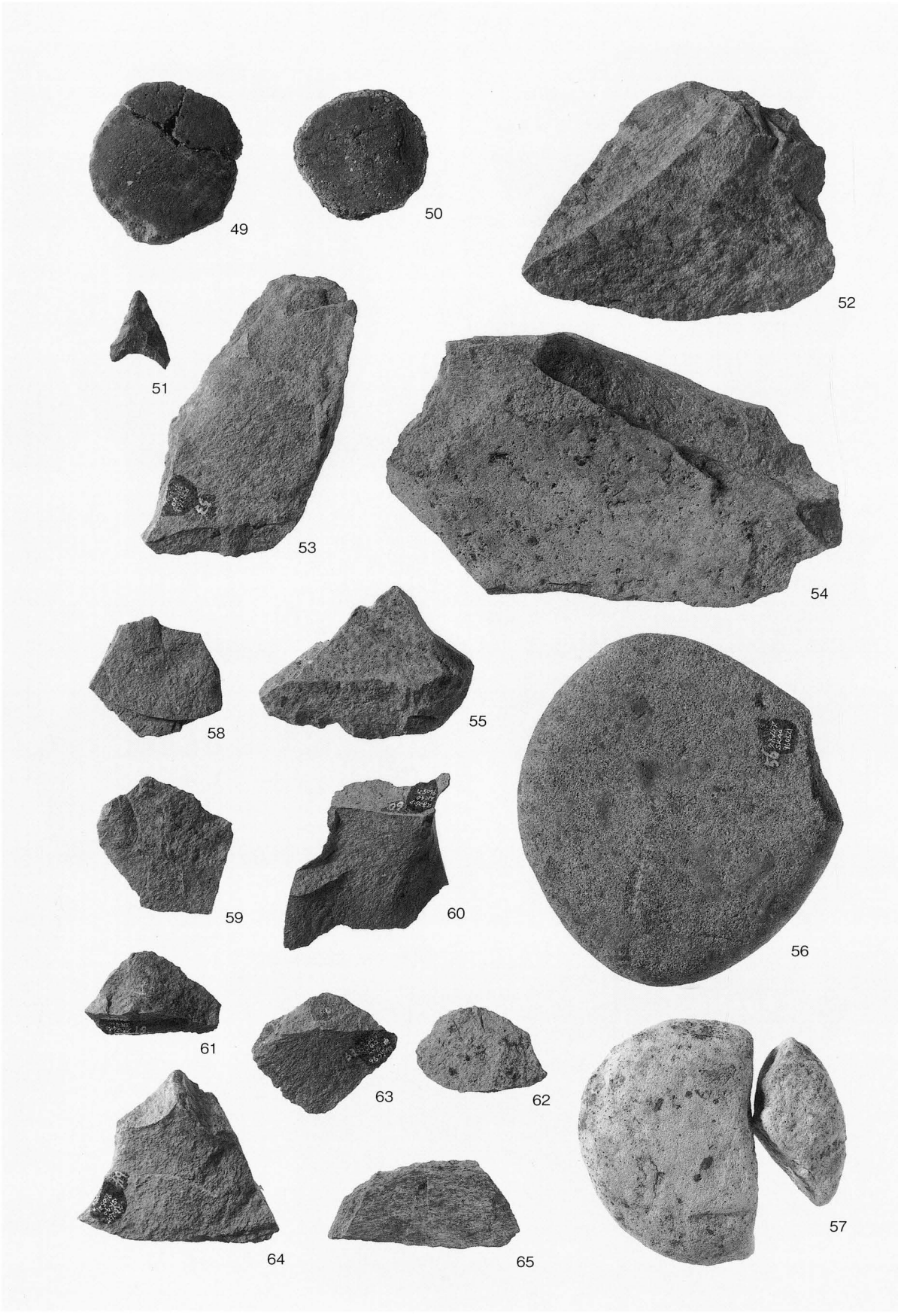
11


40

38

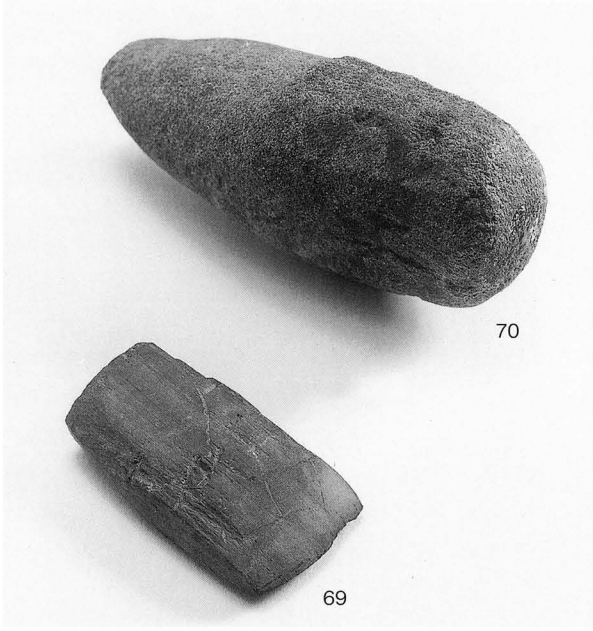
46

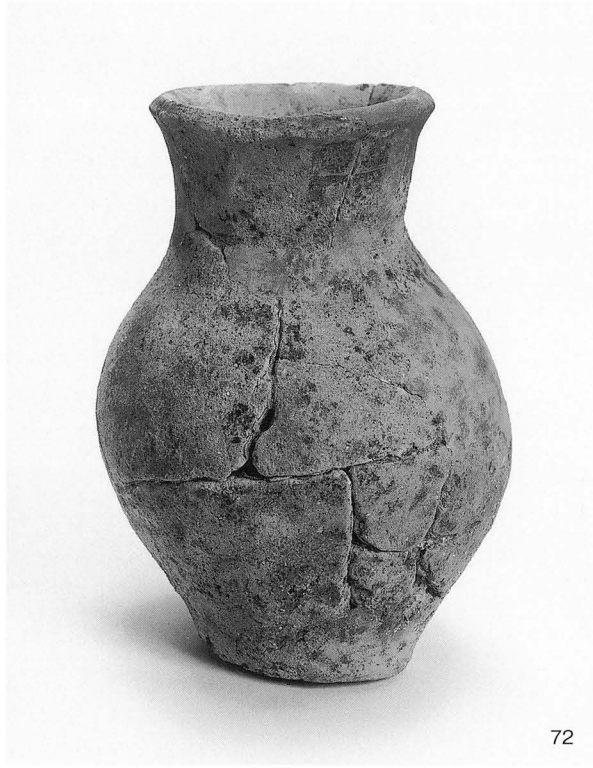
1．出土遺物（ＳＫ24：10・11・13、ＳＫ31：38・40、ＳＫ35：46）

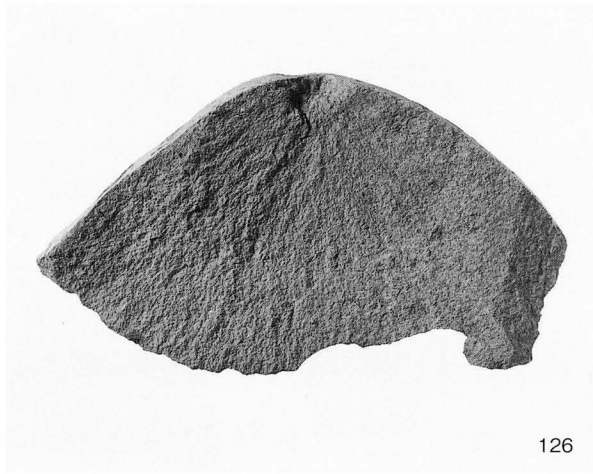


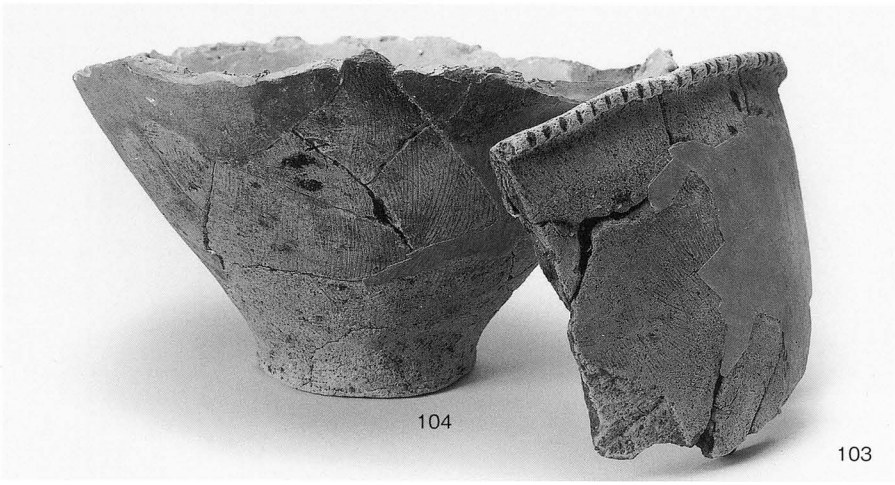
1．ＳＫ40出土遺物

図版12









1．出土遺物（ＳＫ50：69・70、ＳＫ53：72、ＳＫ103：103・104、ＳＫ106：105、ＳＫ126：126）

131

132

135

137

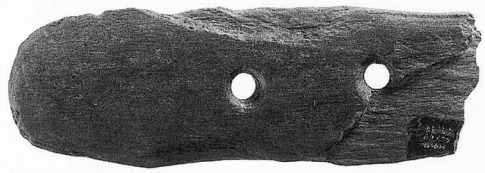
1．ＳＫ138出土遺物(1)

図版14

138

139

207


318

191

316

323

1．出土遺物（ＳＫ138(2)：138・139、ＳＰ1009：191、ＳＫ122：207、ＳＰ976：316、ＳＰ630：318、掘立１：323）